日本の旅

大山澄太

本來無一物

(京都上加茂神社にて)

(伯耆大山にて)

日本の旅

吉水院の遠望

大山澄太

1960

自序

『日本の味』から丁度二十年目に『日本の旅』をまとめることとなつた。旅と言えばすぐ芭蕉や山頭火の孤独な、そして時雨に打たれるような野ざらしの旅を思うくせのついている私には、ここに収めている昭和二十四年から三十三年まで十年間の私の旅のような旅は、仕事と生活の延長であつて、旅らしい旅でないではないかと、自らを責めながらも、再読してみて妙になつかしく、捨てがたい思いがするのである。

『日本の味』の頃の私は勤め人であり、子供をめぐまれていなかつた、そして禅の道に志して、そこから日本的なものを探求しようという熱意をもつていたかと思う。ところが『日本の旅』の私は、勤めのない浪人のようなものであり、しかも二人の子供を持つ親となつている。そしてものを探求するというよりも、気ままに生活を楽しむという姿になつている。人生の往く道から、還る道へと、いつの程にか転回していたのである。従つて旅の仕方もあなた任せのものばかりで、時には子供と共にゆく旅もあつたりして、『日本の味』から『日本の旅』へ、二十年の歳月は私をこんな風に変えてしまつたかと、自分ながら詠歎したようなことである。

しかし外面的には変つて来たけれ共、私としては変ることとなき内面を少しは耕しつづけて来たかと思う。日本的なものに憧れつつ、敬慕する故人のあとを尋ね沢山のよき師、よき先輩、よき友を尋ねることのよろこびは、平凡な旅を心豊かなものにしてくれた。十年の旅中至るところで、私は温い人々の恩情をこうむつている。茲でその人々に感謝せずにはいられない。

暦が一めぐりして、今日私は還暦の誕生日を迎えた。午前四時という生れた時間より少し前に起きてみると、旧二十日の月が少し傾いて雲一つない澄み切つた空に淡くかかつていて、東の空がほんのりとうす明りしている。父から聴かされた六十年前の空と同じかのよう。その故に父は澄太と名づけてくれたのであつた。しかも前面はるかに四国山脈の大きい山々が黒く眠つている。井月に「落栗の座を定むるや窪たまり」という句があるが、私という役人の落栗は落ちるべき時に落ち、落着くべき所に住みつかして貰つたと、今朝しみぐ〳〵思つたことである。しよせん大山は大山であり、澄太は澄太であるのが私のしんじつであろう。

昭和三十四年十月二十一日

久米の里　澄太

目次

日本の旅

題字構成　栗栖福三
和紙手漉　安部栄四郎

ふるさと

――幼きものへ――

海がぴこ〳〵光りよる
海がぴこ〳〵光りよる
あれあれ舟が　一ついる　二ついる
あそこに舟が　やつてくる

下灘あたりの車窓から、まさかぜは、こんなことを歌つている。山の町に生れて、海を見ることの少ないお前には、ひろびろとした緑色の海が珍らしいのだ。父ちやんはお前たちを家に残してよく旅に出る。「行つてらつしやあい」と手をふつて、父ちやんの後姿の見えなくなるまで戸口に立つている二人を残して旅に出る私は、うれしくもあるが、淋しくもある。珍らしいお土産をあてにして、帰る日を待つていてくれるのは、たのしいことではあろうが、「父ちやん、明日は何処つちや行かないの」とか「父ちやんは、帰つたと思うと、直ぐまた出てゆく」などと、久仁子に云われると、二人を家に残して旅に出ることを、いつもすまなく思う。

その父ちやんが、今日はお母さんも一所、四人の旅に出るのだ。しかも、正風にとつては生れてはじめての祖先の地への旅なのだ。

正風が生れた時には、井原のお祖父さんもお祖母さんも、もう亡くなつていられたのだ。だから姉ちやんのように、度々井原へつれて行かなかつたのである。せめてお墓へでも早くお詣りさせたいと思わぬことはなかつたのであるが、正風の生れた昭和二十年から二、三年の間は日本の国が、一番乱れた頃で、汽車にのつても、船にのつても、人と人は荒廃した国土の上で争い合い、罵り合い、旅する心地も決してたのしいものではなかつた。お前の浄らかに澄んでいる瞳に、あの惨めな敗戦風景だけは、見せたくなかつたのである。それからこうしてお前が五つになつた此の頃、日本の地上もいくらか清らかになり、人々の心も少しは和らいで来た。そこでこうして父ちやんのふるさとへ、姉ちやんの学校が休みに入るのを待つようにして、旅に出たのだ。窓ぎわに席の与えられた正風は、飽くことなく、変りゆく外の風物に、瞳を見張りつつ、時々頓狂な声で歌つたり叫んだりするので、周囲のお客さんがみんな笑われる。今治の駅から港までを厚生車で走る時、お前は母ちやんの膝で、かゝかん声をあげてよろこんだね、あんなものに乗ることも、考えてみれば生れてはじめての感激なのだ。それから尾道ゆきの汽船に乗つたのであるが、船の内も、船の外の眺めも、島も、海をゆく舟も、一切は生れてはじめての、新しいものばかり、あんまり元気にはしやぐので、一度枕をとつて、体を横にした父ち

やんも、眠ることが出来ず、とう〳〵お前達と一所に、子供心に立ち帰つて、童心の旅人になつてしまつたのだ。父ちやんは旅に出る時には、必ず二三冊の本を持つて出るのであるが、今度は一冊も持たなかつた。というのも、父ちやんはすつかりお前達の心に従つて、自分を捨てた旅をすることにしたからである。そうすることが、日頃家に不在勝ちで、淋しい思いをさせている父ちやんが、二人に対する罪ほろぼしのつもりでもあるのだ。

久仁子よ、船が瀬戸田という港へ着いただろう。あそこはもう広島県なのだ。西田の小母ちやんが嬢ちやんをつれて棧橋まで来られ、おいしい瀬戸田饅頭を下さつたね。あの嬢ちやんにはよい姉ちやんがあつたのだが、広島で原子爆弾のため、悲惨に死んでゆかれたのだ。広島県に入ると、そのような悲しい家庭が到るところにあるのだよ。あの小母ちやんは、今でも在りし日の写真の前に、毎日姉ちやんの好きだつたものを供えていられるのだよ。

さあ、ここが尾道だよ。上りの汽車まで一時間半もあるので、久仁ちやんの帽子を買つたりリンゴを買つたりしようね。山と海の間の細長い街に、なか〳〵いい店が沢山ある。時々家の切れ目から海が見え、舟がいると、正風は「あれ、舟が」といつてよろこんで叫ぶ。

尾道から福山、そして神辺まで、ここでまた乗り替えだ。小さい駅に立つて夕暮の静かな平野を眺めている間にも二人は少しも疲れた様子を見せなかつた、幼いものにとつて、今日の旅

は少しく遠すぎたのであるが、あの日本一小さいまるで玩具の様な井原行の汽車に乗つてからも、正風は、暗い窓にすがつて、面白そうに外を見て飽かないのだ。

×

四人で一つの炬燵に足を伸ばして寝るこの室は、今は十二畳になつているが、以前は六畳二間になつていて、仏様のおまつりしてある前で、お祖父さんもお祖母さんも死んでゆかれたのだ。久仁子が二つの時、お二人の前ではじめて這い出したのも此の室だ。八十をすぎた老人に七人の孫があつたのであるが、一番幼い久仁子が一番可愛かつたらしい、久仁子が三つの時、東京からお祖母ちやんの病床へかけつけたのであつたが、「おばあちやん、こんちは」という お前の声を聴いて、お祖母ちやんは、涙をぽろ〳〵こぼして「わたしはもう、いつ死んでもよい」と云つてよろこばれたが、二十日ばかりして死んでゆかれたのだ。それから三十五日目にお祖父さんも亡くなられたのだ。久仁子はもうお二人の顔を忘れてしまつたであろう。けれどもお二人は決して久仁子を忘れてはいられないのだよ。正風の生れたこともよく知つていられるのだよ。だからのんのん様へ、いろ〳〵なものをお供えして線香を立て四人で手を合せたのだ。この布団にも炬燵にも、お祖父さんお祖母さんの温いお体が触れていたのだ。今夜はゆつくり二人が、お二人に抱かれて眠れ、古い粗末な家ではあるが、ここには大山という家の遠い祖先の血が通うているのだ。しつかりと抱かれて眠るのだよ。

あんまり早く醒めて、二人が「螢の光」を歌うので、伯父さんがやかましかつたかも知れない。離れにいる兄ちやん夫婦にも聞えたであろう。それでよしよし。さあ起きて顔を洗えよ。水の好きなお前達には、父ちやんが此のは、ね、つ、る、べ、のある井戸の水を汲んでやる。此の古い井戸の水の方が、台所に在るポンプの水よりもうまいのだ。お祖父さんは最後まで此の冷い水を父ちやんに汲ませて暑い夏に死なれたのだ。ああいい朝だ、うららかに朝が光つている。豆の花が踊つている。ざくろも柿も芽をふくらませている、正風は桐の木に抱きついている。大きいだろう、お祖父さんは桐の木が大好きで、父ちやんが生れた時に此の桐を植えられた。それから何度か伐つてそのあとに伸びた芽がこんなに太つているのだ。あの高い梢には鈴のような実が、朝風にかさかさ鳴つているだろう、五月には紫色の美しい花が沢山咲く、父ちやんは此の桐の花が一番好きなのだ。雨の朝など、ぽとりぽとりと落ちて、ほんのり匂うその風情は、日本の初夏になくてはならぬものである。それからね、久仁子も正風も、今はそうして洋服らしいものを着ているが、父ちやん母ちやんが時々着ることのある黒い羽織についている紋は、此の桐の紋なのだよ。桐を家の紋章とする祖父さんやお父さんは、妙に桐の木を愛するのだ。

さあ、お墓へ詣るのだよ。お水は久仁子が持つて、お米や線香やマツチの入つた袋は、正風が首にかけるのだ。よしよしよく似合う。手を引かなくても一人で歩けるだろう。出口の徳永村上へ挨拶によると、「まあまあ、大きくなつて。お祖父さん お祖母さんが 生きて おられた

らよろこばれるのになあ」と云つて下さる。そういわれると、父ちやんは涙が出てならない。此の涙はお前達には解らないであろう。途中寄つたのが、朴朗さんのお家だよ。それから裏山へ。石段をのぼつて、一番高い所、此処がうちのお墓なのだ。遠い祖先の墓地は此処から三里の山奥にあるのだ。此処に眠つていられるのは、お祖父さんお祖母さん。それから薄幸にして早く死んでゆかれた伯父さん伯母さまなのだ。遠い日の悲しみは、年月の底に埋れて今朝はうららかに春の陽が墓標に注ぎ、鶯がうしろの林でないている。あそこに光つているのは小田川。そのほとりの小さい街の家々、その向うの山、父ちやんにとつては、一日も忘れることの出来ないふるさとの山河である。お前達の手をひいて、こうして此処に立つ時、父ちやんは、祖先の血を思い、祖先の眠つている備中の土を思う。

墓を下つてお訪ねしたのが、森下というお家だ。昔から大山の家と一番仲のよかつた家である。正風は門の外から杏の花を沢山とつて来て、温いお縁で一つ年下の妙ちやんとよく遊んだり、踏石から転げて泣いたり、けんかしたり、まるで我が家のようにして時をすごし、ここでおいしいお昼を頂いて、虎のいる家へ帰つたのである。父祖の虫がそうさすのか、お前は今度の旅では、内子へ帰ろうとは云わず、虎のおるところへ帰ろうというのだ。虎の皮が座敷にしいてある大山の家に一番に心をひかれるのも無理はないであろう。午後は佐藤、久津間、川上という風に父ちやんと親しいお家をお訪ねした。いづれもお前達の達者で伸びることを、いつ

も心にかけていて下さる人々に、その元気な姿を見て貰いたかつたのである。虎の家で早くお風呂に入つて、それから三人で、前の川へ散歩に出た。お前達は川原の小石を拾つては、日暮の川へ投げてよろこんだ。いや父ちやんも左の手で拾つては投げた。浅瀬に落ちて水をはねる音を、父ちやんは何年振りにきいたことか、此の川で、鮒やドンコをとり、鯇を追つかけ、水に戯れ泳いで遊び暮らした少年の日が昨日のように、そこに横わつている。石を投げている二人の姿が、自分の姿の様に見えるのも、ふるさとの夢であろうか。父ちやんほど、ふるさとを思い、父祖を念ずるものが、そのふるさとを何時も遠くはなれて住まねばならぬとは――。

大勢のたのしい夕餉がすんだ。南予の「てんやわんや」が兄ちやん達の話題になるのももつともだつた。伯父さんも父ちやんも酒に酔うた。父ちやんは、てんやわんや的に豆腐の一丁を切らずに醤油をかけ、箸でつついて食べて、皆を笑わせたのだつたが、今度はお前達二人が、一座の花形となつた。小さい壇上に立つて「ぼうやは、がつたんこつこ、、、、、、歌います」と云つて眼をむいで皆の方に向き、それからありとあらゆる歌を交番に歌つた。幼いもののまだいない此の家としては空前の洪笑だ。伯父さんは笑い疲れてか、仏間に入つて、お経をよみ出された。流石の正風もやがて疲れて炬燵にいる父ちやんの膝で眠りこんでしまつた。久仁子は目が強かつた。夜がふけるまで皆でゆかいに語り合つたのであつた。

ふるさとの第二夜が明けた。雀がしきりにないて今日もいいお天気だ。二人は門の内の庭や畑をあちこちしてよく遊んだ。無心に遊んでいる二人をみている父ちやんは、いつしか祖父さん祖母さんの心になつているのだ。朝日を浴びて遊んでいる、ただそれだけのことがうれしいのだ。何物かに感謝したくてならない朝だつた。それから四人で、新橋の畔の三階のお家へいつた。ここは高橋という親類なのだよ。叔父さんは大阪の営業所へ行つてるす、しかしやさしいお叔母さんや姉ちやんがいて、久仁子はピアノに戯れたりしてたのしく遊び、お昼を頂いた。久仁ちやんが見たいと云つて、わざ〳〵高屋からよね子姉ちやんも来て下さつたね。またその時ひよいと来合せて、ゆかいな小父さんが沢山酒を飲まれたね、あの人はお祖父さんの兄さんの子で、もう七十一才なのだがなかなか元気で、あれから三里の山奥の村へ帰つてゆかれたのだ。（二十四年四月）

石見の人々

青い蚊帳のうちで眼が醒めると、蟲がしきりに鳴いている、雨がまだ降り止まぬらしい。庭木を打つ雨の音を聴き乍ら、小川さんとねころんだまましばらく話している心地は、遠い旅に来ているとも思えぬような親しさである。ここは石見の国今福村の街道から一里ばかり左に入つた久佐というところで、安芸の八幡高原の大佐山が三里の彼方に望まれるような静かな部落である。昨日は今福と久佐と、二ケ所で村の人々にお話をして、この興禅寺の奥まつた書院に泊めて貰つているのである。

秋茄子漬の鮮かな色にさえ食欲をそゝられるような朝餉をすまして、雨が小降りになりはせぬかと、空模様を見ているのであるが、青い柿や棗や萩にさめ〴〵と雨は降り注ぐばかりである。そこにあつた「世界人」という雑誌で新村出先生の松の随筆をよんだりするのもなつかしかつたが、やがて意を決してお寺の傘を借りて尻からげで雨の中を美又まで出かけることにする。義道和尚はじめ寺の人々に山門まで見送られて、大根や白菜のよく生えている菜園を眺めながら石段を降りる。刈取られて高い稲架となつている早稲も、田に在る稲も穂を垂れて雨に

ぬれている。昨日はその穂に手をあてて稲の香を臭いだのであつたが。しばらくして小さい山路に入る、路の両側は熊笹と萩が茂つていて、重そうに花をたれている萩をふみわけて歩く心地は何とも云えずよろしい。

若い勝手三郎君が、自転車に私の荷物をつけて押してゆく、それから私、小川さんという順に歩く、自転車にのれる人が、押して歩くほどたいがたいものはあるまいと思つて、乗つてゆかれることをすゝめるのであるが、先生と一所に歩く方がよいと云われる。自転車にさえ乗れない私の無能無才をあわれむほかない。話がとぎれると山の笹を打つ雨の音が一入高い。その笹の葉から、私はふと石見の生んだ萬葉歌人柿本人麻呂の

小竹(ささ)の葉はみ山もさやに乱れども吾は妹おもう別れ来ぬれば

を思い起した。都野津の辺が人麻呂の故郷であつたとすれば、此の歌はそこに愛する妻を残して大和へ出てゆく山路で作つたものであろう。斎藤茂吉氏は「萬葉秀歌」でこの歌は邑智郡あたりの山路で作られ、人麻呂は赤名から備前へ越して上京したものと思われると云つている。そうすると此のあたりの山路とは少しく方向は違うのであるが、石見の山間部一帯に茂つているのは此の笹だ。その笹が今朝は秋雨に乱れているのであるが、人麻呂は秋晴の朝風に乱れる笹の葉を見たのであろう。さやという感じは、秋の朝風のものである。「別れ来ぬれば」という感じは、妻を家に残して大和まで幾山河を越え渡つて旅路を重ねる旅人のもので、今日

のように伊予を朝立つて、汽車、船、バスという風に走つて、その日のうちに山陽山陰の背をなす山脈にまで辿りつくような時代の旅人には解らないと思う。尤も人麻呂は、濃艶な恋情詩人ではあつたが。恋情詩人といえば、島村抱月も石見の人で、しかも此の今福村の産である。昨夜まで私と行を共してくれた青年団長笠川哲隆さんのお寺は、抱月の、菩提寺で、和上が先年上京して雑司谷の墓地から抱月のお骨を持ち帰つた時、水谷八重子をはじめ抱月先生を敬慕する人々は、皆それに反対したけれども、「あんたちの拝むのは記念碑でよい、故郷の血縁者がおまつりするのは御骨でなくてはならぬ。志は忝いが」と断つて来たという話も昨日は聞かされたのであつた。雨にぬれて萩を踏み分け、笹の葉すれすれに歩きながら私は人麻呂を想い抱月を想うたことであつた。

浜田街道を横切つて、小川さんは山の向うのお宅へ、私達は美又温泉へと急ぐ。十一年前、私は今市の笛声君と二人でこの道を歩いて美又へ行つた、その思い出がまだかすかに残つているようなところには、野菊がぬれて咲いていた。その時も九月の明月の日であつた。「日本の味」の石見の秋の一文はその折の作である。関正雄氏のお計らいであの文が当時AKから朗読放送せられた時、東京の義弟のところにいた門多の母が、それを聴いて、こんなにうれしいことはない、澄さんのものをラジオで聴いたと云つて、手紙をよこされたがその母も間もなく此の世を去つた。義弟も戦死した。笛声君は長男とお父さんを失われた。十年の間、日本の国土

を襲つた大きい長い嵐は、何もかも変えて了つた。その中にあつて、少しも変らぬものは、小川さん笛声君、そして私をつなぐ温い心の糸である。私はこの美しい糸にひかれて十年振りの石見の秋の旅人となつているのである。

雨にぬれた旅人は昔ながらの美又の湯につかつた。この前は寅屋に一泊したのであつたが、今日は通りすがりの一浴にすぎない。伊予の湯山温泉と同質同温の湯で、つる〳〵した温い湯心地。湯は清らかに澄んでいる、雨だれの音と山からひいてある湯のこぼれる音が、板屋根にぽた〳〵ひびいて妙に旅愁をそゝる。ゆつくり体を温めて隣の室に降りると、その湯壺には、温度を加えないで涌いたまゝの湯があふれている。少し冷いが、じつとしていると、これも入るに耐えられる。西式の健康法ではないが、私は子供が戯れるように、熱いのと冷いのと、ふたつの壺に出たり入つたりしていでゆの感触を独り楽しんだことである。面白いことに、冷い方から温い方へ上る、そのくぐり口が茶室のにじり口の大きさなのである。裸で睾丸をだらりと垂れて、茶室へ入るように、にじり上る光景は、誰が見ても洪笑に価するであろうと、一人で苦笑するのであつた。

湯から出るともう十二時だつた。寅屋の畑中義人君はこの村の青年団の副団長であるが、ハルピンで「日本の味」を求め、石見の秋で我が家の温泉を読んで驚いたとのこと、私達は雨の中を少し歩いて坂根村長さんのお宅についた。酒造を業としていられる。その銘酒の名が霊泉

である、これは私の兄の別号で、兄がもし来たら、腹一杯酒をよばれていいと思う。私は例によつて一合足らずで足りる。酒よりも二合五勺入りの古い徳利に心をひかれた。講演がはじまるまでのしばらくを、昼寝さして貰つた。僅か二三十分のひるねであつたが小川さんにきくと大いびきかいていたほどで、すつかり旅の疲れを拭つてせいせいした。雨がしと〱降るので二時間ばかり、しみ〴〵語つた。愛情を通した人間の和を、聖徳太子の道から考えさして貰い、民族の血のつながりを全うすることで話を結び、三回に亘るこの村の会も終了して、ほつとした気持となり、再び霊泉に帰ると、今市からはる〴〵私の話を聴きにこられた笛声君が新米の焼米をポケツトから出してくれる。まさに十一年振りの石見の味である。そこへ美しい西瓜が出される。これは勝手幸君作るところのもの、早すぎず、遅れず、丁度ちぎりどきの赤さ甘さ。幸君は宮沢賢治君を思わすような求道的な農業技術の指導者で、昨夜は久佐の寺まで泊りがけで私の後を追つかけて来たのであつた。

ゆるい峠を越して小川さんのお宅へゆく。雨の中を萩やすすきの花を見て歩き乍ら、婦人会長の河上さんは「先生のほくろが、もし額のまん中に在つたら、仏像のようだ」と云われる。河上さんは日暮れの山路をまだ二里も歩いて帰られるとか。路の左上の門前には、古い松が枝をくねらして秋雨にぬれている。湯上りが冷えるので白い障子をしめて三郎君と小川さんと三人で静かな夕餉を頂く。奥さんやお嬢さんが、心をこめてつくられた巻ずしや、おはぎは、旅

人には一入うれしかつた。特にうれしかつたのは、色とり〳〵の漬物である。石見の山村では信州の農家と同じように、漬物を大切にする。沢庵、味噌漬、らんけう、茄子、胡瓜、白菜などを、それ〳〵別の器に美しく切つて並べ、それを漬物専用の手のついた膳にのせて出される。これは四国のような南の国では、見ることの出来ぬ食膳の美である。漬物の珍重せられる地方は屹度お茶が盛んに飲まれる。

その夜は村の青年が五六人話しにやつて来た。一燈のもとしみ〳〵語り合つた。四国の方の青年と、こちらの青年とどんなに違うでしようときかれるままに、静かなおとなしい人柄と、寒くて冬が長く物産に乏しい山陰の風土は、政治的には民主主義よりも独裁主義に傾き易く、強力な指導者に引づられ易いであろうが、四国になると、それが大分異つていること。農村の経営がこの地方は平面的であるが、もつと多角的にいろいろ仕事が残つていることなど、ぽつりぽつり語つたのであつた。

明けると九月十一日、小雨の中をバスの乗場へ出る。三泊四日、まずしい私の足跡をしるした今福村の土とはなれ、人々ともお別れする時が来た。バスは有福温泉を経て、浜田へむけて走る。そのバスに乗り合わす男女の人情の温かさは、旅情を慰むるに足るものであつた。

×

久手は出雲と境する静かな海沿いの町で「日本の味」で羽根湖と題して一文を草した曽遊の

地である。あの時の有馬君はもう四人の愛児の父となつて迎えてくれる。私を見たことのない九才を頭の四人が、私にもぐれ着いてはなれない。

夜は町の文化団体である瓶峰会の主催で、観音寺という浄土宗の寺でお話する。静かないい人ばかりの集りで、良寛や芭蕉や山頭火について語る私のことばを、しみじみ汲みとつて下さるのであつた。ここで「石見の秋」で私の愛惜した笹尾是人君の兄さんである長野優氏にお会いしたのはうれしかつた。地下の是人君が十年振に二人を引合わしてくれたのかも知れない。浄土宗の信仰に生きていられる国手で、先頃は友松円諦氏や、山本空外氏を此の寺に招かれたりして、荒んだ世にまことの信の根を下そうとされる姿を、尊いものと思つたことである。

翌日は日帰りで松江へゆく、いや岡崎信之さんを訪ねてゆく。出雲和紙、袖師焼をはじめとして、出雲民芸のよさをはじめて私に知らして下さつたのはこの人である。京大では久松真一先生に親しく訓えられていた一人息子を、広島の原爆で亡くせられて以来の寂寥をお慰めしたい一念で訪ねていつたのであるが、今尚仏壇にお祀りしてある角帽の面影を拝むと、俄かに涙がこみあげて、お経も何も口に浮ばないのであつた。眼を床に転ずると、西川一草亭の草花の軸が掛つて萩が花瓶から垂れている。若草で抹茶を頂き、松江の味を三人でかみしめ乍ら、時の経つのも忘れて語り合うことが出来たのしい一日であつた。杵築順氏の話も出で、故人を偲ぶにふさわしい日であつた。（二十四年九月）

防府と小郡

あめふるふるさとははだしであるく　山頭火

山頭火がはだしで歩いた路を、私はちびた下駄をはいてあるく。なんと、この大道村の路の美しいこと、雨のふる日に裸足であるいても、大して足は汚れないであろうと思われるような真砂土の路である。山頭火のふるさとに来て、ふるさとの句を口にしつつ、此の句を土にふみつけるようにしてあるくことは、私にとってはうれしいことの限り。十二月にしては暖い日がさして、木の枝につるして干してある大根の青首が甘そうに匂うてくる。昨日は伊予の岩城島を発つて尾道に上り、一路大道までやつて来て、中山炬火君のお宅へ泊めて貰い、いろ〱と山頭火について話合つたのであるが、私はあの『俳人山頭火』で出生地を誤つていた。大道で生れたと書いているが防府市宮市が正しい。宮市で十二歳頃まで育ちそれから種田一家は大道村に移つて来たのであつた。宮市で失敗して、大道駅から一里近くも海の方によつた大道村字段の新館というところの、山野酒場を買受けてあとをついで酒屋をしていた。その種田酒場の亡びたあとは、大林酒場となつて、現在に及んでいるとのこと。しかし大道は宮市からあまり

はなれてもいないし山頭火のふるさとであることに変りはないと思う。炬火君の二階へも山頭火はよく酒を飲みに来ていたと云うことである。

炬火君に案内せられて大道から一つ東の三田尻駅に下車して、山頭火の若き日を知る俳人柳星甫先生を訪ねてゆく。防府郵便局の前を少し南に下ると清楚な構えの耳鼻科の医院がある。快く招ぜられるままに座敷に通ると、

「あなたが来られるまでに、俳人山頭火を皆読んで置こうと思ったのでしたが、も少し読み残しているのです。家内と二人で実にたのしく、面白く読んだことです。」

「まあ、あの山頭火さんが、こんな人になっていられようとは。しかし、あれほど徹底すると。」

「大したものだね、こうなると山頭火も大したものだ。こちらでは、あの頃椋鳥句会というのがあって、山頭火も早くから新傾向の句を作っていたのです。しかし何と云うても、酒好きで、よく飲み歩き、後には飲み友達の浴永君くらいしか交わっていませんでした。早稲田では小川未明と同期で、一時は種田か、小川かと云われるほど、学内から期待された時代もあったようでした。」

と、御夫妻はなつかしそうに語られる。柳先生は山頭火より六七年お若いのであろう、早くから俳句の道に志し、二十年の久しきに亘って雑誌「めばえ」を主宰せられたような人であ

る。現在は医は御令息に譲られ、文芸や郷土の歴史を趣味として研究せられている。
「私は山頭火を主観的に見るくせを持つていますので、とても出来ないのですが、誰か、郷土の人で種田山頭火伝を書いて貰いたいと思います。」
「いや、ぼつ〳〵もつと詳しく調べたいものです。」
それから先生は山頭火に関係のある新聞の切抜や、短冊帖を持出して下さつた。その中に一枚ある山頭火の「いちにち光るものありて水底くれけり」という短冊には、心をひかれた。青年期の筆蹟にはじめてふれたのである。人の書体というものは、ずいぶん変つてゆくものだと思う。全く別人の字のようである。山という字だけが、晩年の字を思わせる。更らに先生御愛蔵の芭蕉・蕪村・其角をはじめ古今の俳人の筆の跡に、しばし心を遊ばせているうちに、汽車の時間が迫つて来た。
大道小学校には村のＰＴＡや文化会の人々が五六十人集つていられた。あゝ山頭火のふるさとに来て、山頭火を語るとは、「こら〳〵澄太君、そんなことは止してくれ、それだけは。困つたことをするね」と彼は苦笑しているに違いない。しかしまあ許せ、山頭火よ。あんたの一生を、世に公にする時が来たのだ。あんたの俳句とその詩境を、ふるさとの人々に、今はもう語つてもいい時が来たのである。あんたも一度白骨となつて地下に眠つているのだ。すべてはわれわれに任してくれ。其中庵時代のあんたは、このふるさとだけは、托鉢していないであろ

う。ひそかに人知れず黒い衣を着て通つたに違いない。そのあんたが今や書物の中の人物として、私の話の中の俳人として茲に堂々と現われたのである――。そうしたことを私は独語しつつ、演壇に立つたのであつた。

城千城氏は、法会にゆかれる途中を無理して私に会いに来てなつかしがつて下さる。

「山頭火のお姉さんが、さあ七十すぎでしようか、此の村におられます。私の推定では、この村に山頭火は十七年ばかりいたことになるでしようか。」

大道小学校長の高樹昌三氏は

「この本は、二晩で一気によみましたよ。大道の者は、案外山頭火を知つていませんよ。私は隣の鋳銭司村のものですが、山頭火の其中庵時代は、ずつと此の村におつたのです。それに此の写真のような山頭火の姿を見たことがないのです。村の人も見ていないらしいのです。陶あたりへは行乞に行つているらしいのですのに。」

高樹さんは流石に小学校長らしく、郷土の文化のために、いろ〳〵と山頭火のことを考えていられるらしい。ふるさとの句を尋ねられるので、私が宮市・大道を思わせる句を唱えると、それを一つ一つ手帳にメモせられるのであつた。

あめふるふるさとははだしであるく

ほうたるこいこい故里に来た

ふるさとの水を飲み水を浴び
泊ることにしてふるさとの葱坊主
故里はちしやもみがうまい故里にいる

これらはどうも大道村の句らしい。

生れた家はあとかたもないほうたる
ふつと、故里のことがさんしよう芽

これは宮市でしようね。

霞んでかさなつて山がふるさと

これも非常にいい句で、小郡の町はづれから、大道・宮市を望んだ句でしよう。

ふるさとは遠くして木の芽

これは肥前の平戸から望郷の心にかられて作つたものでしよう。

ふるさとはあの山なみの雪のかがやく

これは「ばいかる丸にて」と前書しているように、海からこのあたりの山脈の雪を遠望した句です。彼は急がぬ旅人なので、門司から欧洲航路の汽船にのる、お客は門司で大半降りるので、三等でもすいていて、遠洋航海の気分が少しは残つている。九州の同人に食事つきの船賃を払つて貰つて、のほほんと、大阪までゆく。そうした旅をもたのしんだのでした。その翌日

には、宝塚へ案内せられて

春の雪ふる女はまことうつくしい

と山頭火の風流ここに極まれりです。

小郡の駅につくと国森樹明君が、なつかしそうな顔で待つていてくれる。ほんとうに十二年振である。二人が会うときには、いつも山頭火がいた。その山頭火がいないので、二人は、お互いに山頭火に会つているような気がしてならない。

「敬坊、伊東敬治君が、今日は出張するので残念だと云うておつたが。」

「あゝあの敬坊か、なつかしいなあ。」

云いつつ二人はもう友沢博さんの玄関に入つていた。「其中日記」の中に「Tさんの御好意」ということばが出るが、そのTさんというのは友沢さんのお父さんのことで、春霞夫人と共に、風雅に生きられた人で、山頭火はずいぶんお世話になつていたらしい。その頃博さんは主として大学時代で、帰郷されてしばらくして山頭火は小郡を去つたのであつた。

「あんたも是非友沢さんには会つて貰いたい。いろ〳〵お世話になつたよ。」

そう云う山頭火の言葉を思い出しつつ、二人は炉の切つてある室に通されて、三方からあぐらで囲んで、お茶を頂きながら、其中庵を語るのであつた。しかし三人共に心が落ちつかない。其中庵で独りの山頭火が、首をのばして待つているような気がしてならないのである。

「では、行こう、早く其中庵の跡へ」三人は藤本敏一氏に電話しておいて、いそ〳〵と出かける。

「此処に豆腐屋があつた筈だが、よく買いに来たものだ。」

「そう〳〵、この家でしたね。」

「酒屋は?」

「あの酒屋は、少し駅寄りの方へ移転せられてね。今あのミシンのあつたあの家でしたよ。」

「酒と豆腐さえあれば、山頭火さんはもう。」

「あの頃がなつかしいなあ。」

街を横切つて田の中の路を、うねりくねりと矢足部落へゆく。路も、農家も、山椿も、石地蔵も、みんなあの頃のままである。山裾につき当つて、右に少しく下り、そして思い出の小道を左にのぼると、小さい竹藪がある。なつかしい柿の木がある。蜜柑がある、棗の木もある。ここだここだと云いながら菜種の植えてある畑の中にふみ入ると、萱や雑草の茂つたところに御影石の敷石だけが残つている。

「やあ、山頭火さん、来たぞ、来たぞ。」

「此処、此処、ここに一人坐つておつたのぢや、そして二人でよく呑んだものだ。」

「竹藪がずいぶん追つかけて出ましたね。こんなところまで来ている。」

柿の木に手を当てたり、井戸のあつたところへ行つてみたり、三人は、しばらくその辺をうろうろしたのち、敷石に腰かけた。師走にしては、暖くおだやかな日である。どこかで小鳥がないていて、空は淡緑に晴れている。

「こんな日の山頭火は、障子をあけて、誰か酒を持つて来そうなものだが――と、人の足音に耳をすましておるのでしたが。」

「これは、伊予の笹の井と云う酒で、大島杜氏の造つたもの、それを同人から貰つたので、持つて来たのです。」

私は小さいびんの口を切つた。山吹色の酒を盃につぐと、樹明君は、先づ庵跡へ一杯ふりかける。

「よう、山頭火さん、のんでくれよ。」

おのづから樹明君の口をついて出る言葉は、さながら生ける山頭火に対しているかのよう。

日南なつかしく酒を供えては汲み
庵主は何処へいつたか酒が匂ふてくる庵跡
柿の木に手を当ててあの頃の面影
崩れて十年夢のような三人で訪ねる

かさこそ落葉をふむ音がして、藤本敏一氏が現われる。写真をとつてやろうと云われるので

ある。在りし日の庵、在りし日の翁を、しば〳〵撮つたそのカメラに、三人はいろ〳〵のポーズで入れて貰う。ほんとうに身にしみる友情である。

「句碑はこの辺に、こうむけて建てるのですね、松山一草庵の句碑が、細長く立つた石なので、こちらは、のつしり牛がねころんだような自然石で、無雑作に、こう置くとしますか、そして其中庵で作つた一句を、小さい字で刻むんですね、山頭火の筆跡で刻みたいものです。それが出来ねば、放哉の場合のように井泉水に書いて頂いたら、どうでしよう。」

「此の上の山に、ふさわしい石がありそうな気がします。早速とりかかりましよう。そして十月十一日の満十周年の命日には、大々的に、除幕式をやるんだなあ。」

「その時には私もまたやつて来ますからね。『層雲』の同人からも浄財を任意に出して貰つて、みんなの志で建てたことにしたいのです。『俳人山頭火』の印税を、少くとも二万円は出せますから、一所にすると、相当な碑が建つでしよう。そうした手配は、地元の方でたのみますぞ。」

「大いにやる。其中庵は大事な遺跡ですから、小郡の人々もぼつ〳〵気がついて来たようですし。」

こうしたたのしい話と、計画、それを庵跡で語るうれしさは、何とも云えないものである。去りがたい名残りを惜しみつつ、四人は、椿の咲いている垣の下を通つて矢足へ出て、思い出

の石蔵さまを背景にして、再び写真をとつて貰う。
それから駅近く帰つてくると、岩城酒店があつて、あの頃のお主婦さんが店先にいられる。
「転宅せられましたね、もう十何年昔のことですが、よくあの人に飲ます酒を買いに来ましたが。」
「覚えていますよ。よく土曜日の午後には、広島からくるからと云うて、待つておられましたが。」
「あの人が死んでもう十年になりますよ。今久しぶりに庵の跡へいつてみたのです。」
こうした立話も小郡ならこそである。
「此の隣がね、山頭火がはじめて小郡に来た時、しばらく泊めて貰つた木賃宿ですよ。」
と樹明君が指す。その指すところに「商人宿、小郡屋」と大きく書いた脇に、「小郡駅通り一二五〇、柳井フミコ」としるした看板が吊されている。
「松山でも一草庵に納まるまでのしばらくを、道後の野中という安宿に泊つていた、その家の前を時々通ることがあるが。」
それから再び友沢さんへ戻り、おひるを頂いて上りの汽車へ送られたのであつた。（二十四年十二月）

北陸ところぐ

有磯海から国泰寺へ

高岡から二上山を左に見て、汽車は伏木の方に向つて北上する。「能町」という駅の名も、旅するものの心をひく。伏木の町の西側の丘陵地帯に、富山湾を眺めて眠るような村落がある。このあたりが地図によると古国府となつている。天平の昔、大伴家持が奈良の都から此の地に赴任して、北辺の守護にあたつていた、その館の跡も此のあたりにあつたのであろう。汽車は伏木から海岸線に沿うて西に曲る。ここから氷見あたりまでの浜辺を有磯海（ありそみ）というのである。その有磯海の雨晴（あまはらし）という小駅で下車する。ここは義経が弁慶をつれて東北へ落ちのびる時に、淋しい杖をとどめて雨の晴れるのを待つた跡だと云われている。村は春祭である。女の子は晴着を着て遊んでいる。餅をつくらしい杵の音がとある家からひゞいてくる。杳閑な田の中の路には土筆がほほけて立つている。山裾を廻つて二十四五丁もあるいてゆくと国泰寺の山門が見える。勅使門・三門・法堂が、古い木立の中に寂然と立つている。妙音会という札の掛つている玄関に立つて案内を乞うと、雲水さんが潔く招じてくださる。書院の

一室に通されて、うまいお茶をいただく。

「前管長の勝平江南軒老師には、山陰地方でいろ〳〵とお世話になつたことのある者ですが。」

という私の言葉を、伝え聞いて、なつかしそうに挨拶に出て来られたのは、老師の弟子、野津明道和尚であつた。二十年振りの邂逅である。明道さんは出雲の八束郡の人で、もと西郷郵便局に勤めていられたのであるが、私と同じ様に禅に志し、私が官吏の位置に止つてゆる〳〵歩んで来たのに対して、明道さんは、まつしぐら此の道に突入出家して禅僧となり、勝平老師を慕つて松江の萬寿寺から遠くこの道場に来られ、それから二十年の歳月が流れたのであつた。和尚は修行を終えて本山からあまりはなれていない安養寺に坐つて、悟後の独りをたのしみつつ、村の人々の教化につくしていられるのであるが、今日は管長釈大眉老師が、埼玉県野火止の平林寺へ行かれて御不在のところえ、富山県知事はじめ県庁の人々が百人ばかり参詣して来るので、お手伝いに来ていられるものらしく、なか〳〵お忙しい様子である。

やがて私達も知事一行と同じ座について、本堂の読経に参加した。心経と坐禅和讃を唱えてそれから明道和尚は管長に代つて、国泰寺の由来について詳しく語られた。参詣者百人の中には知事はじめ庁員の奥さん達も四十人ばかり交つていられるのであるが、全員粛然として勤行し傾聴せられる光景は、よそ眼にも頼母しいものを感じさせられた。人々は花に浮かれ酒に踊

つている桜の季節に、こうして日曜の一日を、清純な禅寺の山風に浸ろうとされるそのことだけでも、とかく吏道の乱れ易い此の頃、ほんとうに尊い姿だと思われた。しかも戦災地富山の婦人達が、みんな清楚な和服で静かに進退されるその姿からは、日本のよさを取戻していられるその平生が思われるのであつた。昼餉は、雲水さんの筍料理をいただいた。お汁も、煮物もあえものも、酢のものも、一切筍で、御飯は筍めしと来ている。まことに単純極る料理の中にいろ〳〵のものを味わされたことであり、仏通寺の筍を思わずにはいられなかつた。

国泰寺の開山聖光国師は、紀伊の法燈国師の弟子で、法燈国師の歿後は、三光国師に兄事せられた。三光国師は出雲の雲樹寺の開山で、後醍醐天皇と関係が深い。山岡鉄舟居士が、明治天皇の北陸御巡幸に扈従して此の寺に来たのは明治十一年の秋であつた。陛下が高岡の行在所にいられる間に、鉄舟は一人でやつて来たらしい。その時の和尚は越叟禅師で、なかなかの偉材、酒も好きだつた。二人は初対面で、無主無賓、旧知以上の親しさで大いに語つた。談たまたま天皇殿再建のことに及ぶや、鉄舟は、得意の揮毫を以つて、再建の資にせよ、いくらでも書くぞと誓つて帰つた。その後久しきに亘り、鉄舟が和尚に書いて与えた書は、実に屏風千二百雙、掛軸・幅物・扁額等一万数千点に及んだという。越叟は之を有志の人々に計つて金に換え、天皇殿、庫裡など再建し、本堂に及ばんとしたのであるが、明治十七年四十七才で、鉄舟は二十一年五十三才で、相前後して共に胃癌で倒れたのであつた。そんな訳で、今尚寺内には

鉄舟の雄筆が沢山に愛蔵されている。就中、私の最も愛誦する「大燈国師遺戒」の額などは、よく鉄舟居士の心血が注がれているかと思う。

知事一行が下山せられてから、明道和尚は私達を天皇殿の下にある茶室に招じ、抹茶を馳走して下さる。眉雪の老僧が一人で住んでいるかのような草庵である。勝平老師の遺作で「春樹亭」と云う。島崎藤村の名を思わないわけにはゆかなかつた。庭前の手水鉢には、山の清水が音もなく涌いてあふれている。別れを惜しんで、お茶を点じてくれる和尚の心からは、一期一会の涙さえにじんでくる。

「越叟和尚の次は、雪門玄松和尚となつていますね。」

「はい、五十七世は雪門和尚で、大正四年に亡くなられています。」

「西田幾多郎博士が四高教授時代に参禅せられた雪門という人は、その雪門和尚でしょうな。」

「そうです。此の寺にいられる時にも、此の上の山に洗心庵というのを建てておられた様でした。独園さんのお弟子で、一寸変つた人で、此処を出て一応俗に還り、金沢の向山に、洗心庵というのを構えておられたのです。」

「そうですか、高坂博士の『西田先生の生涯と思想』や西田博士の『寸心日記』によると、洗心庵や雪門和尚の名が出てくるのです。寸心という号も、雪門和尚につけて貰われたもの

らしいので、私は今度の旅で、金沢では、西田先生参禅の跡を訪ねてみたいと思つていたのですが。」

「今、向山には洗心庵はなくなつているらしいです、そこで博士の門下の人で、近く何でも洗心庵跡に、記念碑と云つたようなものを建てる企てが、すゝめられているとかに聞いているのですが。」

また鈴木大拙博士や西田博士達は、四高の学生時代に、その頃まだ汽車の通じていなかつた国泰寺へ、山脈を越して徒歩でやつて来られたこともあるという話も出た。その昔を忘れぬ鈴木大拙博士は、今も尚、時々此の寺にやつて来られるということである。

日が傾きかけた頃、門の下まで見送られて、寺を辞し、明道和尚にお別れした。遠い旅の果てで奇しくもめぐり会つた一人の禅僧、遠く久しく別れはなれているようで、会つて語れば極めて近いところに、同じ道を愛しつづけて来た二人であつた。別れは惜しいけれど、別れて而もいつも会つている思いのする此の道を、私はとぼ〳〵と下つて来たのであつた。氷見街道でバスを待つている間に、国泰寺の高い石標と相対して、大伴家持の「多胡の崎木のくれしげにほととぎす来鳴き響けばはた恋ひめやも」の歌碑が、花曇の夕空に気高く立つているのを仰ぐことが出来た。バスは僅か二十分で氷見の町に入つた。有磯海にたたずんで東の海を眺めると静かに霞んだ湾の彼方に、真白い雪を頂いた立山連峰の山々が夢のように高く浮んで、今しも

西に沈んだ落日の余光を、まともに浴びているではないか。私は黒いインバのポケットに両手を入れたまま、言葉もなく、そこに立ちすくむのであつた。近くに二山上を眺め、遠く此の連山の雪峰を望んだ大伴家持が、このあたりの浜に立つて、詩情を育くんだ天平勝宝の昔の、その山の姿が、そのまま今私の前に存することに、つきせぬ旅情を味わいつつ、家持の歌をなつかしむのであつた。

立山にふりおける雪を常夏に見れども飽かず神ながらならし
二上の峰の上の繁にこもりにしほととぎす待てどいまだ来鳴かず

福井・永平寺・大野

戦災それから一昨年の地震、その上に水害と云う風に重る災禍に打ちのめされた福井の街の一歩一歩、私は拝むような心地で、郵便局まで歩いていつた。この前此の街を訪れた時には、橘曙覧の跡を探し、橋本左内の墓前にぬかづいたのであつたが、今日はそういう懐古的なことに心を遊ばすことは、此の街の人々に相すまぬことのようにさえ思われるのであつた。それなのに、会つてみると郵便局の人々も土地の人も、何と活き活きとしていられることか、困苦の中を自信を以つて前進してゆかれるような面持には、頭の下る思いがするのであつた。
講演会場の最前列に、一人だけ郵便局の人ではないと思われる人がいられる、私は直ぐ米沢

英雄さんだと思つた。米沢さんは「日本味」以来ずつと私の著書を読んでいて下され敗戦後は、「恩愛に生きる」によつて私の疎開先を知り、「大耕」の同人となつていて下さるのである。福井へゆく日をハガキでお知らせしておいたのであつた。この局の人々は、話が聴き上手なので私はのび〳〵と気楽に語ることが出来、一時間半は、知らぬ間に流れ去つた。米沢さんは「十畳一間に親子七人住んでいるのですからね」とも云われた。その米沢さんは大耕舎の寄附金を、紙に包んで私に握らせて帰つてゆかれた。私は武知さん達と永平寺へゆく電車に乗つてからも、この浄財を貰つてもいいのであろうかと、考えつづけた。御自分の家が二度も焼かれて、仮の住居に耐えていられる人から、大耕舎と云つても、結局自分の住み家でもあるものの建築費を貰うのは、どう考えても逆であつて、ほんとう云えば私の方からお見舞をせねばならぬ訳のものである。その時私はふとお釈迦さんの言葉を思い出した。或る弟子が飢饉のあつた地方えは、托鉢に行かない方がいいでしようと云つた時に、お釈迦さんは「いや、飢饉の土地だからこそ托鉢をしに行け、そうして人々の仏心を起して、豊かな心になつて貰うのだよ」と云われた。しかしお釈迦さんやその弟子は、そうした浄財を頂かれるだけの資格のある人であつたが、私などは、人様の余つたものがあれば頂く、その程度のものでしかない。自分で仏作仏行の出来ていない私は、せめて、こうした涙の出るような浄財によつて、小さい道場を建てさせて貰い、そこに住み、それを世のために使うに当つては、せめてお釈迦さんの遺された

美しい教の線に副うてゆかして貰う、そうするならば、此のお金を貰つて置いても赦されるであろうかと心にきめて、とりあえず袂に入れておいた包みを、財布に入れ直したのであつた。
永平寺の桜も青い空の下で咲き切つていた。門前の小僧ならぬにこ〳〵と如何にも善良そうな局長さんの案内で、宿坊の一室に落着く。大きく重なる伽藍が夕闇の中に沈んでゆく、後ろの山で、何鳥か二声鳴いて、山はいよいよ寂しい。一浴して此の寺らしい精進料理を頂く。伊予の瑞応寺から修行に来ていられる楢崎通元さんが会いに来て下さる。遠い旅先きでお会いすることは一入なつかしい。通元さんは道元禅師の御廟、承陽殿に仕えていられるとのこと、通元さんの紹介で橋本老師のお室を訪ね、しばらく禅談を聴く。祖師の深い道を、身を以つて行ずる心を以つて、一生を貫いて行かれる人のことばは、一つ一つ無心である。たま〳〵私が「満洲亡国の際、朝鮮との国境にある図們の禅寺が、兵火にかかつて焼け、敵に取囲まれた時逃れる道のないことを知つた渡辺和尚は焼けてゆく寺の屋根に上つて、衆を見下し、坐禅を組んだまま、寺と共に焼けて逝つたということを、ある人から聞かされましたよ」と云つたところ、老師は、何だか眼をうるませていられるようであつた。甲州恵林寺の快川和尚を思わすような最期の心事は、道に命をかけている人にして、はじめて理解出来ることかと思う。
武知さんと枕を並べてねる。武知さんは忙しい公の旅の中で、毎日日記を書きつけられる、その様子を見て、私は此の人が三年余の間、シベリヤにて捕虜生活の苦しみをつぶさになめつ

つ、帰国後「鉄のカーテンをつく」という、まことに克明な生活記録とシベリヤのスケッチを公刊せられたのも、むべなる哉と思つたことである。私は日記をつけない、横着なのである、ただ無心に旅し感覚だけを仂かせて、その他はぼう〳〵ばく〳〵として歩いて寝て起きているにすぎない。その代り、机に坐つて書きだしたら、たら〳〵四五十枚も書きつづけるのである、だから正しい記録と写生に缺げて、とかく印象的になつてしまうのである。日記はつけたいものと思う。

振鈴に眼が醒めたのは四時頃であつた。急いで洗面して禅堂に入れて貰い、雲水諸士の尻についてしばらく坐禅する。無心に坐つていると、道元禅師以来の此の道の伝統が、背骨にしみてくる思いがする。禅堂を出て仰ぐ法堂前の桜の花の何と美しいことか、小鳥の声を耳にしながら長い段になつた廊下を登つて、法堂の朝の勤行に参加さして貰う。大和尚・和尚・雲水六七十人が、一心一体になつて読経し礼拝せられる、その威儀は、そのまま仏法そのものであろう。つづいて承陽殿のお勤めをして、境内を案内して貰う。美術品としては、建物・絵画・庭・仏像、とり立てて見るべきものはないが、承陽殿の幽玄さ、荘厳さには、身心自らひきしまり、古聖の魂が今尚茲に生きていられる思いがした。永平寺の生命は、仏殿の美しさや伽藍の大きさにあるのではない。一つに個々の修行者の日々の行持そのものにかかつているのだ。

朝餉を頂いて下山して停留所に出ると、そこに大耕同人鍔淵玉栄君が私を待つていてくれ

た。大きいホクロのある和服の男だとハガキに書いておいたので直ぐ見つけてくれた。鰐淵君は、私達一行に加わつて、電車で大野局まで同行し、旅の会見をよろこんでくれた。

大野は九頭龍川の上流に展けた大きい盆地の中心にあつて、美作の津山を小さくしたような山の町である。汽車が貫通していないだけに北陸本線に沿うている土地とは、異つた一つの独特なものが残つている町かと思う。街路は京都の様に、竪横整然としている上に、路に沿うて小川が流れている。平泉澄博士は此の大野郷の人であつて、平泉寺という村の名があるのもなつかしい。梶谷さんの話によると、南朝の忠臣が大野郷には入つていたらしく、今尚楠を名乗つている人もあるとか、一入心ひかれつつも、私達は、電車で来て、講話がすむと、また電車で去るという慌しい旅人でしかない。

私は追放ということについて、日本で一番美しい態度をとられたのは、左で矢内原忠雄氏、右では平泉澄氏だと思つている。前者は満洲事変に反対して、之を認めるような政府の経営する大学の教授たることは出来ないとして、辞表を出して去つてゆかれた。後者は、敗戦と共に潔く辞表を出して、黙つて故山に帰られた。人間は進むことも大切であるが、退くことはより以上大切である。こうした人々には、追放と云う言葉さえ無用であつたと思う。勝山あたりの九頭龍川は、その岸に咲いている桜を映して美しかつた。「先生、もう一度、今度はゆつくり此の川の鮎を食べに来て下さい」と玉栄君は云つてくれる。私は車中でうと〳〵と浅い眠りを

貪つたりした。

河北潟

七尾線高松駅から一里ばかり、春にしては寒い雨の蕭々として降る中を、早川五栗さんに案内せられて、南大海村のお宅に着いた時には、もうとつぷり日がくれていた。このあたりが加賀と能登の国境ですよと聞かされた路のほとりには山椿の花がぬれて咲いていた。そうした花や草、川の流れ、淋しい家の形、麦の植えてない田、それらは皆早川さんの画として、いつか見たことのある風景である。その人と並んでその人の画境の中を歩いていると思えば、雨の一里は遠い路ではないのであつた。もう十八年も前になろうか、私は親不知の荒磯を歩いた足でここに訪ねて来たことがあるのであるが、御大典の秋に生れられた典次郎ちやんが、その時は三つか、四つかで危い足どりで家の内をよち〳〵していられたその人が、今来てみると、京都大学の農学部を卒業せられ、今宵は村の有志の人々が集つて、祝盃をあげようとせられている。私は典ちやんの成人ぶりに驚くと共に、私達の上を通り去つた歳月の流るる音に、耳を澄ます思いをしつつ、大きい炉辺に、あぐらをかいて坐つたのであつた。流れ変る歳月、そして転変極りない世相、そうしたものの底にじつと変らぬ友情をこめて、私を待つていてくれる友。私はいい友を持つていると、自分で自分に云い聞かせ乍ら、此の地方の特産であるブドー

酒の杯を重ねる、交りのない純正な味はまさに能登の味である。自在で吊された鍋には温い味噌汁がたぎつている、二人は若き者の前途を祝福する楽しい宴の声を、座敷の彼方にききながら、夜の雨音止まぬ炉の炭を注ぎたしては語り合つた。伊予路のこと、大耕のこと、道場建立のことなど。早川さんは建立を助ける心から、浄財出資の各人に、一枚づつの画を書いて下さることになつているのであるが、私は此の友情に甘えて、早川さんの得意とされる、そして大耕の耕作と関係のある大根・人参・蕪など、野菜の俳画を特にお願いした。

明けると雨があがつて薄日が庭にさしている、典次郎さんは私達二人を、カメラに納めてくれた。昨日の路を高松へ送られて出る。丘があつて、小川があつて、浅い林があつて、点々と家があつて、田があつて、そのところ〴〵に山桜が咲いている。能登半島は一帯にこうした土地柄で房総半島の上総あたりによく似ている。高松は、白山浅野平二氏の故郷なので、発車までの僅かの時間で、曽つて土地の豪家として、敬慕せられたというその邸の跡を眺めたりした。ここで、厚生課の村上さん大竹さんと再び会い、金沢行の汽車にのつた。早川さんは二つ目の宇野気という駅まで送つて来て下さつた。「これからは、会う間隔をもつと縮めましょう」「ほんとうに。そのうち四国路へ画会でもしてお招きしますよ」と云つて別れたのであつた。宇野気は西田幾多郎博士の生れられた村である。西田静子さんは「我が父西田幾太郎」の中で

「父は長楽寺のお寺に並んで小川に添つて建てられた家に生れましたが、三つの時、隣家から出た火事で焼けたとのことです。今その跡に竹藪と廿軒ばかりの百姓家が建てられてあります。父の六つの頃、小川に橋のある駅に近い土地へ移りました。その地でその当時の西田家の勢力は可成なものであつたらしく、お米も三百五十石から入つたという記録が残されております。」

「曽祖父は大変学問の好きな人で、刀を差し近隣の人に読書を教え、また村の争いを裁いたりしていたそうです。」

「祖父は、曽祖父ほど学問は好きでありませんでしたが、屋敷内に寺小屋のようなものを造つたりして、今の宇野気村の小学校の前身をつくつた人でした。が相場に手を出し家をすつかり破産させてしまいました。終に土地や屋敷を人手に渡し金沢へ出、父は東京へ出て大学に入りました。その頃の若い父に

　故なくて唯さめざめと泣きし夜半知りぬ我まだ我に背かぬ

　古郷に我に五反の畑あらば硯を焼きて麦植えましを

の歌があります。」

と云うておられる、和倉で見た北国新聞によると、今度宇野気小学校庭の先生遺愛の木の側らに頌徳碑が村人の手によつて建てられることとなり、その碑文の選文を、先生の高弟京都の

久松真一博士にお願いしてあるということである。私は車窓に見える河北潟を眺めながら、あの静かな深くものを考えさすような潟、池よりは大きく、沼よりも海に近く、湖よりも浅い感じのする潟、薄い雲の垂れた下に、灰色に寂しく光つている潟、そういう河北潟を林や丘の向うに見て、少年時代を過された西田先生のふるさとを想いつつ、我が国最初の世界的な哲学者の誕生地の空をじつと視つめるのであつた。丘陵の彼方には日本海の海原があるのであるが、車窓からは眺められない。潟の水がぬまつて来ているような田には、白鷺の群が降りていたりした。ところ〴〵には群をはなれた一羽が、畔にたたづんで長い首を傾けて、じつと北の空を見ているのであつた。

小浜と敦賀

単調な日本海の海岸線が若狭丹後にかけて美しい曲線を描いている。能登の七尾湾と米子の中海が之に次ぐものであろう。若狭は北陸というよりも近畿に近い。加越能と違つて、京都に近い文化を持つている。小浜湾の静かなこと、美しいこと、海に沿うて、昔ながらの町が、桜の散る下に眠つている。小浜と云えば梅田雲浜の故郷であり、小浜中学は、佐久間縫長の母校である。また小浜の常高寺は、山頭火の先輩である俳人尾崎放哉が、大正十四年五月から七月まで漂泊の体を寺男としてしばし横たえた寺である。

頭剃つて帰る青梅ころ〳〵落ちている
剃つたあたまが夜更けた枕で覚めている
遠くへ返事して朝の味噌をすつている
乞食に話しかける我となつて草萠ゆ
蛙たくさん鳴かせ灯を消してねる

などは小浜の作で私の好きな句である。放哉は鶴見祐輔・丸山鶴吉・田辺隆治などと、大学の同窓であつたが、ある動機から、実業界から身を転じて一燈園に入つた。そこでも天香さんの教えについて行けず、一介の寺男として須磨寺へ、そして常高寺へ、流転の体を置いたのであつた。私は山の手のお寺の屋根を望んでは、放哉の淋しい句を思い浮べるのであつた。

私達の宿は、青浜館というよい宿で、縁から静かな小浜湾を望むことが出来、広い庭には、松の木だけを植え、それに丸い海石が配してある、下手に技巧を弄して、こまぢやくれた庭よりも、こうした単純無心な庭の方が日本の庭らしくてよい。女中さん達も皆年をとつていて、礼儀正しく、便所も風呂も清浄である、料理の仕方も、材料の選び方も美事なものである。軍からも戦後派からも、荒されずに、よき伝統を守つて来たと云つた感じである。ここは、私の北陸路の旅に於ける一番宿らしい宿であつた。

小浜から敦賀へ、僅かな車中で私はうと〳〵ひるねした。旅に疲れて来たのであろう。敦賀

は戦災後まだ思う様に再建せられていない街であるが、桜は、季節を忘れず咲き出でている。郵便局は大和田銀行を楯にして全員捨身の防火によつて、災禍をまぬかれている。家を忘れ、身を思わず、その職分を守つた人々が、やがて次の時代に於て、全逓労仂運動の華やかなりし頃にも亦、破壊をこととする政党の手段として利用せられることを防ぎ、従事員の自主的な判断によつて、事業の公益性に思いを致し、二・一のゼネストにも雷同せず、公務員としての中正無私の方向を堂々と歩いて来られたことを永井さん達の断片的な話の中で知り、いづれの時代にも、真剣な人が、真に職場の柱であることを力強く思つたことである。

多田局長さん達の案内で金崎宮に詣でる。新田義貞が、尊良・恒良両親王を奉じて此の城に拠つて戦つた遠い昔の、軍用米が、落城した山上の城址に今尚黒焼けた米となつて掘出されるとか。大谷義隆の最期といい、武田耕雲斎以下水戸天狗党の討ち首と云い、敦賀は亡びしものの悲しい歴史の跡ばかりである。街の古老の中には水戸浪士の最期をつい先年まで目撃して知つている人がいたとか、武田耕雲斎以下の頭髪を大切に守つて、朝夕その冥福を祈つていた禅僧もいたが、その寺も戦災で焼失したとか、——そういう悲史の積み重ねられた街の空に、桜は美しく咲き盛つている。悲しいことも亡びしことも、昔も今も、とけて一つとなつて、落花の唄ともなり酒ともなる。参拝をすまして、城址の山に登り、大きい椎の一樹の蔭で、局幹部の人々と共に、思いも設けぬ花見の莚を拡げたのであつた。そのうるわしい人の和に心ひかれ

ながらも私は妙に寒気を催すので、一足先きに宿へ帰ることにした。私たちと行違いに、多くの若い男女が、どん〳〵引切りなしに金崎宮へ参つてゆく。此の頃毎夜「花換まつり」があるからだという。何とゆかしい「花換まつり」よ。お宮で造花の一枝づつを若い男女に売つて授ける、その花の枝に、番号がついている。夜の九時を期して花を持つ男女が、拝殿の前に集つて、女は男と、男は女と、誰とでもいいその花を交換する。そして後に、お宮ではくじ引を発表して、何人かが幸福の賞品を貰うのである。何とローマン的な花換まつりよ。何時頃から此の宮に、此のまつりが行われたか、それさえもよく解らない。日本の祭のうちで、最も特色のあるものではないかと思う。谷崎潤一郎あたりが、此の花まつりから創作の糸をたぐり出すと屹度いい恋愛小説が描き出されるに違いあるまい。くじ引当選は恐らく明治以後のことで、遠い昔の花換まつりは、造花ではなく、生きた桜の一枝であつたであろう。その一枝が、若きものの縁をとりもつ役をしていたのではあるまいか、神の名に於て、結ばれてゆく無邪気な恋愛というようなことも考えられないことはない。人生の花を知らずに淋しく散つてゆかれた若い二人の皇子も、今は此の美しい祭の光景を、微笑して眺めていられることであろう。

気比神宮に近いたつみという宿についてどうも変なので体温を計つてみると、七度八分。私の体としては珍らしい高熱である。日頃簡素な食事をしていたものが、急に郵政局のお客として遇せられるので、腹の虫が労仂過重でストを起しているのだ。明日の公用に障つてはいけな

いので診療所の先生に来て貰つて手当をうける。おかみさんの心のこもつた親切は身にしみる思いがした。聞けば此の人は北満ヂャムスから命からがら引揚げて来られたとか。千振・弥栄の村人の惨状の一端など聞き、いづれも伊達君と二人で旅した曽遊の地なので、人の身の上とも思えず、涙の下るのをどうすることも出来ない私であつた。

古い局舎も、清掃して使えば、こんなに美しくなるものかと思わせられる敦賀局内を一巡して、それから明るく整つた宿直室で、演壇に立つ元気がないので、畳に坐つて、しみ〴〵とお話した。少しく云い足らぬ気持を残しながら、お別れするのも、旅人の常であろうか。芭蕉の「奥の細道」では此の敦賀が旅の終頃となつている。遠い旅を共にした曽良は、健康を害したので山中温泉で芭蕉と別れて一足先きに故郷伊勢へ帰つていつた。その曽良の代りと云う訳でもないが、福井の等裁が下駄ばきで、へう〳〵としてついて来てくれたのであつた。敦賀へ着いたのは元禄二年九月十四日で明月の前夜である。北国の秋のこととて、明日の天気は定めがたいと云う宿の亭主に案内せられて、二人はその晩月見をした。

月清し遊行がもてる砂の上　　芭蕉

は武内宿弥と仲哀天皇を祀る気比の明神での作である。その気比宮は、私の宿から直ぐ近く見える森の中なのであるが、悲しいかな社殿は一切戦火で焼け落ちてしまつている。その昔第二世遊行上人が北陸行脚の折、此の宮に詣でたところ、神前は泥土が深くて参詣者が困つている

のを見られ、その修理を発願し、自ら草を刈り石を運び、浜から砂をとつて来て社の前に敷かれた。それ以来遊行の砂持ということが、此の宮の年中行事となつているのも、ゆかしい物語りであり、芭蕉はその白砂の上に森の樹立をこぼれて降る青いような月光を浴びて、明月のような真如に生きた遊行上人を忍んだことであろう。

翌日の中秋明月の日は、はたせるかな雨であつた。

名月や北国日和定めなき　芭蕉

月のみか雨に相撲もなかりけり　〃

「一宿なすとも再宿すべからず」と行脚に掟した芭蕉も、加賀路に入つてからは、風土と人情に心ひかれたか、或いは長途の旅に疲れたか、それとも今や帰るべき自分の家のない永遠の旅人として心のむくままに旅することにしたか、金沢でも、山中でもゆる〳〵滞在し、敦賀にも三泊している。

十六日は、一天拭うが如き好晴で、西行法師の「汐そむるますほの小貝拾うとていろの浜とはいうにやあるらん」と歌つているその種が浜へ海上三里を舟で尋ねていつた。種が浜とはどのあたりでしようかと、永井さんにきくと、金が崎とは反対に、港から西に彎曲して木の茂つた岬の方を指して下さるのであつた。

金沢――松任

藤先生――

福井県・石川県の旅を終えて今は富山県に来ています、北国にしては珍らしく打ちつづいた八日間の好晴が、昨日から崩れて曇り、今日は春にしては冷え〳〵する小雨が、音もなく屋根の石をぬらしています。ここは越中滑川の町で、梅原真隆先生の御坊に近い静かな宿の離れ座敷です。こういう雨の降る日には、先生は庵室に籠つてお茶でも喫しながら浄らかな机の上で原稿を書いていられることでありましよう。

先生が、中学・高等学校時代を過された金沢へは旅の途中三度出入しました。旅といつても山頭火のような独りのへう〳〵とした旅でなく、郵政局の予定に従つて、各地の郵便局をお訪ねするのですから、気ままなことは出来ません、しかし、丁度桜の満開している兼六公園はゆつくり見ました。小堀遠州の作だと云われる茶亭のあたりから、池を眺め小さい滝を聴くあたりは、矢張り日本一の名園だと思いました。

水戸の偕楽園や、岡山の後楽園が戦火で廢園にひとしいものとなつた今日では、兼六公園は重要な日本的な庭となつたのではないかと思います。そう云えば、公園ばかりでなく、金沢の街そのものが、京都につぐ日本第二の日本的な都ではないかと思われます。すべての都会が、

灰燼に化し、そのあとにバラックの街は再建せられましたが、人口の多いばかりを以つて、都会とする考え方は、もう此の辺で止めたいものであります。その点金沢は、日本の都会のよさを、そのまゝ残しているのです。従つて道ゆく人も、花を見る人々も、宿の人も、物を売る人も、広島・松山あたりでは見ることの出来ぬ奥ゆかしい気品を持つているかに見られます。ほんとうに恵まれた美しい北の都だと思いました。

金沢では花が開くと同時に宗教平和博が開かれました。性来、こうしたものを見て、博覧達識になることの嫌いな私なのですが、県下の非常にいい仏像が一堂に集つている、国宝も出ているよと梶谷郵政局長に云われ、一寸見て来ました。古い文化をそのまゝ荒されずに守つている能登の寺々からの出品は、なか〳〵数も多くいい仏像がありました。就中門前の総持寺のもの、能登一宮のものなどには心ひかれました。総持寺出展の中に、提婆達多の大きい画像がありました。実に異彩を放つ画で、世尊の生涯について廻つた法敵の主を、こうして堂々と書いて残した画家、どういう人であつたのか私は作者の心をいろ〳〵に思うて見ました。作者不明らしいのですが、支那の古聖を思わすような聰明な知者らしい顔をした提婆達多でありました。

旧本田邸では出口王仁三郎氏の作品を沢山に観ました。画と書と、楽焼と、三百点あまりも展出してあるのです。そのいづれも天衣無縫というか、稚拙の童心というか、稚拙のまゝが、

作者の個性をまる出しにしていまして、なか〳〵にいいのです。実に豊かな宗教的な天分が、単純な筆に匂うているのであります。茶碗などは無造作にひねつて、赤や黄や緑のでか〳〵とした色彩で塗られているのですが、じつと見ていると、あれであるいは茶室の中に、落着けるかも知れないような寂びを感じさすのです。その宗教はよく知りませんがこうした作品を通して見る王仁三郎という人物は、確かに大正時代の逸物だと思われます。志を得ずして此の世を去つた人ですが、無事に生き伸びたとしたら、どんなものを書き残したか、相当興味の持てる人物であつたのではないでしょうか。

人類愛善苑が、独りの先師の遺作だけを展示して、垢抜けのした策をとつているのに対し、本願寺会場の入口には青鬼赤鬼の眼が、電気でギロ〳〵光つていまして、暗い壁の両側には、昔乍らの地獄極楽の絵が並んでいます、如何に北陸の善男善女でも、博覧会でこんなものを見せられては一寸困るでしょう。古聖の真筆には観るべきものがありましたが、美術品には、立ち止つて見るほどのものはありませんでした。ただ一点金沢法船寺所蔵のねゝはんの彫刻像には心ひかれました。

四月十四日の夕暮、加賀の千代尼の跡を訪ねて松任の聖興寺へ詣りました。門内左側に、千代尼辞世の句「月も見て我はこの世をかしく哉」を刻んだ塚があつて、その横には、晩年をそこに庵住していられたという庵もありました。折よく千代尼の遺墨展が催されているので、御

住職中野塔雨さんの親切な案内で、観せて貰いました。沢山ある中の逸品ばかりを出品してあるらしく、俳画も俳句もなか〳〵立派なものでありました。子規系の人々に云わすと、千代の句は所謂写生でないので、ひどくこき下されるのですが、美濃派の支考に少女時代に会つているのですから、芭蕉の道が、だん〳〵下落してくる頃、而もまだ蕪村は出ないという、俳句の一番堕落した時代に句作した人なのですから、あまりに芸術論的に評するのは当らないと思います。若くして夫を亡い、また愛児を亡い、出家して生活を信仰と俳句に捧げた此の女の一生を私は貴く思いました。晩年の自像画など、心持肥え太つた顔の表情に、私はこの世の苦しみに耐えた淋しい慈愛を直感するのでありました。

つくぼうて雲をうかがう蛙かな
梅が香に白き飯くう世なりけり
山陰やわすれし頃のすみれ草
夕顔やおなごの肌の見ゆるとき
三日月にひし〳〵と物の静まりぬ
何着ても美しうなる月見かな
秋の野や花となる草ならぬ草
月の夜や石に出てなくきり〴〵す

身に添うてひとり〳〵の寒さかな

初雪や子供の持つて歩くほど

雪の夜やひとり釣瓶の落つる音

ころぶ人を笑うてころぶ雪見かな

などの句は、なか〳〵いい句ではないでしようか。

立派な書院で岩さんの心のこもつたお茶を頂き、松任局の人々と旅のたのしい夕餉を共にしつつ、塔雨氏からはしなくも私達の敬愛していた正田雨青さんのことを耳にしました。塔雨氏は、句仏上人の出していられた俳誌「懸葵」の同人で京都遊学中には、しばしば、雨青さんを訪ね、雨青さんも亦一度は北陸旅行の途次、此の寺に来て一泊しておるのです。そう云えば、その頃私の編輯していた「広島逓友」の裏絵に出雲崎の良寛堂や、越中立山のスケッチを俳画にして出したあの時の旅で、松任に一泊したよと云うていた友の言葉を思い出され、遠く訪ねて来て、今は亡きその足跡に触れるとは、俳縁というか、仏縁というか、私は心にしみるものを感じました。

また金沢では梶谷さん達の案内で一日湯湧の温泉ホテル白雲楼に清遊して、山気に浸りました。ここは越中に境する高山の山腹へ、大戦中に桜井兵五郎氏が、思い切つた構想の下に、豪荘な設計で建てられたもので、薬王山を真前に望む、大自然の趣きには旅の心を打たれまし

た。ホテル内の至る所に咲いていた石楠花の鉢植の美しさは忘れられません。楼の前の櫟林の上には、康楽寺というお寺まで建立せられており、私はそこで生れてはじめて仏舎利を拝すことも出来ました。仏舎利はビルマの寺から奉戴して帰られたもので、此の山を東洋仏教の中心としようとする雄渾な桜井氏の理想もしのばれ、とにかく、いいことをしたと思いました。

長い手紙となりました。雨は本降りとなつて、楓の若い芽を打つています。あゝそれから笠間という駅をすぎる時には、雑木林の多い村のあたりを眺めながら、先生のふるさとはどのあたりであろうかと思いました。村には桜が満開なのにはるか白山や白山につづく山々には、白い雪が光つているのも、私には珍らしい春景色でありました。

越中八尾(やつを)

バスは富山の街をはなれ、神通川の堤の路を南へ走る。同車の客は女の人が多いが、みな質素である。加賀の人々は華美というほどではないが、何処となく身だしなみに気品があつて、風雅なところもあるに対し、越中の人々は概して素朴で、実質的で活動的であるように見える。そのバスの中へ、途中からお化けのような二人の若い女が、ただれた唇をむき出して、だらりと乗つて来たが、山脈が近くなつた村で降りていつた。平野がなくなつて、飛驒の重畳たる山が、どつしりと根を張つている、その大きい山脈の根が八つの谷に分れているのだが、八

尾という町はその中で一番大きい井田川の流れに沿うた斜面に、千数百の軒を連ねた長い街である。街路の両側には小さい流れがあつて、美しく澄んだ水をさら〳〵と流している、一昨日が春の大祭だつたので、古い軒下には、紋章を染め抜いた幕が張つてあつたりする。深い戸口を覗き込むと、昔乍らののれんが、店の間と次の間との間に掛けられている。家々の間口は妙に短くて奥行はずい分あるらしい、二間の間口が普通で、一間半の家も沢山あり、中には一間のところもある。小林局長さんのお説では、昔はお殿様が、間口に応じて税金をかけていたので、此の町では、こんな習慣になつているとのこと。石屋根の家が多いのも、北の国らしい趣きである。日本の町として最も特色のある町だと思う。こういうところには、生活様式も風俗も習慣も、そのよしあしを問わず、とにかく古いものがそのまま保存せられるであろうなどと思いながら、私は旅人らしい歩調で郵便局から、講演会場となつている城ケ山へ登つてゆくのであつた。ゆるい登り坂は昨日の雨でしめつている、その上に土をかくさんばかりに桜の花びらが散りしいている。それは女の子の友禅の着物のようにあでやかである。その友禅をふんでのぼつてゆく私たちの上に、更らに桜の花びらが降りかかつてくる。樹上に仰ぐ桜も美しいが地上の桜を踏んで見るのも、ぜいたくな花見ではあると思つた。

城ケ山は、高岡城趾の公園と共に、越中に冠たる桜の名所かと思われる。富山の町がはるかに眺められ、その北に富山湾が静かに曇つている、晴れた日には能登半島も、立山連峰も、飛

騨の山々も皆はつきりと遠望されるのであるが、今日は曇つていてそれが出来ない。会場はとある茶亭の広間となつている、今度の旅の道々で私は十七回の講演をしたのであるが、玆がその最後の席となつているのだ。落花の山の春の寂寥が身に迫つてくるような思いをしつつ、私はわれを忘れて二時間近くもしみ〴〵と、人間の道・公務員の道・民族の道について語つた。今日は土曜日なので、今時の基準法的考え方からすると、午後二時からの催しは、公務の外であつて此処にくる来ないも、各人の任意ということになる訳であるが、八尾局の素純な人々は四十六人の中、現場の担当者若干を除いて四十人近いすべての人が聴きに来て、ほんとうに耳を傾けて聴かれるのである。話し終つてからしばし茶菓を共にして散会したのであつたが、これで私の旅の公用は一切終了したわけである。金沢局以来の各地の会合をいろいろに想起しながら、雫のしたゝる桜の樹の下を漫歩して、私達は「桜園」という見晴らしのいい亭に登つた。梶谷さんや小林さんの旅情を慰めてやるとのお計らいによつて、此処で八尾民謡のおわら節を聴かして貰うことになつていた。心地よい桧木の湯桶でゆつくり風呂をたのしみ、背を流して貰つてから、私は武知さんと村上さんの間に坐つて、最後の夕餉を共にした。長い旅に疲れてか、良寛のいわゆる料理人の料理には、私はもう箸をつける元気を失うていた。そしてその代りに、山家風なおいしい沢庵漬をしきりに頂いた、馳走は料理よりもむしろ、おわら節に在つたのである。

歌い手二人、三味線二人、胡弓一人。いづれもおわら保存会の人々で、袴をはいてがつちりと五人一列に坐られる。それ〳〵他に本業を持つ町の人であることが何よりうれしい。その前へ、歌と曲に合せて黒じゆすの帯をしめた四人の娘さんが袖を振つて踊りでる。此の乙女達も亦町の良家の娘さんである。私達は心耳を澄まして、土から生えたような寂びのある練れた節に聴き入つた。

二百十日に風さい吹かにゃ
　早稲の米喰てオワラ踊ります
八ツ尾よいとこおわらの本場
　二百十日をオワラ出て踊る
あいや可愛いやいつ来て見ても
　たすき投げやるオワラひまがない
たすき投げやる暇あるけれど
　あなた忘れるオワラひまがない

八尾は昔から名だたる米どころ、そして今は衰えてしまつたが養蚕と機織の町であつた。寛永十三年頃から農民や織女の間に唄われ出したおわら節が、元禄末期からいよ〳〵盛んとなり伝統四百年今日に及んでいる。おわらは大薫で、二百十日の無事を祈る心から、台風なしに大

きい稲藁に稲穂みのれと此の日を風の盆と称して、町民総出で踊るのである。

保存会の人々は、落花の山に、美しい余韻を残して帰つていつた。曇り日は日暮が早い、私はほのかに見える花びらをふんで藤塚さんの案内で、江尻豊吉さんを訪ねていつた。おわら節ではレコードやラジオで全国的に聞えた江尻老人は今では眼がすつかり見えなくなつて、城ケ山へ登つて来られぬのだし、一つには長い旅に疲れた私の体を、あんまを本職とせられる此の人に、揉んで貰いたい気持もあつたのである。

すゝめられるままに、大きい炬燵に当つて、肩をもんで貰いながら、如何にもすなおで、人の善さそうな江尻さんが、ぽつり〳〵話す、若い時からの断片的ではあるが、民謡芸人としての物語に耳を傾けることは、北陸路の旅の終りの一夜として、私にとつては終生忘れ得ぬ思い出になることとであろう。江尻さんは、八才の時から三味線を習つた。その頃八尾千軒に、三味三千と云われて、男という男は、みんな三味線をひいたものだそうである。三味線は女のものかと思つたら、矢張り男のものであつた。お父さんが義太夫が好きであつた関係から、豊吉さんは若い頃、大阪へ出て芸の修行をしたこともあるとか、今名の聞えている文楽の源太夫などは、その頃からの友人であるらしい。豊吉さんは若い時からひどい近眼であつた。そのころ流行しだした鍼灸術を芸のかたわら習うて帰つたのが因で、今までずつとこうした生業につながつて来ながら、好きなおわらにいよ〳〵研きをかけてこられたのであつた。

このあいだ源太夫さんが訪ねて来てくれた。わたしより三つ上の六十四才というに、なかなかよい声しとる、それにわたしは心のままに唄えぬ、脚気があるからしんどいのだというと、そうではない、しつかり唄わぬからだ、脚気も何も忘れて、芸のことは一生涯修行を止めてはあかんというてくれた。えゝこと云いよる。さあ、あんた今度はここえこう横になつて貰いましよかと云うてくれるその時、孫らしい少年が風呂から帰つてくる、やがておばさんも帰つて来て皆で同じ炬燵に坐る。少年は、おじさん何処から来た人かやと尋ねる。伊予の国、四国から来たのだよというに、まだ四国を知つていない、小学二年生くらいらしい。こんぴら様だよと云つたら、かすかに解つたらしく、遠い所の人だな、今夜は泊つてゆくのかと尋ねてくれたりする。

豊吉さんの話はつづく。昨日富山へ高松宮さまが来られて立山登山をせられるとラジオが云うておつた。わたしは宮様の御前でおわらを唄いましたよ、梨本の宮様の前でも、東久邇宮様でも唄いました。まだ敗戦前のことで、そんなことを思うと、変り変つた今の世の中が今更のように思われ、なつかしいやら、悲しいやら。横になつた私の腰をもんでいる豊吉さんの顔は見えないのであるが、いかにも感慨ふかそうな息が、わたしの背に感じられる。五十余年の間おわらばかりやつて来たのですが、ちよいちよい端唄もやるにはやつたが――今は眼が見えないけれども一寸その声を聞けば、この人は、八尾の人か、八尾から川をへだてた向うの村のも

のか、二里三里とはなれた所の人か、富山あたりの人か、他国の人か、直ぐに解りますよ。ほんとうのおわら節は、此の八尾の町で生れたもので、八尾の水を飲んで育つた者でないと、どう云うものかうまく唄えぬ。上手な節廻しなどで、賑やかに、口の先きや、咽で唄うては、おわらのような土地から生えた民謡にはなりませんや、体で唄うのですわい、手つき足つき、体のこなしが、みな唄にひびいて来るものでして。

いつやら、東京から弘田龍太郎さんが、おわらの研究に来られまして、わたしも会いましたが、おわらを唄うておりますと、いろ〳〵の人に会わして貰います。小杉放庵さんは度々来られましてな、おわらの新しい歌詞を作つておられますよ。吹きこみですか、レコードには十六回もとつて貰いました。あなたはもし今度八尾に来られるならば、風の子祭りの九月一日に来て下さい。聞名寺の境内にあふれたものたちが街一ぱいにひろがつて三味に合せて唄うて踊りますのじや、おわらを唄わぬもの、踊らぬものは此の八尾には一人もないと云うてよいほど、長い街を、上へ下へ踊り暮らし踊り明かすのですわい。昔の八尾は、おわらおわらで半年踊つても食うてゆけたものでして、それは儲けのよい蚕種をやつて岐阜から近江の方へ売つたのですが、今はそれもなくなり、なかなかおわらを踊つているだけではやつてゆけぬ世の中とはなりました。――豊吉さんの話がすむころ、あんまも一廻りもみ終えて春の夜の炬燵が、ほのかに暖い。豊吉さんの美しく光つている細い手に、お礼の志を握らせて、辞して街に出たのはも

う九時半頃であつたであろうか。
山の街はもう眠つている。軒の下を走つている二本の流れだけがさらさらと音を立ててい
る。その流をまたげて私は、高野という古い蕎麦屋へ入つて行つた。小林さん、清水さんも炉
のほとりで私のくるのを待つていて下さつたのである。小さい炉の辺に坐つて、前に置いてあ
る大きい食台を見ると、これは何と美事な下手物の美術品、厚味が六七寸もあつて、美しい木
目が浮き出て光つている。後に掲げてある扁額の一つは象山、一つは鉄舟の書である。深味の
ある店の構えに心をひかれている間に、のれんの次の間で手打ちの蕎麦を切る音などがして、
大きいどんぶりに注いで出された蕎麦は、何と今の世に珍らしい純粋な、色の黒くて香の高い
蕎麦ではないか。この街の夜にしてこの店、この店にしてこの蕎麦、私はうれしくうなづいて
あまり間食をせぬ慣習を破つて、お変りを求めるのであつた。だしと云い、かやくと云い、十
年前に信州の更科で食べた蕎麦以来の、正しい日本的な味覚を呼び起してくれるのであつた。
「あなたの様な、それも御遠方のお客さんに、食べて貰つて、私もうれしいです、この辺の
山村は、霜が早くどつと来ましてな、その霜に打たれる前に刈りとつたものでないと、よい
香が出ませんので。」
と云う老亭主に、心を残し乍らも、私は宿へ帰りを急ぎ、明日は、いよ〳〵帰国の途につか
ねばならぬ旅人なのであつた。（二五年四月）

友浦日記

七月二十七日。終日海上時化、風強く雨。
時化で舟は欠航らしい海原に、白い波頭が踊つている。東風が正面から当てる、風がひどい割に雨量は少い。内子のような山間部では、土用入前後から、雨が降りすぎて困つているのにこの島では日でりつづきで、諸も稲も気息えん〳〵としている。もつともつと雨がほしいと云うところ。
雨の晴れまには、正風や久仁子は浜へ出て「虹が出た」というてよろこんでいる、家内は中野の奥さんと涼しい話。
内子局から廻送して貰つた郵便物の中に、「速達」の文字が雨にぬれている。何か不吉な予感がして、封を切つてみると、大耕同人岡山県豪溪の守谷季男氏が二十三日心臓マヒで「わしはこれまで社会的に何等貢献していない、せめてこの死体を学術研究用にでも役立てて貰つてくれ」と、孝夫人に云い残して急逝せられたという知らせである。一人息子の拝爾君が、家にいて臨終に会えたであろうか、孝夫人の悲歎にくれていられる姿など——しばらく暗然とす

る。東北の空を仰いで心経一巻を誦する。

「広島郵政」七月号が来た。「孤独の詩人」と題して佐々木元勝氏の新著「展望者」の評をした私の一文の次に、郵政省の榎本武治氏の「ある青年との対話」がのっているのもなつかしい。私にとっては曽つて久しく魂を打ちこんで編輯していた「広島逓友」が再生したような気がして、此の雑誌は「大耕」の兄弟の様に思われてならない。

子供達は、全く変った環境にも直ちにすっかり慣れて、中野さん一家を我が家のように思つて、もう甘えだした。よし子チャンはお母ちゃんにつれられて、お祖母ちゃんのところへ隣村から遊びに来ているのであるが、年上の正風や久仁子とすぐ仲よくなつて、昨夜は、三人一所に離れの二階で寝ると云ってきかなかったが、今日は昼も夜も、私達の食堂としている湯殿の横の涼しい三畳で一所に御飯をたべるのである。子供の世界は無心でいいなあと思う。夜、私達がガラス戸に打ち当てる嵐や、ごう〳〵と鳴る海鳴りで、とかく寝醒め勝であるのに、子供はいつ見ても、深くぐつすり寝こんでいる。

七月二十八日。晴れたり、曇つたり、降つたり。

嵐の弱くなつた朝の浜辺へ出て、子供を走らせたり、体操をしたり、素足で踏むに、とても浄らかなこまかい砂浜である。視野の狭い山の町はづれの家から、燧灘を前にして、四坂島を二里の沖に置き、遠く石鎚の連峰を望むここのひろ〴〵とした大自然の中へ放たれた子供達は

見るもの聞くものが珍らしくうれしいのである。

涼しい間に、中野さんのリンゴ山へつれていつて貰う。道のほとりには、もう撫子、桔梗、萩などが咲いていて子供をよろこばせる。まだ若いリンゴの木に、点々となつている青いリンゴを見つけてちぎつて食べる正風の眼の、くり〳〵としていること。

「また盗まれた。この木には、この間来た時には二十個ばかりなつていたのに。」

と中野さんは苦笑している。私は鳥の食べ残しが樹下に転がつているので、それを拾うて食べる。人や鳥にいいところを食べさせてその残りものを、よろこんで食べるリンゴ山の主の愚かさも、われわれと一脈通ずる「愚を守る」ものであろう。

海を見ながら、呑気な七人の子供大供が、青いリンゴを食べていると、涼しい東風が吹きよせてくる。久仁子は帰ると、それを画にして見せた。

午後、少し波が高いけれど子供を海で遊ばせる。この浜にはほろろんという蟹がいる。潮の引いた砂浜へ、丸い穴を掘つて、その中にかくれていて、夕方などほろろんと、遊びに出るのである。透明というほどでもないが淡い色の体で、さら〳〵と砂の上を走る速さは驚くほどでなか〳〵捉えさせない。感心なことには、どんなに追い廻されても人の穴には決して逃げこまないで、自分の穴を探して入つてゆく。蟹の世界にも倫理があるのか、或いは他の穴へ入つたら、その中に頑張つておるほろろんが、怒つて闘争となるからか。この蟹の生きたのはアコウ

の餌となるとのこと。

　　ほんのり暮れた　白砂の
　浜辺にかすかな　ほろろんが
　足音立てず　ほろろんと
　浮かれて遊ぶ　友の浦
　ほろろんは　淋しき蟹よ
　白砂の穴ふかく　その身をかくす
　ほろろんや
　　ほんにはかなき夏の夢

ほろろんをとるのには、潮でぬれた砂の穴の中へ、乾いた他所の砂を握つて来てこぼし入れておいて、その乾いた白砂を目あてにして、シャベルで掘つてほろろんを突きあてるのである。まるで山芋掘みたいだ。ほろろんのいる浜辺で、顔が見えなくなるまで、ハチ犬と子供たちは、涼しい海風を浴びて遊び戯れる。

七月二十九日。終日風雨はげし。

午前中渡辺君兄弟、村上君来談。午後村上村長さん来訪。波音を聴いて読書。

七月三十日。曇のち晴。

東予の連山には、白い雲がかかつてまだ降つているらしい。岩城島の矢野さんが休暇で帰村来訪。その船でヨシコチャンは、母チャンにつれられて粟井の大祖母さんのところへいつた。午後日が照りだしたので、海に入る。波がやゝ高い。子供とともに、子供になつて、潮と砂に戯れる。

今日あたり満月なのだが雲が多くて、月光さえもれて来ない。

七月三十一日。晴のち曇。

のどかな、涼しい日が夢のようにすぎてゆく。朝餉までに、渚の砂をふんであるく、ぬれた砂に、大きいのや小さいのや、三人の足跡がつづいているのを振返るのもたのしい。すがすがしい空気を、体一ぱいに吸うて帰る。今日は午後一時満潮。正風は波に戯れて飽かない。久仁子は岩の上から、飛びこみが出来るようになつた。子供二人で今日はじめて台所から母ちやんを海へ引張り出す。私は、はじめて児をはなれて、潮のふくらんだ沖へ泳いで出てみた。何という海の安らかさ、大らかさ、無心に浮いて大空を見ている時の心は悠久そのものである。所謂海水浴場の、ごみごみがやがやした気分は、われわれの近寄りがたいものであるが、こうした人に知られていない海の美しさに浸ることは、無上の幸福である。

今宵は宮島さんの祭だというので、村の子供達が、浜辺で麦藁の火を焚いて遊ぶ、あちらでもこちらでも束のまま火をつけて走つてゆく、海辺でなくては出来ぬ子供の火遊びである。藤

均君来訪。母屋では碁が盛んである。

八月一日。曇後晴。

朝早くすが〳〵しい砂浜を、はだしで児の手をひいて歩く。遠山は雲にかくれている。

中野さんの書架から碧梧桐の「子規を語る」を引出して読む。夕方中野さんと二人で峠を越して宮窪へ出て藤均君宅へ。二階から海と島山の涼しい眺めをほしいままにしながら、たのしい食事を共にして、役場へ講演にゆく、十時頃からはじめて終る頃は夜更けて冷え〴〵した。浜へ出て帰る時、とても美しい秋のような月が冴えていた。

八月二日。晴。

早く起きて、久しぶりに凪となつた宮窪湾内へ、藤君曽我部君の案内でギザミ釣りに出る。友浦から中野さんが、久仁子を歩かせ、正風を自転車にのせて、つれて来て下さる。私にとつては広島以来のギザミ釣りである。下畠君、栗田君、泉君、平井君等と、よく切串から似島の方へ釣りに行つたあの頃の呑気な夏が思い出される。切串燈台にいられた竹内さんが、今は此の隣島の木浦燈台にいられ、その官舎が、はるかに見えたりすると、二十年の歳月が流れ変つた様で、ちつとも変らずにいるかのようだ。子供達は割合よく釣れるのと、青リンゴや西瓜もあるので、よろこんでいる。「とうちやん、なか〳〵上手だのう」と正風にほめられたりして、青ギザミを引上げるのであつた。

友浦へ帰つて、子供と海につかつている間にギザミは早速料理されていた。二時の舟で中野、藤、大山という日に焼けた顔を揃えて岩城島の田名後君を訪ねる。新築の家を皆で見て廻り、自分の家が建つたかのようにうれしがる我等の友情だ。先づ西瓜のうまいの、それから風呂に入つて、ひろしチヤンを先頭にして皆で海岸づたいに本家の西瓜畑を荒しにゆく。しかし西瓜は朝の露にぬれたのを食べるべきで、夕暮のぬくいのは、何だか気持がわるい。広い畑に百も百五十もころ〳〵転つているのを、無雑作にとつては割つて口にするのだから控え目にしたつもりでも、貪食していたらしい。帰つて、楽しい夕餉をすませて、涼んで蚊帳の中へ入つたが――醒めると、私の腹も、両隣の腹もごろ〳〵ごろ〳〵鳴つている。ひどい痛みさえ加わつた藤君は、疲れていたからであろう。私は下痢だけ。中野さんは大したことなし、日頃から体を練つておられるからだ。

八月三日。晴。

朝は、梅干とお茶だけにして腹を整える。船で津倉へ。藤君は宮窪で下船。尾道から来た割に大きい船はお客も少く、涼しく、空腹の気持もよく、私はよく眠つた。幸港に上つて、大耕支部の藤本久志さんに迎えられ役場へゆく。柴田隆文君が待つていてくれた。私は元気がないので、小学校前の柴田君のお宅で、開会まで休ませて頂く。東風のよく入る涼しい二階にねころんでいると、戦死せられた海軍の兄さんと、陸軍の弟さんとの大きい写真が、何か私に話し

かけるかのよう。あとできくと、此の外にもう二人、併せて四人戦死せられているとか。柴田君とは、先年小松の香園寺で会つて以来、ずつと一筋に大耕につながつて貰い、こうして訪ねてくると、まるで兄弟のような親しさで会えるのも、此の道の味である。此の春、同人三人づれで仏通寺に二泊、老師や仁山師について親しく修行せられた時の話などなつかしい限りであつた。

公民館で午後二時から暑い中を二時間ばかり、私は真面目な男女の聴衆を前にして語つた。朝鮮と往来する飛行機の爆音の下で、大和民族の道を、深く考えつつ。あとで大耕同人の人々とゆつくり座談会でもして貰いたいと思つたが、私は少々疲れて来たので、再び柴田君へ帰りよい風呂で背を流して貰つた。

日が傾いてから、藤本久志さん宅をお訪ねする。東にむいた山裾の小高い所に、青田を見降して、小山に対する構えは、島の家とも思われない。菊や牡丹が沢山に作られてあるのは、御老人の御趣味であろう。二十四貫の大軀を裸にして、主人公は広い庭に打ち水して、夏の客を慰めてくれる。やがて、助役さん、池田校長さん、藤本さん等も来られ、大勢たのしく、盃を傾け合つた。禅の話なども出て、気持のよい会であつた。私は、腹をいたわるため、折角美事に造られた料理の半ば以上を、ただ見せて貰うにすぎなかつたことを、申訳ないと思つたことである。藤本氏自作自慢の大西瓜を切つて、食べて、十二時頃皆散会。明けつ放しの家で中野

さんと並んで涼しい蚊帳の中で短い夜を眠るのも、島の夏らしい。ここの水の味は、実に冷くてうまいものであつた。こんな水は、伊予の国にも沢山あるまいと思う。大家族の皆んなお揃いでお元気なのも、この水の良さによるところが多いと思う。

八月四日。快晴。

舟便よりも早いとのことで、中野さんと二人で、山越して友浦へ帰る。一里半ほどの山路であるが、津倉の牛市へ牛をつれてゆくのにも出会つたりして、わけなく帰つて来た。待つていた子供をつれ、海につかる。久仁子は、十五六米も泳ぐようになつたと云つて、平泳ぎして見せる。此の夏の十日の間に何とかして泳ぐことを自得させてやりたいと思つていた願いが達したわけである。正風は、浮くようになつたと云つて、四肢をひろげて、浅い所に仰向けになつて浮んでみせる。二三日、出ている間に海も凪ぎ、子供はもうすつかり海に馴れているのだ。

一寸、ひるねして、午後二時から友浦小学校で、村の人々に講話をする。狭い室にあふれるほど、此の暑さのただ中を、集つて来られ、時を忘れ、暑さを忘れて聴いて下さる村の人々の顔は美しかつた。

帰つて、最後の海へゆる〱つかる。一人で沖へ泳いで出てみた。太陽に腹を向けて、水面に浮び、じつと浮いていると、乾坤たゞ一人の我となり切る、その我をも忘れて、無心に息をしているこのたのしさ。

友浦と云つても日本の何人か知るであろう。その淋しい浜辺であるが、海の美しいこと、砂の浄らかなこと、遠景の山々の雄大なこと、四季を通じていろ〳〵の果物の出来ること。こういう海の村は、日本にもそう沢山あるまいと思う。試みに子供たちが、中野さんで頂いた果物の名をあげてみても、青リンゴ、オレンヂ、夏蜜柑、桃、ブドウ、西瓜など。毎日恵まれた生活の中で、よく焼けて、海に戯れ、人に戯れたことである。子供にとつてもこうした十日にわたる海辺の生活は生れて最初のものであるが、家内としても卯之町に生れ大洲に育ち、広島、布野、武蔵野、そして内子と転々して来たが、多くは海のない土地であつた。あくせくと、家事にあけくれするその家をしばらく捨てて、海に遊ぶことが出来たのは、中野一家の人々の好意によるもので、これまた生れてはじめての経験であつた。夜は、皆で最後の夕餉をたのしんだ。海も村も黒く更けて、天の川だけが、はつきりとかかつている空を見てから、涼しい風の蚊帳をくぐつたのであつた。

八月五日。晴、のち雨。

いよ〳〵帰る朝だ。ハチ公が、別れと知つてか、妙に頭をすりつけ、尾を振つてくれる。島に馴れつつも、矢張り帰りたくてならない久仁子は「内子へ帰つたら、水をがぶがぶ呑みたい」と云い、正風は「三輪車に乗つてやるぞ」と云いながら、乗場へ急ぐ。（二五年）

熊本の秋

十一月九日。下関から鹿児島行の急行にのる。熊本まで無言。これも亦旅のたのしみである。鳥栖からセーラー服の英国海兵が十五六人のりこんで来た。座席がないと見た彼等は、デツキや便所の戸口に立つたまゝで、遠慮深くして入つて来ない。あまり大きな声で話をするようなこともなく、間食も、立食いもせず、時々煙草をくゆらせるくらいのもので、日本人に笑いを送るようなこともなく、平常のままに立つているので、少し気毒なようでもあつた。アメリカの兵隊とは全く人柄が違うようだ。筑後平野を南下して、大牟田をすぎ、右方はるかに雲仙の峯を望むところから、もう肥後である。

熊本駅につくと、丸山さんと、山頭火夫人が待つていて下さつた。早速バスで黒髪町の丸山さんのお宅へ落ちつく。広島高師の教授時代に、戦線へお送りしてから、もう十三四年振りである。一別以来の物語はつきない。二度目の召集は戦場へ行かず熊本の兵隊教育ですみ、戦後は熊本短期大学の教頭として迎えられ、郷里の学生に慕われておられる。昨年は一年あまりアメリカへ出張して帰られた。専門の語学の外に、丸山さんの民俗学の研究は既に久しい。この

頃九州に於ける河童の研究は面白い。肥後の山間部では、河童が山に上つて、山童と云われているとか。

山頭火夫人――と云つても山頭火は妻女を捨てて出家して独りで旅して死んで行つたのであるが、私は何だか此の人にも山頭火の孤独な影を感ずることが出来るような気がするので、敢て、こう呼ばして貰うことにする。――には昭和十六年三月「愚を守る」を持参してから十一年振りである。その頃は、熊本の下通りで雅楽多と云う額縁店を営んでいられたが、戦災で焼出されて久しく音信が消えていた。「俳人山頭火」が上梓された時にも、先づこの人や、健君に読んで貰いたいと思つたのであるが、あとで聞くともう店で求めて読まれたとのことである。健君は山頭火の遺骨と共に仏通寺で会つたきり、満洲の密山炭鉱で敗戦となりシベリヤへつれてゆかれていたが、無事帰ることが出来、現在では長崎県のある炭鉱の次長として仂いておられ、もう三人の父となつている。夫人は健君一家とは別に、市内大江町の知友のお家の一間に、出家後の山頭火と同じように、独りをたのしんで余生を静かに送つていられるのである。熊本は失意の山頭火が十年もいたところである。その間よく酒も飲み歩いたが、俳句も作つた、句作より禅に志し、ついに出家得度したところである。そして所謂山頭火的托鉢生活の出発点となつたのも亦熊本である。

十日。秋らしい朝の陽が、庭木を通して新しい鶏舎にあたつている。奥さんがしきりに鶏の

世話をしていられる。朝餉には産みたての卵をいただく。

やがて山頭火夫人が迎いに来られ、二人で川尻町の大慈寺を訪ねてゆる。長六橋で郊外電車にのり換えて白川に沿うて下る。熊本は街の構えがどつしりしていて、家の建築に飾がなく、素朴で剛直で、屋敷を広くとつてあつて、木立が多い。土地が肥後の肥で、肥えていると見えて、生垣の木も庭木も、ぐん〳〵伸びて、大木となつているのが眼につく。

川尻の駅から大慈寺まで、野の中を歩く、振り返ると大阿蘇の山には雲がかかつていて、今日は噴煙も望めない。大慈寺と云えば、「禅の生涯」の沢木興道老師が、大正五年から大正十一年まで、僧堂の講師として住し、五高学生などに禅風を呼揚せられた道場である。夫人のお話では、山頭火は大慈寺へ参禅したかどうかは解らぬが、老師が万日山に独住せられてからはよく禅談を聴きにいつたものらしい。興道老師がこの寺を出られてから、久しく無住で荒れ果てていたのであるが、現在は望月義庵老師が住職せられている、その義庵老師が熊本市浄行寺町の報恩寺（俗に千体仏という）の住職時代、山頭火が好んで参禅し、ついに大正十四年二月四十四才にして出家得度した時、導師となつて山頭火の堅い頭髪に剃刀を当てられたのが、此の老師なのである。

古い山門をくぐると右側に切石で築いた大きな石仏が坐つていて、その下に茶の花が楚々として咲いている。大きな法塔、大本堂が棟を竝べて秋風の中に建つている。一礼して右手の庫

裡の入口から、典座寮の土間を通り、一番奥の隠寮へいつて、「ごめん下さい」と云うに返辞がない。日南の縁へ廻つてみると、猫の親子が二匹、ぬく〳〵と坐つていて、私達の顔を見るばかり、菜園で仂いている人に和尚さんはと尋ねると、「今日はいられます、本堂の方でしよう」と云われる。広い境内をぐる〳〵廻つて探すと、本堂の横に稲架を立てる用意をしていられるところ、七十六才の老師が百丈和尚ではないが、十町歩の田地を農地法で取り上げられ僅かに残された一反歩の田に稲を作つて、今日はその稲刈をはじめられるとか。山頭火夫人とは旧知の間柄で、山頭火の歿後夫人はしば〳〵此の老師を招いて山頭火の冥福を祈られ、また此の寺に詣でては供養を重ねていられるのである。やがて隠寮に招ぜられて、いろ〳〵と山頭火について語る。

「はい、坐禅も組みに来ました、どうしても出家するというので、ほんとうの禅僧にして修行させるというのではないが、とにかくわしの弟子にして、得度させたのぢや。」

「老師さまは、一度山口県の小郡へ、其中庵を訪ねて行かれていますね。」

「はい、はい。あのころはよく東京へ行く用事があつたので、一度帰りに寄つて見ましたわい。山頭火らしく、庵のぐるりには、草をぼう〳〵と生やしていましたわい。わざと生やして楽しんでおるのぢやと云つておつたが。」

「此の〃俳人山頭火〃を差上げます、一六八頁をごらん下さい。昭和八年の五月廿六日の日

記に、山頭火はこんなことを書いています。『御飯を炊いていると、聞き覚えのある、そして誰か思い出せない声がする。出てみたら意外にも義庵老師であつた。上京の帰途立ちよられたのである。いろいろ話しているうちに熊本がなつかしくなつた。お茶もないし、何も差上げるものがないので、S店へ走つてビールと罐詰と巻鮨とを借りて来て、朝御飯を食べて貰つて八時の汽車に間に合うように駅近くまで見送つていつた』。」

どれ〳〵と云い乍ら老師は老眼鏡をとり出してその頁をなつかしそうに見入られてから、今日は一つ山頭火さんのために本堂でお経を上げますかな、と云いつつ、夫人を顧みられる。

「どうぞお願いいたします。一日早いけれども山頭火の命日ですから。大山さんと一所にここで拝まして貰うことを山頭火もよろこんでくれるでしよう。」

老師は硯をすつて、戒名紙に「山頭火耕畝居士」と書いて衣をつけて立たれた。二人は長い廊下をぐる〳〵ついて行つて大本堂の仏前に坐つた。本堂はひどい荒廢である、柱は傾き、窓は破れ、坐つている私達の間を、秋風が颯々として通る。

秋風の中で、得度の老師に回向せられるのである。先づ修証義総序の「生をあきらめ死をあきらむるは仏家一大事の因縁なり」と、老師の音声は寂びている。お経がすんで再び隠寮に戻り、そこで、御親切なごもくめしのお昼を頂いた。稲刈の御予定もあるので、尚も心を残しながら辞去しようとすると、老師は此の寺に伝わる開山寒厳義尹禅師の真筆になる国宝「願文」

の写本一枚を記念として私に下さるのであつた。義尹禅師は、後鳥羽上皇の皇子であるが五才の時に上皇を亡くせられ、その菩提のために出家して修行の後、大慈寺を創建せられたとのこと。

熊本に帰つて、米屋町に友枝蓼平氏をお訪ねする。薬剤師で薬局を営んでいられるのであるが、熊本に於ける一番関係の深い文学と酒の友であつた。少しぜんそく気味で、休んでいられたのを、無理に起きて、私達のために往時を語つて下さるのであつた。室にいた犬公が、はじめはしきりに吠えて困つたが、しまいには私の手に戯れてよく遊んでくれだした。

十一日。夫人と二人で植木と味取へゆく。曇つているので傘を用意したが、だん〳〵晴れて来て、山鹿行のバスは快々的に鋪装せられた大きい路を北に向つて走る。私はバスに乗つてから一途に蓮田善明のことを思いつづけた。私の広島時代、文理大の学生であつた蓮田さんは、斎藤先生から私のことを聞いて牛田の家へよく遊びに来てくれた。「地下の水」を出版する時には、台湾の任地へ原稿を送つて、仮名づかいを誤り易い私の字句を訂正して貰つたりした。その後斎藤先生の修監で、中等学校用の「作文」という教科書を編纂した時、その中に、好んで私の文章を取入れたのも蓮田さん達であつた。成城高等学校教授時代第一次応召では、中支に従軍して少隊長をつとめたが、兵隊を一人も殺さぬように、それのみ心掛けつつ、「奥の細道」はじめ国文学の良書に読み耽り乍ら戦場を去来して一弾が中つたが、幸い助つて帰つて来

た。それから昭和十八年第二次応召までの蓮田さんの精進は鬼神そのもので、「鴨長明」「本居宣長」をはじめとして七冊の著述をとげ、「文芸文化」に毎号執筆するばかりでなく、保田与重郎、中河与一氏などと交り当時の文壇に乗り出して来た。その時、南方へ出陣を命ぜられたのであつた。船中で作つたおらび歌など、重要な原稿を、ジヤガルタで日本に帰ると云う佐藤春夫に托したその原稿が、遺書となつて了い、「文芸文化」の終末号を、奇しくも飾つたのであつた。

植木町の師井という医院の前でバスを降りる、ここが蓮田夫人の生家であつて、私をかすかに覚えていてくれる二番目の坊チヤンが、もう中学の三年生となつて待つていてくれた。町裏の我家に、黙つて案内してくれる少年の後姿を涙なしに見られようか。戸口では、東京の家で見ていた「蓮田善明」の門標が昔のままである。夫人にお会いするのも八年ぶりである。床の間には故人の遺愛の書が山と積まれてあり、その中でも故人の著書が一番手近かなところに重つている。なつかしい限りである。「鴨長明」の校正用のゲラ刷がそのままに残つて、蓮田さんの訂正の文字が見えると、あの砧町の家で二畳の玄関を書斎にして、三人の幼い坊チヤンにもぐれつかれ乍ら、夏の暑い日射しの下で、克明に校正をしていた蓮田さんに会う思いがするのであつた。

仏壇の写真は、和服で、腕を組んで微笑していた、此の人が、終戦と同時に、ニユーギニヤ

の小島からシンガポールに集結し、そこで責を感じて自害を遂げるような、烈しい魂の持主とも思われない。私は涙を押えて合掌念仏した。しばらくお茶を頂いたりして奥さんと往時を語り、それから墓地へお詣りしようとしていると、直ぐ表の家から兄さん夫婦が挨拶に来られた。「あなたの御本は、弟から貰つてよく読んでいます」など云われると、一寸お会いして直ぐお別れするのがつらかつた。墓地は街道の西側の森の中である、そこへゆく道が、あまりにも蓮田さんの愛した武蔵野とよく似ているので、奥さんにそのことを話すと、「柳田国男先生も云われましたよ、成城あたりの土と、日本で一番よく似ているのは肥後の植木附近だと。」と答えられる。お墓は、お父さん、お母さん、そして蓮田さんと云う風に、三基皆西に向いて立つている、どちらを見ても広い肥後の野であるが西の山が一番近い。墓前に香を立てて、その煙をふりかえりながら、三人は、畑の中の道を屋根の見える金蓮寺の方へ急いだ。途中一匹の馬が、路に立ちふさがつて遊んでいた。

金蓮寺は、蓮田さんの生れた寺で、今は長兄が住職していられる。古寂びした庫裡の御内仏の前で、兄さんにも御挨拶することが出来た。そして掃き浄められた庭に出ると、庭木の中の一本は、大山木で、枝の先きに赤い実がついていた。私は思わずこんなことばが浮んで来た。歌をやらぬ私なので歌にはなつていないが、此の前後の感銘は、どうも俳句としては表現しにくいものであつた。

大山木実となり寺はすがすがし蓮田善明この庭に育つ

それから墓地では

母そばの母に並びて倶会一処西に山見ゆ安らかに眠れ

武蔵野の土を思わすふるさとの土に帰りてなゝとせの秋

大阿蘇の煙の見えて馬遊び栗刈りすゝむ君がふるさと

こうして二人の夫人と共に、一つは蓮田さんの墓参、一つは山頭火庵住の跡を尋ねるということも、考えてみれば、奇しき因縁である。山頭火の句集「草木塔」や「愚を守る」を熱愛して、「山頭火のおられたと云う味取観音は、僕の故郷の隣村で、子供の時によく遊びにいつたものですよ」と私に云つてくれた蓮田さんであつた。

バスの両側には、所々甘藷の畑があつた、高原は霜が早く来るらしく、いもの葉がすつかり枯れていた。火山灰の堆積して沃土と化したこのあたりには、水田は殆んど見られない、栗の畑が沢山あつて、今栗刈の最中らしい。

山頭火さん、

ここは熊本大江町の奥さんの仮寓の一室です、室の一隅に机があつて、その上に大きい蓄音器の箱が口をあけていて、その中に「種田家代々之霊位」と「解脱院山頭火耕畝居士」と小さい二つの位牌がまつられ、耕畝居士の前には盃に酒が供えてあります。一輪ざしには菊の花が

活けてあり、赤いリンゴも供えてあるのです。蓄音器の箱を、仏壇にするなんて、昔の雅楽多堂の女主人のせられることではありませんが、今は無一物となられた孤独の戦災者なのです、この光景が極めて山頭火的なので、私は一入うれしいです。あんたが捨てるようにして別れていつた人が、今はこうして日々あんたを憶念していられるのです。私があげた「愚を守る」は云うまでもなく、山頭火に関する新聞や雑誌の記事を、奥さんは細大もらさず切取つて、我がことのように大切にしていられるのです。

今日は多年あこがれていた味取の観音堂を訪ねて来ました。思つたよりも便利のいい所で、バスの停留所から直ぐ左手の小山に上つてゆくと、古い松があんたの句の「松はみな枝たれて南無観世音」の如く、風に耐えた枝を垂れていました。石段を半分登つたところの左側に庫裡と本堂を兼ねたような小さい曹洞宗の寺があり、石段をのぼりつめたところに小ぢんまりした観音堂が在る。庭は広々として松の間に桜が交つて紅葉しているのも美しく、お堂の両側には八体づつの羅漢の石仏が、風化した寂しい顔して坐つていられるその顔に、松風が松の葉を散らして通るのでありました。礼拝して下のお寺へ立寄りました、あんたが義庵老師の御世話でここに庵住したのは大正十四年二月から十五年の四月までであつたが、その後住の柏木和尚はずつと今日まで在住し、なか〳〵のやりてで、二十七年の間にお堂の修繕から庫裡の拡張、西国三十三番の設置など大した発展ぶりですよ。「久しぶりに掃く垣根の花が咲いている」とい

うあんたの句になつた垣根は、埋立せられて広い庭となつている。最も驚くべき柏木和尚の努力は此の岩盤の山に百三十尺の井戸を掘つて地下水を汲み当てていることでした。あんたのいた頃のように、麓の家の人が代る〳〵水を汲んで石段をかつぎ上つてくれると云う、あのようなことはなくなつているのです。其中庵があとかたもなく崩れているのに対し、ここはあとかたもなく発展して小さい庵が一つの禅寺になつているのです。これまた無常。柏木和尚は山頭火について何も知るところのない人であるが、昨年であつたか、山頭火を慕う天草島の俳人達が、ここに山頭火のいたことをしきりになつかしがり、わざ〳〵訪ねて来て山頭火の書かれたものが何かありはしないかと、その筆跡を求めていたと云うことでありました。

私は秋風をきゝながら大きい松の幹を撫でるようにして手を当て、三十年の昔をしのび、石段を降りたのでありました。

十二日。小雨。

ぐつすりねて起きて、旅の身辺や、原稿の整理をする。午後丸山さんの御案内で、熊本日日新聞社主催の「山頭火を語る座談会」にゆく。秋の雨がふる中を、川尻の宮本謙吉、「日本談議」主宰の荒木精之、作家の森本忠八、歌人の西本清樹、吉村光二郎の諸氏はじめ十数人集つて下さる。場所は新聞社の直ぐ裏の公民館、司会ほ熊日論説委員岩下さん、岩下さんは広島文理大の出身で斎藤先生の門下である。

茶菓子を頂きながら実に和やかに、飲み友達、文学友達の話がはずんだ。西本さんのお話では、西本さん達の催している短歌の会へ山頭火も一首出して加わつたことがある。互選になつてから山頭火は自分で自分の歌を選していた、これは一寸誰でも出来ない、他によいと思う歌がなかつたと云う。その自信の強さには心をひかれた。またわれ〳〵はるか年少の後進に向つては、人間的に実に優しく、親切で、読書のこと、文学する態度などについて導いてくれた。しかし教えてやると云う風な先輩らしい様子は少しも見せなかつた、今当時を思い出してなつかしく思うと。また吉村さんや山頭火夫人の云われるには、ある日、酔払つた山頭火は、公会堂の前で一人大手をひろげて進行してくる電車の前に立ち塞つて、ついに電車を止めた。それを見た木庭という人が、山頭火を千体仏につれて行つて参禅させた、それが禅門をくぐる第一歩であつた。その他、遊び友達にずいぶん迷惑をかけたのではあるまいかと尋ねてみる、お答えは一致した。それは決して迷惑ではない、料理屋から馬がつけて来ようと、どうしようと山頭火と共に飲むことが好きな人々で、つまり山頭火に酒徳があつたのですねと、皆で笑つたことであつた。

最後に私は山頭火の句碑は終焉の地松山と、故里に近い其中庵跡に建てられているのであるが、悩める十年の熊本時代のしるしとして、熊本へも時を見て一基樹てたいと云う悲願を抱いていると云つて、話を結んだのであつた。（二十六年）

東京と房総

十一月二十一日。小雨。

車窓の外は小さい秋雨がしと〳〵降つていて、品川で午後の四時というに、もう暗い。新橋あたりから、街のネオンが夢のように光り出し、道いつぱいに流れている自動車が緑や黒や、蛙の背中のように光つて、ネオンにぬれて美しい。やがて東京駅である。八年ぶりに踏みしめるプラツトで先づ見つけられたのは、田倉さん、それから長岡さん、その後に薗田さん、そして山上君、田倉実さん。佐藤堅司さんには、此処で初めて会う。東京郵政局の橋川さん阿部さんという風になつかしいにこ〳〵顔ばかり。うしろから肩を叩いて春陽堂の和田さんがのつそり。

「ちつとも変つていないね」「ます〳〵太つてくるね」

などと云われながら降車口へ。そして自動車で荻窪の田倉さんまで走る。戦火を免れた玄関も、座敷も昔のままである、奥さんに挨拶した時、私は急にこみ上げてくる涙をどうすること

も出来なかつた。新京悲劇、引揚者としての生きる道、そんなものはお顔の何処にも残していられないが、それだけに、言葉につくせないものに打たれるのである。夕餉はお心のこもつた手料理で、長岡さん薗田さん田倉さん父子と卓をかこむ。菊の花の一皿は、みちのくの秋の料理で、とても珍しい。外は武蔵野の静かな秋雨、内は温い話と酒。一昨年長岡さんが、胃の大手術をせられた時のお話には心をひかれた。手術の後で、こんなに静かに落着いて、私に心置なく刀を振わせた患者は曽つてないと医師が云われたと云うことであるが、禅定の心境で台上の人となり、大事に処せられたのであろう。それを長岡さんは単に、ますい薬がよく利いたのだと云われるけれど。囚人として遠くシベリヤに流されていられた田倉さんの「赤塔」は広くよまれた本であるが、お話は自然中共の政治などに及んでくる。

そこへ、勝矢さんが雨の中を来て下さる。安芸の国アクセントもなつかしい。参議院内のことから、話は吉田首相の赤いネクタイに及ぶ。

「マツカーサーも心得がわるい、帰る時には天皇陛下に挨拶をして帰るかと思つたら、黙つて飛んで帰つた。」

には皆洪笑同感する。長岡さんは、海事振興会の用で明日は神戸へ出張せられるので九時半散会。よい風呂で旅の疲れを拭い、日記を書いて就寝。

二十二日。快晴。

庭の落葉を掃く箒木の音が気持よく聞えてくる。塩を使つて、庭に出ると、昨日に変つた快晴。雲の片々が、大空のところ〳〵で高く遊んでいる。鶏が、卵を生んだと告げている。「菊はもう盛りを過ぎましたよ。この栗は沢山なつてくれてね。」と田倉さんについて畑や庭を見て廻る。国電で四谷へ。出口で宮本さんの車とぱつたり出会い、三人同車して、東京郵政局へ。

　三年(みとせ)経(へ)つわれ生ありて天山を南に望む野に麦を刈る
　そのかみの吉林の守の掃除する凍れる糞の山なす便所
　みちのくのわが故郷のしだれ桜咲きて散りしかわれは還らず
　これの世の生きのいとなみ四人子を持ちてわが妻やせにやせしか

これらの宮本さんの歌は曽つて「大耕」にのせ、私は「君、吉林之守（吉林省次長）たりし頃、鯉の生づくりにてビールを傾けて訣れしが、国破れて捕えられ、銃殺せられし報あり、われ悲しきうちにも、九死一生の帰国を待ちいたりしに、ナホトカ最後の船にて祖国の土を踏み、君健やか逓信博物館長たり」と註している。「やあ、どうも」「やあ」と軽く言葉を交して車に乗つてはいるが、吉林訣別以来二人の歩いた道は、あまりにも差別と変化がありすぎる。それだけに共に生き残つていたこと、いやこうして生きていることが、たゞ〳〵うれしい

のである。局長室で、二十四日から千葉県巡講のことを係の人と打合せ、田倉さんと二人で上野へ行つて、憧れの日展に入る。日本画、洋画をみて、最後に、彫刻の室に入つた。沢山な立像のまん中に、二人の青年が、肩に手を打ちかけて無我そのもので立つている。女学生が沢山見ているその後から私は此の二人の像を一見した時、不思議に両眼に涙がにじみ出た。おかしいな、この大勢の観衆の中で、しかも沢山の作品を見飽いている眼に、こうした生々しい感激が浮んでくるとは。やがて学生の去つたあと、よく見ると「ヘルシンキの感激」である。石井・上迫の二選手を、藤野舜正氏が創つている。無我にまで達した芸術の偉大さ。私のように二人の優勝者と、何のかかわりのない者までも感激せしめるのである。それから田倉さんと親交のある橋本高昇氏の裸婦「春暁」などを観て退出。上野公園は、紅葉から落葉へ、季節の移り変りで美しい。ベンチに疲れた腰をおろして、しばらく落葉を見てたのしむ。

上野駅から国電で東京駅へ。駅前から丸ビル新丸ビルあたり、街路樹が黄色な葉をしきりに落している。丸ビル地下のほてい屋で、そばをいただく。ビルや食堂に出入する人々は、勿論見知らぬ人々ばかりであるが、昼の休みにこうして地下の食堂などぶら〳〵歩いていた過去が思われて、人々の顔が、何処かで会つたことのある顔のようでなつかしい。二階の一室で折よく高村光太郎氏の個展が開かれているので、観る。小品が七八点、楚々として並んでいる、いづれも昭和十年前後の作である。白檀の木に彫られた白い文鳥のつがいなど、実に愛すべき作

ばかり。上野の多くのそれが、名を競い、見てくれよ、我を見よ、と叫びを発していたのに対してここのそれは、作ることを楽しんでいる。だから観ていて心が和ごみ、安らかになつてくる。桃、蓮根など、手にとつて撫でて見たい衝動にかられる。岩手県の山中に於ける高村さんの小屋の近影は、またなつかしい。あとで宮崎丈二さんにきいたのであるが、岩手では冬は寒くて木が凍り仕事が出来ぬので、ある大作を志して、先き頃東京に出て来られたとのこと。冬の間中、小屋の炉にかがまつていられたためか、腰が少し曲つていられるとか。

靖国神社の境内は銀杏の落葉でいつぱいだ、それを二人の人がしきりに掃きよせている。落葉をふんで、此の宮に詣でる私達の一歩一歩には、云いつくせぬ感慨がこもつている。木枯の風は、美しく黄葉した銀杏を降らしてゆくのであるが、時局の嵐は、若々しい幾万の若者を、その親木から奪い去つて行つたのだ。

それから麻布の巴荘へ。ここは東京地方貯金局の休養所、私のために、東京の大耕会が開かれるのである。集る人、岡崎誠一・景山準吉・勝矢和三、斎藤春彦・佐々木源蔵・佐藤堅司・関正雄・薗田一男・田倉八郎・高木正道・高藤武馬（南蛮寺萬造）古瀬長栄・古山恵風・宮崎丈二・宮沢芳重・宮本武夫・山上進・本吉明治の諸氏、いづれも親しみ深い顔ばかり、玖村敏雄・藤井崇治・長岡信捷・遠藤後一の四氏は御旅行中で、缺席を残念がられていたと。

お客である私から、各人を紹介せよとのことで、私流の紹介をするのも大耕会らしい。すべ

ての人を、皆よく知つているのはこの中で私一人だからであろう。これからは少くとも年に一度は出て来いと皆さんから云われる。占領下の東京を見たくなかつたのである。

隣の席の古瀬長栄さんは、山形県尾花沢の人である。芭蕉の奥の細道のあの「涼しさをわが宿にしてねまるなり」の鈴木清風の尾花沢である。古瀬さんの話では、「ねまる」はこの地方の方言で端座して坐ることである、大抵の人は、ねまるを、寝まると見て、ゆる〳〵横になつてねることのように解しているが、そうではないと聞かされて、私も亦教えられた。「通信世界」に逓信太平記を連載している古瀬さんは一家の人物評論家でもあるが、久しく「層雲」によつて、わたくしと同じ自由律俳句もやつていられ、如何にもみちのくの人らしく素朴である。その前の席は、宮内庁の斎藤さん、信州飯田の人、山頭火が旅で急性肺炎を患つて入院し病院は面白くないと云つて、便所の草履で脱出し、コツプ酒二杯をひつかけて、其中庵まで帰つた、その飯田である。私も曽遊の地でなつかしい。名物、蜂の子の珍味を思い出して話したところ、それについて斎藤さんから、詳しいことを聞かされた。あれは地蜂の子であるが、その巣が見つからない、そこで土地の人々は、地蜂の好物であるところの蛙の小さい肉片を、真綿の糸に吊しておく、蜂がそれをくわえて飛び去るその後に、真綿の糸を伸ばして、巣のありかをつきとめる。そして、油を注いで巣を焼くと、匂いが残るので、松明の火で焼きせめる、地下の巣で無数に眠つている蜂の幼虫をとつて、乾しておくとのこと。

二十三日。晴のち曇、そして小雨。

「朴の木が、あんなに大きくなつて、こゝから見えるでしよう。あの朴が大きい若葉をひろげると、路ゆく人がみんな仰ぎ見てゆくよ。」

と南蛮寺がいう。隣から私の旧居を二人でなつかしそうに眺めているのである。玄関も、何もかもあの頃のまま、子のない現在の持主は、私たちのいた頃よりも、家のうちは清らかに使いこなしていられるであろう。たゞ変つているのは、長岡さんに貰つた金銀二本の木犀をはじめ、家のまわりの木立が大きくなつているだけ。

「八年ぶりとは思われないね、毎月大耕を見ているので、いつも会つているような気がする。」

向うはそうかも知れないが、私から云うと、矢張り久しぶりである。それからの話がつきない。毛深い南蛮寺は頭だけ大いに禿げ上つているが、年寄りじみてはいない。今では、悠々と書くことによつて暮しも立ち、週に二回だけ法政大学へ出るのだと云う。主人の禿に対して客は白髪が多くなつている。話は呑気であるけれども、二人の頭上を烈しい時代の波が荒れ狂つた此の八年であつた。

二人で斎藤清衞先生を訪ねる。「武蔵野に炊ぐ」時代から考えると、先生ももう古い千歳村

の住人である。だん〳〵家が建ち並んで来たが、書斎で火鉢を囲んで話していると、昔のままに静かな千歳村である。山頭火のこと、玖村敏雄さんのこと、話はつきない。

「わしのところへ、毎月これだけの雑誌が来ちよる。」

と云つて三十冊ばかり積まれている山を指される。その中に「大耕」もある。

二十四日。曇、後雨。

新宿で郵政局の阿部さんと一所になつて千葉県佐原へゆくことにする。千葉駅から佐藤堅司さん同車。下総はうね〳〵とした十五六米の丘がつづく国でその丘の間に村があり田があり沼が光つている。白い鷺が沢山刈田で遊んでいるのも西のものには珍らしい。利根川の流れを北の車窓に感じて潮来・鹿島・香取など、曽遊の地を心に浮べているうちに佐原につく。久賀の米本氏父子に迎えられる。郵便局で頂いたおひるの鰻飯は鰻の焼方といい、醤油の香といい、米の味といい、実に美事なもので、鰻は佐原の名物である。

佐藤先生は好んで私の講話の前座に立たれた。西洋史から日本の武士道、それから二宮尊徳という風に、深くその道を学問的に探求せられ、駒沢大学の講座に立つていられるこの人に、前座をせられては相済まぬのであるが、二人の間柄は「大耕」によつて前後を超えているのである。私が話をはじめる頃から外は雨となつて、日暮が迫つて来た。雨の中をバスで久賀へ。

如何にも下総の豪農らしい門の構え。今は門の左が郵便局で、吉植庄亮門下の歌人で歌誌「かんらん」を編輯している重信氏が局長、門の右が旭窓庵で信吾氏がその主、外庭の上に、古い歴史を持つ米本図書館が立つて信吾氏がその館長である。黒い森を後にした母屋の大きい屋根が、とつぷり暮れて秋雨にぬれている。さめ〴〵と降る雨の音を聴きながら、ゆる〳〵風呂につかつていると、はる〴〵旅に来ている我が体が、温い湯気の中で夢のように白い。白い夢はいろ〳〵と過ぎし日を思い起させる。私が此の父子とこうした親しい縁を結んだのは、昭和十五年の七月、伊達大二郎君と二人で、ハルピンから松花江を降り、北満弥栄村を訪ね、弥栄郵政局長米本秀雄君夫妻と一夜を語つたことに因する。広島へ帰つて計らずも私は東京に転勤した。そして弥栄の状況を、お伝えせんものと此の家を訪ねて来たのであつた。しかし悲しい哉、その後新京の航空局に転じていた秀雄君は、満洲亡国に際して彼地の土となつて再び此の家に帰らないのである。

二十五日。雨。

一家一局をあげて歓待して貰つたが、一宿しか出来ぬ旅人は、今日は利根川尻の銚子までゆかねばならない。美しく熟れた柚子をちぎつて貰い、それを懐にしてお暇する。小見川で、佐藤氏と別れる。医師本田氏を訪ねられる由、本田氏は大原幽学の教えを受けられた家である。

銚子局では、前橋時代から、志を同じうした吉野局長にお会いすることが出来てうれしかつた。吉野さんの案内で屋上から銚子の町や、利根川の対岸にある波崎を見る。ひどい風でじつとしていられない。舟は皆港に入つて、今日は秋刀魚舟も出ていない。労仂会館で講和をする間にも、太平洋の嵐が、体に寒々と感ぜられ、私の話も暗くなつたかと思う。ここで大耕同人八日市場の伊東誠さん、飯岡の宮嶋芳四郎さんに会う。鹿野山の講習以来、ずつと私を忘れずにいて下さるのだ。吉野さん・田辺さんの案内で、犬吠岬へ車を走らせる。波静かな日よりも、この時化の日こそ犬吠岬らしいと云われる。荒波は、岩に砕け、岸に吠ゆる。太平洋の彼方は、暗雲がこめて波がたちまちに白く飛びはね、走つてゆく車が振い、大地がうなる。灯台へ着いて、台長さんに親切に説明して貰い乍ら、灯台に昇る。

「無電や、電波の信号で、洋の彼方、視界の外をゆく船と連絡しているのです。銚子の漁船は、直接、此の光を頼りにしていますがね、こんなに時化る日は、船の人は緊張していて航海を誤らないですが、却つて波の静かな日に、沖から帰つてくるのに、岬を一つ間違えたりしますよ。」

と云われる。荒れ狂う岬から潮光荘へ入つて泊る。先づ一風呂浴びる。なんという肌ざわりのよい浴槽であろう。出たり入つたりして楽しむ。それに此のような旅では、風呂に入つている間だけが、私独りの世界で、黙つて一人を楽しむことが出来る。次から次へ会う人は、みん

な会いたい人ばかりで、人と語り合うことも楽しい限りであるが、時には独で黙つていたい。
夕餉に私は特に土地の名産秋刀魚を注文する。ここでは生きがよいので、秋刀魚の腸が一番うまいと云われる。関西へくるまでには、その腸は悪くなつているのでどうにもならない。さんまの塩物など食べたことのない銚子の人々なのである。剣道七段の鶴岡氏の若い時の修業談はとてもゆかいなもので酒杯の興をそゝられたことである。民謡の磯節・大漁節などは、此処で聴いてこそ味があり、旅情を一入深めてくれる。関西の人々は、磯節の調子があまり早すぎるが、太平洋の波のゆる〳〵としたうねりから生れた此の歌は、ゆつくり歌うのがほんとうだと思う。伊藤さん達と枕を並べて休む。

二十六日。晴。

今日は銚子から房総半島の南端館山まで、太平洋岸を南下する、その旅にふさわしい好晴。成東・大網で乗換えていよ〳〵房州に入る。訓練係長阿部さんは、五尺七寸に二十貫という大男、私も小さい方ではない。ぬく〳〵と日南の車窓で、うたたねなどして呑気に旅する二人となつた。旅は道づれと云う。よい道づれだ。
鴨川では富安風生先生のことを思い出さずにはいられなかつた。もう池袋の草魚洞も冬景色になつたので、ぼつ〳〵こちらへ来られる頃かと思うが、下車するゆとりはない。館山局の二

階で語る。昨日と違つて、汗が出るほどぽか〱日が射して温い。自然私の話も陽気になり、柴山老師の「だらり」から悠々と語る。岩井の局長さんはじめ、もつとゆるゆる談じ合いたいような好き人々が多くいられたのであるが、心を残しつつ小滝吉五郎さんに迎えられて去る。四十分にして、犬掛という所で降りると、そこから小滝さんの古くて大きいお宅が見える。犬掛の犬は、里見八犬伝の犬であつて、昔の物語を忍びつつ門をくぐる。東京にて敗戦、安岡正篤先生に相談せられたところ、「応仁の乱の時、志ある人々は多く京を去つた。此の度は、応仁の乱以上に国土も人心も荒れるであろう。帰るに如かず、帰農して耕すに如かず」と示されて、直ちに故里に帰り、土を耕して、今日に至られたのである。晩秋の夜も長いが、話もつきない。

ここで、私は、ひそかに尊敬していた成蹊学園の奥田正造先生が一昨年死去せられたことを聞いて、悲しく、惜しいかなと歎じた。名著「茶味」を読んで以来、一度親しく教えをうけたいものと思い乍ら空襲下で思うに任せず、遠く伊予に去り、今度上京して、是非お訪ねしたいと思つていたのである。小滝さんは東京文理大在学中から、奥田先生に参じ茶と禅を行ぜられまた、法隆寺の佐伯猊下にも先生と共に就いて学ばれたのであつた。今日、茶と禅に関する著書は多いが、「茶味」にまさるものはあるまいと思う。その著者既に亡く、佐伯猊下も亦八十五才を一期として遷化せられた。二人で法隆寺や亡き人々を忍んだことである。小滝さんは、

また東京高師時代から、足利紫山老師や、平林寺の大休老師に参ぜられたのであるが、それは一つに郷里の先輩坪野平太郎先生の影響で、坪野氏は、京都の峩山和尚によつて、心膽を練られた達人であつた。話は、広島の原爆に及び、爆死せられた杉本五郎夫人のこと、遺児四人のことになると、幼年校から士官学校と相つづいて長男正君を親しく教えられた小滝さんは、慈父の如く、慈眼を曇らされるのであつた。

「友あり遠方より来る」とは、全くこのことだと云われる。そう云われると、広島では仏通寺の一滴を共に行じ、東京では大泉の官舎にもお訪ねしたりした私は、遠く四国へ落ちて行つた。それから、十年振りで房総の南端に現われたのであるから、全く遠方より来るである。月光を浴びて裏の小高い所にある離座敷に案内されて一人で灯を消して眠る。

二十七日。晴。

落葉をふんで母屋へ降りようとすると、私を起しに落葉をふんで上つてくる小滝さんとが、庭木の中で出合つた。霜かと思われるような露が、石をぬらし、屋根をぬらし、紅葉した葉をぬらしている。生れてはじめて見る房州農村の朝ぼらけである。田の畔を少し歩いて座敷に帰ると、もう朝餉で、餡餅のぬくいのが一皿ついているではないか。皆で三時から起きて搗いたのですよと云われる。何という家をあげての心入れであろう。下総の雨の一夜といい、安房の

月の一夜といい、私はあまりにもつたいない宿に恵まれすぎている。餅の好きな正風のためにお土産まで頂いて館山駅まで送つて貰つたのであつた。

二十八日。小雨。

少し寝すぎたが、宮本さんと近くの明治神宮に参拝する。何と静かな森であろう。広い参道の砂利をふむ、その足音が自分の足音とは思えないほど美しくて快い。曇つた空から、雑木の紅葉がちり〳〵降つてくる。その落葉をふんで拝殿に達し、手を洗つて、拝礼する。仮本殿は小さいけれども、日本の神は、杜のあるところに宿り給うのであると思えば淋しくない。社を焼いて、杜を残した米軍に、杜の心は解らぬであろうが。帰つて、湯豆腐で、ちよいと一杯、この一杯は山頭火的である。豆腐は私のためにわざ〳〵田舎風のものを用意せられたとか、昨夜の霞浦の公魚と云い、淡々とした日本の味は、夕べもよく、あしたもよろしい。越後柏崎の鯛の子の塩辛もなつかしい。朝からあんまり悠々としすぎて少しくおくれて発車。新宿の駅で待つていた南蛮寺をのせ、長崎へ廻つて宮崎丈二さんを誘う。冬花亭に上る時間もなく、玄関で母堂と奥さんに挨拶して四人で一路川越街道の坦々たる道を平林寺へ走る。占領軍の手入した路だけに、まさしくドライブ・ウエーだ。成増・朝霞と、西するに従つて道は街の気分を脱して、武蔵野のたゞ中につきすゝむ。街路樹の落葉も美しいが、並木の欅は、武蔵野特有の風

景である。停々と云う言葉にふさわしい並木が竝んで、春の靄のように霞んでいる。その並木が次第に高く大きくなつて、清瀬のあの聳え立つ欅が見え出した頃、車は「平林禅寺道」から左に入る。それからお寺までは片側に並木がつづく。楓と桜でみんな紅葉して落葉している。

やがて大門の前に止る。

「いいなあ」「いいなあ」「これは〳〵」四人はたゞ詠歎するばかり。何と云う自然のままの静けさであろう。幽玄そのものが、古い門をとりまいている。門の屋根は草葺で、その屋根に小さい楓が三四本生え、それが大きい楓の下で紅葉して、屋根の上に落葉しているのである。東京と云う魔のような街の都心から、僅か五十分にして、此の閑寂境があろうとは。じつとたゝずんでいると、私達四人が、もうすつかり、晩秋の平林寺風景の中の一つに取り容れられていることを感ずる。小雨が降りだして、帽子をぽそ〳〵ぬらすことも此処では却つて趣きを添えるばかり。踏み石をふみ、落葉をふんで、法堂に至る。その左右の紅葉や杉の木立はまるで、都会の風を石らず清浄そのものである。法堂の大屋根は形の崩れた草屋根で、寂然としている。丈二さんはスケッチブックをひろげて、立つたまま、それを描いている。水の澄んだ小さい流れに沿つて、常住の玄関に立つ。この流れは典座寮の台所を通つて門の方へ流れているのであるが、米の一粒も、菜つ葉一枚も流れていない。私はこの清浄な流れを見たゞけで、平林道場無事なりと観じ力強いものに打たれた。そして曽つて在京中しば〳〵やつて来て、親

切にして貰つた俳僧石馬賢洲さんや、堀井一蔵居士のことを、なつかしく思つた。
白水敬山老師は、私を待つていて下さつた。私は、遠州方広寺で、宗寛老師からことづかつた扇子などを呈することが出来た。そして米国の雑誌ライフ正月のアジヤ特輯号に平林寺が美しい原色写真で紹介せられていたことを話すと、老師はライフを持ち出して、撮影当時のことを語られるのであつた。大休老大師は、と云うと、いや、お元気なので奥へゆかんでも此処へ出て下さると云いつつ、老師が奥隠寮へ行こうと障子をさつと明けられると、俄かに私達の眼を射たのは奥庭の美しさである。木立も芝生もみんなそれぞれに自分の達するべき秋色に達して、まさに、一霜の訪れによつて、冬枯れに入らんとする秋の終末の美に輝いているのである。自然のままの外庭と、素朴そのもののような堂宇のその奥、ここにはこうした造園の美がかくれているのである。庭の趣きに心を奪われていると、大休老師は、九十三歳の御老体を軽く運んで一人で踏石を伝つて出て来られる。白髪、白髯の翁が、瓢々として歩いて来られると、また一入、此の庭の趣きが変つて来て、此の庭にして此の翁あり、動く白髯の翁によつて、静かな庭が本来の調子を出してくる。禅僧というよりも詩僧と云つた御風格である。円覚寺の今北洪川和尚に師事せられただけに、老大師の詩は、日本の禅門に雄たるもの。端然と坐つて話されるそのお言葉は、冴えぐヽとして、耳もよく聞えられ、眼もよくなつていられる。
「どんなものを、召し上りますか。」

「蕎麦が一番好きぢや。豆腐も好き、それから、うどんぢやのう。」
と云われる。お茶を頂いてお訣れするとまた美しい庭の中の翁となつて去られた。隣の室で敬山老師の蘭や、梅や、菊の絵を見ていると、一人の侍者が老大師近著の詩集を持つて来て下さる。表紙をひらくと、「贈、大山氏、九十三大休」の墨跡がまだぬれていた。
古道場に、生涯を禅に生きつつ、詩を楽しむ翁と、法を護りつつ絵を描いて、閑を楽しむ老師が、簡素にしかも悠久な自然の息の中に生きていられる。尊ぶべき師弟であることよ。帰る路も亦同じ落葉の中。東京貯金局へつく。宮本さんは、
「僕はこれから、全逓労組と団交ですよ。」
のことばを残して出てゆかれた。平林寺と、団体交渉、静から動へ。絶好の禅機である。
千葉さんが、沢山の色紙を持つて来て書けと云われる。十五六枚、さら〳〵書流しておいて幹部職員の人々に二時間近く語る。しみ〴〵と聴いて下さる人々を前にして、私も亦我を忘れて語るのであつた。ここには職員が二千四五百人もいられるとか、薗田局長は、それらの人がどうか心を一つに、楽しく仕事をせられるように念じ、人の和を出現することに興味を持つような人である。車で送つて貰い、雨の中を白金三光町の関正雄氏お宅へ。模様が変つているので、探し当てるのにひまどつた。葭子夫人もいとお健やかで、お二人共に以前よりむしろお元気でいられるのは、何よりうれしいことであつた。

「僕よりも、うちでは細の方が大耕の愛読者だよ。」
「ほんとうに大耕を毎月待つていますよ。此の頃紀行文が出ませんね。」
「今度は、帰つて東京紀行を書きますよ。」
代々木初台へ急ぐ。戦災後再建せられた長岡信捷さんのお宅へはじめて上る。洋室の床には迦洞無坪さん作の「南無仏」が合掌している。「来た人がみんな、ほめてゆきますわ」と云われる。「それにつけても、和高節二さんの糸車の絵を焼いたのは惜しくてならない」と云われる。そこへ、もうすつかりお医者様になられた滋君が帰つてくる。特にお願いした野菜料理で夕餉を頂いてから、炬燵で四人四方に坐つて、それから、それへ、一別以来の物語はつきない。猫の親子もやつて来て、私の膝でぐる〳〵云う。そこへ工大生の温君が帰つて来る。三重県庁につとめていられる長男の実さんの噂も出る。官吏、医師、技術者、三人を三色の性格に応じて、すく〳〵と伸ばしてここまで来られた両親の御幸福を思う。雨の音を聴き乍ら長岡さんと竝んで眠る。

二十九日。曇のち晴。

温君に送られて東京駅八重洲口へ。そこで私のふろしきが山上君にリレーされると同時に、東京最後の一日の私の体は山上君任せとなる。両陛下の召上る野菜づくりを以つて天職と任ず

る山上君は、土の如く黙々として朴であり純である。三越へいつて、久仁子と正風に、さゝやかな東京土産を一つづつ買う。そして法隆寺の模写された壁画と仏像の展覧会を見る。一筆三礼で信仰の心のまゝに描いた原画を観ている私には、電気座布団の上で、ぬく／＼と描いた現代画家の線がどうも生きた線として見えない。しかし壁画が焼失した今日、これらの絵は、別な意味で貴いものであろう。

大手門から皇居に入つて、呉竹寮の前方の雅楽部の館に至る。古代印度に始つて、支那大陸朝鮮を経て、奈良朝時代に我が国に入つて来り、平安朝の頃、日本の雅楽として、確立した此の古典的な音楽と舞が、今日、玆で演出せられるのである。澄み渡つた大空から降り注ぐ雨後の日をうけて、入口で待つていると、古山恵風君がにこ／＼顔でくる。好きな俳句がまとまつたのであろう、澄み切つた眼で、松と大空を眺めている。やがて田倉さん、山上君と同村の白木寛先生、斎藤春彦氏も来られ、一所に観る。此処では流石に、縫紋の絞附を着た婦人の姿も多い。しかし男の和服は、どうも私一人らしい。舞台の周囲は、白い御影石の中粒の砂利がしいてあつて、清楚な極みである。その上に椅子が竝べられていて皆静かに腰をかける。宮内庁吉川儀式課長の挨拶につづいて山崎楽部長の解説によつてはじまる。管絃方には、横笛三人、笙二人、ひちりき三、琵琶二、箏二それに鼓一人、鉦一人、太鼓一人、計十五人が徐ろに現われて、着座。それから五種目の管絃と舞楽が、此の舞台の上に繰拡げられた。何という荘厳さ

であろう。舞う人も、管方の十五人も、まるでいのちがけだ。それでいて、静かで優しい。妙というか、幽というか、玄というか、観衆は恍惚として、我を忘れ、古今を絶し、処を忘れて美しい夢の世界に引きづり込まれるのであつた。舞台の右と左に置かれてある大太鼓は、京都の紫宸殿から昭和の御大典の直後に此処へ移されたものの由、時々鳴りひゞくその音は、世にも稀れな悠揚たるひゞき、その太鼓、舞台演出者の衣裳、館の構造、そうしたものが、ある一つの色調に統一せられていて、そして又演ずる舞と調和している。楽とは調和なりと云いたい感じである。長時間の舞を、よくもこんなに稽古せられたものだと思う。

しかもすべては、堀一つ隔てた東京の街で盛りを極めているアメリカ流のダンスと全く対照的である。外なるダンスは、肉体の線からくる美である。内たる雅楽は、骨格の線によつて描かれる美である。肉と、骨と、人間にとつて、どちらが大事なものであるか、どちらが最後のものであるか。肉が女の肉体に傾き、しかも衣を脱いで裸出してゆく傾向を辿るに対し、骨の美は、古代ギリシヤの美で、男性の骨でなくてはならない。そして露出をさけて、衣装の美を借る。たまに、指二本を衣の袖から現わすが、それは、曲線ではなく、天を指し、地を貫く直線である。肉――女――曲線の美に対して、骨――男――直線の美である。こうした二つのものが西洋と東洋にそれぞれあつていいのであり、またあるべきであると思う。この雅楽を欧米人にも見て貰いたいなと思つたことであるが、散会の時には、相当多数の外交官らしい欧米人

夫婦も私達の後の方で観ていたことに気がついたのであつた。舞い方については、素人のしかも初めて之を見る私が、何も云うことの出来るものではないが、特に感歎久しうしたことは、舞い終つて、舞台から退き去つてゆく、その退き方の何と堂々たることよ。まことに終を完うしたと云う感じで実に悠々と、後姿の美を残して去つてゆく。去りゆくものはまさにかくの如くあらねばと思わせられるような退去振りである。管方はまた、去るものが去り終るまで、最後の妙音をかき立てて合奏する、その故に、一芸終つて、そのあとに残る余韻は、掬すべきものがあるのであつた。こうした宮中の楽に奇しくも会し得させて貰つたことを、身の幸と思い深く感謝し乍ら、今度は斎藤さんの案内で、皇居内を謹しんで一巡拝観した。宮中三殿に拝礼した時には、霜の夜を、国を憂いて、ここに土下座せられて、皇祖に祈られた戦時中の陛下のお姿もしのばれて、襟を正すのであつた。斎藤さん主管の庭園係内の珍重な盆栽と、花には、心ひかれるものがあつた。最後に所謂二重橋を渡つて、旧西丸の焼失した宮殿跡に立つた時には、感慨無限。宮内庁員の奉仕によつて、やつと焼跡が整理せられ、今は芝生になつているのであるが。

戦災者や引揚者の住居が安定するまでは、御所の再建はお望みに相成らない――と斎藤さんに聞かされるにつけても、汚れた富におごり、公務を濁して、酒色に溺れる者の多い日本人はもつと自主的に、自覚しなくてはと思つたことであつた。女官の局の前を通る時には、もう日

は暮れていた。斎藤さんにお別れして、我々五人は、旧天主閣の跡に登つて文字通りの荒城の月を観て、別れることにした。天守閣が焼けてからもう百年近くになり雑草が茂り、その一部は菜園にもなつているが、華やかなりし昔の夢が何処かにさまよつているかのよう。折からのぼつた十三夜の月が、私達の顔を輝らし、脚下の草むらを照らす。はるかに望むと、その月は立ち竝ぶビルをも照らしている。あゝ私の旅の東京の最後の日は、こうして江戸城天守跡の月光の中で、終りを告げられるのだ。何という歴史的な、そして劇的な東京と、東京の人々への別れであろう。

山上君の室で二人枕を竝べてから、私の眼に三つの馬の姿が浮んでくる。二つは真白で、つつましくうつぶしている。一つは栗毛で鼻筋だけが白い。じつと私の顔を見ている。今日、厩へ案内されて見せて貰つた馬たちである。白いのは、嶺雪号で、陛下の御馬、他の白いのは、白藤号で皇太子様のお馬、栗毛のユーリツ号も皇太子様のお馬。ユーリツはどうしたものか、私に馴々しく顔をよせて来た。私はその若々しい頬を軽く叩いたり撫でたりしてやつたのであるが、その三つの馬が何だか私の枕辺に顔をよせて、私の匂いを臭いでいるような、夢のような現のような、馬の顔に守られて、皇居内の一夜を眠りこんだのであつた。（二十七年）

久仁子と共に

久仁子は、隣の船客の少女やその弟とすぐ仲よしになつて、雑誌を借りたり、まりを貸してあげたり、上甲板に上つたり下りたりして、楽しそうに遊んでいる。船が来島海峡にさしかゝる頃、三人は、大きなリンゴを一つづつ手にして室に帰つて来た。二等室のうしろに美しい食堂があつたので、入つて行つたら、そこにいた船の人が、三人にこれを一つづつ下さつたのだと云う。みると、よく洗つて貰つたらしく水がまだしたたつている。三人は、リンゴのようにその顔を赤らめてよろこんでいる。私も時々上甲板に上つて、子供と一緒に島を眺め、山を望む。高縄山には珍らしく春の雪がまだ残つている。

明石丸が今治を出る頃、久仁子は二年前の夏の友浦を思い出したらしい。友浦では夕方になると、浜に出て、ほろろんと云う走りの早い蟹と戯れ、正風がぼつ〳〵眠くなる八時すぎになると、きまつたように、友浦沖を、今治港を出た明石丸か、あるいは舞子丸かが、美しい燈をとぼして、音もなく夢のように東へ東へ通つて行つたものである。その夢のような憧れの船に今乗つて、神戸へ向つているのである。久仁子は友浦の方を見に室を出て行つたが、もう海の

上は暗くて、島も家も見えなかつたと云う。正風を家に残して来たことが、可愛そうでもあり悔いられもする私達なのであるが、どう考えても今度の旅は正風には、時が早すぎるのであつた。弟にすまないと思つてか、久仁子は売店で船の色刷してある絵ハガキを買つて来て、旅の第一信を書いたりしていたが、そのうちに、服を着換えて、ころりと横になり、寝てしまつた。

五年になると、学校の社会科で、地理・歴史の緒を教わつた。地理と歴史ほど子供の世界を広くしてくれるものはない。その五年の課業を終えるのを待つて旅に出ることにしたのである。寝顔をそつと見ると、ほんとうに邪気のないよい顔でねている。

私はたゞ一度だけ、父につれられて船にのつて遠い旅をした少年の日の思い出を持つている。その思い出は、父が亡くなつてから、もう十年にもなるのに、妙になつかしくて、狭い和船に枕を竝べてねた時の、父のあの特色のある油くさいような体臭が、今尚私の鼻についているようでさえある。故里から四里の路を歩いて笠岡に出で、そこから故郷の人々二十人ばかりと一緒に、別仕立の帆前船にのつて、翌朝多度津についた。港に上ると、見物などしないで直ちに一行は海岸寺に詣り、それから祖谷山にのぼり、善通寺に詣り、金比羅様に参つて、また金蔵寺まで引返してお寺に泊めて貰つた。所謂七ケ所詣りと云う宗教的ハイキングである。信心のない子供には相当つらい、強行の旅ではあるが、それでも、父が煎餅や焼饅頭の温いのを

買つてくれるのがうれしくて、元気でついて廻つたものである。金蔵寺では終日、帳場を張つてお接待をした。つまり故郷の家々からお金や米を集めて、それを船につみこんで来て、この札所に巡礼してくるお遍路さんの一人一人に、あげるのである。それが私達備中の村々の古い年中行事になつていたのである。父はその世話方をしていたらしい。ところがその美しいお大師様への奉仕の旅も、帰りの船中では、台なしとなり、一部の者は、五戔十戔の賭博をやりだした。ある男は、財布を空にしてしまい、これでは家に帰れぬから、父にお金を貸せ、も一度やつて儲けるという、父はそんな戔は貸してやれぬと云うと、その男は家の近くの者であり乍ら、父の顔をなぐりつけて来た。父も負けるものかと、反撃した。私は心を震わして父を守ろうとした。その時私は生れてはじめて、父への愛情をひし〳〵と身に感じたように思う。——そうした、あまり楽しそうでもない旅が、今にして思い出せば、涙が出るほどになつかしいのである。「父と共に旅をする」そうしたよき思い出を、今や、父として子供に握らせようとして旅に出ているのである。

眼が覚めると淡路島が見えている。久米から一緒に出て来た高市さんが、船室の壁にむいて合掌し、朝の拝礼をしていられるその横顔が、真白い巡礼姿でもあるし、人間ばなれのした地蔵さまか何かの像のようである。私は黙つて高市さんのお姿に合掌して、遠い旅のつつがなきことを念じた。去年の春は夫婦で四国の八十八ケ所を遍路せられたのであるが、今年は更らに

道心を伸ばして、西国三十三番を夫婦で巡礼しようとしていられるのである。やがて久仁子が起きた。一人で洗面に行つて上陸準備をする。船中のお友達や高市さん夫婦にお別れして、神戸で下船。歩いて元町駅へ、それから大阪へ、そして車で上本町へ。早いもので八時発の参宮急行に間に合つた。天気もよい、坐席もゆつくり、電車は快く走る。沿道の説明をしてやつているうちに、四月一日の十時十五分にはもう山田に着くというスピードの旅である。

「父ちやん、こんなに大きい杉！」

と云つては、参道の千年杉に久仁子は抱きついてよろこんでいる。やがて外宮の御手洗で、口をすすぎ両手を洗う。大きい鉢の底から、こん〳〵と湧いてあふれる清水が、遠く旅して来た二人の体を浄めてくれる。久仁子はうまい〳〵と云つて、その水を杓に汲んでは飲む。日頃はあまり生水を飲まないのであるが、子供は直感が正しく、この水の味がよく解るらしい。

参拝をすまして、バスで内宮へ走る。荷物を店に預けておいて空手で歩く。踏みしめる砂利の道、古い木立、空の青さ、身も心も軽く、丸木の鳥居をくぐり、五十鈴川の橋を渡る。下駄で踏む木橋の明るい足音よ。清く明るく、大らかな参道は、参拝者の行列で一杯である。全国各地から、それ〴〵に参つて来たものであるが、この国の遠祖を敬慕し、その神徳を仰ぐ心に変りはない。一人の監視者も指導者もいないのにみんな粛々として秩序を乱すものがいない。先きを競うでもなく、他を責めるような表情も見られない。民族のふるさとに帰つた気楽さ、

なつかしさ、そうした万人共通の感激がこの道をゆくすべての者を貫いているのだ。それはまさしく、大和のはらからとしての感激である。内宮では御手洗の設備は路の右側にちやんと整つているにもかかわらず、誰一人としてそこで手を浄める者はいない。みんな、少し先きの五十鈴川の美しい流れで、直接に身心を浄める。

「この川の水はね、どんなに大雨が降つても濁らず、またどんなひでりの夏でも涸れないのだよ。」

と云いつつ両手を洗う私達の影に、小魚は決して恐れたりせず近よつてくる。私は十九年の五月にお詣りしてからまる九年ぶりである。あの時は、苦戦のどん底にいて、国の将来も不安に充ちていたので、この道を歩いて大神の前にひざまづく私の心も悲壮であつた。午前三時半に古市の大安という宿を出て、この川の水で禊し、誰も通らぬ暗い森の道を、素足で歩いて行つた。宮司の朝の拝礼よりも私の方が先きであつた。石の冷たさも忘れて大前に額づいた時、私は泣けて泣けて仕方がなかつた。やがて拝殿で、のりとがあがつた。私一人のために、大神に祈つて下さるような気がしてならなかつた。森の奥では、「ほう〳〵」と、夜の鳥がたくさん鳴きつづけていた。宿に帰ると、酒の乏しい時にもかかわらず、朝餉には、二本の酒を用意して、私を待つていてくれた。

「大勢のお客さまの宿をしますが、あなたのように夜明け前に一人で詣られる人は、めつた

にありません。うちでは、昔から参宮客の宿をしていますので、不寝番をつけて、夜中でも戸口を明けるように気を配つていますが。」

と云つた年増の女中のことばも今思い出される。その参道を、久仁子は、体を踊らせ、飛ぶようにしてあるく。この子は、うれしい時には、いつでもこうして歩くのである。そして古い大杉に突き当つては、両手をひろげて抱きつくが、私の手が加勢しても、とても及ばない杉の太さだ。

やがて大前に達し、青味をおびた石段をふむ。多くの足にふまれて、石は滑らかにすりへらされている。前方の人々が立ち去るまで、じつとたたずんで心を静かにし、真正面に立つて、拍手を打つ、その音が、何とも云えず腹にこたえる拝礼であつた。それから、少しく左に寄つて、寂静そのもののような御社の古い柱と屋根の傾きを観る。参道をもとに戻つて橋を渡る時五十鈴川のほとりを眺めると、蕾のふくらんだ桜の下の川岸の芝生で、みんな楽しそうにお弁当を開いているではないか。浅瀬のせゝらぎといい、神路山の姿と云い、空の明るさと云い、ほんとうに羨しい大自然の食堂であるが、遠い旅人の悲しさ、私達は、停留所前の月竝の食堂で、昼食をとらねばならぬのであつた。

松坂、名張、長谷寺など、心をひかれる駅の名を素通りして、八木で電車をのり換える。このあたりから眺められる畝傍山・耳成山・香具山の松の緑は、長い戦争にも耐えて、深く茂つ

ていてうれしかつた。二千年の昔から、耕された大和の国原は麦の畝も正しく伸びて、その中の菜の花が今盛りである。古い白壁の家、崩れかかつた土塀、少しく傾斜の急な草葺の屋根、そうした平凡な農家の姿や、その家をかこむ古木立や、点々と見える椿の花にも、私は何だか民族の郷愁と云うようななつかしさを感じるのであつた。西大寺で再び電車を乗換えて間もなく奈良につく。

藤川君に電話をすると、直ぐ福角さんと一緒に来てくれて、日暮れまでにまだ時間があるので、久仁子に東大寺の大仏さまを拝ませにゆく。千二百年前の日本の宗教文化を象徴する此の大仏が、乙女の心にどんな風に映ることか。去年「大仏開眼」の映画は見せたのであるが、あまりにも原作を無視し歪められた製作は、この悠久な大仏を観る予備知識にも何にもならなかつた。大きい仏殿の中にはまだ冬が残つていた。冷え〴〵として動かない空気の中を、前から後から、或いは斜に、左から、右からも仰ぎみるお像は、たゞ大きいと云うだけではなく、無言のうちにこまかい慈悲が表情せられている。何度観ても観ても、此の仏像の真の相は観つくせない。

仏殿正面の金属製の六面燈籠一基は、千二百年前そのままの国宝で、よくも長い歳月の雨露に堪え得たことである。その一つの面に刻みつけられてある音声菩薩は、作者不明の傑作であると、藤川君に教えられてよく観ると、ほんとうに大したものである。大仏に心を捉われて、

こうした小さいものの美しさを見逃していたなと思う。公園を漫歩しているうちに春日神社の鳥居に出た。鹿が沢山遊んでいる。野の鹿をはじめて見る久仁子は、せんべいを買つて与えたりしてよろこんでいる。一匹の鹿は、一群の学生たちから、沢山の御馳走を貰つたものか、満腹していてせんべいなど食べようとしなかつた。ふと眼を転ずると木立の間に、白木蓮が大きい沢山の花を空にむけて咲かしている。その花に、薄曇の空から、かすかな夕陽がこぼれているではないか。電々公社の寮となつている春日荘に一夜の宿を恵まれる。奈良ホテルと池を一つ離し相対していると云うような絶好の位置で、床に活けられたあせびの花が畳の上に白玉のようにこぼれている。夕餉には電報局の大里・高木・高橋さんも一緒に来られて、奈良独特の料理であると云われる若草鍋を七人でかこみ、親しく温く語る。

若草鍋、その名もなつかしいではないか。大きい鍋には、昆布と鰹と塩で味をつけただし汁がたぎつている、その中へ美しく大皿に山と盛られたいろ〳〵の野菜や珍味が投げこまれる、こまかく切つてあるので、直ぐ煮える、それをめいめいにとつて食べるのである。季節によつては二十種類以上のものが用意せられると云う。試みに私の食べたものの名を記してみるとねぎ。大根。椎茸。豆腐。白菜。筍。豚。ほうれん草。いか。かまぼこ。あなご。蠣。銀杏の実。

至つて複雑な雑炊のようでありながら、その味が妙に単純なのに心をひかれつつ、味わいつ

くしたことであつた。私はふと、奈良朝時代の人々が、朝鮮や支那から渡来した人がもたらすそのころの大陸の食べ方を学び、春日野に若草の萠えいづるのを待つようにして、野草をつみとり、このようにして温い鍋をかこんだであろう古えの大和の風俗を、自分勝手に想像してみたりした。

古い樹林の間から朝の光が薄く射してくる春日神社の参道を、子の手をひいてあるく。芝生にはまだ青いものは見られないが、頭上の桜はもう綻びかけて匂うている。鹿がたくさん遊んでいる。久仁子が小さい掌に餌をのせると、たちまち七八匹が来て食べる。静かなやさしい鹿の眼に春が来ている。礼拝をすまして、若草山へ出ようと道を横にとつたが、左と右を間違えていて、春日の林に入つてしまつた。それは驚くべき馬酔木（あせび）の原始林である。花の盛りはもう過ぎているが、その灌木の枝先きにだけ、真白い雪のような花が咲き残つている。

「父ちやん、ほんとうに、雪がふつているのかと思つた。」

と云うて眼を輝かす、あせびは、中国四国の山にもあるがここで見るほど真白い花が咲かない。林を過ぎると小さい寺があつて空也上人旧蹟とある。私達は、この空也上人のいられたという跡に住んでいるのであるが、ここでその上人の旧蹟を見るとは。あせびの林と云い、ほんとうによい散歩道に迷いこんだものである。萬葉植物園、博物館などには心をひかれるが、子供にはまだ早い。宿に帰つて、父と子、二人だけで朝餉をいたゞく。家にいても、旅に出ても

二人だけでこうして食事することは珍らしい。これまた一期一会である。赤味噌の味も海苔の香も心にしみる。

このよき宿を後にして二人は電車で西の京までのる。西大寺で乗換える時、奈良の都はこのあたりまでづつと昔は街がつづいていたのだよ。だから東大寺と西大寺があるだろうと云うと僅かな歴史の知識を呼び起すようにして、遷都のことを思うて見るらしい。詣でることは出来なかつたが、丸い小山の松林を、静かな池でめぐらしてある垂仁天皇の御陵は、この子には古い歴史のしるしとして回顧せられる。歴史と切離して今日の社会が何処にあり得よう。アメリカの様な浅くて新しい国と違つて、少くともはつきりと千四百年の歴史が、此の大和を中心として、その遺物と共に文化の歩みを明らかに示している事実を、日本の学生たちは、もつと豊かに学ぶべきである。そういう意味で、私は先づ伊勢神宮、それから大和、そして京都。それから近代文明の先走りをする神戸・大阪に子の手を引かんとするのである。

電車を降りると、右手の森の彼方に塔が立つている。薬師寺だ。白土の路二三丁にして裏門に達する。今日はこの寺の花会式らしい。桃や桜の花が夥しく供えられて、古い仏像のお顔が光つている。お寺の僧や檀家の人々は、会式の準備に忙しいらしい。皆一流の国宝である。金堂を出て東塔を仰ぐ。天平の建築文化の粋というべきであろう。東禅院に入ると、ここにも亦古き仏達。一人の高校女先生らしい人が、二人の女学生をつれて来て、その一つ一つについて

詳しい実地指導をしていられる様子を見て、私はよき師弟よと、心から尊敬したくなつた。そして久仁子なども、やがて天平時代の歌や仏像や建築に少しは心をよせる日も、あるであろうかなどと想うてみるのであつた。

薬師寺から憧れの唐招提寺へ。古い僧院の厚い壁に沿うてあるく。大和ならでは歩かれぬ路である。門をくぐると、此の寺の境内は、今尚、千二百年の昔のままの精舎である。流石に戒律のきびしかつた鑑真和上の道場であつただけに、白く光る庭土の感じは浄土のように清純である。私は今まで多くの寺や道場に出入したが、この唐招提寺のような清浄な感じを受けたことがない。金堂の入口で、拝観受付をしている老人も説明をしてくれる老婆も、こうした寺によくあるような俗気が少しもない。先づ金堂に入つて内からその建築を見、そして、堂々たる気品あふれる仏像を拝む。国宝の中に国宝が竝んでござる。それがすべて在りし時代のままに保存せられているのである。法隆寺を小じんまりとしたようなものである。その中で三本缺げるという千手観音の大立像には大小千本の御手が、一つ一つ違つた形で刻みつけられている。後の講堂内の仏たちも亦、いづれも見ても〳〵飽かぬ美しさに光つている。茲にいち〳〵記すことは省くけれど、私は、今の世をしばらく忘れて、古人の悠久丹誠な心にふれるよろこびにしたるのであつた。堂を出でて、庭に立つて、金堂・講堂・鼓堂・礼堂の建物をじつと観る。太く丸い柱、美しくそつた屋根の線、厚い白壁、それがよく調和してどつしりと力強く、浄ら

かな地上に立つている。それらの建物をのせている基礎工事の確実さよ。千二百年の間、風雪と地震を経て寸分のくるいも生じていないではないか。

おほてら　の　まろき　はしらの　つきかげを　つちに　ふみつつ　ものをこそ
おもへ

せきばく　と　ひは　せうだいの　こんだうの　のきの　くまより　くれ　わた
りゆく

と「鹿鳴集」の会津八一博士の歌もしのばれる。

京都では老師さんの広誠院に二泊さして貰い、久仁子も亦朝夕の食事を共にさせて貰つた。近来いよ〳〵健やかになられた師を、ひそかに祝福しつつ。

四月三日はケーブルカーで比叡山にのぼつた。山の上には熊笹のかげに雪が消え残つていた。それをとつて食べては、鶯笛を吹き乍ら根本中堂へと杉間の道をあるく。久仁子は「この山は狐くさい」と云う。狐もいるであろう。大講堂はまだ寒々として暗い。一燈を捧げて此の山を開いた古聖の心を思つた。『照于一隅』のことばもなつかしい。『国宝とは何ぞや、道心ある者を国宝と云う』多くの学徒に向つて、人間の中にある国宝探求の行を教えられた。奈良

で見て来た国宝は古人ののこした文化財にすぎない。その仏たちの心を、今日の社会に生くるわれ〳〵が多少なりとも心にして、生きた国宝へ精進することこそ僧最澄の遺訓であろう。さればこそ、この山にのぼつて道を求められた法然・日蓮・栄西・親鸞・道元・蓮如・恵心等偉大な宗教家はそれ〴〵生きた国宝として此の国の人心を教化せられたのであつた。山上からは霧が深くて琵琶湖を展望さすことが出来なかつた。ケーブルで坂本に降りて大津の湖畔で、さざなみの匂いをなつかしんだことである。三条に戻つて岡崎へ廻り動物園をゆつくり観せる。

四日は、子供にふさわしい観光バスで京洛の名所を一巡した。古寺よりも、まだ百貨店のエレベーターに心をひかれる子ではあるが、バス・ガールの美しい声での説明のセリフに瞳をかがやかせるのであつた。太秦の広隆寺で観た仏像の中には、久仁子の胎教となつて貰つた聖徳太子二歳の時の「南無仏像」もいられた。

（二八年四月）

関東よりみちのくへ

五月二十五日。晴。

「父ちゃん、いつていらつしやあい。」

「とうちゃん、みやげ、わすれなよ、いつてらつしやい。」

と学校へ出てゆく久仁子と正風のうしろ姿が柿の若葉のかげにかくれる。遠い旅に出るのだと思えば、草木よ、犬よ、茄子よ、鶏よ、と云いたくなる。

準急せとは、相当にこみ合つていた。でも一つの席を見出してほつとする。郵政局の松島棗里さんと隣合せとなり、広島時代や、大耕について語る。

善通寺の駅には、東原重行君が待つていてくれた。郵政研修所へ。そして富岡所長と久しぶりに会談。体もすつかりよく、職員や、生徒のために心を砕く君の気構えを尊いと思つた。生徒全員にしばらく講話する。みんな姿勢が正しく、視線が正純なので、うれしかつた。東原君と二人で、桐の花と、樗の花の咲いている窓でビールを抜く。妙に暑い日である。シベリヤで

一度死線を超えた東原君の話には、人のまことがにじみ出る。多度津港まで送つて貰い、大阪行あけぼの丸にのる。船は大きいが、三等は不潔である。しかしよく眠れてよかつた。

五月二十六日。晴。

大阪天保山へ上陸。私はふと、いつか如法寺の会で、鍋田さんが涙乍らに語つたお母さんの話を思い起し、私の母のことまでなつかしくなつて来た。それは、幼少の日の鍋田さんが、田舎から来てこの電車に誤つて一人で乗つた。ところがお母さんは、狂気の如くなつて、一生懸命に走つて、電車を追つかけた。その姿が、母の唯一の記憶であると云うのである。

特急ツバメ号では、皇居奉仕に上京する大阪住吉の婦人会の人々と同じ車であつた。九時から午後五時まで、坐禅の構えで無言。左窓に山々を観る。動中の独坐、時には坐睡。上目黒の和田さん宅へ泊めていただく。

山頭火の「愚を守る」出版について相談。十三夜の月美しく。東京のはつなつの夜はいいなあと思う。

五月二十七日。晴のち曇。

和田さんはもう家のまわりの畑の手入れで、朝を楽しんでいられる。ビルで仕事しつつも、

土をはなれない老童心よ。

二人で、日本橋のビルへ。そこへ東京郵政局の阿部さんが来られ、明日からの巡講について相談して、日本電信電話公社まで送つて貰う。いちよう、プラタナス等の街路樹の緑が美しい。公社では田辺正氏に会う、十年ぶりである。弘済会長の平沢要氏を訪う。三人で広島や仏通寺の思い出を語る。郵政省で武知仁氏に会うのも金沢以来はじめてである。松井一郎氏を郵務局長室に訪う。十五六年ぶりである。禿頭、美髯の風格は、一入なつかしい。話に興がのつて、二時間半ばかりも語る。昨年万国郵便会議でブラツセルへ日本政府代表として行かれ、西欧各国を、観て来られての、お土産話は、実によかつた。

それから教養係の榎本さんを訪ね、しみ〴〵と仕事や歌について、また広島の耕一君や、双岩の貞子さんを語る。ここには千葉県府馬の絵鳩恭子さんも勤めていられ、亡きお父さんを追慕したことである。再び千葉さんに迎えられて、東京地方貯金局へゆく。局長薗田さんは、局長会議で不在中であるが、ここの作法室を借りて昨秋につぐ、東京大耕会を催していたゞく。荻窪の田倉さん宅泊。

五月二十八日。曇のち小雨。

庭木の若葉が眼にしみる朝である。奥さん実さんが、夏には八幡浜へ来られるついでに、大

耕舎へも泊つて貰い、思い出の仏通寺へも行きましようなどと約す。

新宿までの国電沿線の家々では、ばらを色とりどりに咲かせている。昨秋は菊の花であつたが。阿部さんと二人で京橋の竹葉亭の南の国立近代美術館へゆく。建築と室の構造が、美術品を観せるために出来ているので、観て快い。日本画の系統とその展開を歴史的に順序よく名画ばかり陳列してあるので、実物教育をうける感じがする。上野から急行で高崎へ走る。関東平野は、ほんとうに若葉青葉で埋つている。伊予の山川を見ている眼には、行つても行つても山のない風景は珍らしい。やがて高崎につくと、改札口に女の人山がわいわいしている。駅の人は、ぽかんとして自失して立つている。どうしたのかと思うと、同じ汽車で乙羽信子が下車しているのである。竹内局長の案内で高崎郵便局へゆく。十余年ぶりであるが、古い人はまだ私を覚えていて下さる。

講演会場は、高崎貿易会館の講堂になつていた。そして不思議なことに、私の控室には、ブルーノ・タウトの記念室が当てられていた。この室にはタウトの愛用していた日用品や什物をはじめ、筆跡数点と写真が保存せられている。戸棚や本立からパイプに至るまでタウトのデザインによるもので、日本の文化を愛した異邦人を忍ぶに十分である。

やがて開会、私は「肉親の愛と隣人の愛」について語つた。会場に満ちた上州の人々は、身動きもせずに、私のまづしい話に耳を傾けてくれた。私は時を忘れ、我を忘れて無心に語つ

た。終つたあとで、一人の人が立つて、
「私は、空襲で局舎も家も焼かれて、ずいぶん闘い苦しんで来ました。しかしとにかく独立独歩やつて来ました。私は誰が何といつて、他人の云うことを聞かず、頑固な男です。生れてこの方、父が死んだ時に、一度涙をこぼしたことがあるだけでした。その私が今日は、先生の話をきゝ乍ら、はじめから、しまいまで心ゆくまで、泣かして貰いました。気持よく泣かせて貰いました。」
と、言葉もとぎれ〳〵に云われるのである。私も亦眼を曇らせたことである。あとで控室に来て貰つて話してみると、近くのある特定局長さんで、
「あの席にいたものは、恐らくみんな、私と同じ感激に打たれたに違いないと思います。先生この精神を、今後、郵政部内のすべての人に伝えて下さい。そして私を、先づ此の道の同志にして下さい。」
とはつきり誓われる。何という情熱と、信義に充ちたことばであろう。私はこの人の真心にふれ、そのうしろ姿を見送りつつ、ふと、上州の義人、国定忠治のことを思つた。そして、この人、一人の男のために、はる〳〵四国の果てから、ここまで旅して来たのであると思つてもよいような気がした。そして、生きていることの、うれしさを、しみ〳〵と、自分で味つたことである。それから竹内局長さんの好意で、日ぐれの道を、タウトの旧居、八幡村の少林山達

磨寺へ一路車を走らせる。碓氷川に沿うて、中仙道を一里あまり上ると、川の南側の小山に達磨寺の屋根が見える。橋を渡つてから車を降り、急な石段を登つて、鐘のなくなつている鐘楼の下をくぐると、楓の青葉が茂つている静かな庭が拡がる。やがて広瀬和尚さんがにこ〳〵しながら、案内に出て来て下さる。まづ洗心亭へ参りましようと指される樹の下の道をゆくと、和尚さんがたんねんに作られている芍薬の花が右側に咲き盛つている。やがて青い樹の間に洗心亭が見える。この亭は、東大にいられた佐藤完治博士が建てられた茶室なのであるが、タウトの気に入つて、昭和九年八月から十一年十月まで、足掛三年の間のタウト夫妻の仮寓の家となつたのである。亭の右上の小高い所に、故人のドイツ文字の筆蹟を、四角な青石に拡大した清楚な碑が立つている。私にはドイツ語は解らないが、

私は　日本の　文化を　愛する

ブルーノ・タウト

ではないかと判読する。和尚さんが亭のガラス戸を明けて、上つて見よと云われるまゝに入つてみると、六畳と四畳半の二室で、六畳には北から東へ廻り縁がついており、四畳半には、まん中に大きい炉が切つてある。

「先生は、この炉がお好きでしてね、冬になると、いつもこちら側に坐つて、奥さんがそちら側で、よく向き合つて静かに話をしたり、お茶をすゝつたり、ものを考えたりしていられ

ましたよ。」

と云われる。「日本美の再発見」その他の著書を通じて、十五年前から敬慕していた私は、だん〳〵夕闇が迫つてくる畳の上を、なつかしい思いをこめて一足一足ふんであるいた。

タウトは一八八〇年、ドイツのプロイセン州、ケーニヒスベルグに生れた。ユダヤ人の血をうけていた。若くして建築工芸学にすぐれ、シャルロツテン工科大学の教授となつた。一九三二年には、ソ聯政府から頼まれて大モスクワ都市の建設に参画したが、その頃から、ナチの運動でドイツを追われ一九三三年五月、日本のインターナショナル建築会に招聘せられ、敦賀に上陸したのであつた。私は松江のラフカディオ・ヘルン旧居と思い比べながら、北の縁に立つた。青葉を通して、眼下に碓氷川の清流が見える。今日は曇つていてその山裾の線しか眺められないけれど、左に榛名、右に赤城の両山が一目に収められる。この雄大な大自然が国際的流浪者の孤独な心をどんなに慰めたことか。

和尚さんは更らに庫裡の方へ私達を招じ入れて画帳や、短冊や、色紙に書き残されたタウトの遺墨を見せて下さるのであつた。すべて毛筆である。英語もドイツ語も皆和紙に書いている。

「この室でよく抹茶をあげました。その時には、ちやんと坐つて、茶碗を掌で廻し乍ら、うまそうに飲まれたものです。お食事ですか、朝は軽いパンと牛乳くらい。お昼と晩は、あの

私達の室に来て貰つて食べて貰いましたが、魚類や油物が好物でした。よく高崎の鰻屋や、てんぷら屋へも食べにゆかれました。またエリカ夫人は、実によく先生につくされる人で、先生のためには、どんなことでも骨身を惜しまずにせられましたよ。」

窓の下の杉や欅の葉がだん〳〵暮れてくる。その木立の間から、かすかに川瀬の音がひゞいてくる。老夫人が「妾が摘んで作つた新茶ですよ」と云つて、緑色の香の高いお茶を出される。

「先生は、浅間山が非常に好きで、よく写生せられました。写生と云つてもその場で書かれるのではなく、よく見ておいて、亭に帰つてから書かれるのですが、頭がよいからか、スケツチしたかのように書かれました。またよく旅に出られました。京都附近はもとより出雲・北陸・秋田の方まで。秋田の農家の建築がドイツの故郷の方の家とよく似ていると云われました。はい〳〵日光の東照宮などは大嫌いでした。いや此の寺の本堂など気に入りません。先生は、日本の美を認めて世界に紹介せられましたが、悪いところは、何の遠慮もなく、ずけ〳〵面と向つて云つてくれました。」

と、和尚さんの話はつきない。タウトは昭和十一年トルコ政府の最高技術顧問に聘せられて十月十二日、此の洗心亭を去つてイスタンプールに至り、昭和十三年には、ケマル・パシヤの葬儀場を設計したが、それを最後として十二月二十四日、五十八歳の若さを以つて客死した。

ところが、ヱリカ夫人は昭和十五年、故人の遺言により、はる〴〵このなつかしい達磨寺へ、タウトのデスマスクを携えて来り、寺に納めてドイツの方へ帰つてゆかれた。私は、薄暗い北向きの室で、桐の箱の中に、静かに眠つているブルーノ・タウトの顔を眺めさして貰い、じつと眼をとじて、しばらく、此の哲人的工芸家の数奇な生涯を憶念して、寺を辞した。高崎から渋川まで上越線で北上し、渋川から雨の中を伊香保の温泉場までバスで上り、金太夫と云う古い大きな宿についたのは、もう九時頃であつた。

五月二十九日。雨・くもり小雨。

朝の食膳には、うど、わらび、ぜんまいなどがあつて、山の温泉という感じをふかめてくれる。昨夜はおそく着いて、雨の音を聴きながら湯あがりの疲れた体で貪るように寝込んだのであるが、朝、四階の窓から見下すと、朴の若木が、大きい葉に、雨をうけ、二つの真白い花を咲かせている。渋川からバスで三里あまりも榛名山の中腹へのぼつて来ているので、雨の朝は寒い。この宿は木暮金太夫という古い宿で、わらびと云えば、ここでは徳富蘆花の「不如帰」の武雄と浪子を思い出さないわけにはゆかない。ところが、今朝私は、湯の中で、武雄と浪子ならぬ仲のよい中老夫婦を見た。やせた青白い夫が、よく肥えた妻の背中を洗つてやつているのである。うるわしい風景ではあるが私はふと、中里介山の「大菩薩峠」の白骨温泉に出てく

るいやな、、、、、、、おばさんのいやな肉体を思い浮べてしまつた。ここの湯は濁つていて、肌ざわりも悪くまた温度も一寸低いので、温泉としては、その名が知られているほどに、いいとは思われない。天気がよければ、朝の爽やかな山気の中を、バスで山上の榛名湖までのぼつてみるところであるが、雨はいよ〳〵降りつのるばかり。バスで渋川まで下る広い山路の両側には、アカシヤの樹が多かつた。花盛りで、白い雪のような花が雨にうたれているのも美しかつた。汽車で沼田へゆく。

沼田は赤城山の北方の山の上の、丁度信濃の小諸を思わすような静かな町である。昔から利根郡の中心となつた町で、高等学校も沢山あるらしい。バスや汽車に乗降する学生が非常に素朴で、落着いている。群馬県では旧制中学校・女学校を男女別のまま、それ〴〵高等学校にしているのだという。気風も学習振りも非常にいいらしい。農業同志会舘で沼田局や附近の特定局の人々のために、しばらく講話して、小林局長さん達に送られて沼田から汽車で上牧(かみもく)温泉へ急ぐ。実は沼田の次の後閑駅に下りると、そこからバスで上越の仙境法師温泉へゆけるし、また渋川へ後戻りして四萬温泉へ入ることも考えたのであるが、山深く入つてひどい雨に降られると困るので、今盛りであろう筈の法師や四萬の深山の石楠花の花に心を残しつつ、鉄道に近い上牧を選んだのである。

ここは、利根川の上流、しかも本流で、青い両岸の山を映して岸に砕けつつ、勢のよい急流が音を立てて流れている。釣り橋を渡つて上牧荘という川のほとりの宿につく。宿は二軒しかない淋しい山峡の部落で、伊香保のような温泉街と違つた閑寂さがある。浴槽は川の流れの直ぐほとりで、古い湯垢のついた大きい板であることが、山の湯らしくてよい。そして温泉は青いほど澄み切つてあふれている。夜更けて、ぼんのくぼを、温い縁にのせて、手足を伸ばして眼をつむると、骨にしみ入るような湯の味は、身をも心をも無心にしてくれる。遠く旅に来ているということも忘れて、筧から落ちるさゝやかな湯の音を聴く。一人で出たり入つたりすると、自分の体が人間の体ではなく、この湯に昔から栖んでいる人魚か、河童の体のように思われてくる。薄暗い一灯の下で、一人の湯の音をさせて一人で聴く。しばらく楽しんでいると、女中さんが三人で、がや〳〵やつて来た。それ〴〵の籠には洗濯ものを一杯いれている。一日の労れを温泉で拭い、湧いてはあふれる温い湯を汲んで洗濯をしようというのである。みんなたくましく、浄らかな肉体美である。筧の口へ行つて、熱いのを掌にすくつて一口飲み、五十幾段もあるという高い階段を、私の室へ帰つて来たことである。

伊香保の金太夫もそうであつたが、朝は梅干の一皿が出る。紫蘇が使つてないので、色が変であるが、台司の白湯を汲んで梅湯にして飲む食前の一杯は、旅する体にはありがたいと思う。沢庵その他の漬物の味が、山へくると特においしい。川鱒の塩焼もよかつた。たゞ豆腐が

出ずに、豚カツ等の出ることは、いさゝか淋しいが、これは、私のわがまゝで、宿としては、無理もないことである。

五月三十日。晴、のち曇。

朝早く湯につかつていると、昨夜の大雨で増水した利根川の水音が、体にひびく。昨年はこの川が海に入る銚子に旅し、今はその水源にいる。久賀の米本翁一家や、下総の人々のことなど、思い出さないでいられようか。

通じもよく、朝餉もおいしく、旅心地いよいよ定まると云つた感じ。ものすごい音の急流を釣橋で渡る。山峡の緑に、身心が染まる心地である。時鳥は鳴かないかなと思う。

前橋市街は全焼したのであるが、郵便局は、理想的に新築せられて、講演も広い会議室で出来た。ここでも近隣の局から大勢集つて来て、心を澄まして聴いて下さるので、うれしかつた。局舎の窓から晴れた赤城山が見える。局前からバスで高崎まで坦々とした路を走る。赤城榛名の山々が今日はとても美しい。緑の山ひだが、旅情をそゝる。浅間山も遠く聳えている。妙義山の奇峰も近く見える。高崎から準急で東京へ走る。このあたり電化しているので、乗心地がよい。

赤羽・池袋・新宿と、調子よく乗換えて代々木の長岡さん宅へ着いたのは六時半頃であつ

た。南蛮寺は既に来ていた。しばらくして宮崎丈二さんも来る。ほんとうにうれしい集いである。よい酒でみんなほろ〳〵酔う。私も旅の疲れを忘れてくつろぐ。仏通老師のこと、詩のこと、伊予の同人のこと、話はつきない。長岡さんの尊敬せられる河田烈氏の「君子其慎独」の扁額のある四畳半で。

五月三十一日。曇後晴。

参宮橋から成城まで小田急で走る。思い出の多い沿線である。久しぶりに遠藤梧逸さん宅をお訪ねする。梧逸さんは福島県の平へ句会にゆかれて不在。奥さん茂さんと、抹茶を頂きつつ一別以来の話にふける。とぼしきを分ち合つたあの頃をなつかしまれる。私が東京を去る時、かたみとして、私の庭の朴の木を植えさして貰つたのであるが、仙台へ疎開不在中にその朴が枯れてしまい、どうも申訳ないと思いまた他の小さい朴を植えましたと、裏庭へ案内して下さる。あとで二冊の画帳を出される、その中には私の粗末な画も残つている。描いたことを忘れていたその画を見ると、俄かに、その頃のことが浮んで来るのであつた。

午後は祖師谷大蔵で降りて、勝矢和三氏を訪ねる。蓮田善明君のいた家と同じ番地である。突然なので、奥さんや嬢ちやんはびつくりせられる。静かなよい庭には、石がよく坐つている。満洲の話、広島の話。広島の人に会うと広島弁がどん〳〵出てくる。「つかあさい」と云

うような言葉もここでは自然である。嬢ちやんに写真をとつて貰つて、お別れする。生垣の多い道を、南蛮寺まであるく、隣の私の旧居の朴が大きな葉を、高い空にひろげているのが目につく。主人は今朝旅に出て不在。しばらく奥さんと話す。「今年はもう銀婚式ですの」と云われる。ほんとうに速いものだ。三男二女の母として、体の休まる日とてはなかつた二十五年であろう。「妾たち、是非旅行に出たいの」と云われる。瀬戸内海を船で旅して道後・別府に遊ぶようにすすめ、二人の来遊を約して別れる。

六月一日。雨のち曇。

ぐつすりねて起きて久仁子や正風へ絵ハガキを書いていると、宮本さんが来る。二人で朝から湯豆腐で一杯。

こうなると、山頭火以上だ。空腹へ柔らかく落ちついてゆく豆腐の味は、心にしみる。またしばらくは会えまいと思うと酒の味が身にしみる。清純・端的・温和。そういつた豆腐の味は二人の気持にぴつたりくるのである。高木正道さんから電話。今度は何処か旅行中で会えまいと思つている人と、東京最後の日に、話の出来る電話は有難い。

阿部さんと二人で一路宇都宮に赴く。講演会場は労仂会舘だ。宿は大きい養鯉場を持つ郵政クラブ。古い樹立が多くて心の静まる宿である。鯉を主材とする料理も珍らしかつた。あんま

りうまいので、酒は特吟だし、少し過して寝る。

六月二日。終日曇天。

朝餉前にぶら〳〵散歩したり、原稿紙を買つたりするうちに栃木県庁の前に出た。このあたり栃木県らしく、栃の木の街路樹が青々と並んでいる。栃は橡でも同じで、七葉樹ともいうだけに、七つの葉が規則正しく一つの柄をなして、上にむいて地味な花がついている。朴の木とどちらが兄であるか弟であるか、深山の兄弟であろう。朴は葉がもつと大きくやわらかでローマン的である。しかし橡の街路樹とは、流石に栃木県らしい。

鹿沼市まで自動車で送つて貰う。このあたり蕎麦の産地らしいのでお昼には、郵便局で生蕎麦をとつて貰う。私の予想の通りとてもいいものであつた。講演は丘の上の市民会舘である。畳に坐つて聴いて貰うのも、私の話にはふさわしかつた。汽車で宇都宮へ戻る、閑散な二等車の中、日光見物に行つたらしい三人の一家族がいる。細君は、窓に足を上げて、主人に何かあごで指示している。主人は細君のサンダルを穿き、女の児は父の靴をはいている。見られた風景ではない。女性が伸びゆく戦後の情勢はいいけれど、一人の主婦のだらしなさによつて、一家の格がくづれてしまつている風景は、心を寒うせずにはいられない。宇都宮から東北本線で黒磯まで北上。このあたり那須野の原のたゞ中で、雑木林や不毛の原野がひろ〴〵とつづく。

左へ入ると塩原、右へゆくと那須温泉である。ここではじめて芭蕉の「奥の細道」の跡にふれる。日光から那須に道をとつた芭蕉は、曽つて参禅した鹿島の仏頂和尚が、その後臨済宗の巨刹雲巌寺に住職せられ、便りなど貰つていたが、老師はもう遷化せられたその跡をしたつて、わざ〳〵廻り道して雲巌寺にお詣りしているが、私は古人の跡を訪ねることもせず、横着にもバスで温泉へ走る。まつたく関東平原の北隅で、奥づまつたと云う感じがする。街を右にそれて、郵政の対雲荘に泊る。

ここでは東京から出張して来られた薗田さんが私を待つていて下さつた。大耕会で会えなかつた代りに、奇しくも此の山の湯に泊り合わせるとは、はじめから計画していても、こんなにうまくはゆくまいにと、相よろこびながら、一夜を語り合つたことである。ここの湯は、炭酸と硫黄がきついので、鉄もタイルも腐つてしまう。そこで湯槽はすべて板、湯を流す管は、松の木のしんを繰りぬいた素朴なもの、それが却つて私達の好みに合うのであるが、湯がきつくて倒れるので二、三分以上は入らぬ方がいいとある。殺生石のことも思われて夜更けに入る時など、恐ろしいような気もした。

六月三日。曇。

朝餉には、わらび、細い筍、野蕗の佃煮、それに卵が一つ。山の湯らしくてよい。薗田さん

は一バス早く宇都宮へ向つて立ち、私達は殺生石まで散歩する。荒廢した山の岩間からは、到るところ白い煙が立つている。谷の行づまつたところに柵があつてその中に伝説の殺生石が横たわつている。

飛ぶものは雲ばかりなり石の上　　芭蕉

の句碑などが立つている。雲が低くたれていて、異様な匂いがする。山腹の路を那須神社へとつて下る。神社の前あたりから、湯の町まで、ぶな、みづなら等の巨木が並んでいてその間に背の高い山つつじが赤く咲いていた。このあたり海拔千米内外で、六月と云うに朝は冷え〲する。

バスで黒磯まで出ると、町には日の丸の旗が掲げられ、今日は天皇陛下が那須の御用邸へお越しになるとのこと、駅の貴賓室入口には山つつじの大鉢植が美しく行啓を待つているかのよう。大田原町は、那須郡の中心をなす重厚な町で、西田局長さんに迎えられ、お昼には、那珂川の鮎をいただく。土地々々の季節のものほど、旅する者にうれしいものはない。会場は、最近廢止となつた地方事務所の講堂であつた。ここで一週間の旅を共にして貰つた阿部さんと、北と南にお別れする。

車窓に見える栃の木の葉に眼を楽しませたりしているうちに汽車は白河の関にかゝる。停車時分の間に、プラツトホームで、旅人はうまそうに蕎麦の立ち食いをする。遠く旅に来つるも

の哉と思う。白河の関という言葉が既に詠歎的である。やがて須賀川につく。

風流のはじめや奥の田植歌　芭蕉

の句は、丁度この頃の作であろう。芭蕉は等窮と云う人を訪ねて此の町に四五日も滞在しているが、私は、道山草太郎さんという俳人と、白河から私に会うために来ていられた大谷仰峰さんという画家に迎えられる。いづれも未知の友であるが、虎屋という大きい宿に案内されて、三人で、一杯やり乍ら山頭火を語ると、これは十年以上の知己の親しさである。草太郎さんは須賀川地方に於ける俳句の元老で、「愚を守る」「草木塔」以来の山頭火宗である。仰峰さんは、そうした山頭火の遺著を、毛筆で写本して、愛誦して止まぬと云うような人である。みちのくに、一歩入つただけで、私はみちのくらしい清純な二人の友を得て、あまりにうれしく、阿武隈川の大きい鮎を味わいつつ、杯をすごしてしまつた。その時、草太郎さんの同友俳人十二三人が、やつて来られ、別室でまたしばらく、山頭火を語つたことである。

六月四日。曇。須賀川より塩釜へ。

目が醒めると、かつこうが、のどかに鳴いている。いや、かつこうが鳴いたので目がさめたのであろう。宿の庭木に来て鳴いているらしい。五時前らしいのに、こちらは夜の明けるのが早くて、もう障子が白い。少し冷えるし、まだ起きるには早いので、ふんわりした蒲団の上で

かつこうを聴く。少し遠くの木へとんでいつたらしい。私はふと、斎藤先生がみちのくの端まで歩いて旅をせられた時、十和田湖から、一人で山路を青森の方へ出る途中、このかつこう鳥が、深山の中で遊んでいて、歩いてゆくと、逃げるどころか、人間を珍らしがつて、足もとへ降りて来て鳴いた――と云うような話を思い浮べたりした。

ぐつすりねたので、朝餉がとてもおいしい。私は、三度の食事のうちで、いつも朝が一番おいしい。道山さんのお話ではこの須賀川には有名な牡丹園があつて、つい十日ほど前まで遠近の見物客で街はいつぱいであつた、しかもその牡丹を今日のように美しく育てたのは、実に清貧をたのしむ、いい老人であつたが、先生死んでしまつて淋しくなつた。先日の読売新聞で、吉川英治さんが、此の牡丹園と、その老人のことを書いていられたとのことなので、牡丹に、心をひかれつつも、仙台へ急ぐ。

リンゴ・梨・柿・さくらんぼなど、車窓から果樹が沢山見えるのも、福島県らしい。仙台へつくと、遠藤梧逸さんと海運局の舟木さんが、待つていて下さる。古い士族の屋敷だつたというつのだ亭で三人たのしい昼食をいたゞく。舟木さんとは一昨年、下関で会うことが出来たのであつたが、梧逸さんとは、十年ぶりである。少し冷えるので、熱燗のコップ酒を貰う。印刷出来だちの梧逸さん主宰の俳誌『みちのく』を貰う。忙しい会社の仕事の傍ら、この道によつて生き甲斐を感じていられるらしいお気持はよくわかる。午後の汽車で岩手県の方へゆかれる

ので、別れを惜しんで舟木さんと二人で塩釜へ走る。今は坦々としたドライブ・ウエイであるが、昔は、岩切から多賀城あたりを奥の細道といつたその名の如く、細々とした路であつたのであろう。東北海運局では、吉村局長や、高橋大麓さん橋本さんが待つていて下さつた。早速職員に何か話をせよとの事で、コツプ酒のほろ〳〵気分で「禅について」語つたのであるが、みんな一言一句吸いとるように聴いて下さるので、語ることも亦たのしいと思つた。

それから皆で多賀城趾を尋ねることゝして、自動車でまづ野田の玉川へゆき、能因法師の「夕ざれば潮風越てみちのくの野田の玉川千鳥なくなり」の歌碑の前に立つ。現在ではもう地勢が変つてしまつて、昔日の感じからは遠い。そこから古い丘陵の裾を廻つて多賀城趾へゆく。車を降りると、そこの丘の上に、芭蕉も訪ねたという壺の石碑が立つている。大きい平たい青石である。聖武天皇の初期、神亀元年（千二百三十年前）に大野東人が建てたと云う日本でも一番古い碑である。右へ入つてゆるい丘をのぼつてゆくと、いよ〳〵多賀城のあつた趾である。足元に、瓦の破片が沢山落ちている。拾つてみると、古代の布目瓦である。多賀城に用いたものであろう。吉村さんが、「これがいいですよ、僕はよく子供をつれて散歩に来ますが此の前は、このあたりに、もつと沢山散乱していましたよ」と云つて形のよいのを拾つて下さる。

桜はづつと後世に植えたものであろうが、よく太つて青葉が茂つている。雑草をふみわけて

ゆくと、草の中に、黙々と礎石が残つている。その昔、奈良朝の政府の力が、北に向つては、ここにまで伸びて、云わば北の太宰府であつたわけであろう。石を踏んだり、撫でたりすると懐古的な情が迫つてくる。また、南朝の忠臣北畠親房顕家の父子が、義良親王を奉じて、抵抗の城とした時代もあり、芭蕉の「夏草やつはものどもが夢の跡」の句は平泉の作であることは云うまでもないが、私は此処に立つて、此の句を想うてみたりした。此の礎石のある所を中心として南北千米、東西八百米と云う雄大な構えであつたと云うのである。このあたり、多賀城を中心とした文化も、発達していたであろうが、風雪千二百年を経た今日では空しく草が茂つているだけ。芭蕉は

『今眼前に古人の心を閲す、行脚の一徳、存命のよろこび、羇旅の労をわすれて、泪も落るばかり也』

とひどく感激しているが、汽車や自動車で、羇旅の労を知らぬ私には、芭蕉ほどの感慨のないことを恥かしく思う。それから歌枕として残つている末の松山と、沖の井へ案内して貰う。舟木さんは、なか〳〵に芭蕉の足蹟を詳しく調べておられ、いろ〳〵と説明して下さるのであつた。暮れて塩釜へ帰り、神社の東につづく丘の上の海員会館に泊めて頂く。芭蕉も塩釜に一泊して、その夜は奥浄るりと云う古びた琵琶をならす盲目法師の一曲に耳を傾けている。私達は、塩釜港や松島の一部を眺めとする一室で、時を忘れて親しく語り且つ、吉村さん秘蔵の酒

を汲み交わしたことである。

ここの一皿のまぐろは、実に、まぐろの漁場だけあつて、舌頭に残る味であつた。いやしい私は、こうして土地土地の産物を、口にすることを行脚の一徳とするか。

六月五日。雨。松島より鶴岡へ。

港の暁は汽笛の音で明ける。宿の人はまだねているので、こつそり戸をあけて、石巻の石だという青石の石段をふんで塩釜神社に詣でる。ぬれた参道は、通る人もなく浄らかである。まづ多羅葉（たらよう）の大木が眼につく。その厚い葉を一枚拾う。そして俳人正田雨青さんが、曽つてここに詣り、此の葉のうらに俳句を書いて送つてくれたことなどなつかしんだことである。紙の少い頃の人は、此の葉に字を書いて、葉書としたであろうなどと思う。社務所の屋根がぬれていて、前庭の木と共に絵に書いたように美しい。拝殿の前の右と左にも、多羅葉の古木が若い葉を小雨にぬらしている。横門の外には、巨大な橡の木が川端龍子の絵のように、蒼々と高く茂つて青い雫を落している。幽にして厳、東北第一の神社であろう。芭蕉は神前の古い宝燈を見て「文治三年和泉三郎寄進とあり、五百年来の俤、今目の前にうかがいてそぞろ珍し、かれは勇義忠孝の士也」とほめている。三郎は藤原秀衡の三男忠衡である。

宿に帰つて朝餉をすまし、日記を書いていると吉村さん舟木さん高橋さんが迎いに来て下さ

る。雨は降りだしたがいよ〳〵松島を観る時が来た。芭蕉は塩釜から船でゆき島々を眺めて、あの名文を残しているが、私達は、海岸に沿うて、うねりくねり、車の窓から観る。雨にかすむ静かな湾内に、無数の小島が、それ〴〵の形をして、ちらばつている。島の間から島が現われ、また他の島が島にかくれてゆく。自動車がカーブする度に、その眺めが変つてゆく。眺めのいい岬では車から出て、松のしづくにぬれ乍ら、松の青い小島を眺めるのも旅人らしい。雄島では、傘をさして、橋を渡り、雲居禅師のことなど忍び、多年性の萩の古木に心をひかれたりした。

瑞巌寺に詣でる時には、流すような雨で、山裾にある古い巌穴の中に雨をさけて、千年も昔に、ここで修行したと云う古えの僧達のことを思つてみた。此の寺は、伝教大師のお弟子、慈覚大師が創建せられたのだから、「しづかさや岩にしみ入る蟬の声」のある山形県の立石寺と同時代のものである。北条時頼の世になつて、臨済宗に改め、常陸の真壁平四郎が出家して宋へ行つて金山寺の無準禅師について大悟し、帰朝して第一世となつている。無準禅師は、京都東福寺の開山聖一国師の師尚でもある。その後、伊達家の菩提寺となつてから雲居禅師が迎えられ、その高徳によつて、今日の七堂伽藍が整備したと云うことである。雲水さんの説明で本堂などを拝ませて貰つているうちに「この貴賓の玄関は、支那の金山寺の玄関の構造を、そのままに模倣した様式です」と聴き、私は、仏通寺の開山愚中禅師が、修行せられたあの楊子江

岸の金山寺を想わないではいられなかつた。愚中禅師が入宋せられた時には、金山寺はもう仏通禅師の時代であつた。

松島駅で大麓さんにお別れして、三人は雨のふりしきる東北本線で小牛田まで北上して酒田行に乗換える。丁度時間なので、ホームに三人並び、蕎麦の立食いをする。立つてさら〳〵すするところに、みちのくの蕎麦らしい感じがしてうれしい。私達にとつては、まる一日のたのしい会見が終りに近づきつつある時で、これは別れの蕎麦でもある。「大耕舎が近いと度々訪ねてゆきたいのですがね。伊予の同人はよく行くようですね。」と、舟木さんは、大耕舎を憧れて、別れを惜しむ。ほんとうに「今度は何処でお会い出来ることか」鳴子の駅で下車されるとき「また何処かで、会うでしよう」と吉村さんに云われ、旅する者と、辞令で動くものとの、奇しき離合が胸に迫るのであつた。

汽車が山にかゝると、雨は小休みとなる。芭蕉が、「蚤しらみ馬の尿する枕もと」の句を残した尿前の関は、このトンネルの彼方でもあろうか等と、古人の雨にさらされた旅を思ううちに、もう山形県だ。人家少く朴の木が到る処に、白い花を開いている。しかし山はよく伐採されて、原始の林など見るべくもない。いつしか乗客も少くなつていて、車中は少し寒い。新庄をすぎる頃から、左手の彼方に残雪の白い山々が重つて見える、出羽の三山であろうか。最上川は、今日も亦、さみだれをあつめて早く流れている。清川八郎の生地清川からは名だたる荘

内平野で、もう殆んど田植が終つている。早いもので、みちのくの東の松島から、背柱をなす山脈を越して、西の端の鶴岡がもう見えだした。荘内の美田は、二里も三里もずつと山裾まで整然と稲の畦畔がつづく。

「やあ、どうも、御苦労さんでした」と長南七右衛門さんに迎えられる。杉本さんの「大義」や清水精一師や「大耕」を通して、心の旧知である。初対面とも思われぬ親しさのままバスで、鶴岡の街を横にそれて、一路温田川温泉へ走る。御殿旅館と云つて旧酒井家の殿様が、用いていられた湯宿につく。「この室には、安岡正篤先生も泊られたことがあります。」と云われる枯れた障子でめぐらされた座敷にくつろぐ。青いまでに澄んだ湯には、菖蒲の一束が投入れてある。ゆる〳〵一浴、そして一杯やりつつ、道の話にふける。生れた歳も同じ亥の年とはなつかしい。

六月六日。鶴岡市。曇時々晴。

鶴岡行八時半のバスに乗ることにしていたところが、宿の時計は既に四十分になつている。長南さんはもう次のバスにしましようと云う。「まだ八時三十分に間に合います、直ぐ出ましよう」と私は云つてしまつた。十年来時計を持たぬ私の勘が仂いてくれたのである。停留所へゆくと、丁度八時半、都合よく乗れてよかつたと思う。

鶴岡市の以文会へゆく。ここは旧藩主、酒井家が、そのお屋敷の一部を充てて財団法人とせられたもので、荘内藩の伝統ゆかしい致道館教学を現代的に延長せられたものである。此の頃の公民舘には、幅はあるが深さがない。以文会は、致道博物舘をも兼ね備えて、郷土の文化と人材の育成に、不断の努力をつづけられている。「泉」という機関誌も出されている。云わば日本的社会教育でこうした例は全国的にあまりあるまいと思われる。会務を担当していられる犬塚又太郎氏、加藤省一郎氏、酒井忠明氏等と、庭に面する三余室と云う茶室で会談する。やがて私のために、「潮音堂」の三字の横物が床にかかげられた。これは、測らずも昨日の瑞巌寺と関係のふかい金山寺の無準禅師の真筆で、実に美事な大作である。東福寺にあつたものが、小堀遠州公の手に渡つていた、それを遠州の茶の弟子であられた酒井忠勝公が特に所望して貰われた逸品で、重要美術品となつているものである。そこえ菅原兵治先生も来られ、ぽつりぽつり語り乍ら昼食を一緒に頂く。その中の黒ごまの、ごま豆腐はこれまた珍らしいみちのくの味であつた。

午後、酒井さんの案内で庭園を観せて頂く。有名なバラ園では、旧酒井忠良公が作業服姿で、雨の後のバラの手入れをしていられる。長江老人も手伝つていられる。その姿が実に無心で、バラに注がれる視線は、慈父が児の上に注ぐ視線のように、愛情と深い注意に充ちている。聞けば、古いのは四十年以上のもので、バラと云うバラのあらゆる種類百五十種以上も育

ていられるとのこと、須賀川の牡丹園と云い、ゆかしいみちのくの薫りである。明治維新で藩政を奉還し、昭和の改革で農地を解放せられた曽つての城主が、世を忘れ、バラを愛育することに静かな楽しみを蔵していられるのである。花は、白・赤・黄・クリームその他それぐ〵無心に咲き誇つているが、主公の心中を知るや否や。明治維新と云えば、あの「大西郷遺訓」を出版したのは、実に荘内藩学の菅秀実であつた。親しく大西郷に陽明学を学び、歿後は、その遺訓を、明治二十三年に鶴岡から出版した。私は犬塚さんから石版ものの一冊を頂いて、学問の道統と云うものを手近に感じたことである。

午後郊外藤島村の米倉庫の広間で「無我と慈悲」について語る。倉庫長田中善吉氏などと別れを惜しんで、直ぐ近くの長南さんのお宅へ泊めて貰う。荘内平野の代表的農家で、家に帰ると先づ馬や鶏を見て廻り、ものを云うておられる長南さんは、いいお百姓だと思う。ところが此のあたりは一戸平均二町二反歩も耕作しているが、米しか出来ないので清水先生は、百姓ではない一姓だと云われるなどと語つたことである。単作は、短命の原因だと、東北大学の近藤博士は研究発表していられるが、考えさせられる。

六月七日。鶴岡。曇。

五時に起きて、広い屋敷のまわりを見てあるく。庭に珍らしくも一樹のけゝゝんぽ梨がある。気

持のわるいほど甘い此の実を、私達少年時代に好んで食べたものであるが、此の木の近辺では、酒屋は必ず酒を腐らすと云う伝承を、もつと科学的に研究してはどうかと思う。

六時までに車で鶴岡の以文会へ、曇つていて月山も鳥海山も見えない。勤めに出る前を集われた同友会の真面目な若い人々のために「禅の用」について二時間語る。此の話は、私としても快心の作であつたと思う。場所と聴手のつぶがよいからだ。三余室で自由律俳人、和田秋兎死君に会う。句集二冊を貰う。話は直ちに山頭火に及ぶ。山頭火は、昭和十一年の、みちのくの大旅行で、此の孤独の天才詩人を訪ね、相抱いて語り且つ飲んでいる。湯田川温泉など、このあたりに七八日ばかりいて、ずいぶん秋兎死の世話になつたらしい。そのことは山頭火からもきいていたが、山頭火は、そのつぐないのつもりか、破れた笠と、法衣を脱いで秋兎死に与え、着物一枚で永平寺へ行つたらしい。如何にも山頭火的である。飲みすぎたざんげのつもりで僧形を捨てたつもりではないかとも語り合う。

以文会から少しはなれた荘内松柏会館へゆく。ここも酒井家の別宅を、戦後、会館に充てられたもので、酒井忠悌氏にお会いする。伊予では、久松さんが知事選挙の時、「お殿様」と書いた投票が実に沢山あつて、当選せられましたよと云うと、久松様の当選は、全く日本的民主主義ですねと云われる。松柏会は、十七年前に荘内農村指導者のために結成せられ、戦前・戦中・戦後を一貫して、郷土のために土に即していろ〳〵貢献している。長南さんはその育ての

親で、現在は、高山さんに任せ、酒井氏が会長である。午後各村から参集せられた会員の人々に二時間ばかり語る。そして高山さんの案内で、松ケ岡の東北農家研究所へゆく。ここは明治初年、酒井藩の人々が旧家老をはじめとして開墾した地域で、現在は、中学を卒業した農村の青年に、正しい日本の農道と技術を伝習する、村塾のようなものである。私も実は、敗戦後、伊予にも、丁度こうした農村の子弟を教育する塾がほしいと、いろ〳〵考えたこともあつたので此の研究所には心を動かされた。秋兎死君は、自転車で来り待つていてくれた。私と一緒に風呂に入る。仏通寺の風呂と同じ大きさで「痩身」という句集の名の示す如く秋兎死君の体では、丸い板に乗つてしまつて、沈めない。「よし来た」と十八貫五百で応援し、二人でつかる。塒に戻つたかつこうが、窓の近くで、姿を見せて鳴く、しきりに自作の句を朗吟してきかせてくれる君は、体そのものが詩である。所長の菅原さん達と、たのしく盃を傾けて夕餉を頂く。ほんとうに一期一会である。小雨の中へ秋兎死君を送つてから、生徒たちの坐禅している道場へ行つてしばらく一緒に坐る。ここでは、朝夕坐禅を行じ、坐禅和讃を唱える。食事その他起居は禅の生活に準じている。私には実にぴつたりくる行き方である。

六月八日。雨。時々曇。

かつこうの声で醒める。直ぐ近くの開墾の本陣あたりを散歩する。岡から眺めると月山が姿

を現わしていて、残雪が白い。本陣とせられた建物は、加藤清正の子忠弘が、荘内藩預けとなつて住んでいた古いもので、維新後ここに移されたもの。後の大きい桐の木がしきりに花をこぼしている。拾つて口にあてると、ほのかななつかしい匂いがする。かつこうが遠いところ、近い所で閑かに鳴く。閑古鳥とはよくあてはまる名だと思う。

食後、生徒に話をする。行の教育で、身心が正しい。バスで鶴岡へ出る。正午、犬塚さん高山さんに見送られて青森から南下して来た急行で富山に向う。

ねずみが関あたり、雨がしきりに降つて越後路に入る。ふと醒めると、雨が止んで、右の車窓に山が見える。あゝなつかしい国上山だ。良寛さまの五合庵を訪ねて、あの上の国上寺に泊めて貰つたなつかしい山である。柏崎・直江津・糸魚川・親不知・市振みんななつかしい芭蕉の足跡、今日は雨にかすんでいるが、親不知の荒磯を市振まで歩いて出た日の私はまだ若かつたと思う。

京都の旅

御所の北面を通つて、烏丸通を曲り、鞍馬口で電車を降りる。この秋はまだ霜が来ないので街路樹の大きいプラタナスの葉がまだ青い。

「京都もここまで北へくると、空気が浄らかぢやなあ。」

と老師さんが云われる。洛北の山々がはつきりと澄んで眼近く見える。見覚えのある大きな碧梧桐のかぶさつている門をくぐる。足もとの秋海棠はもううら枯れている。玄関からづつと書架が林のように竝んでいる書斎に通される。新村先生は十時から慈雲尊者の百五十回忌が上加茂の方のお寺で催されるので、その方へ行かれねばならぬのであるが、それまでの僅かの時を惜しむような面持ちで会つて下さる。書棚の上に沢山こと積み重ねてある松笠の枯れたのが老師さんの眼につく。

「松笠がたんとありますな。」

「ははあ、あんなものを集めるのが老いの楽しみでしてね。あの中には、安芸の宮島のもの天の橋立のものや、松島のものや、全国各地の松笠があります。旅の途中で拾つたのや、心

ある人から送つてもらつたのや、いろ〳〵と皆忘れがたい松笠ばかりです。」
「ほほう、それは面白い。可愛いいものですな。」
「いや。この世のお勤めを果して地に落ちた松笠は、丁度私自身のようなものだと、停年で大学を退いた時に思い当り、それから、ぼつ〳〵集めて来たのです。枯れ果ててしまつて、自分の持つていた松笠の実は、風のふくままに全国へ蒔き散らして、自分は、こうして無為を楽しんでいる、まつたく松笠のような存在でしてね。」
「いつかは、皆さんでよくお出で下さいました。」
「広誠院では、大変お世話になりました。私達老人で、流水会と云うのを造つていましてね
あの時は、東京から土岐善麿さんが来たものですから。」
「土岐さんは、去年松山へも放送局の用事で来られたことを、私はあとで知つたのですが、あの人は、『歌のことば』の中で、山頭火の『草木塔』をとてもほめて紹介していてくれるのです。」
「山頭火と云えば、私も明治九年に山口で生れたので、なつかしいです。――そのうしろの床にかかつているのは、慈雲尊者の書かれものですが――。」
と、先生は、床を指される。ふりむくと
「時」と一字あつて、「桃栗三年、柿八年」とある。

「すべて世の中のことは、時を待たねば、時がすべてを解決してくれるとでも云うのでしょうか。」
「ははあ、これは立派な筆跡ですね、広誠院にも一つあるのですが、大山さん、昨夜休まれた室の床にかかつているのが慈雲尊者ですよ。」
「話が飛びますが、仏通寺と云えば、もう既に亡くなりましたが、鎌倉にいた私の弟が、明治四十三四年頃に、仏通寺へ行き、時の老師に参禅しているのです。どうして仏通寺までも行つたか、そこが解らぬのですが。」
「香川寛量老師の頃でしよう。」
「いつか、仏通寺の開山、仏徳大通禅師の語録を送つて貰い、あれはいろ〳〵参考になりました。」
「あの紙は、大山さんのお世話で、すべて出雲の民芸和紙を用いましてな。」
「大山さん、去年の秋は、東京でしたね、あの平林寺へ行かれた時の文章は、なつかしかつた。私が行つたのは、昭和十八年の十二月のはじめでした。あなたと一緒にゆかれた南蛮寺君、宮崎丈二さん等、なつかしい人ばかり。」
話はつきないが、時はいつまでも三人を「時」の前に居らしてくれない。先生が慈雲尊者の会へゆかれる時が来た。お別れを惜しんでおいとまする。格子戸をしめて出ると、右側の板塀

の根に、朴の若木が一本立つている。老師さんと私は思わず「ここに朴の木が」と云つた、その声が玄関に坐つていられる先生のお耳に入つたらしく、「朴が」と何か云つていられるのであるが、それがもう聞きとれない。

小路を北へ歩いて北大路へ出る。比叡山の姿がくつきりと秋の空を突いている。電車で大徳寺前を通り、バスに乗り換えて、妙心寺裏門前に下車する。大きい門をくぐると、山内は昔ながらに静かである。秋の陽が、古い土塀や敷石にあたつて、どの寺の松も、枝ぶりがよい。師と共に、こうして京都の古い山内を歩くことが、それだけで心足りるうれしさがこみ上げてくる。此の夏の暑さを、狭い病室で堪えて来られたお体は、手術のあともすつかり癒えていられるらしく、敷石を踏んでゆかれる一足一足の歩調は、曽つて、二人で仏通寺の庭を竝んで歩いたころと同じものが感じられる。

春光院の門をくぐつて右に廻つて裏側に入ると、また小さい門がある。これで門を三つくぐつたことになる。門のうちは苔が一ぱいにしきつめたように茂つていて、苔の中を踏み石が点々とつらなつている。その石に、一つ一つ異つた趣きが潜んでいる。此の庭は、建物もそうのようであるが、別に改つて、庭を造るとか、茶室を建てるとか云つたような意図なしに、何心なく造られたものらしいのであるが、それが年を経て、そしてまた、庭の心に従うて住みなして来られたためか、名のある庭よりも、心にしみるものが感じられる。

柱に「今日失礼します」とある。久松先生の字である。しかし私たちは、少しも失望しなかつた。この庭、このお部屋に、先生のお心がはつきりと匂うているではないか、そんな気持がしたので、御留守居のしとやかな御婦人に招ぜられるまま、お室に通つた。教授会があるので先生は、今さつき出られたと残念がられる。「抱石庵」と大書せられた寸心先生の扁額もなつかしい。小さい床の柱には、早く咲いた椿がほんに一りん、青い葉と共に活けられて、室にはまだ朝の香の匂いが残つている。その匂いの漂うところに、妙心寺の湘道老師と、西田幾太郎先生の小さいお写真がかかつている。哲学と、禅と、お二人の師の下で、学道を行ぜられる久松先生にお会いしているような気がしてくる。老師が、

「なんといい風ぢや。気持のよいこと。」

と感歎せられる。三尺の簀をくぐるようにして、庭の竹をゆるがせた秋の風が、二人の身辺に這うてくるのである。「葉々清風を起す」とは、まさに、今日只今、此処の風光ではあるまいか。私は、曽つて戦時中に、先生から愛されていた松江の岡崎光雄君のことを申し、岡崎さんの消息を語り、ことづかりのお土産を差出した。

「あゝ、松江の岡崎さん、いいお方が原子爆弾で亡くなられ、先生もよく思い出して、惜しんでおられますので。」

そう云われると、私は何だか、自分が光雄さんの父ででもあるかのような気がして、眼を曇

らせ、ことばがつまつてしまつた。凡そ戦争とは縁の遠い性格の学徒が、実によき師につき得ていたものを、あのようにして動員せられたのであつた。

信州から到来の、白い栗菓子も珍らしく、ゆつくり抹茶をいただく。私達は少しも用件があつて来たのではない。たゞ無心に、秋日の雲のように、ひようぜんとお訪ねしているのであるが、ただ一つ私は、お尋ねしたいことがあつた。それは一昨年頃、先生は膽石症を患つていられたので、その後の御様子が知りたかつたのである。その時老師は、

「先生の膽石、もうすつかりよろしいですか。」

「おかげで、よい薬を教えて貰いましたので、あれからもう一度も出ませんので、よろこんでいられます。」

「それは結構。膽石や膽砂には、これから出てくる山芋、あのじねんぢよと云うのが、生で食べると大変わるいので、あれは是非お控えになるよう。」

清風は、依然として竹葉から湧いて流れて二人をつつんでくれるのであるが、お暇して門前まで送つていただく。隣の霊雲院の大きい国宝の梵鐘を仰ぐ、この鐘の下に西田寸心先生のお墓がある、そこへ先年は、久松先生に案内して貰つたのであつたが。

大本山の前を通つて、表門へ出る。そして門前の早川尚古斎を訪ねられるので、ついて上る。名人は外出中。奥さんや白髪のお婆さんが、大阪弁で親しそうに語りよられる。大阪で戦

災に会い、ここに仮寓していられるのだが、それもいつまでも居られぬ家らしい。ここでは管長さんとか、老師さまとか云われない。

「和尚さん、おつさん」である。

「おつさん、ようこそ、訪ねておくれはつた。」

と云う風に。聴いているうちに、その親しさがだん／＼と解つてくる。老師がまだ天龍寺の雲水時代に、大阪托鉢にゆかれ、先代尚古斎の時代から、よくお昼の点心をよばれていられたらしい。おひつ一杯の御飯をけろりと空にして見せたり、うどんのお代りを五六ぺんも出して笑わせたりせられたものらしい。だから老婆は

「おつさん、もうええ齢やさかいに、あんまり大飯は食べられませんやろな。」

と笑わせる。今の世では、想像もつかない、あの頃の雲水生活。その托鉢と点心を通しての、今尚つづく此の親しみはどうだ。ここでも主に会えない私達ではあつたが、用事のない流水の客、抹茶をよばれて辞する。

バスで一路三条河原町へ出る。丁度おひるなので、寺町の河道屋へつれて行つて貰う。うどんやそばは、京都では此の店が一番よい。此の店の祖先は、桓武天皇が遷都せられた時に、大和からついて来た千二百年の旧家である。先代、植田安兵衛さんが明治廿八年に著わした「蕎麦志」を、東京の古本屋で探出して、宮沢さんが送つてくれ、読んでいたので一入興をそゝら

れる。此の前は、昭和十二年頃に来たと思うがその時の女中さんは、日本髪で、帯をしめ、木綿の、そして紺の匂いの漂う純日本の姿であつたが、今日は洋服であることも止むを得まい。あの時は、昨日、水江ターキーが男装でうどんを食べに来たので、ターキーのフアンが店頭に何千となく押しよせて来てうるさかつたこと。彼女が、畳の上に足を投げ出して食べるので、「日本の畳の上では、ちやんとお行儀に坐つて食べたらどうどす」とたしなめてやつたとか、意地のわるい禅僧のような女中さんであつたが。

床には、大徳寺の大綱老師の月の歌がかかり、額は、「かわみちや」と平仮名で直入道人が書いたもの、こういう禅師や墨客が出没するところである。うどんの味は、とてもよかつたが蕎麦は松江のわりごには、及ばぬと思つた。

今日は、春の葵祭と竝び称せられる平安神宮の時代祭である。わしは京都にいて、まだ一度も見たことがないと云われるので、馬鹿になつて貰つて、二人で三条小橋の橋畔で、行列を観ることにする。正午に、御所から繰出して、烏丸通を下り、四条から河原町へ出て、三条通りを祇園の方へ通るという行列を、橋畔で待つことにした。高山彦九郎が、御所を仰いで、その荒廃を歎いたと云う大橋の手前で、帝都の昔を忍ばして貰うわけである。行列は蜒々として、一里半にも及び、二千人に近い京都の市民が奉仕して、真面目に変装して通る。その衣裳と云い、道具と云い、持物と云い、皆それ〴〵の時代の考証によるもので、流石に京都だなと思

う。京都ならではと感ぜさせられる。

維新勤皇隊を先駆として徳川城使上洛の列（江戸時代）豊公参朝の列・織田信長上洛の列（安土・桃山時代）それから楠公上洛の列（室町時代）城南やぶさめ列（鎌倉時代）天皇御幸の列・藤原公卿参朝の列（藤原時代）みんなそれぞれにその時代の姿である。黙々として行進する人々は、もうすつかりその時代の人になり切つているかのよう。

この祭は明治二十八年平安神宮創立の年からづつと昭和十七年までつづけられ、二十五年から復活したのだと云う。今年は、祇園の芸者たちも加つて、紀貫之の女、紫式部、清少納言、常盤御前（平安時代）それについで巴御前、静御前、阿仏尼、淀君（鎌倉・室町時代）が、皆それぞれの侍女や伴をつれている。また、出雲阿国、吉野太夫、和宮（江戸時代）なども加つて、此の古き都を流れ去つた歴史の女、文学の女、芸能の女など、女性が列に加つたことも、此の祭に、一入の美しさゆかしさを添えたかと思う。幾万の観衆も、流石に京都らしく静かである。少し疲れて広誠院へ帰り、いただくお茶のうまいこと。そこへ藤川熊太郎君が迎いに来てくれて、今夜は、鹿ケ谷の電通荘に泊つて、一夜を語ろうと云う。東山をはなれた後月の満月の美しい光の中で、疎水のほとりの門を叩く。水は音もなく流れている。後は、冷泉天皇の御陵である。松の枝に月光が澄んでいる。二人は、夜のふけることを忘れて語つた。

久松先生は、私達の時代祭見物中に、わざ〳〵広誠院へ尋ねて来られ、「墨美」の慈雲尊者

号を老師と私にそれ〴〵下さつた。その尊者の枯雅にして力の漲る墨の跡を、鹿の鳴声の聞えそうな奥まつた二階の一室で眺め入つたのであつた。

起き抜けを、すぐ近くの法然院に詣でる。女二人で広い参道を掃いておられる。山門も、それを取かこむ木立も、ただ静かである。苔のよくついた木の根に心をひかれながら本堂で礼拝する。上つて香を立て、木魚を叩かして貰いたいと思つたが、白い障子は、何処からも明かない。この頃は、いろんな者が、出没するのでどうも仕方がない。その昔、ここで法然上人の高弟、住蓮と安楽が、念仏三昧に入つているところへ、仙洞御所の侍女、松虫・鈴虫が、人間としての自己に覚め、念仏の一道に馳せ参じた、そのことが因となつて、ついに所謂、念仏の法難となつて上人はついに阿波の国へ流されるに至つた、あの悲劇のことも思われる。また巣鴨出獄後の河上肇博士が、時代の嵐の外に立つて、よくこのあたりに歩を運び、静かに流れてくる木魚の音に心をよせられたと云う自叙伝の一節も慕われてくる。そこへ尾張だという二人のおばさんが、朝詣りして来て、障子の外から念仏せられる。庭を掃いていた老人が箒をやめて話しかける。「ようこそ、遠いお国もとから、参られました」と云う。東京の人が田舎と云つてしまうところを、「お国もと」と云うのも京都らしい。掃いたあとに直ぐ落葉のする道を、小鳥の声に耳を澄ませながら宿へ下りたのであつた。

西田天香さんが、大正時代に、一燈園を創られたのは、鹿ケ谷のどのあたりであつたろうと

思いながら、三条大橋へ出るバスに乗る。大津行電車は、遠足の小学生で一ぱいになつた。一人の女生徒に腰かけさせてやると、他の男の子がわあと云う。背にはちちははの愛情あふれるおべんとうが、小さいリユツクに一ぱい、いい匂いがこぼれる。山科をすぎて四宮で下車。鉄路をうしろに越すと、すぐ一燈園である。光泉林の門をくぐると、白砂の庭に大きいふじ猫が一匹遊んでいる。一寸舌で呼ぶと、猫は、私の足もとに来て、ころりとひつくり返つて、白い腹を見せて甘える。そこへ下駄の音がして、木のかげから、江谷さんが出て来られる。三畳の書斎と四畳半が、先生御一家の栖である。そこへすわらじの山田隆也さんや石川さんも来られしみ〴〵と語る。

江谷さんの机上や身辺は、各地の民芸品でとり囲まれている。話は自然と、民芸のことに及ぶ。奥さんに抹茶をたてていただき、彦根の井伊家のこと、現在の井伊市長夫人の歌集をみせて貰つたりして、中寮で江谷さん、山田さんと三人でお昼を頂戴する。私の好きな土鍋の湯豆腐がうれしくゆる〳〵頂く。二、三の同人も来られ、放哉や山頭火について語る。この二人はいつもよく引合いに出される自由律俳句の雙璧であるが、放哉が肺病患者であつたに対し、山頭火は体が健康であつたこと。放哉は、浮んでくる句をそのまま投出すように発表したが、山頭火はよく練り推敲した。放哉の禅は禅味のある性格であつたと云う程度のものだが、山頭火は一応師について行じ、祖録などもよく味読工夫していた。その他のことはよく似ていたこと

など語り、放哉が一燈園に僅かの間しかいられなかつたと云うことは、体が弱く、その上、山頭火と同じように時には一杯酒をやらねば納まらぬので、こうした行的な協同生活には堪えられないのがほんとうであつたでしようなどと云つたりした。

それから江谷さんの御案内で園内をゆる〱観せていただく、いや拝ませて貰つた。ある篤志家が感ずるところあつて山を一谷天香さんに寄附せられた、それを拓いてある部分は屋敷にし、畑にし、また学校の敷地とせられたもので、その中心が礼拝堂である。朝夕、老いも若きも幼きも、この講堂に集つて勤行し、拝む心を主体として、懺悔と奉仕の生活がつづけられる。報酬を求めないで、労力を人に捧げつつ一筋に社会をひろく浄化して来られた五十年の行願は、世にも珍らしく尊いものであつた。それが今では同行三百人を越す一つの新しい村となつて生長し、一燈園独自の小学校・中学校・定時制の高等学校・大学林を持つていられるのである。この頃、社会教育の面では、村づくりとか、全村教育とか、その名称だけは、立派なものが各地でとりあげられているが、それは、熟語の乱用でしかない。

一燈園の日常生活の姿は、天香さんが南禅寺で禅を行じられたその体験が相当著しく影響しているように思われる。禅の道場は青年雲水に限られるが、一燈園は出家ではなく出社会の道である。女・子供をふくめた家族的な集団である。従つて、禅の道場の規範そのままにはゆかない。その代り、道場では出せない家族的な妙味があるわけである。

さて、いろ〳〵の建物を拝見してうれしかつたことは、いづれも、いづこも、実によく清掃せられ、特に上等の材木を用いられてもいないのに、ぼつ〳〵歳月と行の力によつて、日本の美が光りいでつつあることであつた。更らにうれしく思つたことは、礼拝堂の脇には、一般の同行よりも毎朝少し早めに、幹部の人々だけが入つて、静かに坐禅せられるという暗室に近い静慮の室があり、また鹿ケ谷から持つて来られたと云う一燈園発足当時の建物は、禅の小さい専門道場と同じような設計になつていて、今尚独身者の有志の人々によつて坐がつづけられていることであつた。動静一如こそ、すべての生活者のほんとうの在り方である。一燈園の路頭の行願は、一昨年のように、淡路島一国のあらゆる家の便所掃除を、全員総出で敢行せられる。こうした動の仂きの背後に、静かな礼拝と坐禅の行が蓄積せられている。また天香さんの隠寮には、師がお一人で黙想せられる小さい地下の坐が用意せられている。法隆寺に於ける聖徳太子の夢殿の役を果すべき室かと思つた。

資本主義と社会主義、この二つのものは世界の大きい思潮の主流をなしてはいる。しかしそのいづれも、人類の理想的な生き方を造り出してくれるものとは思われ難い。うつかりすると拝物や唯物に陥り易い。まして此の二つのものが、正面衝突することによつて生ずる闘争の火ばなは、社会を革命か戦争かに追いこむ危険性を多分に孕んでいる。二つのもの共存を認めて戦争を競争に止めようとする正しい行き方もあるが、そうしたものに失望し、疲れ、あるいは

その勝敗に興味の持てない性格の持主が今の世にはずいぶん沢山存在する筈である。各種の宗教も、多くの場合、二つの対立者を超えた道を示してはくれるが、生活ぐるみ抱きこんで老幼男女相共に、同行として生きて行ける具体的な生活様式と組織を持つていない。深く考える人は、あるいは茲でも満足し切れないかも知れない。そういう人々が、此の洛東山科の里で、北に山を背負い南にひらけた山ふところの一燈園で、静かな祈りの共同生活をせられているのではあるまいか。私はその生活の一端にふれさして貰いつつ、旅中半日の閑を楽しんだのであつた。

天香さんは信州の方へ御旅行中でお会い出来なかつたが、私はお会いしたと同じ感じを園内の一木一草から受取つた。齢八十をすぎて、道のために全国各地に旅の出来る御健康は、お若い時から心中無一物で粗食に甘んじて来られたことのお徳であろう。更らに天香さんの幸福は、園内に十指を屈するに足る立派な古いお弟子に恵まれていられることであると思つた。今の世ではよき師を持つことよりも、よき弟子を持つことの方がはるかにむづかしく、在り難いことである。それは五十年来、黙々と、あらゆることを忍び、あらゆるものに合掌して来られた翁の、最大のお徳であると思いながら、私は江谷さんに送られて京都行の電車にのつたのであつた。（二八年十月）

松江と倉敷

備後落合から汽車はいよ〳〵ゆるく北進する。山家風の家が点々あつて広い草場には牛があちこちに放たれて遊んでいる。私は前日広島の栗田君の案内で、全国和牛共進会を見せて貰い日本一と賞せられた備後比婆郡口北村の牡牛の、あのやさしい目と、艶々した黒い毛並を思い浮べた。

ある人が、その牛の飼主に尋ねると、

「はい〳〵、これは、もう十一才でして、わしらの家族と同じですよ。種牛として皆さんからも可愛がられ、村内はじめあちこちに、もう千以上の仔が出来ております。値段ですか、先日も馬喰さんが来て、五百万円なら買いたいと云うてくれましたが、うちではもうわが家の大切な息子ですからなあ、千万円でも売りまへん。」

と答えていた。牛と並んですぐ後に座を作り、一家の者が総出で牛の世話をし、牛と寝食を共にしているあの出展風景は、やさしいものであつたが——。

汽車はいよ〳〵山脈を越した。久しぶりに見る出雲の山々であり、村々である。玉造の八雲

荘の温泉に一浴。松江から来られた伊勢坊さんたちと一夜楽しく語り興じてねる。

明けて伊勢坊さんの車で宍道湖畔を走つて松江郵便局へゆき、旧友林君の案内で松江見物をする。

有沢山荘は、十余年前と同じ静けさである。何処を大戦の嵐が通りすぎたかと云うように、松平不昧公の昔のままに、松風が渡つている。草履に穿きかえて菅田庵の待合へゆく。簡素な室内を見せて貰いながら、遠く旅に来て、街中を車で走つて来た心を落着ける。いや自然に落ちついてくる。そこから踏石を一つ一つ踏んで菅田庵へ露路を下る。苔の中に程よく配られている踏石を、草履で軽くふんでゆく心地は、心頭の塵を洗いおとすようなすが〳〵しさである。黙つて入室して、坐つたり、立つたり、手を触れたりして観る。小堀遠州に師事した、一代の茶人不昧公が、忙しい政務の中を茲に来て茶を愛し、魂を視つめた高雅な風格がしのばれる。柱も、壁も、窓も、みなよく枯れて秋の日が、ほのかに感じられる。遠くの林で小鳥が時々鳴いている。左に廻つて水屋を見て、向月亭に出ると、眺めがたちまちに展けて、ぱつと明るくなる。清楚な庭、そして山につづく樹々の竝び、まことに和やかである。とげ〳〵した心も此処では、温くまるめられるであろう。女庵主の心のこもつたお茶をいただき乍ら「いいなあ」「いいなあ」と顔を見合す。それ以上に言葉のいらぬ風趣であり、また二人の間柄でもある。お茶というものはこうしたところで、こうした心で味わい楽しむべきものであるかとしみ

〲思う。

辞して小さい門をくぐる。と、門外左手の樹の枝から、長い丸竹がぶら下つている。この竹に自在をとりつけて、釜を吊し、落葉を焚いて茶を喫したであろう、或る日の野点の跡である。少しはなれて小さい林間の池があつて秋の水を湛えている。水には、林の樹々がはつきり映つて深山にいる思いがする。紅葉にはまだ早い葉を小鳥が散らして行つた。そこから入口までの小径もまた自然のままで技巧がないので、いよ〳〵よろしい。一歩一歩を惜しむようにして通る。草屋根の門をくぐつて、ふりむくと「閑」の一字の額がかかつている。これは向月亭の作者瓢庵（不昧公の弟）の筆跡かと思われる。

古い松江の士族屋敷が、そのまゝに残つている街を通つて久しぶりにラフカヂオ・ヘルンの記念館を訪う。瀟洒な建物、小ぢんまりした展観場はハイデルベルヒのゲーテ記念館を型どつたものですと若い女の人が云う。ヘルンの筆蹟は勿論、机、椅子、煙管に至るまで、幾多の遺品遺物が陳列されていて、一つ一つ、心をひかれぬものとてはない。こうして、日本の人と風物と文化を熱愛した異邦人の跡を、極めて深切に保存顕彰することは、奥床しいことの限りである。隣の旧居は、当時のままに保存せられている。純日本の家である。蓮のある小さい池、お稲荷様、木蓮の古木、百日紅等、読書に忙しい故人の心を慰めたことであろう。私は松江中学生時代から、ヘルンに愛された大谷繞石先生のことなど、ここで思い出したことである。亡

くなられるまで「広島逓友」の俳句の選をお願いしていたので時々お訪ねしては、酒をよばれつつヘルンや漱石の話を聞いたものである。

二階から宍道湖を眺めることの出来る倚水荘で、林君と二人で昼餉をたのしむ。食器のすべてが、私の好きな民芸作品であることもうれしい。大阪以来四十年に近い二人の交りではあるが、いつも遠く隔て住むために、相語り、酒を汲みかわすことも稀であつただけに、こうして向き合つていると、淀川を渡つて焼芋を買いに走つた少年の日のことまで浮んでくるではないか。昼の酒は少し廻りすぎた。千鳥城を見てから岡崎さんでしばらく休み、夕方より、郵政関係の人々のために、近くの寺院で講話する。

翌日の午後は岡崎さんの案内で、「出雲和紙」の製作者安部栄四郎さんを岩坂村に訪ねた。安部さんは丁度御上京中であつたが、紺絣もんぺ姿の奥さんから、いろ〳〵とその後のことを聞く。高松宮様、義宮様が遠く此の紙漉場を訪ねられた当時の模様を、奥さんは、眼をうるませて語られるのであつた。またバーナード・リーチの、再度来訪の話もなつかしく、裏の二階の別室には、リーチが出雲布志名に滞在して製作したいろ〳〵の焼物を、大切に保存せられているのも、ゆかしく拝見した。あとで製紙場を見せて貰つてお暇する。美しい山にかこまれて水の浄らかな別所の里よ、さようなら。

松江に於ける最後の半日は、伊勢坊さんの計らいで閑を得て、宍道湖で鯊釣をさせて貰つ

た。磯川さんが船頭格で、大橋の畔から舟を漕ぎ出した。魚を釣ることよりも、憧れの湖水に舟を浮べ、自分達も亦、松江風景の中に入つていると云うことで、私の旅情はもう一ぱいである。はじめ嫁ケ島が眼近に見えるところへ碇を入れて二三匹釣つた。少し東風がふいているが空は大きく晴れて、笹濁りの湖水に白い雲が映つて流れる。湖水は思つたよりも浅くて、四五尋位のもの、じつと糸を垂れて、東を望むと、伯耆の大山が、出雲富士の名にそむかず、美しい線を秋空に張つている。西を望むと、大社にかけてひようびようとして湖水がひろがり、小波が立つている。

しばらくして大橋の東下に舟を移して、また釣をたれる。今まで幾度も渡つたことのある大橋であるが、こうして舟にのつて、初めてしみ〴〵と此の橋を眺めることもうれしい。人のゆきゝ車の往来を、どつしりとのせて、昔の木橋ほどではないにしても、古雅な姿で横たわる橋。湖畔の家の静かな趣き、北側には松江一流の旅館が竝んで、一度泊つたことのあるような宿の名が、遠くからよく読める、鯊は四五匹も釣れたらもういいので、私はうつとりと、此の橋のよさと、橋畔の景色、そして遠景といつたように、しみ〴〵鑑賞して楽しんだ。もし人ありて、私に日本の三名橋をあげよというならば、岩国錦帯橋は別として、瀬田の唐橋、嵐山の渡月橋、そして此の松江大橋の三つを挙げるであろう。見れども飽かぬ眺めを持ち、歩いて渡つても、車で通つても、こうして舟から仰いでも、心地よい橋であることよ。

日暮が近づく頃から、橋上のゆききも繁しくなり、鯊も空腹を感じたか、盛んに釣れ出した。季節が早いので四五寸にしかなつていないが、湖から引上げて握ると、魚の体が少し温い。やがて橋に灯がついた。橋畔の大きい柳が、ほの暗い風にゆれだすと、湖上の波が寒くなつて来た。「半日の清遊としては、大漁々々」と口にしながら、舟を橋畔の雁木へ漕ぎよせた。

ハガキを書いていると、ポストに入れて来ましようと云う。昨夜は、倉敷レイヨンの酒津工場で講話をして、おそく着いたのであるが、女中さんは私の着物をちやんとたたんでくれる。洗面に行けば、ヂレツトに至るまで用意してある。こんなに親切な宿は一寸覚えがない。ここは倉敷市大原邸の脇にある川増と云う宿。

工場から倉田さんと平松さんが来て下さつて、直ぐ近くに在る美術館と民芸館を案内してやると云われる。あれからもう十幾年にもなるが、なつかしい美術館の建物は、時代を経て、既に古きものの落着いた美しさを見せている。東京の近代美術館などよりも、此処の方が重厚で、光線の加減と云い、立つて観る距離と云い、はるかにしつくりする。観にくる人も、三々五々と云つた風で、静かである。みんな足音を立てないで、じつと観入つている。以前とはすつかり絵が入れ替えられ、いよ〳〵充実している。

ミレーの「断崖」これは昔のまま、矢張りいいと思う。シヤヴアンヌの「漁夫」同じく「幻

想」セザンヌの「風景」その前を立ち去りがたい。ルノアールの「泉による女」ゴーガンの「タヒチ島にて」全く調子を異にするが、どちらにも心をひかれる。ゴッホの「アルプスへの道」マチスの「エールタの海岸」ルオーの「道化」ピカソの「鳥籠」等々、いづれもフランスのものがいいなあと思う。イタリー人では、セガンチニの「アルプスの真昼」が素晴らしいと思つた。高山の紫外線を、こんなにあり〳〵とよくも描き出したものだと思う。世界一流画家の作品が、こうして一堂で観られるとは、「有り難いことだ」と独語し乍ら門を出たのであつた。

それから少しゆくと古風な備中の倉を竝べて四つ、民芸館としてあるその門をくぐる。外村さんにお会い出来なかつたのは残念であつたが、岡山県を主とし、全国各地の、嫌味のない実用品で、しかも素朴な「美」の要素を多分に持つ、陶器、木工品、藁工品、織物等が、実に調子よく配置せられている。しかし私は美術館で、観る心を、へと〳〵に消耗させて来ているので、此処はまた改めて、清新な眼で観せて貰いたいと思いつつも一通り見ることにした。多くの人が、無心に創作した作品を、デパートの商品のように、慌しく見て通ることは、私にはとても堪えられぬことだ。それから羽島焼の窯を拝見して、素焼に字を書き、明日は両陛下が、岡山からこの道をお通りになると云う浄らかに鋪装せられたアスファルトの道を、車は私一人をのせて岡山へ走つてくれるのであつた。（二八年）

師と友を尋ねて

四月三十日　晴。竹原

堀江から仁方へ、内海は小波もなく静かである。竹原につくと、黒瀬君、林君が待つていてくれた。新築の電報電話局は広くて明るい。局長室で吉井さん、山岡さん、有田さん達と久しぶりに語る。有田さんはわざ〳〵木江から会いに来て下さつたのである。

午後は吉井さんの案内で、神社境内に吉井さん宿年の願望であつた唐崎常陸之介の碑を建立せられたのを観にゆく。常陸之介は山崎闇齊の高弟で、高山彦九郎正之の同志であつた。竹原に久しく止つて国学を講じた。吉井氏の先祖にもその門弟となつた人が多い。憂国の志士で書をよくし、大義名分を明らかにした。寛政八年十一月十六日六十才で屠腹した。

皆さんと別れて吉井本邸に泊る。今日は岡山の池田家御夫妻が此の竹原の旧家へお立寄に相成る予定だつたのが、変更となつた由。床の掛物や座敷の額は、頼家のものが多い。山陽外史の天草の詩や、方広寺の詩は、重要文化財と云うてもいいであろう大作である。福沢諭吉先生の額、特に私の母校興譲館の朗廬先生の額はなつかしかつた。珍らしい鯛釣草のたれた一り

んざしの下で、色々と古人先哲の書を拝見。その昔、芸州藩の町年寄として栄えた吉井家のよき建物と家風にしたつて深く眠らしていいただく。

五月一日 晴。木野山より萬富へ

朝飯には、わらび、蕗など、季節の好物を頂いて、備中の木野山へ大月郁代さんを訪ねてゆく。郁代さんは三十年振りにアメリカから飛行機で帰郷せられたのである。「層雲」を通じて大月喜三郎さんと相識つたのは、二十年も前であつたか。井泉水先生も藤秀璻先生も、渡米の節には此の人を訪ねられた。自らは加州に止つて、御両親のまだお達者であるうちにと、夫人を先きに帰らせた心事をゆかしく思いつつ、御老人と一所に私の好きな鰆などいただく。初対面とも思われぬ此の親しさ。

戦後、日本が一番物の缺乏している時、小包でいろ〳〵と久仁子や正風の着るものまで送つて頂いたことなど、今更のように思われる。その郁代さんから

「帰つて一番驚いたのは、日本には物があり余つていること、そして女の人など大変はでであることでした。妾もこうして髪を縮ませていますが、これはこちらへ帰つてから皆さんがパーマをかけていられるので、何だかきまりがわるくて急にやつたようなことです。洋服でも皆んなよい生地のを着ていられるので、妾など恥かしい様です。」

と聞かされて、私はびんぼうな日本人のぜいたくを恥ぢ入つた。アメリカ人の豊かな生活の間にあつて、勤勉と簡素に生きる者と、乏しい自国の資源を他国の輸入品で補わねばならぬ現状の中で、表面だけ富めるアメリカ人の真似をする者と、どちらがほんとうであろうか。

記念の写真を撮つて貰つたりして、松山へも来て貰うことを約して木野山駅でお別れする。

萬富の駅につくと藤原保夫さんが待つていて下さる。南方と云う部落は、大和の農村を思わせるような土塀でかこまれた家が四五十軒計画的に建てられた古い純農村である。藤原さんが帰られると、二匹の牛と羊が、もう〳〵めい〳〵とないて迎える。「そら食べ」と云つて甘そうな刈りたてのげんげ草を投げてやられる。やがて中野さん岸本さんも来られ、四人で裏山の方を散歩する。柿や桃の果樹畑があつて、みのりの秋を思わせる。山藤の花が、美しく咲いて脚下には虎杖のうまそうなのがニヨキ〳〵生えている。まん〳〵と水を湛えた大池には夕焼雲が映つていた。

夕食に頂いた藤原さん手作りの太いアスパラガスの味は何とも云えないものであつた。私はマヨネーズでなしにゴマ味噌に酢をきかせたものをかけて貰つた。

五月二日　曇。神戸祥福寺

神戸に下車。「嗚呼忠臣楠子之墓」に参つて平野の祥福寺に詣でる。今日はここで「層雲」

全国大会があるのである。

祥福寺は、臨済大学長をも兼ねていられる山田無文老師の道場で、老師も亦井泉水の門下なのである。山を後にした高台に建てられた大寺である。門前から一点の塵もなく、寺内は実によく清掃せられ、二十四五人の若い雲水がそれぐの行に専念していられる。

句会の前に大本堂で同人物故者の追悼会が催される、その中には放哉、山頭火もいる訳で井泉水師以下各目焼香する。

午後書院で句会に入る。参加者は私鉄ストで半減して三十五人。先づ二十九年度の授賞式がある。神戸の吉田六郎氏が作家として近年素晴しくよい句を創りつづけられるので、層雲賞を与えられ、井泉水賞は、計らずも私が戴く光栄に浴した。私は同人として三十年来、横着ばかりして来たのであるが、此の細い一筋につながる道すがらに於て、山頭火のことで一つの役割を担つて来たことが、師の認められるところとなつたのかも知れない。また師は「大耕」のいろいろの営みをも理解して下さるような御挨拶であつたが、すべては元来、無功徳であつて、賞を受けるに価する私ではないけれど、素直にいただく。

句会では互選の高点句が何処でも問題にせられるが、選句は議員の選挙とは違うので、私は昔から互選の意味は認めない。たゞ一句一句に対する師の講評を傾聴する。それから京都の内島北朗、名古屋の池原魚眠洞、摂津の木戸夢郎、佐賀の松田一男、小豆島の井上一二、下関の

近木圭之介、大阪の牧山牧句人はじめ、皆でいろ〳〵と俳句の作風などについて座談研究をする。来年は「層雲」五百号に達するのでその記念事業についても相談する。とにかく此の道を拓いて四十年、その一生涯を棒にふつてつくして来られ、今やその師が古稀を越えて尚お元気だと云うことは、われ〳〵としてうれしいことの限りである。終つて雲水の手になる精進料理で夕飯を伴にするのもなつかしかつた。散会しても尚師をかこんで短い夜を惜しみ、私たち遠方のものは、そのままお寺で泊めて貰つた。

五月三日　雨。京都広誠院

典座寮でお粥をいただく頃から雨となつた、ストは今日もつづくらしい。私は友に別れて一人で駅に出て国電で京都へゆく。

広誠院には私の勘が当つて益洲老大師が巡錫先から帰つておられ、お茶を頂き乍らお話を聴く。佐々木三雄君も同席。庭の楓の新緑が一入鮮やかで雨にぬれている。床には白隠禅師のものがかかつている。雨の一日を院に籠ることも旅の一日として有難い。

夕餉には芸州三原の酒「酔心」をいただく。一休寺の納豆も、辛く幽かな味としてよかつた。老大師が四月に義濃犬山の徳授寺へ授戒にゆかれ、その間大洲如法寺の藤木和尚が師に侍されたこと、授戒者が二千七百人もの男女に及んで大変だつたこと等お聞きした。

五月四日　曇つたり晴れたり。尾崎

大阪の地下をくぐつて難波。そして尾崎へ旅をつづける。地下鉄と云うものは、何だか都会文化の虚無的トンネルのようで悪くないと思う。三宅さんに迎えられて倉敷レイヨン工場の門をくぐる。禅林の山門から、道はこうした門へもつながつている。

午後社宅婦人の人々に語る。大きい風呂で一人ゆるゆる体をのばす。夕、従業員大衆に語る。女子寄宿舎の長い廊下が実によく拭きこまれて、室々の入口には照顧脚下のスリツパが整然と揃えられている。いいなあと思う。西条土産の柚子の香の強い菓子でお茶を頂いて休む。

五月五日　薄曇。大阪

大阪中島の電通会舘へ急ぐ。桜の宮会が催されるのだ。恩師加田宗吉先生はもう七十八才で尚お元気である。佐藤一造先生には大正八年以来三十八年振り、八十七才と云うに昔の如く気品の高い温顔で待つていて下さる。小谷勇助先生は六十八才で住吉播磨町局長として御健在。此の三師をお招きして曽つて此の師に教えられ、またその部下として通信生養成の教職にあつたものが、年に一度こうして、相会すると云うなつかしい席には、東栄、和泉助一、太田武司氏等同窓二十余人の顔が竝んでいる。一別以来の話のつきないうちに洋風の宴席がはじまる。

私は遠来の珍顔と云うので、茲でも師に竝んで、親しくお話を聴くことが出来た。

神戸では俳句の師に、京都では禅の師に、大阪では官吏の師に、今度の旅は、恩師を訪ねるの旅であるかと思う。此の師をはなれて私の今日はない。その旧師がそれぞれ皆御長寿で、後進に立派な範を無言のうちに示していて下さることは、私にとつて何と云う幸せであろう。

別れを惜しんで東西に散じ、私は呼ばれるままに小谷先生のお宅へ泊めて頂くことにした。長男を戦争で失われてからは、お二人のお孫さんを愛育せられて、深く信仰に生きつつ、清純な局長としての奉公に一貫していられるいろいろのお話を承つて、二階で休ませて貰う。流石は大大阪の表通り、夜もすがら往来する車の音は、旅の枕にひびいて止まなかつた。こうした都会の一夜も時には閑居する私への警策であろうか。

五月六日　雨。紀伊田辺、富田

小雨の中を、先生に天王寺まで送つて貰い新宮行の準急くまの号に乗る。和歌山をすぎて有田川流域あたりは、去年の水害のあとが今尚ありありと忍ばれる。雨は止まない。田辺駅には竹山老人と松井夫人とが待つていて下さつた。田辺市公民館で一寸休み、婦人会や一般の人々に「無我と慈悲」について語る。皆それぞれに宗教的に日頃から工夫を重ねていられるらしく聴くもの、語るもの全く自他一如、時を忘れて感応道交するの感があつた。それから有志二十

五六人の人々と、俵屋で夕食を共にして座談をする。私は、はじめて会う南紀の人々の心の素純さにうたれる。大谷さんと云う方は、若狭の原田老師に十五年も参じておられる、その体験談などよかつたと思う。

竹山老人と私は夜ふけて少し南の富田へ行つて西嶋さんのお宅につく。ゆる〳〵湯に入れて貰い、とてもいい酒を四五杯いただいて、少し疲れていたので、ぐつすりと眠る。

五月七日　雨のち晴。

雨が晴れて、庭の楠木などの若葉青葉が美しい。その一葉々々が光明を放つているではないか。はまゆうの太い株が点々と竝んでいて南国らしい庭である。松風の中を歩いて海岸に出ると、太平洋の大きいうねりが小粒に揃つた浜の小石を洗つている。土佐の桂浜を思わせるような大観である。砂丘に腰を下してしばらく空と海を眺める。私は有名な人物よりも無名の人の中によい人を見出してよろこぶと同じように、無名の風景の方が、有名で大衆の押しかける名勝地よりもだんだん好きになつた。この富田の浜辺など観ても飽かぬ絶景だと思う。竹山老人と二人で抹茶をいただく。

午後、大耕六月号の原稿や、此の日記を書く。松林の彼方から、海鳴りの音がきこえてくる。夕方田辺から松井さんも来られ、西嶋一家の方々と温い鍋をかこんで夕飯をいただく。大

鯛も新鮮でおいしかつたが、此の村の豆腐もよいと思う。つづいて、禅その他のことについて十一時頃まで座談。

五月八日　晴。椿温泉

松井さんの案内で、竹山老人と三人で次の駅まで汽車で行つて、椿温泉へゆく。

小さい湾のほとりを、二軒の旅館で占めているその一つの椿楼でくつろぐ。椿と云う名も南国らしく白浜よりも私たちには落着ける温泉である。浴槽はよい加減に温いのと少しぬるいのと、水に近いのと三つあつて私の体には実にふさわしいアルカリ性の泉質である。子供のように、珍らしそうに三つの槽に交々入つてたのしむ。旅の体を湯に横たえて、ぼうとしているその無心な楽しみで身心共にとろりとする。お昼にいただいたあわびやもづくは浜の香がしてよかつた。

松井夫人は満洲事変の時、建国直前に、熱河省の工作中に満洲国の礎石として戦死せられた松井清助大佐夫人で、夫君の死後六人のお子さん達をそれぞれ立派に育て上げ、特に仏通老大師等の影響で、宗教的によく育てられた。現在では市の婦人会の指導者として、道を楽しみつつ余生を送つていられるのである。

一寸ひるねして帰る。もう初夏の陽ざしである。お茶を喫するその味のよさ。私は日記を書

いたり読書したり、竹山老はその側らで、大耕表紙としての画を書いておられる。今日はしきりに家のことや、畑のことなど思われる。子供たちが待つているからであろう。

五月九日　雨、風あれる。　和歌山

俄かに時化となつて、松林がうなり、波の荒れる音が窓を打つ。醒めてまだ早いので寝床の中で静かに考える。竹山老も醒めてはいるらしい。その寝顔が、良寛さまに、似てござる。三日も泊らして貰うと、此の家にお別れすることが何か淋しくなる。西嶋さんは、単に病患だけを仕事の対象にする所謂開業医ではなく、人間全体、身心一如、もつと大きく云えば病人の生活環境にまで、医師としての手をのばし、そのよき指導者たらんとするような理想を以つて、ぼつ〳〵それを現実化していられる人だ。私たちは、此の一家が南紀の一隅で温い光を放つて下さることを祈りたい気持である。ひるの汽車で奥さんと一所に田辺へ出て、和歌浦を見ることにする。竹山老はしばらく止つて額の篆刻をすると云う。（二十九年）

庄原から鳥取へ

備後庄原

夏草の
しげるがままに
比翼塚ふたつ竝びて
夢は永し
太古そのまま静かに眠る

青草をふんで
みはるかす一河の流れ
ほのぼのとして
家は古りて　寂し
倉田百三この町に生る

「出家とその弟子」
「処女の死」「歌はぬ人」と
相つぎて　むさぶり読みし
あの頃のこと
うつつの如し
長髪を撫で上げつつ
語りし君のことのは
薄赤くやせたる頬
くぼみたる瞳の
黒く光りし君のふるさと

井家上耕一の官舎には、茶の間に大きく深い上海流の炬燵がしてあつて、炭火のいらぬ此の頃は、机の代用となつている。主人が一人なので、若い人、おんなおとこつどいて、ゆかいに炊事している。青い畳が匂うている室で、郵・電両局の人々と飯台をたのしく囲む。鯉のさしみ、鯉の白味噌汁、それに鮠の焼いた酢ものなどは今日見た川の産物である。夜が更けると星が冴えて、備北の此の町からは空が近いような気がする。蛙が遠くでしきりに鳴いていた。耕

一と澄太、どちらも負けず大いびきをかいてねたであろう。
庄原から備中神代へ、神代から伯備線で北へ走る。落合、東城あたり、山の青葉が車窓に迫り、乗客の少い車内まで青くなる。山陰へ越すあたりまで、ほんとうに「分け入つても分け入つても青い山」で、山頭火さんの如く、このような道は、笠をかむつて歩いてみたくなる。伯耆大山の容姿はいつ見てもいいと思う。曇つてはいても、雲が高いので、山がはつきり見える。伯耆大山で乗換えて、大山の裾野を大きく廻つて鳥取へ急ぐ。日本海の青くて静かな海を背にして、松の林があり、村があり湖水がある。このあたりの風景は、油絵でもなく、墨絵でもなく、水彩画だと思う。
吉田君、永見君、丹羽さんなど電通のなつかしい人々に迎えられて街に入る。やがて講演。その頃から雨となる、外は雨だなと眺め乍ら話をすゝめている自分を観る自分がいる。壇上に立つようになつて年を経たなと思う。
宿は一の湯皐月寮。鳥取は街のただ中に温泉が沢山湧いている。水害、地震、火事など、災難の多い所ではあるが、温泉は自然の温い恵みである。藤村も「山陰土産」にそのことを書いていたと思う。あの時の同伴者鶏二さんは、四人のお子さんのうちで、一番よく父に似ていて立流な画家となられたが、戦争も終らんとする頃、従軍画家に徴用せられ、海南島へ飛行機が着陸する時、事故で亡くなられたことを、文学愛好の畑和夫君などに語つたりした。ぐつすり

ねて、早く起きて一人で温泉につかる。少し濁っているが身にしみ心も和む。

鳥取にて

街中のところどころに
いでゆ涌く
とつとりの　土のあたたかさ
ふみしめてあるく
われも亦　旅人

ゆけむりの
ほのかに白く　朝あけて
城山の青葉に
雨　あがらんとする

山脈の
果つるところ

砂山の
うちつづくところ
白波の
うねりて消ゆる
北の海の
深き嘆きを　われ聴かんとする

あまさぎは
悲しき魚よ
湖山なる
みづうみのほとりに
棲むと云う
あまさぎの
味の淡きを　われ愛するなり

興禅寺境内の尾崎放哉句碑に詣でる。放哉が小豆島の南郷庵に入つた時に、山頭火は熊本で

出家している。放哉が大正十五年四月七日病歿した時に、山頭火は肥後の味取観音を捨てて漂泊の旅に出ている。古い樫の葉が雫を落して、丸い句碑をぬらしている。

「春の山のうしろからけむりが出だした」

と最後の句が刻まれている。

興禅寺は黄檗宗で、お茶を頂き乍ら、いろ〱話しているうちに、大原幽学が師事した近江松尾寺の提宗和尚が、この寺の開山であること、そして松尾寺の開山、潮音禅師は、木庵禅師の法をつがれた人であることを稲垣丹田和尚から教えられた。

降つたり止んだりする街を、車で駅前通の吉田璋也先生の鳥取民芸館へゆく。病院長としてお忙しい先生が、わざ〱実に丁寧に館内を案内して下さる。階下には鳥取の牛戸焼と因久焼を年代順に陳列されている。あまり広くない古風な土蔵であるが、ほんとうに簡素で、民芸作品もさること乍ら、内部の設計や飾付にも吉田先生の工芸家としてのいい感覚が蔵されている。素朴で、平凡で、無心な美を漂わせている一つ一つの器に心をひかれて、時を惜しみつつ観る。二階は県外各地の種々の参考品で、古い支那の陶器も交つている。吉田先生は、館の小さいことや、陳列品の少いことを云われるけれども、私たちには此の数で十分、駒場や倉敷の民芸館になるとあまり多面的で数が多く、一回では観切れない恨みがあると思つた。館の入口の木喰上人流の地蔵さんも亦、よく此の下座を行ずる民芸の道を象徴しているかと思つた。

いつ来ても倉吉の美しさは、裏山の古い木々の茂りにあるかと思う。ただ駅から電々局へ行つて、講話して、それからバスの乗場へ出ただけであるが、心の和むところである。

放哉を慕い、俳句と絵をよくした河本緑石は、隣の社村の人で、ここの農学校の「仏さん」とあだ名せられた先生だつた。八幡浜で、溺れる友を救わんとして不慮の死をとげた惜しい人。

バスに乗つて走り出した時、後から呼びかけられて振りむくと、岡山県井原の同人久津間夫妻が直ぐ後の席にいられるには、お互いに驚いた。このお二人は五月にははるばる伊予路の旅で大耕舎を訪ねて下さつたのに、私は一日違いで不在した。こんなところで、旅する者が、旅する人と、同じバスに乗合わせるとは。しばらく三朝で湯治していられるのである。七年ぶりの三渇荘では、大丸さんが待つていて下さつた。赤碕から佐伯君、浦安から吉田君わざわざ私の倉吉での話を聴きに来てくれ、その上一緒に泊つて語ろうと云うのである。倉吉の田中さん旭の山崎さん同行の鳥取の永見国君たちと、一会をたのしむ。湯の質は、私の知る限りでは三朝が一番いいと思う。蛙の声をきゝ乍ら、親しい友としみじみ浸る。永見君と、枕を竝べて休むのも旅なればこそである。翌朝、大丸局長さんの益洲老師の書に箱書をする。私としては初めてのことである。短冊なども沢山書く。油屋に久津間夫妻を訪ね抹茶をいただいて、故郷の話に耳を傾ける。

境へゆく途中には米軍の基地があり、弓ケ浜の松並木は美しいと思う。広瀬局長に迎えられて、その後の話もなつかしい。私が広島から東京へ去つたあとの、戦時中のむづかしい仕事を担われ、その後大陸で敗戦を体験した人である。大耕一号からの同人渡村の松本君。出雲城安寺で一度会つた藤本源君等、なつかしい人々に待たれる私は幸せ者だと思う。一時間半ばかり講話して、米子へ出る。

潮助治さんいよ〳〵お元気で先づ安心。私達が東京で家の建つ間、お世話になつたのはこの一家である。宮崎丈二さんの近くでよく往来したあの頃はなつかしい。漸く這い出した久仁子を、我が子のように抱いて下さつた静江さんは、小学一年生の道つちやんの母となつていられる。あれからいろ〳〵と苦難を超えて来られたが、愛児を光りとして生きられる一家の幸福を思う。

家島君の心配で、日野川の若鮎を沢山いただく。江尾の清水さん達と、日野川で鮎狩りをし河原で焼いて食べた往年の香りを思い出したりした。

忠明君の案内で逓信診療所に至り、大山の絵など見る。忠明君の絵も亦不断に新しさを探求して止らずいいなと思う。米子郵便局の窓から大山がよく見える。話のあとで大耕同人の人々としばらく座談する。

雨の中を相賀さんに送られてバスで二部へ入る。大二郎さんの戸口には「大耕舎二部支部」

の看板が掛つている、雨のさめ〲と降る音をきいて、奥の間にくつろぐ。
辻さんの彫刻の話、新井さんの陶器の話、満洲の話、東京の人々の話、信州の山の話、信州の山には、新京で亡くなられた頼子夫人の遺髪が眠つている。夜はまた仲田さん、伝燈寺さん石井さん、伊達さんも来られ時を忘れて語る、十二時散会。
天井の高さ、夜の深さ、旅の最後の一夜を伝燈寺の一室でぐつすり寝る。
昨夜は、うどん、今朝、団子汁、旅をつづける私には、御飯でない食事が一入うれしい。それにしても、梅雨期の七日の旅路の、到るところで戴いた食事のおいしさ、それは私の体の調子がよかつたからでもあるが、その食べ物の背後にある「人情の味」をも噛みしめたことであつた。雨の少しふる中を、バスで溝口まで伊達さん父子に送られる。
日野川は、さみだれをあつめて速く、薄濁りして走つている。汽車は、出入の客も少い。根雨の町はづれの丘に立つている平和観音像を遠望する、辻晋堂さんの作である。木野山駅の車窓で松山へ来て貰つた大月郁代さんに会う。近くアメリカへ帰られるとき、一期一会である。高梁川の雑魚の串にさして焼いたのを貰う。鮠、ギギ、砂喰など、ドンコはいないが、いづれも、私の幼な友達である。（二九年六月）

小豆島

長岡信捷さんのお伴をして、小豆島へ渡つたのは、昭和十三年頃であつたかと思う。それから十六七年ぶりである。あの頃は暗い船室に体をかがめて坐りこんだのであつたが、今日は明るい快速のオリーブ丸の清潔な椅子に腰かけている。たゞ困るのは観光地域の例にもれず喚がしいジヤズが鳴りつづくので、船尾の静かな室に席を変える。この美しい海と島々を観るために、ジヤズ等は一切不要。ロダンが云つたように、名画は黙つて見るべきだと思う。

土庄電々局でしばらく休んでから、藤原さんの案内で井上さんと一緒た本覚寺の一髪観音を拝みにゆく。海を見降すところに鐘楼があつて、その鐘の銘が荻原井泉水の俳句であることは世にも珍らしい。一つ撞いてその長い余韻に聴入る。一髪観音の御堂は目下建立進行中で、敷地だけを完成している。井上さんに導かれて本堂の一室に入ると、そこにこれまた世にも珍らしい大きな絹地に、杉本哲郎画伯の筆になる原画の観音像が描かれ、その原画の線の上に、人間の毛髪を集めて、彩色し、刺繍が施されている。その多くの人々の毛髪の中には、印度のタゴールや、ネールの髪も交つているのである。その観音の四辺を取りかこむ図案はアヂヤンタ

ーの壁画に似せて杉本画伯の筆になるもの、なか〳〵変つた構想である。発案発願者の和尚さんは上京御不在中。

それから井上一二さんのお宅へ戻る。古く七代に伝わる醤油屋で、玄関には四斗樽が二つ坐つており、一升から五合、一合、五勺と云う風に順々に桝が角を並べて置かれてある。これが酒だつたら、放哉や山頭火が歓喜したことであろう。奥の茶室に招ぜられてお茶を頂き乍ら放哉のありし日の話を聴く。近くの南郷庵にいて、用件をすべて郵便で出しているのも放哉らしい。山頭火と違つて相当気むづかしいわがままな性であつたらしく身辺のお世話も骨が折れたことであろう。大正十五年四月、放哉が死んでから、放哉の句を縁として、私はその頃病弱で無為に遊んでいたので、その淋しさに一脈通うものを感じ、此の句作道に入つたのであつた。山頭火は行脚の途中、放哉を慕つて二度この島に渡つて井上氏を訪ね、墓参をしている。

蕪村の三十六俳仙の絵を見せて貰つたりして、画帳を出されたので即興のままに

風音こと〳〵　放哉を聴く　　　澄　太

としるした。此の日、島は風が強く、茶室の窓の障子を絶えずコト〳〵鳴らす、放哉も手紙の中に、島は風が強いとよく書いていた。そんなことも忍ばれたので。

それからいよ〳〵南郷庵を訪ねる。ここは西光寺に属し小豆島八十八ケ所の番外として観音様がおまつりしてある。放哉は大正十四年八月から、十五年の四月までの八ケ月を此の庵の守

として住し、酒はよく呑んだが、肺病を忘れて句作三昧だつた。大松が一本昔のまま崩れた土塀の内にあつて、その根方に、

いれものがない両手でうける　　放　哉

と、井泉水の筆になる句碑がちよこなんと立つている。石は古びて、苔がつき、此の石の上に流れ去つた三十年の風雪を思わせる。一月前には、故里鳥取で句碑を撫で、今茲にまた終焉の地で碑を拝む。お堂は昭和七年にお詣りした時より建て替つて向きが変つている。放哉が淋しさに堪えかねて叩いたり、さすつたりした木魚がよく禿げて坐つている。なつかしさの余り私はその木魚を叩いて般若心経を誦すると、一二さんも後に坐つて、唱和された。

裏山の墓地の西光寺歴代の墓に竝んで、放哉にしては立派すぎるような墓に詣でる。それから山を越して今夜の宿となつている観海楼に入る。屋島を波の彼方におくいい眺めである。郵便局長大森さんが来てくれ、いろ〳〵と往時を語る。やがて、土庄公民舘で、講演。毛利局長さんの日頃の訓育のよろしさを思わせるような、ほんとうにいい人々の集りであつた。海からくる風を左に受け乍ら、私は涼しい思いして語つた。宿に帰るともう八時近かつた。空腹に注ぎこむビールの味は、体にしみてうまいと思つた。

翌、二十二日。室田さんと二人バスで一路坂手へ急ぐ。オリーブの畑が多い。道路もよく、天気もよい。車窓の眺めの美しさ。池田、草壁、内海、苗羽を経て坂手に着くと、そこに川野

雅章さんが待つている。小さくてよく浄められたキチンとした局でしばらく休んで、川野家に落着く。島で古い醤油屋である。此の町は北に洞雲山を負い、南に深い湾と良港を持ち、左右に岬が突出して、小豆島東南端のよくまとまつた静かな町である。女流作家壺井栄さんの故里で、その作「女の暦」「二十四の瞳」のロケーションがあり、此の春は島も賑やかだつたとか。しかも壺井さんは小学校を出て、しばらくの間、坂手局に事務員として勤めていられたこともあると云われる。私は此の人の作は、雑誌で時々見た程度であるが、地味で気取らぬ、女の心を実によく素直に描き出す作風には、何だか小豆島の、いい醤油の味に似たものを感じていたのであつたが。後の小高い所に、生田春月の碑があるので案内して貰う。昭和五年播磨灘へ別府航路の菫丸から身を投じた春月の死体は此処の岬に漂着した。そこでまあ坂手が春月の終焉の地となつたわけ。碑の面には、高村周豊鋳作になる絶筆「海図」の原稿のままが、よく出されている。昭和十一年に友人の好意で建てられ、題字は石川三四郎筆、裏面の選文は加藤武雄の作で、加藤氏ははる〴〵除幕式に島へ来たと云うことである。鳥取の放哉は土庄で死し米子の春月は、坂手で死んだ。北の人が妙に南の島に憧れてくる。

一風呂浴びてバスで内海へ。佐藤電々局長さんの社宅を会場として、職員の人々に座談。土庄と同じく温い局風を以つて皆と共に業を愛し楽しむと云つた様な気分に打たれ、島はいいなあと思う。川野さんと再び坂手に帰つて涼しく泊る。床には、前島密先生の軸が掛つていた。

山頭火の故里

『この塀が七八間ばかりと、あの西側の二階建の一棟とが昔の大種田の頃の残りで、その外は、皆、あとで建てたものばかりであります。さあ屋敷はどの位ありましよう。八百坪あまりでしような。今は、その跡にこうして十四五軒も住んでおり、私もその一人なのですが。へえ、何しろ大きい庄屋さんでして、母屋は高い草葺の屋根で、その裾に瓦のおだれが四方に出ておりました。大きな樹がたくさん植えてありましてのんた、わしらは正一さんと一緒によく蟬をとつて歩いたものでした。わしの方が三つ歳上で、わしはもう七十六になりますが、あの頃の盛んであつた大種田の屋敷の様子はまだはつきり覚えておりますのんた。それは大したものでした。ちよいとこちらへおい出ませ、へえ、あんたは伊予の松山の方からやつて来られたのでしたか。そうです。お母さんは、とても美しい人でしたが、正一さんが十才の時に、井戸に飛びこんで自殺せられました。その井戸は、たしかこの辺であつたと思います。すぐに土を入れてつぶされましたが。あの時、わしや正一さんは、納屋のような所で芝居ごつこをして五六人で遊んでおつたのです。「わあ」と皆が井戸の方へ走つて行つたの

で、わしらもついて行きましたが「猫が落ちたのじや、子供はあつちへ行け」と云うてよせつけてくれませんでした。

種田さんかな、とても善い人で、あれが悪いと云う者は一人もなかつた。学校では、はじめはあまりよう出来ざつたと思うが、中学へ上つた頃からとてもよく出来るようになつて、いつも一番だつたと云うことですが、わしらはその頃から、別々の道を歩くようなことになり、それからのことは少しも知りません。俳句をやることも、山頭火と云う名も一向知らずにいましたようなわけです。』

河本老人は黒くはつきりした眉の下に、人なつかしそうな眼を光らせつつ、山頭火さんの生れた家跡を案内してくれながら、こう語つてくれた。私と柳先生が、お礼を云うて道路へ出てからも、しばらく軒下に立つて私達の後姿を見送つていた。木犀がぷんと匂うて、防府の街は静かである。詳しく云えば此処は防府市西佐波令の八王寺。

生れた家はあとかたもない　ほうたる　　山頭火

まつたく此の句の通りで、この句を作つた日の山頭火さんの懐古と云うか郷愁というか、底の抜けたような淋しさが、ここに来てみると、私にも通うてくるような感じがする。

その生家跡から南へ三田尻駅の方へ二丁下ると、街路の四つ角に大きい榎木や欅木のこんもりと茂つた森があつて、戎が森と云う。小さい祠も立つていて、今は児童遊園地となつてい

る。此の森の中へ、山頭火さんのふるさとの人々の温い贈りものとして、大きい句碑が建てられ、山頭火さんの十五回忌に当り今日その除幕式があるのである。私は先年、筑後の柳河在で北原白秋の詩碑を観たことがあるが、あの碑も生家から少しはなれた小学校の横の森かげで、如何にもふるさとの碑らしいものであつたことを思い出した。はじめ柳先生から刻むべき句についての相談があつた時、私は山頭火さんの真筆がよいと思つて、「分け入つても分け入つても青い山」の軸物を送つてみた、これは句としても代表作でもあるし、ふさわしいかと思つたのである。ところが、石の大きさや形にうまく合わず、また文字が続けて書いてあるので、読みにくいと云うことで、今度は私に書いてくれと云うことになつた。それが九月の終りである。

私は急いで例の悪筆をも忘れて

雨ふる故里ははだしであるく　　山頭火

と、山頭火流に大書して送つたのであつた。それが、石の姿にぴつたり合つていて、なかなか美事に刻まれているので一目してほつと安心した。山頭火さんの句碑としては、既に

昭和十六年三月、終焉の地松山一草庵に

鉄鉢の中へも霰

昭和二十五年十月、久しく住した小郡其中庵跡に

はるかぜのはちのこひとつ

昭和二十七年十月、出家得度の地熊本大慈寺境内に

まつたく雲がない笠をぬぎ

の三つが建てられているのである。これらはいづれもその土地土地の山頭火を慕う人々の友情によつて、建てられたものであるが、その経費は主として、山頭火の遺稿を私が編著して得た印税に拠つていたのである。ところが、故郷を捨て故郷をはなれ、ひよう／＼として雲の如く秋風の如く、気の向くまゝに全国各地を行脚行乞し、旅にて歳を重ね、旅先きで死んで行つた山頭火さんが逝いて十五年にして、ふるさとの土に迎えられて帰つて来たのである。温い故里の人々の友情がついに結晶して此の一基の碑となつたのである。ふるさとは有難いものだと思う、建設委員長の柳義雄先生は、五十余年の昔、防府に椋鳥句会というのがあり、若かりし日の山頭火と時々席を同じくせられた。その後ずつと俳誌「めばえ」（定型）を主宰して来られた関係から、今日の式に集いよられる故里の俳人はすべてホトトギス系の人々であつて『層雲』の誌友は一人もいないのである。山頭火は、もう既に流派を超えた俳人なのである。むしろ人としての山頭火、世に例のない道を縦横に歩いた山頭火の生活と心境が、その作品と共にふるさとの人々に慕われるのである。由来、山口県には維新の関係もあつて、政治家、軍人、思想家には、一世に名をなした人物が多い。防府市の人と云えば松岡洋右氏、光田健輔氏がいる。文人としては、山頭火は、国木田独歩につぐ存在だと云われている。私は、碑のぐるりを

廻り乍ら、「山頭火故郷に帰る。山頭火故郷に帰る」と、独語した。そして「雨ふる故里ははだしであるく」と小さい声で囁いてみた。

この句は山頭火さんが、ふるさとの土を、はだしで踏みしめて歩きつつ詠つたものか、歩く歩調に此の句のリズムがよく乗つてくる。人は故郷に錦を飾ると云う時代に、山頭火さんは、黒い衣を着て、深い笠をかぶり、裸足であるいて帰つて来た。変り果てた姿に、その頃の故里の人は、恐らく誰一人として、それが、大種田の正一さんであることに気がついた者はいなかつたであろう。それでいいのである。一切のものを脱ぎ捨てて、人生を裸足で、歩いて来た山頭火さんには故郷に飾るべき何物も要らず、また持つていない。そのありのままの気安さが、此の句の感じを明るく大らかなものにしている。此のあたりは、土がすべて真砂土で浄らかである。それが少し雨にぬれていて、踏み心地がよい。一歩一歩の足のうらに、生れた土地の温かさが感じられる。何処かで一杯ひつかけたか、山頭火さんのよい足どりから生れる句の調子は浪漫的である。しかも全身、全心で作つた動かせないものを持つている。昭和七年の作で、其中庵に住みついて最初に出す句集の原稿の一番はじめに、此の句を書いて私のとこへ送つて来たことも覚えている。

やがて、妹さんである町田しづさん、咲野夫人のお里である和田村の佐藤誠一さんも来られ一草庵に保存中の山頭火遺愛の鉄鉢に、山吹色の酒が注がれて護国寺さんの読経で式がはじま

つた。柳先生の開会のおことばには、友情あふれるものがあり、病後のお体でよくもここまで運んで来られたものだと、私はたゞ感謝の心で一ぱい。それから小沢知事の式辞を藤本文教課長が代読せられたが、これは決して形式的なものでなく、山頭火の生涯をよく知る人の文で、文中到るところに、山頭火の句が文章の一部となつて現われたりした。それから市長さん、毛利様などの実感迫る式辞があつて、献句。最後に私が立つて、山頭火さんの追憶談をしばらく語らして貰つた。会衆は六十人ばかり。榎木の黄ばんだ葉が、風のないのに、ほろほろこぼれしみ〲としたいい集いであつた。終つて附近の小学校の講堂で、直ぐ会にうつる。桃源洞先生の挨拶も、この会にふさわしく、山頭火的であつた。それからいと和やかな交歓風景の中の何処かに、何だか山頭火があごひげを撫でながら坐つているように思われてならなかつた。つづいて追悼句会となつたのであつた。（二九年十月）

防長の友

十月十一日

昨夜は淡い秋雲に出たり入つたりする月を観て、書物に囲まれたような坂田常太郎さんの室で旅の疲れをぐつすりと眠り捨てるほどに眠つた。坂田さんは私が寝てからまた一杯やつてその上、学校の仕事もせられたらしい。山口市といつても、この小川と云う所は、柿の木の多い農村でもう稲刈の最中である。田の中の道を手をあげて見送つて下さる坊チャンや奥さんの姿は、初めてお会いした人とも思われない。

まづ湯田へ出て、中学校で全校生徒に山頭火さんについて話す。今日は山頭火忌なので、松山にいると、一草庵で一寸した法要でもするところであるが、その代りに此処で坂田さんの苦心になる山頭火展を観せて貰う。故人の書いた短冊類もさること乍ら、私が一番心を打たれたのは、山頭火に関する文献がもれなく集められて整然と出展せられ、また句集「草木塔」の抄本を印刷して観覧者に配られたことである。剣道六段と云う坂田校長さんが、剣の道から、禅へ、禅から俳句へ、そして山頭火へ、酒へという風に、面識のない山頭火に心を砕いて下さる

のである。しかも湯田は、其中庵の崩れたあと、昭和十三年十一月から、翌年の九月まで山頭火がしばしの栖とした風来居のあるところ、昨日は草歩さんと共に久しぶりに前町龍泉寺前の風来居を訪ねて、徳重さんからいろいろと話を聴いたのであつた。また小郡にいる間にも旅館西村米子さんが、層雲の同人だつたのでしば〳〵訪ねて来て居り、私も何度か山頭火と共に千人風呂に入つている。そうしたゆかりの地に坂田さんがいて下さるのである。

山頭火に心をよせて集われた人々にも私はまた一時間半ばかり、山頭火の禅、俳句、生活について語つた。あとで山口の伊藤理基さん、和田健さん、林進さん、小学校の平田先生などと「花園」で会食し乍らいろ〳〵話し合うのもたのしかつた。和田さん林さんは、中原中也の影響下で盛んに詩をやつていられたので、山頭火と共鳴、よく語りよく飲み、ある時は、あの四畳一間しかない風来居に、十四五人も若者たちが詰めかけたと云う。平田さんは徳山の久保白船の遠縁に当り、伊藤さんは早稲田は十年以上も山頭火より後であるが、縁浅からぬ人。

午後、伊藤さんとバスで小郡へ下る。「其中日記」の敬坊は、現に山口県農協共済連の会長である。その事務所に集つて草歩さんの先達で矢足の其中庵跡へゆく。なつかしい路だ。樹明さんは、もう待ち切れず一杯やつて、ほろ〳〵ぼろ〳〵で、それでも句碑のまわりの雑草をとつて、キチンとして私達を迎えてくれる。碑前には、その辺の木からもいだらしい熟柿が山ほど供えられている。周囲の垣では萩がきれいに伸びて咲いている。句碑の根方の石蕗も咲いて

いる。西側の柚子は、庵主不在十七年の星霜を経て、在りし日の如く五つ六つなつている。友沢さん達も来られ、句会ではなく冷酒会となる、山頭火には此の方が気に入るであろう。

短い日が傾く頃、バスで山口へ急ぐ。県庁前に下車すると、そこに玖村敏雄さんが待つていて下さる。木町水の上の官舎まで小径を少し登る、柿がうれて虫が鳴いている。後の山裾の禅寺の客殿として建てられたとか、稲田を置いて山を眺める清楚なそして心安まる家である。

「十年ぶりですなあ。」

「あんたに、お礼と報告せねばならぬことがある。私が追放せられず文部省に止つて占領下の日本の教育につくそうとした時、自分は日本の防波堤となるつもりだと、手紙を書いた。その返事としてあんたは、今更防波堤でもあるまい、日本とアメリカの間に橋を掛けよと云うて来た。これは心にこたえた。そこで太平洋に橋をかけるつもりでいろ〳〵やらして貰つたが、日米学者の交流と云うのが、その中での一番大きい仕事だつたかと思う。その詳細を記したこの冊子を見て貰いたい。」

と云つて日本語と英語と両刷の本を出して下さる。照彦さんが、元気になつていられたのは何よりもうれしい。原爆が広島に落ちる少し前に、お父さんを東京に送つた牛田の家で、防空壕の代りに、畳を重ねて、その蔭で静養していられる時に一寸会つてから今日まで、面壁九年の闘病、それも原爆からつづく敗戦日本の暗い壁に面しての闘病であつた。病む人もよく耐え

られたが看病されるお母さんの愛情こそ、地涌無辺のものであつたことと思う。

風呂から上つて西条の亀齢をしづ〳〵味わう頃には前面の山に月がのぼつて、八時四十五分防府の放送局から「山頭火さんと故里」と云う私の録音が十五分出るので一所に笑い乍ら聴く。今日はまつたく山頭火デーだ。

山頭火のこと、井本さんのこと、馬山人（南蛮寺）のこと、それからまた米司令部との接渉のこと、文教行政のこと、いろ〳〵と話はつづく。七年の間に九人の文部大臣に仕えての占領下のお仕事は、なか〳〵のものであろう。しかし玖村先生の骨格の中には矢張吉田松陰の筋金が貫通している。たゞ至誠そのもので、米側へ体当りせられることによつて思わぬ道が開け、米側の信頼も篤かつたのだと思う。六ケ月の米国出張も意義の深いものがあつたと思う。いろいろあちらの話を聴かして貰う。そこへ昨日防府で会つた藤本さんが、広島文理大時代の親友後藤貞夫君から貰つた山頭火の句「空へ若竹のなやみなし」の軸を持つて来て見せて下さる。句もいいが、これは酒の醒めた時に書いたもので字も美事である。一時半頃に休む。

十月十二日

朝、室には秋の光りがあふれるほど。二階の照彦さんの室の西の窓から古い塔のあるお寺を眺める。山の趣きも静かで、山口は小さい京都だと云う感じがずる。県庁前まで奥さんに送つて貰つて、日赤病院に藤野厚君を訪ねる。新京の大同公園で会つてから十四五年ぶりだ。忙し

い事務の側ら俳句を楽しみ故郷の自然を愛すると云うような風格が出来ている。しばらく話して別れる。

川棚温泉寮につくと、大耕支部の伊藤延一君はじめ、三隅の松野さん、仙崎の宮川さん、黄波戸の西村さん、下関上田中町の本田さん、吉見の森崎さん、須佐の品川さん、それに地元の武久さん達が、もう到着して待つていて下さる。なつかしい顔ばかり。一浴して一杯に及んでいると、豊田中の内野さんも来られ、秋の一夜、旧情を温めたことである。そこへ、徳見さんが「川棚と山頭火」に書かれた木下旅館の老主人や貴島さん、高瀬さん、倉光さん達と一所に来て下さる。しばらく山頭火の宿をして下さつた木下旅館は、妙青寺の直ぐ右下である。

「まつたく邪のない人ぢやつた。」

と二十二年前を回想せられる。この人々はあれほど川棚の土地と風景と温泉が気に入つて、ここに結庵しようとせられた山頭火さんをどうして他へ行かしたのか、その頃、事に当つた人は皆もう世にいないが、せめて、町内の者で句碑でも建てて、山頭火さんの記念としたい、その事についていろ〳〵相談したいと云われるのであつた。

十月十三日

明け方雨がふつたらしいが、六時にはもう晴れていた。起抜けを湯壺につかる。皆で気持のいい朝飯をすまして、妙青寺に詣る。昔のままに堂宇も庭も禅寺らしく。「黙照窟」と大きく

刻まれた益洲老師の額も年を経ていい味が出ている。

特牛駅から特牛の町までバスで一里あまり。しばらく伊藤君の郵便局で休む。日記によると山頭火の足跡があり、泊つた宿もあると云う。その路を歩いて神田村の中学校へゆく。宿直室で昼食を頂く。小使さんの手料理であるが、水いかのうまいこと。此処の海から今とれて生きたのを料理せられたもの。

午後、婦人学級をかねて村の男女の人々に語る。いい集りであつた。

秋の日は暮れ早い。稲のうれた匂いのする道を、伊藤君の家に帰つた時には、とつぷり暮れていた。山と山との間の静かな三軒家の一軒である。六人の子女の父として、戦前戦後満洲、別府、掛淵と、流転しつつ、一家和やかに、皆達者で、ここまで辿りついて来られた苦労を思う。もう長男坊は、大学を出て、中学校に勤め、次男坊は、海員養成所を出て遠く南方の航路についている。バンコツクで貰つて帰つたと云う小猿、それから山羊、鶏まで、生き物の好きなまゝに愛撫しているのだ。猿の性態についての話も面白く夕飯を頂く。奥さんの漬けられた沢庵の味は、実にいいものであつた。表へ出ると、十七夜の月が冴えて、山の木々がすき透つて見える。寝るには惜しい月である。

十月十四日

猿が起きて寒そうにしている。南方の生れなので日本は寒いであろう。伊藤君がゆくとひげ、

ずねに両手でしつかり抱きついてかくれる。時々ひげを爪先きでかけ分けている。虱でも探すつもりかと云うに、それは愛情の表現だと云う。犬と猿は仲のわるい代表となつているが、此の猿君は、犬の子にも抱きついて仲よく遊ぶ。可愛いものだ。秋の深くなつたことが感じられる朝だ。隣はもう稲刈に田へゆかれるいでたち、私達は汽車で滝部までゆく。丘の上の日の当つている学校で、村長さんはじめ、村の幹部の人々に語る。皆揃つた人物ばかりなので話もよく通じてゆくのが感じられた。

午後は、来島基三さんのお墓へ詣りたいと思つたが、一寸遠いので失礼乍ら仏壇を拝ませて頂く。未亡人や三郎君を後に感じ乍ら香を立て、鉦をならして読経していると涙がこみあげて来て仕方がなかつた。来島さんは、特定局長会長として、広島ばかりでなく、全国的に名の通つた立派な人物であつた。その一生は自分のためよりも、公務と隣人のための奉仕であつた。

滝部駅で、伊藤君に別れて下関へと急ぐ。右は朝鮮海峡だ。長州の志士は維新の頃、此の海の防衛に心を砕き血を流した。青い青い海の彼方に、李ラインもあり、北によると竹島もある。歴史は同じことを繰返すのか。汽車はだん〳〵半島の尖端に近づく。下関の駅につくと、本田さん、森永君、松田君の丸いにこにこ顔が待つていてくれる、何処へ行つても待たれる旅はほんとうに有難い。

先づ下関郵便局に松尾明男君を訪ねる。本州西南端を守る大きな局長として、よく落着いた

物腰は、昔からのこと乍ら一入頼母しい感じがする。二時間ばかり語りつづけて、阿弥陀寺町の紅石山麓にある愚頑洞へゆく。山本さん夫妻が私の好きな風呂を沸かして待つていて下さる。海峡が眼下に在り、はつきりと門司を見渡す南向の室でしばらく休む。やがて大耕下関支部の同人の顔が揃う。飯台をかこんで、秋の一夜を語つた。語つたというよりも放談したという方が当つている。ある時はこちらの灯を消して対岸門司の灯を眺めたりした。おそい月の出る頃散会。門に皆を送つて出ると、ほろほろと好い加減に酔つた顔に、秋の夜風が快かつた。

それから室に帰つて、また森永さん山本さんとしばらく語り、短冊色紙二三十枚を書き流して、愚頑洞の名にふさわしい頑愚な自分をふり返りつつ、洞内にくつろぐ。その名を忘れたが机上の草花が、ライラツクによく似た強い匂いを放つ。匂いと云えば今度の旅の宿々では、いづこも木犀がふくいくと匂うていた。木犀を宿々にした防長の旅であつたことよ。

十月十五日

四時半に起きる。洞は早起洞にて、いつも四時には起きるのだと云われる。お茶をいただいて、一番の電車で一番の汽車にのる。海峡の底をくぐつて九州から来た列車には空席が多かつた。山頭火は、いろ〳〵の思いをして此の海峡を、数十回も渡つていることなど思う。柳井港から大島郡の小さい港を縫うようにして高浜へ通う船も、お客が少く静かであつた。私はよく眠つていたので、六時間半の船路も短いものに思われた。(二十九年)

西海遊記

七月十日　晴。門司から長崎へ

早鞆丸の一夜は涼しかつた。夜半に窓をしめに起きたほどだつた。梅雨は、もう上つたらしい海上の空模様である。右は宇部、左は鵜島あたりであろうか、船は関門へむけて快い調子で進んでいる。九州の山並の中に、黒く特異な姿を見せているのは、英彦山である。曽つて、丈二さん川本君と登つたのは新緑の頃であつた。

下関の街を海峡から見るのも久しぶりである。壇ノ浦、赤間宮、春帆楼、それから愚頑洞などなつかしく眺める。赤間宮の背後の森は、とても美しい。

十時半、門司で東京発長崎行の急行雲仙に坐を占める。北九州の工業地帯を通るのも久しぶりである。福岡の手前で、汽車は雨にぬれたりして割に涼しかつた。佐賀・山口を通る頃は暑くてひるねから醒めた。

四時前、長崎駅頭には、草石さん、谷端さん、松尾さんなどが待つていられた。待たれる旅の有難さを思いながら、今町の坂本旅館に一先づ落つく。一草庵のことなど、松山便りもそこ

そこにして、風呂につかる。桧木の湯槽もなつかしく旅の疲れを一掃する。うしろの床には、

夢と詩があつての人生であり
詩と夢があつての文学である

宇野浩二

の色紙がかかつている。六十すぎた人の文字とも思えぬほどに、素直なくせのない字である。その掛ものに港からくる風が、強く当つて、活けてある草花を倒したりする。西日のさす室であるが風がよく入るので、涼しい。長崎には、芥川龍之介の河童の屏風のある料亭があると聞いていますが、原爆で焼けなかつたでしよかと云うと、いやある。では今からそこへ案内しようと、草石さんにつれられてぶらりと街に出る。寛永年間に、唐の僧、如定が架設した眼鏡橋を渡る。支那の絵で見る寒山寺にありそうな石橋で、三百余年の歳月を経て、古く寂びしかも堅固そのものである。

菊本と云う純日本風な料亭、ここのおかみが若き日に、龍之介に愛されて、河童の絵など描いて貰い大切に保存しているのである。そのお若さんも、今は六十一歳だと云う。背の高い、感受性の敏そうな容姿は、芥川好みであつたであろうと、うなづかれる。料理が出るまでにまだお客の来てない清楚な室々を見てまわる。玄関には鈴木信太郎の画が衝立となつていて、その上に永井荷風の額がかかつている。そして金島桂華の絵、虚子の額、足利紫山の額等々、い

づれも見るべきもの。涼しいすだれの内に香がほのかに薫る室にくつろぐと、渡辺与茂平さんが来て下さる。与茂平さんは、私くらいの年配の文人遊客と云つたような人で、斎藤茂吉が長崎医大時代に、師事して短歌をやり、のち上京して芥川などに親しまれて文学をやつていた人。この人から長崎と関係のある文士の話など聴きながら、憧れの屏風を観る。銀張りの二枚屏風である。左側に河童が葭の穂をかついで、片手には魚を一匹さげて立つて、淋しそうにこちらをむいている、龍之介が大正十二年頃（三十二・三歳）長崎に遊び、ここが気に入つて二十日あまりも滞在したと云う、その間に書いて残したもの。瘠せた細い河童の背から、手足の線にかけて、芥川の神経が生きて今尚動いているようである。その右側に

橋の上ゆ胡瓜なぐれば水ひびきすなはら
見ゆるかぶらのあたま

お若さんの為に

我鬼酔筆 龍

とある。もう一つの屏風には、同じく龍之介の扇面が六七枚張り交ぜてある。その中の草籠に活けてある俳画風の桔梗、そして女郎花、芒の絵は、なか〱によろしく、若い文士の余技とも思われないようなものである。

卓上に持ち出される料理も、此の家と室にふさわしくいいものであるが、今宵は、眼の御馳

走、耳の御馳走で、いかにも長崎の夜らしい。いや、長崎でなくては味わい得ないものを、ゆつくり楽しんだ。「河童供養」と題した三、四冊の画帳には、菊池寛をはじめとして、芥川の死後、この河童を訪ねる多くの芸術家の手記が蔵されている。若干の戦後派も交りて。

そこへ、草石さん所有の小川芋戋の河童の軸が持ち出されて床に掛けられる。此の河童は水の中に立つて、じつと静かに水面を見ている。私達は、河童を背にし、河童を前にし河童にかこまれて、ちびり〳〵飲み且つ語つた。与茂平さんお若さんに別れて私達は街に出た。繁華街には夜の人があふれ、夏の市は賑やかである。その裏街に入つて草石さんは、古道具屋から、徳利や、壺のいいものを手に入れて帰つた。その何焼とも分らぬ古い壺は、私が貰つた。また一風呂浴びて、まつたく風のない夜に、煙草を無心にくゆらせて休む。

七月十一日　快晴。長崎滞在

控えの室は四畳半で、その窓から、冷え〳〵と朝の風が入つてくる。その涼風の中で朝餉をいただく。食前に私は持参の梅干を一個食べる。此の坂本屋は、長崎でもいい宿らしく、設備と云い、食事とその器物。そして女中さんのしつけと云い、申し分のない宿なのであるが、今時、私のように歯磨きの塩や、食前の梅干を必要とする客はないらしく、その用意だけはしてない。だから携行するのであるが。朝の梅干は、腹の中を浄めてくれていいばかりでなく、旅

にいて我が家の味を楽しむたゞ一つのものである。子供たちに、長崎の絵ハガキで旅の便りなど書く。

県警察本部に迎えられる。草石さんの室には、武者小路さんの南瓜の絵や、鈴木信太郎さんのものなどあつて、世の人の想像するような本部長室らしくはない。信太郎さんが、小皿に大浦天主堂を書いているのを「いいですなあ」とほめると、「では、あげましよう」と云われるので、貰う。此の人の前では、うつかりほめられないような気がする。しかし惜しげもなく、いいものをどん〳〵人に与える人には、また何処からともなく、好きなものが入つてくるから面白い。

六階の講堂で「無我の心境」について講演する。ぎつしり一杯の聴衆であるが、東の窓から朝風が入つて、皆静かに耳を傾けていられるので、楽しく無心に語ることが出来た。語ることも亦、一つの遊びであるところまで脱落したいものだ。本部長室で冷しそうめんを二人分食べて、午後は長崎市中の見物をさして貰う。坂本屋から梅田さんが、わざ〳〵案内に廻つて下さる。まづ、シーボルトの旧居跡。そこは、鳴滝の深まつた閑静な所で、今は、建物は何も残さず、古い井戸には苔が茂り、夏木立には蟬が来て鳴いているばかり。此のオランダから来た若き科学者に、オランダ医学を学んだ高野長英、緒方洪庵、二宮敬作などは皆日本の先覚者であつた。丁度近くに、大耕誌友西本好一さんのお宅を尋ねて、長崎のカステラなどを頂いて

しばらく涼しい風で暑さを拭い、それから諏訪神社に詣でる。長崎の総鎮守である。至るところに茂つている楠の大樹は、美しいと思つた。街と港を見降す。長崎は、神戸を小さくし、尾道を大きくしたような感じがする。しかし港は深い湾になつていて、対岸に半島の山々が青い。

車は暑い街を走つて石畳の上をすべり、紅色の壁を持つ朱塗りの支那風な美しい門の前に止る。崇福寺である。明僧超然の建てた黄檗宗の寺で、支那の禅寺そのままの構造である。お盆には、日本に在住する中国人が各地から皆ここに集つて、供養を楽しむとか、日本に於ける中国人の本山であろう。隠元や即非の立派な筆跡に心をひかれて額や聯を見て仏像を拝む。山頭火は、昭和七年の二月四日、友人十返花さんに案内せられて此の寺に詣で

冬　曇　り　の　大　釜　の　ひ　び　　山頭火

の句を残している。その大釜と云うのは、直径五尺五寸、高さ六尺五寸、重量二千貫の巨釜で、よく見ると少しひびが来ている。天和二年長崎地方に大飢饉があつた。その時崇福寺の支那僧千獃和尚は、自分の愛する書籍や器物を皆売払つて、この釜を鋳造させ、それで、一度に米四石二斗の粥を炊いて、毎日千人以上の窮民に食べさせたと云うことである。私は暑さも忘れて此の釜に手を当て、異国の僧の大いなる慈悲の心を思い、そしてまたその思い切つた非常時の措置に頭の下る思いがした。

寺を下りて、車はオランダ屋敷を徐行して、古いオランダ建築を見せてくれる。そこから更らに南に出て、坂を上つてお蝶夫人の家と称するオランダ風の古い邸前に立つ。港口を直ぐ下に見下した丘である。「お蝶夫人」はかりそめの物語を創作にしたものであろうが、世界中を歌つて廻つた三浦環の歌によつて有名となつた。少しあと戻りすると、大浦の天主堂がある。つつましく石段を登つて礼拝して、入堂。

冬雨の石段をのぼるサンタマリヤ　　山頭火

の句も思い出される。冬雨ならぬ炎暑は、石段の石を熱くしている。白堊の堂内は、ひつそりとしていて、清浄そのものである。フランスの宣教師ベルナルド・ブチジヤンが、あの慶長の殉教者二十六聖人を記念するために、慶応元年に建立したもので、国宝となつている。その天井の特異な張り方と云い、窓と云い、日本では他にない美しさである。用材はあちらから運んだもので、島原の大工が工作に当つたのだと梅田さんは説明される。礼拝壇上の右側には、大きい殉教の絵が当時の悲劇をそのままに掲げられている。その他、堂内に掲げられている額はすべてキリストはじめ、殉教者の悲惨な最後の絵である。仏教の仏・如来・菩薩たちの円満な像とは、凡そ異つた痛々しいものである。そこからは、悲壮な熱意と、烈しい感激は涌くけれど、人間愛慕の平常心は出て来ない。暴力に対する聖力は導き出されるが、無我の安心感は感じられない。

拝し終つて堂を辞し、下駄をはく時、足袋の裏を見ると、両足共に少しも汚れていない。朝夕信者たちが、心をこめて拭き浄められるその行が思われてうれしかつた。今では清浄であるべき筈の禅寺でさえ、足袋の裏を汚さないような板の間は珍らしいのに。門前で久仁子のために聖女のコケシを求めて車に入ると、日南で待つていた車中は、たまらぬほどに暑い。暑い車は、暑い街を北に走つて、駅前を通り、原爆の中心地帯に入る。

広島と違つて、長崎では、市街を北にはづれて、浦上上空で爆破した。焼跡の丘が今は公園になつていて、新しく植えられた樹木が茂り始めている。その中央に平和祈念像が建てられている。北村西望氏のお作で、まことにたくましい大作である。丘を越えて、如己堂を訪う。ここは、永井隆博士の旧居である。戦災後、僅か二畳あまりの一室を病床として「この子を残して」以下、多くの著述をせられたその原稿が、故人の在りし日の如く納められているのは、涙なしには見られない。これらの書に記されている事柄や、故人の思索のあとについては、感情を抜きにして考えると、まだ若くして、偏狭なものがあるのであるが、死の病床で、これだけの労作を敢てなされた氏の生命力の強さには、何人も頭が下るであろう。この原稿が、生前、ヂヤーナリズムに華々しく取り上げられず、若し死後に於て、遺稿として世に出されたならばそれは、一時の有名でなく、永遠に残し伝えられることであろうなどと、余計なことを思つて

いるうちに、車はもう浦上天主堂の下に止つていた。

日本第一と称せられた天主堂も、今は、その一角の残骸のみ、青い空に立つている。広島の物産舘のそれに匹敵する原爆の惨跡である。ここ浦上は、天正年間からづつと全村あげて天主教信者である。しかも為政者の弾圧の下でひそかに信じられただけに、根強いものがあつた。明治六年はじめて信教の自由が認められ、明治十三年、起工して、実に三十四年の歳月を費し信者の血と汗の積み重ねによつて完成したもので、信者自らの力と奉仕によつて、一つ一つの煉瓦が築かれて行つた。入口の左右に立つている石の聖像をはじめ、彫刻に至るまで、信者の手になるものであり、かくて高さ十四間、間口十間、奥行三十四間、三千人を収容する大殿堂となつた。それが、原爆によつて、崩し去られると、信者達は、我が家よりも先きに、第二の仮天主堂を建てそこで現在は祈りをつづけているのであるが、今や本格的な堂の再建を志してあの残骸が、物見高い日本人の見世物になることを好まず、市当局にいろ〳〵申し入れているとのこと。その熱烈な信仰心は仏教徒などの及ぶところではない。梅田さんのお話によると、今尙、夕暮になるとあちらの丘の畑、こちらの田の中に立つて、お百姓さんが、アンゼラスの鐘に心を澄まして、静かな祈りを捧げる、ミレーの晩鐘の絵そのままの美しい光景を見ることが出来ると云うことである。何人かの人間が生き残る限り、原爆と雖も、人間の絶対的な信仰心を破壊することは出来ないのである。

日の傾きそめる頃、宿に帰つて、一浴し、よく冷えた一本のビールを痛飲する。腹から背にしみとおつてうまいと思つた。今日一日流した汗を、ビールで補給したわけである。

夕方、三菱の西本君来訪。今日の訪問では、物足らぬらしい。食後、街へ案内して貰う。船には乗らないのだが、大波止の棧橋へ出て、港の風をうけて、港気分に触れる。それからぶらぶら歩いて、多聞と云うおでん屋に入る。垢抜けのした店で、モロキユウ、冷豆腐などあつさりしたもので、長崎の夜を楽しむ。

七月十二日　晴。長崎

ぐつすり寝て起きて、朝風呂を浴び、旅のメモをつける。出来れば、その日その日に、日記風な原稿を書いて旅をつづけたいと思い、紙だけは用意して来たのであるが、今度の場合は、山頭火のように孤独な一人の時が少いので、メモだけに止る。窓からは、市街とそして船のいる港風景と、その向うの青い山が見られる。下を見ると、朝の物売りが、天びん棒にそれぞれの商品をかついで、旅人には解らぬ売声で売り歩いている。長崎の街は坂が多いので、車が利かぬのであろうか。のんびりしていてよいと思う。

此の宿では、毎日、私の着物や袴をきちんとたたんでくれる。汗のついたものは、黙つていても褌まで洗濯してくれる、ほんとうにいい宿だと思う。

午前中、警察学校で、午後は、長崎警察署で講話。

それから署の巡視船で、長崎港から、出島あたりまで海の上から、街を眺めて走る。戦中には、日本最後のそして最大の軍艦武蔵を進水させた三菱ドックでは、今、アメリカの注文で四万五千トンのタンカーを造つている。近く進水するその日には、アリソン大使もやつてくると云う。しかし、外地を失つた日本、外国貿易のまだ制限せられている今日、長崎の港は、その昔ほどに、船舶の出入はなく、曽つて栄えた港としての淋しさはおうべくもない。夕食後、一人で街の散歩に出る。街幅の狭い賑やかな通りを上る。行きこう人々は男も女もおつとりしていて、黒い頭髪が目に立つ。果物店は、桃・西瓜・真瓜など、梅雨の晴れたあとの美しさが一入。上るにつれて淋しくなると、珍らしく、ゴマ豆腐ありますとしたゴマ豆腐屋があつたり、女の髪を気味わるく吊したカモジ屋、美しく光る板の間を職場とした桶屋など、古風な店があつたりする。宿に帰つて少し疲れた体を按摩を呼んであんまして貰う。

一人一室、そして一浴一杯、そして一燈のぜいたくな宿での客として、山頭火のことを思う。山頭火は二月三日から、七日まで旧正月の頃、寒い長崎であつた。行乞を地でゆく旅人に比して、私のは、高等乞食の横着さであることよ。

七月十三日　晴。長崎から佐世保へ

むし暑くてよく眠れなかつた。朝食にゴマ豆腐が出た。ここは、決して同じ献立ての料理を出さない。三泊したこの宿に一応さよならする。谷端さんに案内せられるまま県下の講演に出掛けることになつた。本部の車で、一路諫早へ走る。長いトンネルをくぐると、葉桜の並木がつづく。道はすべて鋪装せられていて、快いドライブである。

諫早署での講話は、涼しい風が背に当る二階で、区内各駐在所から寄つて来られた純朴な人々を前にして、しみ〴〵と語ることが出来た。あとで頂いた黒砂糖で固めた諫早おこしの味も亦素朴でいい駄菓子であつた。城趾や、眼鏡橋を見て車は大村湾に沿うて北へ走る。彼杵の古墳を右に見て、しばらくゆくと大村である。戦中は、海軍航空隊の基地として、新聞を賑わしたところ、ここでも涼しい二階で一時間半ばかり語つた。福田署長さんの前任地は、対馬の厳原だつたとのことにて、いろいろと彼地の話を聴く。島内には朝鮮人が六千人ばかりいるが多くは山に入つて炭焼をしていて、従順善良で、たまに朝鮮本土から、オルグのような者がやつて来ても、黙々と仂くことが好きで、新しい理論について行こうとしないと云うお話は、李ライン近くのこの島の治安の保たれていることのしるしであろう。こちらにある程度の備えがある限り、近年は別に憂うべき現象もないらしい。

更らに北上して早岐の町をすぎ、西に廻り路して、三里あまり走ると、今殆んど完成している西海橋がある。此の橋は東彼杵郡から西彼杵郡へ、海峡を渡すもので、三百十六米の大橋である。下は急流の深い瀬戸なので、橋脚を据えることが出来ない、そこに技術上の苦心があつたわけである。此の瀬戸は琵琶湖とあまり変らない広さの大村湾の入口に当るので、近江で云えば瀬田の唐橋のような地位にある。これからは、船によらず、西彼杵半島から早岐・佐世保へ向けて、バスも通ずる訳で、交通上の革命が起ることになると云う、陸運上ほんとうに有意義な架橋である。

夕方早く佐世保について、山裾の山水楼に泊る。門前に青木月斗の大きい句碑のある、大きな構えの、日本の宿らしい宿である。室の名も山・紫・水・明などとつけてあつて私たちはその明の室に汗にぬれたシャツを脱いだ。縁の外は紅葉の深い林で、何処からか渓流の水音が聞えてくる。天井が高くて、十二畳と云う大きな室なので、じつとしているとひんやりする。夕餉に出されたあわびの刺身は、とても美事に切れていて美しくおいしいものであつた。更らにうれしかつたのは、漬物を重視する家風らしく、平たい皿の上に、沢庵・ランキヨウ・菜の古漬・大根の味噌漬・茄子のドブ漬など、とても渋い味のものを少しづつ竝べてあることで、私のような漬物党には最上の馳走であつた。果せる哉、翌朝は食事の前の番茶に、梅干一個が添えられていた。佐世保のような新しい港街で、京都的な宿に泊れるとは思わなかつた。

七月十四日　晴。佐世保から平戸へ

起き抜け、ジープで弓張山の頂上に登る。ここは昔は砲台のあつたところであるが、今は公園となつている。佐世保の全市街を西に見降して、近くに九十九島の西海国立公園を、遠くに五島列島を望む絶景である。山上の朝の気は身にしみて涼しい。ジープにゆれたペコ〱の腹には、朝餉がとてもおいしい。ここでもよき宿にお別れを告げて、早岐にあと戻りして講話。午後は、佐世保署で講話する。今度は十一回の講話をする旅なのであるが、一回一回に、新しい感じと熱意が涌いてくるのを覚ゆる。

車で、平戸口まで一時間半。左岸に展ける海の色の青さ。晴れた空の美しさ。涼しい渡し船で平戸まで十分。此の島は弘法大師が支那留学の途中、船を待つために立寄られており、また栄西禅師は宋からの帰途、まづここに上陸して、茶の実を植えられた。貿易港としては、長崎以前に開けた。松浦鎮信公の英断によつて、十六世紀の頃、既に、オランダ、イギリス、ポルトガルの商館が出来、しきりに南蛮船が往来した。それに伴つて、フランシスコ・ザベリオがキリスト教宣教の拠点としたところである。また鎮信公が山鹿素行を兵学の師とせられ、その女を山鹿家へ嫁がせている関係から、素行の孫、高道は江戸浅草の塾積徳堂を平戸に移した。現在の平戸市長山鹿氏は、その直系の後裔であるなど、西海の小島でありながら古くして床し

い伝統のある町である。

宿で、暑いけれども、くつろいだ食事をすましてから、山崎署長の案内で街を散歩する。街や路地で出会う若い娘さんや、学生たちが、山崎さんに笑顔で会釈して通る。みんな庭球の対手や、バレーボールの弟子なんですと云われる。

「やあ、おやぢ居るか。」

と、つか〳〵入つたのは池の屋と云う畳屋さん。私たちまで不遠慮に座敷に上つてゆくと、衝立に大きい江戸時代の風俗画が描かれている。他では見られない珍画であるが、その線の美しいこと。女の顔の表情の無心さは、その手足の指の先きにまで通じている。着物の柄、絵具に至るまで美事な大作である。

「歌麿の作ではないかと云う人もありますが、も少しあとの、文化文政年代のもののように思います。此の春には池部良さんがやつて来て、足の線の美しさには見とれていました。」

と主人は云われる。それから陶器その他の愛蔵の美術品を手にとつて見せて貰う。谷端さんは、古い香筒がいいと云つて、私に貰つて下さる。お金を払うからと云えば一文もいらない、たゞなら気持よくあげるが、お金を出すならあげられぬと云う。今の世に珍らしい老人である。それから眼鏡橋に出て、旧オランダ屋敷あたりの海岸で雁木に腰をおろして夜が更けるまで涼んだ。宿へ帰つても暑くてとても寝られないので。直ぐ眼近な海上に、黒子島と云う原始

林の黒い島が浮んでいる。その上に無数の星が輝いて、はつきりと天の川がかかつている。
谷端さんは、京都の警察学校教官時代に、大徳寺の太田大梅窟老師に深く参じ、戦中は、大徳寺道場に雲水がいなくなつたので、警察学校の道場として、学生を指導せられた。また京都の広誠院へも生徒をつれて行き、益洲老師からお話を聞き、広瀬老夫人からは、お茶を頂いたこともあると云われる。柔道は六段、剣道も亦よくし、剣禅一致の立場を今尚掘り下げつつ、最近では、拳銃射撃に、禅の数息観をとり容れて、身心一如、技術と人格の調和を目ざして、県下警官の指導に当つていられるような人である。また京都では、新村出先生や、川田順などに、国文や短歌についてお世話になつたこともあると、いろ〳〵と夜の海風をうけ乍ら京都時代の話を聞いてみると、何だか逓信時代に私のやらせて貰つた事とよく似ていて、そこに一脈相通ずるものを感じ、一つの道につながることのよろこびをさえ感ずるのであつた。

七月十五日　晴。平戸滞在

朝食前、山崎さんの案内で、ジープで街の裏山を越して、一里ばかり走つて千里が浜へゆく。美しい丘があつて静かな砂浜がつづく。此処は英蘭貿易の全盛時代に、平戸の副港として殷盛を極めた跡である。樹の茂つた丸い丘は丸山と云つて、外人に親まれた廓の跡だと云う。海岸に児誕石と云うのがある。近松門左衛門の小説「国姓爺」の鄭成功が誕生したところ。ま

た三浦安針が琉球から初めて我国に甘蔗を持ち帰り、試みに栽培したと云う畑もあつた。

朝日にむいて帰る頃が丁度学生たちの登校時である。此の道にはバスが通つていないので、営業の妨害にはならぬからとて、山崎さんは、小学生、中学生、女子の高校生、平戸の町へ茄子を売りにゆくお婆さんに至るまで、「おうい、乗つて行かんかね」と、車を止めては拾つてゆく、峠を越す頃には、十七、八人の一行となつて、和やかに談笑しながら帰つて来たことである。とにかく民衆から敬遠され易い警察が、このようにして、いつも島の人々と解け合つているとは、ゆかいなことではあるまいか。

山頭火が平戸へ行乞して来たのは、昭和七年三月三十一日で、木村屋と云う木賃宿に四泊している、一日三十戔で。彼は町を托鉢して、二度巡査に叱られている。そして

　巡査が威張る春風が吹く　　山頭火

と一句残している。それから二十三年を経た今日、私は、まるで此の句と反対の風光の中にいるのである。そこに日本の国の変化もあつたが、山頭火も今では微笑していることであろう。

平戸署楼上の講話も涼しい思いですました。語るもの聴くもの一如であつた。それから亀岡神社に詣でて、平戸城趾を尋ねる、今は櫓を一つ残すのみで、夏木立と夏草が茂つているだけ。古い石崖に昔をしのびつつ、旧天主閣跡に立つ。古い樹立の多い、そして海の深くして青

い絵のような街である。湾頭の黒子島は原始のままの木を茂らせて黒い。

常盤と云う大きい料亭で冷いビールを抜く。ここの鮮魚料理はその一つ一つが生きていた。ここでもあわびを賞味する。しばらく休んで、旧藩公松浦家の千歳閣を拝観。素行の陣羽織には心をひかれた。山裾の暑い石段を登つて、聖ザビエルの記念碑の前に立つ。四百年記念として昭和二十四年に建てられたもの、あたりに平戸つつじの木が多い。オランダ塀に沿うて、商館跡の古い井戸を見る。その近くに、判田さんと云う今は駄菓子などを売る家に入つて、コルネリヤの彫像を拝見する。上品なお婆さんは、快く仏壇から牌のようなものを机の上に降して見せて下さる。コルネリヤの母は平戸での美人であつた。直ぐ上のオランダ商館長に請わるるまゝ結婚した。そして生れたのがコルネリヤであつた。母に似て美しい娘となつた頃、幕府のキリスト教への粛正が加えられた。是れは一つには、どん〳〵新しい外国兵器を備えていた松浦公への弾圧でもあつた。コルネリヤは、ヂヤガタラお春と同じ運命に陥つた。他の混血児と共に遠くヂヤガタラへ流されて行つた。それから十数年を経て、唐船でひそかに大きな瓶が判田家にとどけられた。その中に、日本恋しや、恋しや日本と、連綿とした日本と母を愛慕する所謂ヂヤガタラ文と一所に、この彫像が秘められていたのである。小さい鏡台のようなものに横四寸、竪七寸位の板が、はめられている。板の面に日本髪に結つて、愛児を抱いている自分の像を描き、それをこまかく線彫にさせ、つまり、写真の代り、心の鏡として母のもとへ送つ

て来たのである。あちらで島の人と結婚して一子を成したその姿を見せようと云う、涙なしには見られない情のこまやかさは、刻まれた線の中にもにじんでいる。此のコルネリヤの顔と云い、また抱かれている童児の愛らしさと云い、彼の橋本雅邦の筆になる悲母観音の絵を思わすものがあつた。大きい瓶は今尚、店の片隅におかれてある。手をあてて撫でながら、私は、その中から、夢のような小説の糸が引き出されてくるような気分にさえなつた。

四時頃から、田助浦へ四五人の釣好きな人々につれて行つてもらう。田助と云えば幕末の頃に西郷・桂・高杉などの志士が、ここに会して密議したところである。一応田助の港まで舟でゆき、そこから餌や道具を入れて沖に出る。壱岐の島がうつすらとはるかに見えて波は荒い。流石にここは玄海灘である。あゝ四国に住むものが、玄海に釣をたれるとは。十尋ばかり降すとチク〳〵つつく。陽が傾くまで悠々と大空の下で遊ぶ。それでも太いベラなど五尾を上げる宿に帰るともう七時。夕餉の膳には海の幸が一皿加えられた。

七月十六日　晴のち雨。平戸より長崎へ。

山崎さんの案内で平戸市長山鹿光世氏を訪ねる。山鹿積徳堂である。城跡から南へ山つづきの樹立の中の、如何にも兵法家らしい邸である。大きい犬が来て、私の手をなめる。

ここには山鹿素行の「中朝事実」の原稿その他兵学に関する著述が数百冊そのまゝ保存せら

れている。重い中朝事実を手にした時には、日本の国を一貫して流れている精気に触れるような思いがした。そして山鹿素行全集の編纂者広瀬豊先生や、松陰全集の玖村敏雄先生の談に及んだ。山鹿氏は更らに箱の中から山鹿流兵法乃至哲学の秘伝とも云うべき「原源発機」の一冊を出して示された。その筆蹟は、私などの簡単に読むべきものではないが、まことに一代の英哲素行その人の精魂に接する思いがした。

吉田松陰は嘉永三年九月に、長崎・大村・川棚・早岐・佐世浦・江向と見学して十四日に平戸港に入っている。はじめ葉山佐内に会って、佐藤一斎の伝習録を借り紙屋と云う宿に泊ってこれを写しつつ、心読したりして、家老の山鹿万助にはなか〳〵近よれなかったものらしい。二十二日入門して「入門起請文」を入れている。

右の趣き、相背くに於ては、日本国中大小神祇・摩利支尊天・八幡宮並びに自分崇敬の神罰罷り蒙るべきものなり。仍って起請文件の如し。

吉田大次郎矩方

と、読んでくると、古人の高い志のほどがその字ににじんでいるようで、頭の下る思いがした。

「西遊日記」によると、松陰は十一月六日、平戸を発って八日には船で再び長崎に出ている。その間、兵学研究は勿論、外国船の出入する此の港で、時局についての認識を深めたことは云うまでもない。山鹿さんはまた箱の中から、萩焼の抹茶々碗を取出して、これは松陰が入門の

時に土産として萩から持つて来たものですと云う。私は両手に持つて少し深い茶碗を撫でたりした。古くして、さま〴〵の物語と歴史を秘めた美しい青葉の島を後にして、平戸口へ。そこから江迎署へ車で走る。

新しい庁舎は、塚本さんが、伊予の宇和島まで出張して来て宇和島署の建築をそのまま取容れられたもの。暑い朝であつたが、全員真剣そのもので聴きとつてくれ、私も時を忘れて語つた。時を忘れてはいるが、話し終ると大抵は予定の時間を二分とはくるわしていない。時計を持たぬことは、却つて時を知るに便利であるようにも思う。

塚本さんの案内で、争議中のある炭鉱の寮で、冷たいそうめんをいたゞいて昼食にする。中小炭鉱の苦悩と、そこからくる鉱員の生活などについて聴く。警察は資本家を守るのではなく法と社会秩序を守つているのであるが、とかくその立場は労仂者側から誤解され易い。そこに仕事のむづかしさがあるらしい。佐世保のボタ山崩れの時の如く、警官が、身を挺して労仂者とその家族につくされたこと等、よかつたと思う。

一路相ノ浦署へ向う。ここでは吉谷署長さんは、御夫人はじめ、職員の家族をも一所に招いて居られたのも家族的でよかつたと思う。いよいよ暑い午後であつたが、眠り気を催す人もなく、別れを惜しんで、長崎からはる〴〵迎えに来て下さつた車にのつて、来た路をぐん〳〵南へ走る。諫早あたりから雨になつて、ぬれた長崎の街に入つたのはもう七時であつた。直ちに

風呂につかつて、今日の強行旅行を思い、よくこれに堪えたと我と我が腰を、少し熱い湯でたでる。

草石さんの案内で、夕食は支那料理として四海楼にゆく。雨の夜の長崎は、石畳がぬれて、それに青い灯、赤い灯が流れて、ほんとうに美しいと思う。ここへは、斎藤茂吉もよく来ていたらしく、

四海楼に陳玉と云うをとめ居りよくよく今日も見つつ帰り来

の歌もある。その玉姫はもう茂吉と共に此の世に在らず、その妹の清姫が五十歳で、背も声も高く、私たちに酒を注いでくれる。しかし私は少し疲れたのであろう、油の多い料理は控え目にした。そこからぶら〳〵雨の晴れ間の石畳の路を歩いて、坂を越したりして、丸山の花月へ案内される。古くから名の通つた料亭で、庭の樹々が雨にぬれて光るのも美しい。坂本龍馬が悲憤して斬りつけたと云う、傷のある床柱のある大広間で、年増の芸者さんは、「春雨」「ぶら〳〵節」「長崎物語」などを、夜更けの三味線で唄つてくれるのであつた。「春雨の間」では往時よく此処に出入した中国その他各国人の匂いを嗅ぐ思いがした。階下の六畳間は、花月が女郎屋であつた頃、若き日の頼山陽がしばらくそこに寝起していた室だと云う。彼の天草洋の雄大な詩は、その頃の作であろう。楼から出ると、このあたり深夜の女が、軒に充ちて雨のしづくの下で、男に抱きついている、これも雨の夜の丸山風景として、美しいものに

見えた。青い灯はいよ〳〵青く、赤い灯は赤く、雨は夜でも竪に降る。

九月十七日　曇のち晴。長崎より雲仙へ

少し腹具合がわるい。坂本旅館を辞して谷端さんと車で雲仙へ走る。途中千々岩と云う美しい浜を通る、ここは橘中佐の故郷で、橘神社の社頭に車を止めて北村西望氏作の軍神の像を仰ぐ。小浜から山にかかり、桧の林まで上ると、蜩が降るほど鳴いていて急に涼しくなる。温泉宿は青い林の中に点々あつて、雲の去来の間から、紫外線が快く皮膚を刺す。裏庭の芝生の中から、穴があいてしきりに湯煙をあげている富貴屋と云う大きい宿につく。室の名のしゃくなげも気に入る。まづ一浴して昼は食パンだけを少しとる。午後、温泉地帯を見て廻つて、頂上も雲が切れたらしいので、大きい路を仁田峠に上る。有明海を見おろして、熊本から阿蘇を望み、天草を南に見ると云う大観である。茶店の寒暖計は十七度である。風が肌に寒い。ここに大きい碑があるのでよく見ると

地獄天堂一念中　　回光一念本来空
空々寂々非他物　　巌上松青躑躅紅

と。これは、肥後の大智禅師が雲仙に遊ばれた時の詩で、筆者は徳富蘇峰翁である。南に転じて天皇歌碑のある方へ、十丁ばかり山上の稜線を歩く。いぬつげの林もあつて、このあたり

海抜一、二〇〇米位であろうか、冷え〳〵した山気の中で鶯がしきりに鳴く、その他の小鳥も多い。眺めをほしいままにして、雲の晴れ間から阿蘇の噴煙や、久住の山頂を指したりしてゆくと、大きい自然岩の腹に、

高原にみやまきりしま美しくむらがり咲きて小鳥飛ぶなり

と昭和二十四年行啓の時の御作が刻まれている。峠へあと戻りする間、遠くで時鳥が二度二声づつ鳴いた。私は、この山上で、十日間の暑気を一掃した。ゆつくり歩いて、山気を楽しみ再びは観られないであろう、偉大な西海の大観をあかず眺めた。

また一浴して、夕餉の膳に向う。涼しいので、ビールは止めて酒にした。鮮魚はすべて島原から上つてくると云う、腹も整つて健康な食欲がぐんと涌く。山の特産物としては何もないがおいしい夕餉であつた。「君の名は」以来、春夏秋冬、各地からのお客が大変にふえたと女中さんは云う。土産の手拭も、せんべいも、みな真知子である。此の宿には、私の眼に止つただけでも、岸恵子の大きい写真が十枚以上も掲げてある。窓から見える地獄のところの岩は、真知子が手をあてたとか、真知子岩と呼んでいる、それを、ぞろ〳〵何処かの婦人団体が、一人一人手を当てて見て通る。ラジオ、そして映画。人々はこのようにして引きつけられてゆく。岸と佐田は、今や雲仙では新興宗教の神様以上である。晴れた空に星を見てねる。

七月十八日　晴。雲仙より島原へ、そして柳河泊

車で島原へ降りる。天草四郎の叛乱のあとは、どのあたりであろうか。そこは市からはなれた南方であるが、弾圧がきびしくその跡には何物も残つていないとか、市外に須川と云う村がある、九州一うまいそうめんの産地である。此の村の先祖は、香川県の小豆島から、幕府の命で強制的に移住して来たものである。すべての信者を粛正して、あとに人間がいなくなつたので、全国各地から、島原の村々へ人を送りつけたと云う、昔の暴政が思われる。山から降りて来た体には、ここでの講演は暑かつた。うだるようだつた。あとで島原城趾を見て、海岸の大きい楼で、名物の大蟹を腹一ぱいいただく。冷たいそうめんもうれしかつた。

お別れの蟹をだまつて食べる海からの風　　澄　太

旅を共にした谷端さんと、いよ〳〵お別れの時が来た。いや長崎県の警察の人々にお別れするのだ。大牟田行の汽船は、いよいよ港を出てゆく、桟橋にいつまでも立つて見送つて下さる谷端さんと署長さんに、私は大きく帽子を振り、また扇子を振つた。私は船室に入つてから汗と涙を一所にふいた。

熊本あたりから夕立雲が北上するのを見つつ、その夕立と一所に大牟田へ上陸する。そしてぬれた筑後平野を西鉄電車で柳河へ走る。

緑平さん夫妻は、夕立の通つたあとの涼しい家で待つていてくれた。「緑平居」と大書した山頭火の額もなつかしい。山頭火・緑平そして澄太。此の三角を結びつけるものは、酒ではなく、心の純一さであると私は思う。早速山頭火の軸物を三四点かけてその前で山頭火を語る。床には、「其中日記」に出ていたあの其中庵の掟が、表装して掛けられている。山頭火が書いて壁に貼つていたものを持ち帰つたものである。雀がぬれた葉かげで私を見ている。トマト・茄子・南瓜・胡瓜からお茶に至るまで、夕餉の料理はすべて緑平が自ら作り、奥さんが、巧みに料理されたものばかり。兄弟以上の親しさでビールを抜く。昭和九年頃、山頭火が奈良に行乞し、女高師の兼行桂子さんと二人で古い都を見物した時、楽焼で「奈良の旅にて、同行三人山頭火」と書いた抹茶々碗を土産に貰う。

山頭火さん。あんたが死んでもう十五年になるが、緑平さんも、澄太も、あんたが生きていてくれる頃と、少しも変らぬ思いで、細々と生きているよ。私を緑平さんに会わしたのも山頭火である。私と草石さんを結びつけたのも山頭火である。今度の旅も、考えてみれば、あんたが地下で私達をあやつつてくれたことのように思える。あんたが、漂泊の旅をして、一歩一歩歩いた足跡を、私は汽車に一哩も乗らず、よい自動車で走り廻つた。恥かしいような気もするが、こうした旅も今の場合また已むを得ないのだ。

孤独の緑平さんは、いい養子夫婦を迎えられて、清らかな古い家で、相変らず雀を愛して句作している。夫妻で吊つて下さつた青い蚊帳の中で、私は、あんたと枕を並べて寝る思いがする。その半生を旅にすごしたあんたは、死して尚、旅をつづけていることであろう。どうか、日々よい宿についてくれ。今夜は、私と一所に、この緑平居で雨後の涼しい一夜をぐつすりとねむつてくれよ。松浦の炭鉱地帯で、健さんを探したが、炭鉱が変つていて会えなかつた。明日は、久留米から日田へ出て、あんたの足跡をしのび、大分から船で松山へ帰るつもりである。松山の一草庵の句碑にも、苔がついて、草石さんが植えて行つたあんたの好きなぎの木も、よくついて年々伸びている。（三〇年）

高野山まで

十月十一日　晴。人情の味

今日は山頭火の命日なのであるが、九日の日曜日に一草庵で十六回忌を営んだので、予定の通り秋風にのつて北へむけて旅に立つ。少し台風気味だが海上は小波程度で、静かな船室にねころんで、小泉信三先生の『国を思う心』を読む。もう二十四年も昔のことであるが、芝の社会政策学院で、先生から独逸の国家社会主義について講義を聴いていた日のことが思い出される。先生は高橋誠一郎先生と共に、いつも和服の着流しで通つて来られた。あの頃四十一、二才であつたかと思う。船客は皆静かに並んで寝ころんで雑誌を読んだり、眠つたりしている。そのうち私も毛布を着て寝てしまつた。眼が醒めると、窓に近く青い松の枝が見える。音戸の瀬戸である。船は此の海峡を拓いた清盛の塚のすぐそばを通つている。しばらくして鍋という港に降りる。そしてバスで呉局までゆれて走る。

天農局長の応接室に素晴らしい山の日本画がかかつている。よく見ると、此の前に安田さんからその人となりをきいていた玉樹画伯の大作である。玉樹さんは、小林古径の門下で、独創的な異彩を放つている人。私はその山の絵を見て、お茶をいただき乍ら、広島時代に天農君な

どと、白木山・野呂山・極楽寺山など、よく山を歩いた日のことをなつかしく思い出した。丁度呉市内の特定局長さん達が会合していられたので、安田さんの紹介で、一所に食事をし、一時間ばかり、座談を交え楽しんだ。特定局長と云えば、この頃新聞では、ずいぶんひどい事をする者のように書かれているが、私の知りそして交つている人々は、皆いい人ばかりで、よく部下職員を愛し、仕事の仕方も正しいと思う。

立花さんの案内で、市内見物に出かける、見物する所も別にないので、水源池の土堤に登つて、石に腰かけて桜の木の間から、全市内を展望する。海軍々港時代の呉の空は、工場の煙でどんより曇つていたが、今は空気がよく澄んでいる。立花さんのしみじみとした処世観を聴いて、その無我的な心境は羨しいと思つた。郵便局に帰つて五時から一時間半ほど私の感想談を皆にきいて貰う。戦後、こうした会がなかつたと云うことだ。日下君から生の人参の汁が、増血栄養としてとてもよいなどと大病克服の体験談をきく。局長官舎は、東山腹にあつて、広い野菜畑もついていて、呉市中にもこんな静かな住家があるかと思われる。目で温い鍋をかこみ人情の味をたのしむ。熟睡。

十月十二日　快晴。 原爆の跡

呉から広島へバスで走る。林さんに迎えられて広島局へ。食後、佐久間さんの案内で逓信病

院に蜂谷先生を訪ねる。岡山弁もなつかしくその後の物語。そして「ヒロシマ日記」を著者から直接寄贈をうける。そこへ佐伯のばばんがお茶を汲んでくれる。八月六日から九月三十日までの原爆ドキユメントは、今やソ連を除く世界各国語に訳されて出版せられつつあり、アメリカではベストセラーとなり既に三十万部も売れ、イギリスでは一日二千部づつ出ているとか。自ら大負傷しながら、あの死生の間をくぐるような日日、よくもこれだけ記録せられたことだと思う。

病院を退いて比治山多聞院へ。山門の右脇に、広島郵便局原爆殉難者の塔が建てられている。讃岐庵治の巨大な花崗岩である。建立以来、親族故友の参詣が多く、香と花が絶えないと云われる。私は頭をたれて合掌念仏し、裏へ廻ると、二百八十八名(電信局・電話局は別)の氏名が刻まれている、その中の多くは知つた名であり、なつかしい顔である。涙なしに仰がれようか。そこから山上の御便殿跡の広場に立つて再建されたヒロシマの市街を展望する。私がはじめて広島に赴任して、ここから市街を眺めてから丁度三十五年振りである。変り果てた姿の中に、日本の悲しい歴史と、世界の動きが、そこに縮景されているように思われる。

山を下つて、幅広い道路を走つて中島の原爆記念碑の前に立つ。「安らかに眠つて下さい。この過ちは繰返しませんから」と二行に横書された碑の下で、二十余万の死者は、果して安らかに眠つているであろうか。このあたり、橋や建物の設計や構図は、あまりに新奇にすぎて、

比治山に於けるほどの実感が迫つて来ぬのは、私一人であろうか。他のことはともかく、死人に対する礼だけは、国際的な問題や、時局の感覚と云つたようなものを離れて、静かに、厳かに、つつましくやりたいものだと思う。

郵便局に帰ると、上川さんが待つていた。大耕誌友その他有志の人々が保険課に集つていられた。ここでもまづしい感想を静かに聴いて貰つた。保険外務の人々は、日日街頭に立つてあらゆる階層の人を対手にして苦心せられるだけに、社会人として、また人間として、いろ〳〵と心を練つてゆかれる場合が多いことであろう。

夕餉は、佐久間さん、大江さんと三人、本川の蠣船で頂く。折からの夕潮が、ぐん〳〵川下から逆流してくる、その水に街の灯が映つて美しい。蠣のすのもの、そしてフライ、それから蠣めし。まつたく昔なつかしい広島の味である。蠣めしに限つて、釜を座敷に持ちこんで、直接についでくれる。松茸の香も亦わるくない。漬物は特に広島菜を出して貰つた。此の漬物は不思議に蠣の風味をよくしてくれる。出てくる女の人達の言葉が、旅の者の興をそそる昔のようなまるだしの広島弁でないのは、此の船の気分としつくりしなかつた。

河の畔で佐久間さんと別れて、高須の横畑黙壺居を車で探して貰う。病気は大分よいらしく山頭火の屏風のある座敷にくつろぐ。一浴して山頭火の回想談で夜を更かす。三枚屏風には、大きな字で「淡如水」「白雲白」と書いている、なか〳〵雄渾である。更らに六枚屏風には、

ひら〱蝶はうたへない
空へ若竹のなやみなし
ぬれてふてふどこへゆく
うれしいこともなかしいことも草しげる
分け入つても分け入つても青い山
酔うてこうろぎと寝てゐたよ

の六句が大書せられ、出雲の民芸和紙で仕立ててある。このあたりまだ蚊が出るので、山頭火の作品にかこまれて、蚊帳の中で深くねむる。

十月十三日　晴。柚子の香

明けても矢張り山頭火の話がつきない。私は、小郡其中庵の写真を残してくれた黙壺さんの功を謝しつつ、西条柿の渋を抜いたのに、またしても広島らしい味覚を楽しんだ。

バスで広島駅へ送つて貰う。大江さん、林さんもわざわざ見送つて下さる。松江行の快速に乗る時、友和村の岩見尚文さんに出会わし、三次まで同車。友和と云えば、杉本五郎夫人定枝さんの故里である。その村へ杉本さんのことを語りに行つた時には、夫人も、その老母も、

岩見さんの母上も皆お達者であつたが、今はみんな世になしとは。

備後庄原に下車。耕一君に迎えられる。備北の山気が快よい。耕一主人の料理で豆腐と松茸の泳いでいる鍋を高木さんと三人で囲む。まだ青い柚子を切つてちりとして頂く。季節を食べているという感じである。あたりは寂として、何の音もしない。外は満天の星。

十月十四日、十五日　雨。米子・境

醒めるとはげしい雨。そこ〳〵に朝餉をすまして雨の中を七時の汽車へ急ぐ。雨がさめ〴〵降るので、別れの窓へ顔を出すことも出来ない。車中はがらんとして、寒い。新見で乗り換えて伯備線を北上する。山陽山陰の境あたりは車窓に迫つてくる木々がぼつぼつ紅葉しかけている。

米子郵便局と電報電話局と合同の講演会に臨む。話し終つて局長室に帰ると、緑の色も美しくほんとうにふつくらと温くたてられた抹茶が運ばれる。疲れた旅人には此の上もない馳走である。「これはどうも鷲見さんがたてられたものらしい」と家島君が言う。永年この道を楽しんで来た人の味として、重ねて頂く。志谷局長はじめ幹部の人々と、しばらく座談に興じて、雨の小降りになつた街を、角盤町へ歩いてゆく。潮さんは「ヒロシマ日記」では潮老人となつているが、もう古稀に近いと言われるのに、何時会つても若くてお元気だ。

十五日、米子の街の神田神社の秋祭で賑つている。道笑町の家島君宅に落着く。

まづ大雅堂の二枚大屏風を観る。右面が龍、左面が虎、まさしく霞樵池大雅の大作である。龍と言い、虎と言い、大雅でなくては描けない手法である。虎は、何処かで見たことのあるようなものであるが、竜は虎以上に大膽でまるで雲がうづまいているよう、雲か龍か見分けがつかないようで、その中から鋭い龍の眼光が流れてくるのである。

まづ、こう見て、抹茶を頂いて、煙草をくゆらせて又じつと見る。此の虎は、童児のような無邪気な顔をしている。竹の幹を踏まえた手は、恐ろしい爪を忘れて、私に向つて無心に戯れてくる。私はふと、少年時代に八年も愛していたふじ猫の表情を思い出した。虎と猫とを混同しては、作者に叱られるかも知らぬが、とても可愛い虎なのである。或いは其処に大雅の和やかな人柄が出ているのかも知れない。また、大雅ほど墨の色と味を活かした画家は、雪舟以後あまりいないのではあるまいか、その優雅な墨色が、龍となり雲となつて遊んでいるのである。絵をかくということも、ここまで脱落して墨に遊び、紙に戯れ、筆に飛ぶところまでゆけばさぞ楽しいであろうと思う。とかく、大作というものは、見ていて、その作者の精気にふれてか、息づまるようなものを感じさせられるものであるが、この龍虎の大作にはそれがない。きわめて大らかであり、肩のこりが脱けてゆくような平らかさがあるのみ。龍も虎も相打つの威を忘れて、左右から向き合つて、天下の春をたたえているのである。

それからお祭の酒をゆる〳〵頂いて、またじつと眺める。大雅は南画を極めたばかりでなく深く禅にも参じていた。こうした絵が書ける心境は、まさしく禅そのものである。宝暦元年、大雅はそのたま〳〵白隠禅師が岡山の少林寺に赴いて、その帰途京都に立寄つたことがある。大雅はその時、二十九才であつたが、直ちに参じて偈を呈している。またある年、大雅は江戸へ下る途中駿河の原宿の宿に一泊した。その頃、原の松蔭寺では白隠和尚まだ健在であつた筈であるが、参禅したかどうか明らかでない。宿屋には丁度仕立てだちの白張りの二枚屏風があつた。皆のものが寝しづまつてのち、彼は今日、仰ぎ見たあの富士山の姿を書きたくてたまらなくなり、ひそかに墨をすつて書いた。無断で書いたことを主人に叱られはせぬかと思つて、彼は早く起き、朝めしも食べずに逃げるようにして去つた。あとで女中が見つけ、「昨夜の田舎絵書きらしい人が、あの新しい屏風に、楽書きをして行きました。」と言う、主人はその楽書を見て、大いに怒り、「こんな変てこな富士山が、画になるか、美しい屏風を汚しやがつて。」と言つた。大雅は、江戸のある殿様に頼まれて、襖の絵を書きに行つたのである。話のついでに原宿の屏風に、富士の絵を書いて逃げたことを物語つた。のちその殿様が関西へ帰国する途中、その宿を探し、屏風のことを尋ねた。屏風は、座敷に使えぬとあつて納屋の隅に放りこまれてあつた。殿様がそれを買い受けたいと言うと、主人は急にその絵がほしくなつて、とうとう譲らず、今日原宿に残つているということである。その富士の絵というのが、山の頭だけ大きく、

雲は子供の楽書のように遊んでいる。その 筆法は或いは此の龍・虎のそれと同じかも知れない。

「こげな屏風、何んのことやら解らん、誰も相手にしてくれぬのでもてあましている、いれば持つて行きなさいと、隣の古道具屋が言うので、僅か、表具代以下の値段で貰つて来ましたがよう、ところが、誰に見せても、是れでも絵かと言つて、問題にしてくれませんよ、あんたが一人ほめてくれましたよ。」

と呑気そうに家島君は語る。日野郡の方の旧家から出たものらしく、表具も堂々としていて面には少しのきづもない。まさに家宝であろう。そこへ相賀さんがやつて来た。赤名以来のいろ〳〵の物語にふけるのもなつかしい。此の春、頼まれて私の書いてあげた井月の句「落栗の座を定むるや窪たまり」の句の半折が表装出来たので見てくれと言われる。それから家島君が墨をすつて、支那のいい画仙紙を切つて何か書けと言う。大雅のように墨に遊ぶ能はないが、とにかく戯れて書く。「独坐大雄峰」と書く時に、力が入りすぎて、紙が破れたが、かまわずにぐん〳〵書いた。その私の手つきが、物凄かつたと相賀さんが驚く。今日は、よいものを見せて貰つた。私は所有しようという気がないので、見ている間が心から楽しい。

十月十六日　晴。伯耆大山の紅葉

昨夜の二人に送られて、バスで伯耆大山へ。坊領と言う所で降りる。そして十年ぶりに美しい流れをまたいで、中津尾家の戸のない門をくぐる。此の夏のことである。私はふと、此処の泰治郎翁の夢をみた。そこで早速ハガキで暑気の見舞を出したところ、毎日無事、暑気にもあてられずに達者でいると毛筆の返事を貰つた、その時、此の秋には久しぶりに参りますと書いたのであつたが、秋を待たずに九十才を一期として、枯れるように去つて逝かれたとか。一昨日はその三十五日の法要であつた。私は、翁の眉の毛の濃いおだやかな写真と、新しい位牌に向つて、心経を唱する時、涙がこみあげて仕方がなかつた。翁より数日前に、上の部落にいられた九十六才の姉様も亡くなられたと言う。翁は若い時から御厨屋から売りにくる鯛が好きだつたので、死の前日、大鯛を一匹買つて見せたところ、非常によろこんで、姉さんにも持つて行つて食べさせてやれと言つた、しかしその時既に老婆は一足先きに逝つていられた、それをかくして「はい」と言う嫁さんの心は悲しかつたと言うお話を聴き乍ら、いい茶碗の数々で抹茶を頂く。

そして進君に案内せらるるまま、バスで御山へ登る。夏の大山にはその頂上まで十回も登つた私であるが、秋の大山は初めてである。紅葉はまだ三分と言うほどの色彩で、山気は心にしみて清浄である。不老園と言う、お寺が宿屋になつている奥の間に落着く。もう炬燵に火を入れてある。広島では蚊帳の中に寝た旅人が三日後には炬燵に足を入れる山の客となつているの

だ。二人で、湯豆腐をすくい上げ乍ら昼酒をほんのり酔うほどに楽しむ。大山の豆腐は山の水のよさによるが、三徳山門前の豆腐と共においしい。私は特に頼んで山うどの糟漬を出して貰う。そのほろ苦い味は、その昔、与謝野晶子の心を捉えたと言うが、各地の名物のうち此の山うどほどに雅味のあるものは少いであろう。大山の雪がとけて若葉すると、紫外線のあふるる中から採つて来て、夏も暑さを知らぬところに漬けられた野生のうどには、山の精気が尚もこもつている。

寺を出て、ゆる〳〵と豪円山に向う。主峰を仰ぐと、あのぶなの密林が美しくうれそめて、その上に既に初雪をかむつたと言う頂上あたりが白雲を抜いている。よく見ると、登山する人の影が、かすかに上り下りしている。その主峰から左につづく大雪渓の肌にも既に秋が来ている、ベンチに腰かけて大観するその山色は、午後の陽にあか〳〵と映えている。じつと吸いこむ空気の味のうまいこと。豪円僧正と中津尾家との関係など聞き乍ら、寺に帰つて茶を喫する。坊領とは、大山寺の寺領で、中津尾家は、古くからその坊領を管理する大庄屋だつた。帰つて、一浴して、ゆる〳〵夕餉をいただく。ごま豆腐は特にうれしかつた。離れの二階で熟眠。

十月十七日　晴のち曇。三朝温泉

起きいでて、庭を歩いて眺める、古池の鯉が足音を知つて近よつてくる。庭木は、それ〴〵に年を経ていて、その枝の間から左に大山主峰、右には高麗山が望まれる。苔のついた石の根には石路がもう咲いている。家の裏は、あすなろ、榎、欅の古木が立ち並んで風を防いでいる。門の外には浄らかな流れが水車を廻すようになつている、その流れの上に、無花果が、いたづらに口をあけているので、ちぎつて食べる。

出発前に、またお茶を頂く、一期一会と言うことを身に感じないでいられようか、遠く離れ住む者が、此の家の人々といつまた会えることか、最後に出された古萩の茶碗は、まことにいいもので、支那の宋の時代のものそつくりである。

大山口までバス、そこかる赤碕につくと、佐伯友幸君が微笑をたたえて待つていてくれる。局長追放せられたあと、家を再建しつつ米子信用金庫赤碕支店長として立直つてから最初の訪れである。ここでたま〳〵一休禅師の真筆を見るのも旅中の一楽であつた。父佐伯氏は、馬道楽と言われたほどの愛馬家で、乃木大将がステツセル将軍から旅順で貰つた寿号と言う馬を、馬齢達して軍馬から払下げられる時、東京の乃木邸に赴いて、その馬を貰つて帰つて飼つた人である。ある年、乃木夫妻が、はる〴〵その馬を見に訪ねて此の赤碕に来り、とある宿に泊られた、それとは知らずむさくるしい一室に泊めた宿の主人は、あとて乃木さんと知り、大あわてしたたと言う逸話も残つている。馬のたてがみを撫しつつ、東京から持参した人参を、愛馬に

食べさせられたということも、世界の名将として床かしい物語である。

奥さんや、ゆう老母にお別れして友幸君と一所に倉吉へ。途中から浦安の吉田克文君同車。三朝温泉三澗荘では大丸さんが待つていて下さる。吉田君と、ゆる〱温泉に浴して、一夜語り、枕を並べて休む。吉田君が四男四女の父としての心づかいの物語には心を打たれる。広島時代美少年だつた君が、もう孫を持つおぢいさんと聞いて、うたた歳月の流れの速さを思う。十八日は鳥取泊。

十月十九日　曇。熊さん一家

車中「ヒロシマ日記」を読みつづけ乍ら、山陰本線を京都へ上る。すぐ前の行商人らしい人が、「あなたは、華道の方の先生ですか。」と言う。妙な見立てもあるものだ。柿がうれて稲がうれて、所によると、素早い手振りでその稲が刈られている。城崎で弁当を求め、福知山ではホームに降り温い丹波のゆで栗を買つた、そして胸にしみるようなうまい山国の水を飲んだ。綾部・亀岡・嵯峨をすぎて、花園・二条とだん〱古都の中へ汽車はすべつてゆく。丹波・山城と、山の姿が、松の木立が、南画のように美しい。京都の駅では、藤川君、榎本君などが待ちうけていて、京都電報局へゆく。二年前までは、共産党員が、一つの拠点として活躍した職場であるが、藤川君の寛容な友愛によつて、そこにイデオロギーの相違は今尚残るとしても、

とにかく和やかに仕事をすすめている。そのただ中で、私は、試みに「王舎城の悲劇」と題して古代印度の物語りをして、いだいけ夫人とその子あじやせ王の苦悩と、転迷開悟のいきさつと、浄土に生くるよろこびについて語つた。

そして日暮れの雑踏の中を北野白梅町の社宅に至る。久しぶりに熊さん一家の客となつたのである。街のただ中でありながら、、静かな住いで、家のうちには、広い五六十坪の空地があつて、季節の野菜がとり〳〵に作られている。心温く語り、身に温く飲みそして食べて、和やかな家風の中に眠る。

十月二十日　雨・嵐・のち曇。一灯園

庭や畑を一まわりして朝餉をいただく。床には川辺華堂画伯の秋の山がかかつて、その下に藤川君の亡きちちははの写真がじつと私たちを見てござる。

「熊や、えゝ家に住んで、もつたいないのう、今までよう辛抱してくれたのう。」

と囁いていられるよう。それと同じ思いのする私の心には何か血のつながりの様なものが通つて来て、和やかな一家を眺めているのである。「行つて来ます」「いつて参ります」と、潔いことばを残して学校へ、勤めへ出てゆく。その中の順三君は、私のつけた名である。藤川順三、私はもう一度此の名から流れてくるすなおな気分をかみしめてみた。

そして長女雅子さんのために、色紙の筆をとつた。

和ぎて流れず、敬して諂はず、清くして潔く、寂にして喋しうせざれ

右利休のことば　　澄　太

と。やがて、いい家へ嫁入するであろう此の娘の幸を念じつつ。藤川君の車で京大病院の眼科を訪う。秋の雨がしきりに降つて、御所の木立がぬれ、街がぬれ、赤いポストがぬれていた。

「そこひ（緑内症）でな、四五日前に手術して貰つたが、おかげで、今日はもうこうして片目を明けている。幸い右だけだつたのでよかつた。ところが手術するために尿を調べてもらつたところ、糖尿があることが解り、それを治すのに一ケ月もかかつてな、おからばかり食べている。」

と、益洲老師はどつしりと寝台の上に坐つて、静かに語られる。三人で、ぽつ〳〵いろ〳〵語つて、祈るような心でお別れする。「病気の時は、病気するのがよろしく候」と良寛さまは申されたが、すべてを名医に任せて、一切の計らいを捨て、悠々と病気していられる姿には不安の感じが少しもしないのであつた。

病院から鞍馬口に走つて小山中溝町の新村出老先生をお訪ねする。先生のお好きな朴の木が大分大きくなつて、広い葉が雨を受けて色づいている。丁度御在宅で、快く和室の応接間に通

される。先日満七十九才に達したと言われる。八十には八十の老がある。静かな落着きの中から匂うように、こまやかにいろ〳〵話して下さる。まだ踏まれたことのない四国路に心をよせられて

「わたしは、北海道・九州へは旅行しましたが、四国は、船の上から松山あたりの山を人に指されて見て通つただけなのです。老妻の方は、父が江田島の兵学校長をしていましたので娘時代に大三島や道後の温泉にも行つているのですが。」

と言われる。それから話が荻原井泉水に及び

「井泉水さんも私より少しあとですが、同じ言語学をやられた人で、よく手紙を貰います。先日も芭蕉随筆の新著を送つて貰いました。なかなかいい本です、芭蕉の一筋につながると言いますか、あの人もとにかく自由律俳句を一生涯一筋に貫いて来られましたね、なか〳〵それだけでも偉いことですね。それから昨年あなたから送つて貰つたあの加州で亡くなられた津村木洋さんの〃わが一つの灯〃あれはなか〳〵にいいものでした。」

と言つて書斎へその遺稿集に取りにゆかれ、まづ巻頭の写真を示して、

「この顔、ほんとうに純情そのもので、鋭いものを内に蔵し、品位の高い、とてもいい顔ですね。俳句の外に短歌にもいいものがありますね、この

死期知らば生者歎かん知らざるは神のなさけとポープは言へり

は、いい歌ですね。」と、めくられる頁のいたるところに先生の朱点がほどこされている。

「ポープと言う文学者も調べてみました。ポープの書いたものの、何処にこのような説があるか今それを調べているのです。」

「そんなにして此の遺書を愛読して下さるとは、木洋さんもその世話をしたオークランドの塩沢さんもどんなにかよろこぶことでしょう。去年帰国して来られた大月夫人のお話では、病院で自殺されたらしいのです。和歌山県の人で早稲田を卒業し、愛人が死ぬるかどうか、とにかく失恋してアメリカに渡り、六十九才まで独りを守り、浄く純に生き抜いた人なのですが。」

先生は深く感じられた顔つきで、此の人の一生を憶念せられる様子。雨を外に感じながらお話はつきず、情も残るのであるが、おひる前に失礼する。玄関へは老夫人も出られ、お二人で見送つて下さる。

「あの朴の花が、何時頃から咲くでしょうね。」

「もう五年位先きでしょうか。」

私は、先生のお好きな朴が、あの大きく白い花を空にむいて咲かす日まで、お二人とも今のようにお達者でいて下さることを、心に念じながら、青桐の下の清楚な門をくぐつた。

午後は太秦の電気通信学園へ案内せられ、多くの学生たちに「禅と茶の在る人生」を語つ

た。はじめ台風気味で窓を打つ風雨の音で困つたが、そのうち静かになり、自他共に一つのいい気分にしたるうちに話し終えることが出来た。うしろで傍聴していられた一人の紳士が、

「いいお話でしたなあ。」

と云われる、その岡山弁の主は、医博岡本先生で、備前瀬戸の人。吉田学園長さんなどとお茶をいただいているうちに、直ぐ仲よしになつてしまい、「うちへ一所に行こう、あんたに見せたい書画が沢山ある」と誘われ、早速油小路三条のお宅へゆき、数々の墨跡・美術品・茶室・庭を拝見する。まるで美術館に入つているようだ。雨があがりかけた門でお別れする時、右にカリン、左に柘榴の古木を仰ぐと、カリンは珍らしくも美しい実を沢山ならせている、街のどまん中にこうした雅致が保たれる京都のよさを思つた。

そこから一路山科の一灯園へ。雨のあがつた光泉林は樹木がぬれて、しつとりしている。江谷さんに迎えられて漣月さまのたてられたお茶をいただく。藤川君が帰つてから江谷さんのお室で、沢山の画を見せて貰う、この五月に、森有一先生が林に来られてから俄かに絵心が起き毎日、一寸した閑を得ては習作された、その一枚一枚、それぞ〵にたのしく観る。武者流でもあり、有一流でもあるが、そのうち林洞流が出てくる気配が見えてうれしい。夕飯には、谷野さんと三人で私の好物湯豆腐をいただく。そして講堂での勤行の末席に坐らしてもらう。子供も大人も御一所で普門品から、なむからたんのうに至るまで、少年少女たちがよく暗記してい

られるのには驚く。端坐したまま行儀のよいこと。だん〳〵眠くなつてくるらしく、ふら〳〵居眠りしながら、それでも読経している子もいて、それが一灯園らしくていいと思う。一日よく学びよく遊んだ子は満腹すると、いや食べ〳〵眠りこむのが普通である。又この堂の構造がどうも天香さんの創作らしく、中央が板の間で、両側が畳になつている所は、岡山の曹源寺の本堂を思わせる、その畳の部分が二段になつていて、小さいものが第一列で、青年、成人、老人と云う風に順々に、男女別に両側から向き合つて坐についていられる。その配置は、禅の専門道場のような感じがする。正面には円窓が切つてあつて、そこには何物もお祀りせず、外の自然の風景があるだけ。その自然の中に、お庭の燈籠の一灯がとぼつている。壮厳でしかも親しみの持てる構図の中で、人と人、人と自然が和やかに溶け合つて、一つの光明に抱かれている。

そのあとで有志の方々に、「大原幽学」を聴いて頂く。既成の社会機構をはなれて、長い路頭の托鉢から、一つの新しい村づくりにまで身を以つて築きあげて来られた人々なので、幽学の歩んだ道はよく解つていただける。終つて天香さんのお室で当番の方々と更らに談合する。園内の人々は、天香先生とか、お師尙とか呼ばないで、皆んな気軽に「天香さん」とだけ云つていられる。「親鸞は弟子一人も持たず」と云われたように天香さんは、園内の人々を弟子と見られず御自分と同じ地平に置いて、あみだぶつならぬお光りに直結させていられるように見

うけられる。托鉢、飲食、作務、勤行などの行持は、禅的でありつつ、信の筋は親鸞聖人から聖徳太子に通じているようだ。理論はしばらく後廻しにして、行願と云う宗教性の強い体験によつて、こうして調和していこうとされる志がよく解る。十一時頃室に帰つて山気の中に眠らして貰う。

十月二十一日　快晴。旅の誕生日

五時前に眼がさめる。外はまだ暗いが満天の星空である。五十六年前の今月今日の、今頃、私は母の体から離れて出たのである。その日も今朝のように秋の空がよく澄んで、経が丸という太い山の上に星が輝いていたと父から聞いている。旅にあつて、精舎で誕生日を迎えさして貰い、十三年前にお別れした父を思い、母を思つていると、いつの間にか皆もう起きていられる気配。私の眠りを醒さないように、廊下の方を拭いていられるらしい。

五時半、昨夕のお堂で勤行の末席に坐る。行持終つて私に何か一寸話せと天香さんが云われるので、山頭火さんの生活の一端を語らして貰う。朝餉は皆の人と同様に飯台につきたいと思つたが、天香さんが一所に食べようと申されるので、江谷さんについてゆく。足もとを見ると朝早い一筋の細い水が流れている。ただ何事もない秋の水の流れ、それが無心のままに美しいのである。

朝飯は食パンとピイナツバターと紅茶、そして果物。簡素で、栄養十分。この席では、天香さんは、いろ〳〵と自由律俳句について聞かれる。尾崎放哉がしばらくお世話になつたこともあるだけに関心が深い。八十四才と云えば、もう翁である。その人が眼耳鼻舌身意に缺ぐことなく、腰も曲らず、此の頃は顔色も少し赤黒く、いよ〳〵お元気である。毎月の光誌には、自らペンを取つて二十枚内外の原稿を書いていられる。

三条大橋で藤川君達に迎えられ憧れの桂離宮へ案内して貰う。九時に門をくぐつて一時間あまり、私は時を忘れて此のゆかしい日本の美のただ中にいた。白い二枚の障子のしまつた玄関と、大らかな靴脱石に心を奪われてより、全く我を忘れていたのである。古人が筆をなげうつと云つたが私はペンを捨てねばならない。私の描写ではここの美しさはとても表現出来ない。

嵯峨野を走つて、高雄の紅葉を見に入る。紅葉にはまだ早いが楓樹の古木の間に清流を見降す。この少し上流の高山寺にいられた清僧明恵上人のことが慕われる。午後伏見桃山の郵政研修所に至る。生徒に一席お話して、いい玉露の茶を頂き、構内の亭にくつろぐ。

一浴して心温い一杯。石丸所長、小野さん、清原君、藤川君、そこへ荒谷君も大阪から帰つて加わる。話は秋の夜にふさわしく、お茶のこと、宗教のことなどしみ〴〵と人生を掘り下げる話題でつづく。朝パン、昼うどん、夕、山海の珍味。こうして迎えられ、友情でかこまれる

いい誕生日を感謝しないでいられようか。あとで荒谷君に肩をもんで貰い二人枕を竝べて、秀吉の桃山城の跡、愚庵の庵居した跡に近く、日本の国を竪に貫く伝統の静けさの中に眠る。

十月二十二日　晴。高野山

短冊と色紙を沢山書き残して近畿電気通信局に太田武司さんを訪ねる。しばらく語つて、昆布茶のおいしいのを頂く。難波まで送られて、高野山行の電車の客となる。河内の平野を南下して、橋本から紀之川に沿うて上り、極楽坂をケーブルで登る。千古の老杉の林である。林の中に、あけびが熟して口をあけているのも山の秋らしい。

一先づ常喜院に荷物を預けて投宿を頼んでおいて一人で奥の院に詣でた。帰りみちである。杉と石塔の間で白衣の旧軍人が、一本足で、ぴよん〳〵飛ぶようにして、あたりを箒木で掃いているではないか。終日、ここに立つて喜捨を乞うたのであろう、その自分の場を、夕べ引きあげる前に清掃しているのだ。私は何気なく通りすぎたが、五六歩後戻りして志をその手に渡した。

それから金剛三昧院を訪ねる。奥まつた静かな古い寺で、庭先きの、石楠花の大樹が眼につく、こんなに大きく茂つた石楠花を見たことがない。よくみると天然記念物となつている。花盛りの頃、一度見に来たいと思う。住職は、見覚えのある顔。去年の晩秋、金山管長の伴をし

て、八十八カ所の巡礼をし、寒い雨のふる日に、隣りの浄土寺に詣でて来られた人であつた。私は、大原幽学が文政年間に此の寺の秀漢と云う僧に二年ばかり師事したことを告げ、それを確かめる何か記録はないでしようかと尋ねたのであるが、その頃無名の漂泊者幽学など記録に残る筈もなかつた。また奥の院道にある「ちちははのしきりにこいしきじのこえ」の芭蕉の句碑の大雅の字があまりによく、全国でいろ〳〵の句碑を見て来たが、あんな美事なものはない此の寺で伊賀の藤堂家の墓地を管理していられるらしいが、あの句碑の拓本でも刷つたものはないでしようかと尋ねたが、当寺としては、刷つていない、欲しい人には自由に採らせているとのことであつた。遠くで鐘の鳴る頃失礼する。お山はすべて清らかに静かである。ある店頭では柚子がほのかに匂うていた。誰でもよく高野も俗化してしまつたと云うが、悪化したのは山よりもむしろ我々の生活ではなかろうか。

常喜院では、十三年前の夏、母の納骨に来た私を覚えていられた。上手のない親切なもてなしである。大きい風呂をゆる〳〵頂いて書院の一室にくつろぐ。両面の金襖は、四枚づつ、八枚、いづれも松に鶴、竹に鶴の大作である。小僧さんが炬燵をしようかと云われるが、火鉢にして貰い、一人で石丸さんに頂いた宇治の茶の封を切つて、しづかに味わう。舌にとけるような味、水がよいので一入うまい。そこへお膳が運ばれる。飯びつを置いて、どうか御自由にと去つて行かれたあと、試みにその精進料理の献立を記録すると

豆腐の味噌汁　　　松茸と芋のてんぷら

生あげのあんかけ　　紫蘇の入つた手製福神漬、奈良漬

二の膳には

コンニヤクの白あえ。高野豆腐、椎茸、松茸の煮つけ。富有柿一つ、それに土産の箸と杓子が一袋

簡素で、田舎風な料理であることがうれしい。砂糖は高野豆腐にだけ用いてあるのもよい。いづれも幼い頃、家の法事などで母が手料理したそのままのもの、私は思わず、「お母さん、一所に頂きましよう。」と独語してしまつた。母が家内につれられてこの寺のこの室に泊つたのは七十一才昭和七年の四月はじめであつた。山はまだ寒く、雨にこもつて、ゆつくり三泊して院の気に浸らして貰つた。私が最初の文集「青空を戴く」を世に出したところ、計らずも七十円ばかりのお金が入つた。それを路銀として、京都、奈良、吉野、高野、大阪、神戸と、十日ばかりの旅をして貰つたのであつた。その旅の中で母が一番気に入つたのは、高野の山であつた。「澄太や、外に望みはないが、もう一度あの高野山へお詣りさしてくれい。もつたいない所ぢやけえ」とよく云つていた。そのうち大病されたり、戦争で私の公用も忙しくなり、また母も弱くなつたりして、とう〳〵それを叶えてあげることが出来ずに昭和十八年の夏、去つてゆかれた。

そこで、母のお骨の一部分を、母の憧れた山に納めようと思つて登つて来た時も、私は此の寺に泊めて貰つた。その時は、向うの室で庫裡の方からまだラジオが流れてくるのを聞き乍ら疲れ切つていたので早く休んだ。ラジオが聞えているのに、私は母の夢を見た。ほんとうに法悦にあふれるような顔して、静かに大きい門をくぐつて、本堂へ入つてゆかれた。それが、はつきり見えた。あまりのなつかしさに、「お母さん」と呼んで眼がさめた。実は肉腫と云う不治の病で、それも医師の誤診で足の手術をし、ほんとうに痛い〳〵と苦しんで死んでゆかれ、人からは生仏のように云われた人としては、あまりに悲惨な最後だつたので、私はいつまでも心を暗くしていたのである。その母が、私と一所にお山へ来て、あのはればれしい顔を見せて下さつたので、私はうれしくてうれしくて、枕がぬれるほどに泣いたのであつた。

それから十三年の歳月が流れた。やがて故郷で法要も営むが、先づこうして、高野の母に会いに来ているのである。夜更けて位牌堂に入れてもらい、寂然とした光りの中で、たゞ一人静かに誦経した。

南無敬信院釈慈眼妙育大姉。(三〇年)

伯耆大山

大二郎さん、私たちのうしろ姿をじつと見送つていられるあんたの視線を背に感じながら、私たちはぼつつり〳〵一歩一歩、あの木の根の重なる路を登りました。久仁子も正風も私も、靴やズツクや下駄をぬいで素足に草履ばきという古風な素朴ないでたちが、やつぱりよかつたようです。山の水でしつとりぬれた草履を通して足のうらに浸み通つてくる山気の快よさは、何とも云えないものでした。私はこれで第十三回目なのですが、子供たちが果して頂きまでついてくるかと実は少々案じていたのです、ところが身の軽い子供たちは案外すた〳〵登り、十八貫五百という私の方があとになりがちでした。それでも往年に比べて別にひどい苦しさも感ぜずのぼることが出来、すつかり体の自信を得たというものです。

ぶなの巨木の密林は、大山特有の山林美ですね、木肌は白樺に似て葉は欅のようなぶなは、年を経ていよ〳〵強く山に根を張つていました。その密林を抜け出る頃から、うぐいすが近くの茂みで春のように囀つていて、脚下には高山植物が咲き、霧の晴れ間をふり返ると、弓が浜から中海、島根半島が絵のように浮んで見えました。五合目、六合目という標木を見てはそこ

で一寸休みました。私は国上山の良寛の五合庵を思うのでしたが、山頭火は酒の五合を思つたことでしよう。彼は昭和のはじめ頃、新庄から日光村へ出て、この山に一度登つています。大山の主ともいうべき桐山さんや、米子の相賀さんには、ゆる〲ゆく私たちの足どりは、却つてやつかいであつたかと思いますが、私にとつては此のお二人は何よりも心強いリーダーでした。

大山、、、、、キヤラ木の原始林に立つて、桐山さんは

「今、空から姿を現わした、あれが三酤峰です、そしてその右の崩れた大斜面、あそこにはまだ雪が残つていますよ。先月島根大学の学生が一人であの岩角を登つていて遭難したのです、僕が馳けつけた時には、頭を打つていて、もう駄目でした。大山はやさしい山のようで毎年、夏も冬も何人かの遭難者を出しています。そんな時、山岳部の青年は、実に友情に篤く、また僕の頼むことを、昔の軍人以上に忠実に守つて、あらゆる苦難を物ともせず潔く行動してくれますよ。ごらんなさい、此のキヤラ木を、指ほどの小さい枝ですが、路を修理するために、たまに切つてみると、三百年を経ているような年輪が数えられるのです、雪に埋つていて、なか〲太れないのです。あつ、あそこを飛んでいるのが、岩ツバメですよ。」

と語つてくれました。そのキヤラ木はあんたの好きな信州でいうアララギ、飛騨の国の一位の木と同じ種類のもののようで、ここの密林すべてが、天然記念物となつています。キヤラの

原生林をすぎると、灌木が段々小さくなり、八合目あたりからは高山植物が次第に多くなり、九合目からはそのお花畑なのです。山の上はもう秋で、紫、紅、白、桃色など、その名も知らぬ草が、胸にくいこむほどに澄んだ青空の中でほんとうに無垢清浄に、つつましく咲き揃っているのです。

晴れるとここは天国で浄らかな葉も花も
天人のように鳴くうぐいすも草花のかげ

一足一足を惜しむようにしてついに頂上に辿りつきました、十時でした。子供たちは感激のあまり、言葉もないのでした。ここで桐山さんに記念の写真をとつて貰つている間にも脚下を霧が去来するのでした。子供たちは、鳥取砂丘からはじめて見た日本海を、ここから又遠望するのです、その青く遠くつづく海原の上に、いろ〳〵の色と形をした雲が、無心に浮いて流れるのでした。

私はその雲の中から幻のような面影を思い起すのでした。大正十年の夏、私はまだ二十四才でした。はじめて此の大山に登つたのです、その時はバスがなく伯耆大山駅からずつと歩いたのでした。宿に一泊して朝早く此の頂上に達しました。丁度今のように海と雲の美しさに見とれていると、私の脚下の草花の中に一人の紳士が坐つて、魔法びんから熱湯を注いで静かに抹茶を立ててうまそうに喫しているのです、その人は私を顧みて一ぷくいかがですかとすすめて

くれました。お茶の味など皆目わからぬ頃の私でしたが、私はその人と竝んで坐り、そのお茶をいただきました。その時と同じような草花が今ここに咲き、同じような雲が去来しているのです、その人は出雲の出身で大阪で何か実業についていて府会議員もしていると話されました。三十五年も昔、ここで戴いた山上の馳走を、私は昨日の如く思い出しているのです。

頂上から少し降りて神社の出張所に至り、そこから石室や小さい池のあるあたりを歩きました。草花はいよ〳〵浄く美しく、足もとに咲きつづくのです。あとで桐山さんから久仁子が一つ一つについて教えられた草の名をここにしるしてみますと、

みやまあじさい、しこくふうろう、岩かがみ、つが桜、まいづる草、しろ草、こうもり草、もつけ草、こめ葉、深山おだまき、ちやぼせきしよう、大山くもがた、おとぎり草、しらたま、いわはせ、ほうじよばかま、大文字草、等々、愛しく、あわれな花の可憐な名前ですね。

撫でては通る花の名を知るの知らぬの

その小さい花をよく見ると、麓の村からとんで来たのでしようか、蜜蜂がしきりに伪いているのです。淋しい花にとつて、何というなつかしい年に一度の来訪者でしよう。花も花も柔らかくすべてを蜜蜂に任せているのです。

こんなところに蜜蜂が花に口づけてゆく

池の北の一寸出張つた草原で弁当にしました。久しぶりに戴く私の好きな握りめし、うましともうましでした。

握りめし握つて食べる手も口も雲の中

その雲に大きい窓が出来ました。絵にしたらよい構図でその中に弓ケ浜、米子の街、関の灯台などがはつきり描かれている。その米子の街へ夕方までには降りてゆく私たちなのです。

雲で、美しい北の窓がふさがつたので眼を西に転ずると、そこはあんたの生国出雲の山々です。まさしく八雲立つ国で、山々の間から白い雲があちこち立ち昇つているのです。宍道湖も白く光つています。

八雲立つ国原をそこに見て雲の上にいる

帰りは正面登山路を桝水原を目ざして下山しました。この道では二、三人の人に出会つただけで、通る人も稀れでした。その小径から眺める限りの草原が、実にすばらしいお花畑なのには驚きました。誰も見るもののない山の上で浄らかに咲いて、白雪に埋れてゆく草のいのちを愛しく思わずにいられましようか。

いちめんに咲く花よ山の上のかなしみよ

咲いて知られず散つて雪が早うくるお山

お山の上はお花畑で真昼ひつそりみつばち

咲いて雲にかくれている草花よさよなら

幾度も身辺を通る雲は、暖かかつたり、寒かつたりしました。ある時は、肌冷え〳〵と、腕のうぶ毛に、さつと霧を点じてゆく雲もありました。これは季節によつては霧氷になるのでしようか。

一直線に下りる脚は、上る時よりも痛いのですが、桝水の開拓地を眼下にした時には、足の痛みも忘れていました。それから溝口へあんたがバスで帰つたその道を逆に山の家までゆるゆる蝶や草をあさりながら歩いたのでした。正風が途中とてもうまい筧の水を見つけて、久仁子も私たちも歯にしみるその味を楽しんだことです。（三二年八月）

山脈の彼方

三坂峠にかかると、バスの窓から撫子の花が見えたりして山路はもう秋だなと思う、耳がつんとつまるのは、標高がずい分高くなつたしるしであろう。久谷村を眼下に見降したりすると何だか飛行機に乗つているよう、でも久米あたりは暑そうなもやがかかつていてよく見えない。峠を越すと、とうきびの穂が至るところに立ち竝んで、秋風にゆれている山国らしい風景となる。久万で乗換えて菅生山を南に廻り、川瀬村に入る。岡さんの門口で車を降りて、仰ぐと空は澄んで、陽の光りが肌にしみて、くすばゆいような快感をうける。

座敷に通された私たち一行はまづ、きちんと整頓して七、八段に本がぎつしり竝べられている新しい書棚の前に坐る。この千冊あまりの書籍に、私は「哲友文庫」と名づけておいたのであつた。哲友文庫とは「禅哲院義貫智友居士」の哲と友をとらして貰つたのである。哲友居士とは川崎義友君の戒名である。その義友君は壬生川町川崎義之さんの一人息子、同志社大学の文学部を優秀な成績で卒業して、厚生省の官吏として人口問題についての仕事に精励していたのであるが、昭和十九年七月応召し、満洲へ出征した。チチハルで軍務に服していたのである

が、二十年八月の、あのソ連侵略の時、二十六才を一期として戦死して帰らなかつた。たつた一人の愛児、しかも学問と公務に熱心で、親を思う念の強かつた義友君を失つた両親の歎きはわれわれの想像以上のものであつた。その義友君は大変な読書家で、特に日本の古い文化に憧れて、よく大和や京都の古寺を訪ね、仏教、建築、絵画その他工芸品の研究には深い興味を持つていた。従つて愛読した書籍の中には、工芸、美術、文学、歴史、宗教、社会に関するものが多く、その数は凡そ一千冊に及び、いづれも当時一流人の著わしたものばかり。両親はこの遺愛の図書を、愛児のかたみとして戦後大阪から故郷に帰る時にも、沢山の荷物の中で一番大切にして持ち帰つた。それから十三年、図書は箱に蔵められたままだつた。読んでくれる弟も妹もいない、親族の子弟も既にそれぐ\に一家をなしている。遺愛の書ではあるが、それを死蔵していたのでは故人の志に添わないであろうことを考え出した川崎さんは、ある日、私にこう云われた。

「うちの義友の本を、川瀬村の岡楽木さんに寄贈したいと思うのですが、受けて下さるでしようかな。」

「それは、いいでしよう、よい人を選ばれましたね、あの人だと、書物を大切にし、家としても転勤や移住のない古い農家ですから、書物が散逸しないでしよう、また六人のお子さんが将来愛読するようにもなり、あの村には耕友が三十人ばかりいて下さるので、代るぐ\利

用さして貰われるでしよう。その上、川瀬村は、愛媛県下では、社会教育の一番進歩している村で、一般の村人の中にも、利用する人が沢山いられるでしよう。」
というようなことで、図書は荷造りされて、山脈の彼方へ送られたのであつた。ところが、その時川崎さんはまだ岡さんに会われたことがなかつたのである。一面識もない人に、愛児の形見を無条件で贈るということは、一寸おかしいことに違いないのであるが、この二人の心を結びつけていたのは実は「大耕」だつたのである。先年の寒中、一灯園の六万行願として、光友達が大阪府枚方地方の家々を、一軒々々便所掃除をして廻るという行をした。その中へ松山の亀田孝さんと、岡さんとが参加して、寒中の下座奉仕の行を全うせられ、その日々の感想日記文を大耕に掲げたことがあつた。その記事が、両親の膽に銘じ、この人なら、義友の志を守つて下さるに違いないと思うようになられたらしいのである。この念願、この直感は当つた。その人がふさわしいばかりでなく、その家、その村、その環境も亦、まことにふさわしいのである。そこで私はよろこんで仲をとりもつて「哲友文庫」と名づけさして貰つたのであつた。
しかも岡家の長男仁君も同じ満洲で、義友君と同じようにして戦死していられるので、靖国神社では、既に両家の英霊は戦友として共に眠つていられるのである。今日は、その義友君の伯父伯母に当られる小糸春吉さん夫妻も行を共にして、曽つて京都時代、我が子と同じように愛した若者の、遺愛の書籍の落着きどころを見て置こうとせられるのである。短い一生ではあつ

たが、書物を熱愛した義友君の魂は、この静かな山村の、温い人々の手に抱かれて、書物と共に、いつまでも生き育つてゆくことであろう。私たちはそう信じつつ、香を炷てて文庫の前で誦経したのであつた。

日が傾いてから私たちは、植物の採集をするという正風を先頭にして、住吉神社の古い森に入つた。この森には、かやとか、けんぽ梨とか、珍らしい大木が茂つている。小径をぬけるとうらの山裾の県営養鱒場では、大きい鱒が群をなして泳いでいた。そこから山かげの畦をゆくと、いろ〳〵の秋草が、可憐に咲いている。嬉々として草を採る子供たちと同じように大供たちも草を楽しんでゆくと、そこにも亦山裾に稚魚の養鱒池がある。池に手を入れると、水は氷のように冷い、その山清水が鱒になくてはならぬものらしい。涌清水が五分でも流れ止まるともう稚魚は死んでしまうということである。池に入れた掌で水をかきまぜると、魚はよく馴れていて、五百も八百も掌にふれるところまで慕つてくる。聴けば牛乳や刻み玉葱、豚の肉などの栄養を毎日与えているとのこと。それから岡さんの隠居を一寸お訪ねして帰る。浴衣一枚では涼しすぎるようだ。

夕餉のお膳には、鱒の焼物が頭を並べていた。塩焼き、油揚、いづれも他では食べられぬ清浄な淡水魚の味である。その土地で造られたもの、とれたものが、私たちには最大の薬食であり、味覚も亦満足する。自家で作つた大豆を、豆腐屋へ持つて行つて造らせられた豆腐の味も

水がよいためでもあるが一入おいしい。その翌夕は、珍らしい鰻の茶漬飯をいただいた。これは珍らしいというよりも、岡家先祖代々から伝えられた家風料理である。まづ鰻はとろ火で時間をかけて焼く、御飯は少しく堅目に炊く。茶碗むし茶碗を大きくしたような茶碗の中に、焼いた鰻を三切れ程入れ、その上に御飯をつぎ、醤油を一寸かける、この醤油は、アミノ酸で即製したものでなく、岡家自造のほんとうのもの。最後に煎茶を少し濃く出したのをパッとかけてふたをし、しばらく経つて食べる。その注ぎ方、そのふたの取り時に、こつと勘が要るわけで、先年亡くなられたお母さんが一番いい味を出され、次が楽木君だと云われる。私たちは楽木君が鰻焼きに着いていたので、奥さんに注いでもらつたのであるが、油つこい鰻めしを、こんなにさら〳〵と淡い口当りで食べたことはなく、此の家の味としてとてもいいものを頂いた。村の話では、岡の鰻茶漬は、八杯は食べねば損ぢや――と云うとか。久万から来ていられた梶川さんなど、相当やられたらしかつた。私はうまいからと云つて、酒と同じく、量に動きのない腹を持つていることを、この時ばかりは、損だと思つてみたかつた。

この村の米のうま味には、正風がすぐ気がついた。一般の人は、この頃の米の味覚に異状を感じていられないかも知れないが、私は、農家でホリドールを稲が穂になつてからも使用するようになつて、米の味に実は異状を感じていた。このことを職業的に、いち早く察知したのは酒倉の杜氏だつた。むし米をする時に、ホリドールを使つて作られた米は、昔の小米、くず米

程度に扱わないと、すぐむしすぎとなり、酒の味が弱く、うつかりすると腐るおそれもある。農薬によつて、この頃の米は力（りき）を失つていると云うのである。このことは国民の栄養上、相当大きな問題だと私は思う。特に玄米食は健康上いいのであるが、その玄米の皮に影響する農薬のことも考えねばならぬと思う。しかし、北陸、東北など寒い地方の米は、ホリドールが使われていないかも知れない。と云うのは、気温が低く、夜は土用でもりんと冷えるこの川瀬村では、村内の申合せで、一切ホリドールを使用しないことにし、また使用せぬでも虫害がない村なのである。そこで、この村の米には力（りき）がある。その味が力（りき）のない米を食べている私たちには、なつかしいものとして味われるのである。そしてまた、鱒の稚魚を育てるに、ここでは毒薬の不安をいささかも感じないこととなつているのである。

ところが、私たちが来た二、三日前、養鱒池の大きい鱒が一夜に千何百尾も変死したという事故があつた。池の水を調べたが毒性はちつともない、警官はいろ〳〵探つてみられたが悪意の行為らしいものが感じられない、まつたく迷の死なのである。ところが、池のすぐ隣に住んでいられる大西清一さんの説はこうなのである。

夜半、二時すぎだつたか、池の中でバタ〳〵異様な音がした。それは聞いたが、その外には人の足音もせず、何のこともなかつた、朝起きてみると沢山こと白い腹を返している、まあ、僕の見解としては、いたちのしわざではないかと思うんですよ、いたちが千何百の鱒を殺すと

云えばおかしいのですがね、池の辺で僕は此の頃よくいたちの子をみていた、大分大きくなつたなと思つていた。そのいたちが、鱒をねらつたのか、すべり落ちたのか、とにかく池に落ちたのですね、入るのは入つたが、コンクリなのでなか〳〵這い上れない、バタ〳〵しているそこへ、鱒は、餌を投げられたと思つて沢山こと集つて来た。いたち奴、やつと這い上つたがそのあばれ苦しんでいる間に、例のあづり屁という奴を放つたのでしようね、あれは人間でも気分が遠くなる程、アンモニヤ性が強いので、清純な水で育つた鱒は、きつと、いたちのあづり屁でアンモニヤ中毒にかかり沢山こと変死したのですよ——と。これには一同大笑い。如何にも山脈の彼方の山村の夜話らしい話である。ところがこれが冗談ではなく、その筋からの要求で、大西さんは、これを詳しく書いて、参考意見として印を捺して提出したと云うのである。あれほど熱心に北海道から来て養鱒に尽していられる場長さんに、責任上の傷がついてはいけない。科学的調査によつても変死の理由がわからぬとすれば、いたちのあづり屁ということにしておけば、村民も安堵し、場長さんにも責任がなくなるでしようと、曽つて村長をしたことのある大西さんらしい話ぶりなのである。

中の日は、十一時のバスで一同岩屋寺へ拝参した。岩屋寺はお四国第四十五番の霊場で、川瀬村下畑野川と、美川村仕七川の村境の山中にある不動尊をまつる聖域である。

途中小さい峠を越したところに嵯峨山という古い部落がある。平家の落ち人の末だということ

とで、嵯峨山は京都の嵯峨をとつて、昔をしのんだものであろうか、昨年は、大西さんの案内で、その宗家小椋氏を訪ねて、家に伝わるいろ〳〵の什物を見せて貰つたりした。木材の多い土地柄として、代々木工を業とせられたらしい。その仙境から流れ出る溪流を少し下つたところに山の湯が細い煙を上げている、嵯峨山温泉である。僅かに涌く鉱泉を汲んで沸かすのであるが、泉質がよくて、皮膚病と神経痛に特効がある。私も二度ばかり岡さんにつれられて来たが、肌ざわりのよい湯である、道後のような観光地と違つた、素朴な山の湯も亦なつかしいものだと思う。

その湯のあたりから、岩層が変つて来て、礫のような丸い小石を、セメントで堅めたような地質である。岩松がその断層に頻しく茂つているのが眼に立つ。溪流が、無心な雑魚を遊ばせているのも呑閑である、この川は仕七川の町で面河川と合して仁淀川となつて土佐を流れて太平洋にそそぐのである。私たちは、岩屋橋のところで下車しそこから参道を十丁ばかり登る。杉や、桧の大樹の中に、私の好きな大きい橡の樹が、緑の葉をすかして、青い空を仰がしてくれる、まさしく深山の巨木である。蟬が寂かに鳴き沈んでいる。やがて本堂に達し、奇岩怪石を眺め、礼拝をすませてから、子供たちと一行十人、仁王門を涼しく吹き抜ける風の中に坐つて、お弁当をいただく。今日の東道者日野友幸君のお話によると、この門から更に奥山へ登ると、古岩屋という霊場があつて、そのあたりの秋の風趣は眺めもよく、紅葉も一入美しいとの

こと。

大師堂の右横に暗い洞穴がある、燭をつけて杖で探つてゆくと、そこに千古の霊水が涌いている、その昔、空海上人が久しく禅定せられ跡である。身心清浄、寂として、浮世の垢をすすぐの思いがする、此の頃は八十八ケ所も、所によつては、俗化したり、荒廃したり、清掃さえも怠つたりしている有様であるが、この岩屋寺などは、今も昔も変りなく、山の神聖さがよく保たれていて、お遍路さんはいうまでもはく、われわれかりそめの参詣者さえ、大師の遺徳に触れさして貰えるような気がしてありがたい。

和尚さんから人なつかしく招ぜられるままに、庫裡の二階の書院に通される。奇岩を背にした特殊の建築も見るべきものであるが、一塵をも止めない広い座敷の清風も亦うれしい。よい茶菓を頂きながら、いろ〳〵とお山の話を承る。句碑のよいのをもう一つ建てたいのだが、山頭火に岩屋寺の句はないだろうかと云われる、山頭火も二、三回拝登している筈であるが、その頃の日記は焼き、句は残していないのである。和尚さんは、曽つては南画も学び、「渋柿」で俳句もやられたという風雅を身につけた人である。「ゆつくり、泊りがけでもう一度、来て下さい」といわれる言葉を背にして、日盛りのバス停留所へ降つたのであつた。

一燈寂として霊水の涌くところ　　澄太

楽木居へ帰ると、村内の直瀬から渡辺典美さんが私を訪ねて来て待つていられた、東洋レー

ヨンにいられた時には如法寺の大耕会にも来て、お茶を点じて下さつたのだが、ここでも亦、皆で典美さんの抹茶を頂いた。大雨となつた。肌寒い冷気を感じながら竹山翁が曽つて、面河と岩屋寺に遊ばれた時の大作の画を拝見した。その夜、私は鬼子雄君の案内で公民館へゆき、「道徳から宗教へ」と題して、釈尊の十善戒を中心にして、一時間半ばかりしみ〴〵語つた。黒板のうしろの窓から流れてくる夜風があまりに冷え〴〵するので、窓をしめたほどであつた。聴いて下さる人も、講座に慣れた方ばかりで、自他一如の共感をもつて、立秋の一夜をこの道に遊ぶの思いがした。

川崎、小糸両夫妻をお送りしてから私と正風はもう一日、この村に止つた。皿ケ嶺の裏山にかかつている朝雲を眺め乍ら私は川を遡つて善通寺を訪ねた。皿ケ嶺は、こちらから見るのが山の表かも知れない。私たちが松山から毎日見ているのは北にむいた裏側であろう。しかし山の姿としてはこの山は北から見るのが高くて美しい。

信一君が山から採つて来てくれた実のついているまたたびかづらは、生れてはじめて見る珍らしいものだ。その乾いた実は、よく貰つて筋の薬として酒に漬けておいて飲み、人にもすすめたものであるが、これは深山でないと育たない。私は越後からマタタビの青い実の塩漬をとりよせて食べているのだが、越後のは実の形がこんなに丸味でなく、唐辛子の短いの位に細い。そこで哲友文庫から牧野博士の「日本植物図鑑」を抜いて調べてみると、越後のは深山マ

タタビで、川瀬村のがほんとうのマタタビである。そうしているうちに隣の猫がもうやつて来て、体を転がしている。辞書には「猫大いに是を嗜む」とある。名はアイヌ語の「またたぶ」から来たもので、珍妙な実の形からアイヌがそう呼んだものらしい。俗に、マタタビを食べて精を養い、そしてまた旅をつづけるからマタタビというと云うのは、違つたこじつけだとある。（三三年八月）

十一の宿

宝塚・清香軒　（九月十三日泊）

大阪で宝塚行急行電車にのりかえる。午後五時半でラツシユなのだが、幸い席がめぐまれた。豊中を過ぎると大阪郊外という感じがなくなつて、窓に入る風も涼しくて清い。宝塚の一つ手前のめふ神社前で降りると、妙子さんがよし子チヤンをつれて迎いに出ていて下さる。一応街道に出て、三丁ばかりあと戻りすると、北側に、十戸ばかりの住宅が竝んでいて、その中の一つが今度移つて来られた酒井竹山翁の新居である。翁御夫妻もお元気で待つていて下さつた。

「おかげさまで、こんなよい家に、住みつかして貰いました。妙や、よし子が通うのに、今までの家よりか、一時間以上も近くなりまして。」

「ここからは、聖心女学院まで僅か三十分ですの、よし子は、夏の間ぢゆう、そこの溝川でドンコや鮒取りばかりして、あんなに元気そうになりました。」

「茨木では、雨がふると、バケツや、ドンブリ等、十二三も竝べて、その雨もりのない所へ

身をよせて寝たものですが、もうこれで安心しました。」

敷地四十坪、建坪十二坪という小ぢんまりした住宅。一年前に建てて、東京へ転勤せられたあとを、買いうけられたのである。設計はとてもよく出来ていて、桧の風呂もついている。玄関や廊下はよく雑巾がかかつていて、大切に住みこなして来たような家。これなら、自分で新築するより却つてよかつたと思う。四人が静かに生活せられるのに、すべてがふさわしい環境である。去年の春、画会を起してから、約三百八十人の御援助を得て、浄財として私の方からお送りした二十八万円が、大体総費の半額としてお役に立たせて貰つたわけで、ここで私はあらためて大耕をめぐる人々に感謝せずにはいられなかつた。それにしても流石は墨竹五十五年の翁で、よくもまあ求めに応じて、大小沢山の画をかかれたこと、御苦労さまでした。しかもその一つ一つは、私などの駄文駄句と違つて、それ〳〵に清香を放ちつつ、各家の床に掲げられ、末永く多くの人々から敬愛せられずにいないであろう。玄関に御自刻の額が上つている。益洲老師の書で『清香』とある。清香軒と名づけられてはどうであろう。風呂から上ると、西宮の山上克巳君が来てくれていた。話は西条の故桐野さん、山下義夫君に及ぶのも自然であろう。聖心女学院というのは、東京の方は大学院を持つているが、幼稚園から大学まで、一学年一クラスだけを、キリスト教精神を根底として教育し、神母は、ドイツ人で、立派な人らしい。妙子さんは高校二年生の担任で国文を講じ、よし子チヤンは、お母さんにつれられて小学

一年生。

東京・冬花亭　（九月十四日泊）

特急ツバメで、まる五年振の東京駅に降りる。長岡さん宮崎丈二さんと、齊藤泰全和尚が待つていて下さつた。泰全和尚は、越後田口の人で北京にもいられ、先年は永平寺高階管長に随伴して伊予の内子、大瀬などへも来られたのだが、初対面である。長岡さんにお別れしてすぐ新宿へ廻ると、斎藤清衞先生、南蛮寺萬造そしてアポロン社の加瀬正治郎君が待ちうけていて裏街のある二階へ上り、六人車座になつて秋田の太平山で一杯。会いたい人々に会うよろこびは酒の味をいよ〳〵よいものにする。斎藤先生は、明治書院の俳句講座で山頭火を担当して御執筆中、「あの山越えて」を電車の中でよんでいられたらしく握つていられた。御飯よりも、蕎麦にしようということになり、その辺の路地に出て信州の蕎麦屋に入る。私は藤村の「旅情」ののれんに向いて、ザルをすすつた。中村屋で一寸買物をして、バスで長崎へ。そして宮崎冬花亭に落ちついた。小雨にぬれて秋海棠が咲いていている。風呂から帰つて、詩の話、画の話武者小路さんは此の頃少し御病身でお訪ねしない方がよいというような話。筑摩書房から贈つてくれた高村光太郎の写真を見たりして涼しい二階の話はつきない。床に入つてから泰全和尚に貰つた弟さんの三郎作る初窯の湯呑を、もう一度出して、握つてみる。三郎さんは、富本憲

吉先生について久しく修行していられたが今度田口に窯を築かれたのである。その包紙の和紙には

「この男、雪の中に窯をつき、土もて玉にかえんとする夢をいまだはぐくめる。とぼしき薪に寒き膳。されど雪の夜を汗して焚ける三日三晩、とり出す陶の、千に一つはやゝ心にかなへりと、にがきつらにほくそゑめるか。雪はや消えん、雪国に梅の蕾はいまだかたきか。」

とある。石版の文字もよく文も亦よい。私は一度一茶の柏原から野尻湖に出て泊り、歩いて落葉松と白樺の峠を越して赤倉を通り田口に出たあの一人の旅を思い、日本一の雪国でまづしさに耐えて、陶ものの道に、心をこめて、あかあかと火を燃やしつづけるたくましい作者を想うてみるのであつた。

ぐつすり、実にぐつすりと眠つて、醒めると窓の外は深い朝霧である。古くておいしい味噌漬も出て、朝餉を頂き、八十六才のお母さま手造りの小さい毬を久仁子の土産に貰い、バスの来る路傍でアリタ草（水虫の妙薬）を見たりして、宮崎さんに池袋まで送つていただき、上野から常盤線にのる。

茨城県警察本部長夏目草石さんの室。松山や、山頭火の話などして昼食をすますと、九・一五の午後一時、草石さんが云つた。

「割に静かだね。」

「三百人ばかり、主として茨大の学生です。教育長に交渉を申入れましたが、勤評は、教組の問題で大学生と関係はないと云つて拒否しました。」
「そうだろう。」
そこへ他の部下の人がやつて来て、「結局デモ隊は一寸気勢をあげて、解散しました。その一部が庁内に入つて廊下をうろついている程度です。どういたしましようか。」
「警官は出ない方がよい。少しは、学生も県庁内を見学してよかろう。どうしても引揚げねば、大学の生徒課長に云つて、連れて帰らせたらよい。われわれの方は、手を出さぬ方がよい。」
「はい。では、万一の事態に若干を備えておくことにします。」
「うん、しかし機動隊の必要はあるまい。」
本部長は悠々たるもの。小川芋銭や、小林古徑、鈴木信太郎など、夏目さんの好きな画家の話がはずみ、やつと東京の古本屋で手に入れられたという、芋銭の「河童百図」を見せてもらう。午後、警察学校で、講演をすませてから、偕楽園を案内してもらい、常盤神社に参拝し好文亭を拝観する。お城と共に戦災に合つて新築されていた。水戸学の立場からいつても、ここは戦時中の方が、盛んであつた。公園は荒れ、弘道館も廢れていて、ただ梅の林だけが、水戸のよさを見せているかのようだつた。しかし藤田東湖先生の墓に詣でた時には、流石に襟を正

し、頭の下る思いがした。その辺一体の墓石の中に、桜田門外で井伊大老を倒し、大義に殉じた志士の墓が見出される。その後藩内二派に対立した理論闘争がついに血戦となり両派合せて千七百余人の有能の士が、倒れているその墓には、心が痛む。安政の地震で東湖が変死しなかつたら、藩論は統一せられたのではなかつたかなどと思つてみた。それにしても新しい日本を産み出すために、水戸が演じたと同じ歴史を、現代の日本人が繰返しているのではあるまいか。平和を希望しない者が日本にいるであろうか。真の平和を築く方法を異にしているもの同志が、闘争の火花を散らしているのである。水戸の内戦には外国の手が伸びていなかつただけまだよかつたのだ。今は、かりそめの闘争が、ワシントン、モスコー、北京、台湾にも通じていないと誰が云い得よう。夕餉は山口楼の涼しくて静かな一室で、夏目さんたちとゆる〳〵頂いた。私は芸者さんに頼んで本場の磯節をほのぼのとする思いで聴いた。一人はひき、一人は唄う。はる〳〵旅に来て、その土地の民謡に耳を傾けるのは旅の楽しみの一つ。そこから大洗の南端まで送つて頂いてはまざく荘に落着く。

大洗・はまざく荘　（九月十五日）

風はないのであるが、太平洋はうねりがあつて、砂浜に打ちよせる音が、鈍重なひびきとなつてくる。磯節のリズムだ。窓をあけると、浜干しの鰯の匂いがぷんと漂うてくる。太平洋の

うねりを体に感じて寝るのは、幾年ぶりであろうか。時々その音で眼がさめたりした。早く起きて、一人でそつと風呂場へ降りてみると、まだ熱くてきれいなので、朝風呂につかる。外は小雨らしい。食後、雨が止んだので庭下駄をはいて砂浜を散歩すると、荘の犬が二匹よろこんでついてくる。水平線はどんより曇つていてはつきりしない。渚の砂の上に、私と犬の足跡が何処までもつづく。足の曲んだ松の木が遠く鹿島灘につづく。

大洗から水戸へ出る道路は、直線で、両側の銀杏やプラタナスの並木もどつしりして美しい路だ。午前は水戸署で講話。午後一寸官舎に夏目夫人をお訪ねし、松山のことや、先日水戸へ来られた吉岡清風さん御夫妻の噂などして、一路太田市の西山荘へ車は走る。今日は谷川教養課長さんの御案内である。西山荘は義公水戸光圀卿の隠栖せられたあとで、太田の街から、関東平野特有の丘陵と丘陵との間に深くつづく狭田の奥まつた所に、昔のままに残つている。古い大杉の間から流れてくるせせらぎの水が浄らかである。門をくぐると右側に大きい山椒の木が赤くつぶらな実を沢山つけている。荘はすべて茅葺で簡素そのものである。萩の武士屋敷の何処かで見たことのあるような建物だ。早口なお婆さんについて説明を聞きながら表に廻り、縁から座敷に上らせてもらう。公の室と客間との間に敷居がない。これは地方の農民たちまで遠慮させずに気楽に近よせて、主客一如となろうとせられた公の心の現われであろう。その左奥の一室は御寝室でその隣の控えの間には、所謂、助さんか格さんかが常に侍つていたことで

あろう。寝室の表に三畳間があつて、梅の木の窓下に清楚な机が昔のままにつつましく置かれてある。ここが大日本史を著述せられた室である。窓が西南にむいているのも京都の皇居にむかつて筆をとられた忠誠心を思わせる。心の字形の池も古寂びている。昔から善政をしいて民を愛した名君の住居はきまつたように質素である。朝夕の食事も簡素であつた。今日の政治家は、大いに学ぶべきであろうなどと思いながら太田署に帰つて講話一席。途中からひどい雨となつた。その席で耕友であり一灯園の光友でもある横山ひとし氏に会う。その横山さんの案内で、佐竹寺に詣る。ひどく荒廃しているが、本堂と、聖徳太子作と伝えられている本尊様が国宝となつている。秋田へ転封された佐竹氏の菩提寺だつたのである。そこから大門の枕石寺は近い。

門をくぐると雨にぬれて秋草が庭一めんに乱れ咲いている。親切な奥さんに教えられて本堂で礼拝をすませ、右横の壇の厨子の中にまつつてある石を拝んだ私はなつかしいままに思わずその石に手を当てた。枕にしては少しく小さすぎるかと思われた、「大心海」の文字は親鸞聖人の刻まれたもの、私はまたその掌をはなして合掌瞑目した。その時、心に浮んで来たのは、大正十年頃広島の寿座で観た倉田百三原作の「出家とその弟子」第一幕の光景である。守田勘弥が親鸞を演じた。その劇では、現在一灯園すわらじの山田隆也さんが唯円で、岡田嘉子がいかえでだつたと記憶する。

建暦二年十一月二十七日、聖人が越後から関東に入つて来られて間のない頃、四十才の初冬である。大門の隠士日野佐衛門尉は、一夜の宿を乞う旅僧に向つて、仏道を修ずる者ならば、樹下石上を宿にせよと冷く拒否した。旅僧はすなおにうなづいて門前に出で、石を枕にして横になつた、夜となつて、雪はふりつづけ、旅人の体を埋めようとする、その中で聖人は念仏を唱えていられた。その夜更けて佐衛門尉は息苦しくなり夢に観世音のお告げをうけた、驚いて出てみると、旅人は石を枕にして雪の中で念仏三昧に入つているではないか。彼は後悔して旅人を招じ容れてねんごろにもてなした。それが縁となつて彼は聖人の弟子となり、出家して入西房道円法師となり、念仏信仰がこの地方に広まり、のちこの枕石寺建立となつたのである。

枕石の横に安置してあるのは、聖人のお首だけの絵である。これは法橋が描いたもの、また聖人御真筆の「南無阿弥陀仏」の六字の名号も手にとつて拝ませて貰つた。また入西房が聖人に石を枕にさせた日から満一年経つた霜月二十七日に聖人を慕つて刻んだという御木像も拝ませて貰つた。この寺に遠近から参拝する信者は今尚あとを絶たない。西山荘の光圀卿は

伝えこし石を枕にことわりや世々にかかぐる法のともしび

と詠じ、広島市寺町報専坊の慧雲和上の詩は

聞道厳冬夜　　聞くならく厳冬の夜

褥雪臥門前　　じよく雪門前に臥す

枕石今猶在　　枕石今なお在り
何耐就安眠　　いづくんぞ安眠に耐えんや

横山さんは、この道につながる人で、不具の少年七八人をわが子の如く愛育し乍ら、農を営みＰＴＡの会長をしていられる。そして山頭火の好きな人。一路水戸へ車の走る此のあたりは広い〳〵常陸の美田で稲のうれそめた色が美しい。

水戸・清風園　（九月十六・七・八日三泊）

小雨の秋の日はもう暮れていた。高台の屋敷街のはづれたところ今夜の宿はその名もこのまし い清風園である。静かな離れの室の縁に立つと、芝生の庭の下に千波湖という小さい湖水がかすかに光つている。その向うに水戸郊外の丘がつづいて木立の影か黒い。芝生の崖下を常盤線が走つているのであるが、汽車も見えず、騒がしくもない。観光的な宿でないのが、私にはうれしい。ゆつくり風呂に浸つてから、旅の絵ハガキを書いたりする。枕石に掌を当てたものの、私には、いづくんぞ安眠に耐えんやというような道心はない。安眠を貪るほどでもないが安眠する。

十七日は終日雨。市川さんの案内で仙台へ通ずる街道を北に走る。「埃がしないから、雨の方がいいですよ」と云われる。日立署で講話。此処は、新しい建築で、警察型でないのが眼に

立つ。午後、同じ道を更らに北進して、高萩署で講話。日立、多賀、高萩と、このあたりは近代的な工鉱業地帯で、日立製作所は一つの王国を成した観がある。高萩から更らに北へ走つて勿来関の少し手前の五浦に岡倉天心の旧居を訪ねる。

門をくぐると右脇に茨城大学研究所の事務所があつて、緒方さんが親切に案内して下さる。旧居の庭に立つと、松の間に太平洋の大海原が展開して、右と左に岩壁の岬が突出していて小さい湾を抱いている。湾内には点々と岩石が竝んでいて白波を立てている。その湾の中心に一つの突起があつて、そこに天心の夢殿ともいうべき六角堂が昔ながらに立つている。頭をめぐらすと天心旧居の左方松原の間に、木村武山、下村観山の旧居が眺められる。右上の林の向うには、横山大観旧居の屋根が見える。菱田春草の旧居は丘の彼方で見えない。天心は美術学校を創立して初代の校長として、縦横にその手腕を発揮していたのであるが、例の事件があつて潔く職を辞して、此の五浦に居を定めて閑居した。そこへ以上の弟子たちが後を慕つて移り住み、所謂日本美術院の発祥地となつたわけである。旧居の南側の松の木の間には、「亜細亜は一なり」の巨大な碑が建てられている。これは大観の筆になるもので、その上部には天心の肖像が浮彫りにされている。

緒方さんは六角の堂の錠をあけてその中にまで入らせて下さる。正面には床の間があつて、天心はここに仏像をまつつて、静坐瞑想に耽けることを楽しみとしたらしい。此の六角は京都

の六角堂にならつたものか、それとも法隆寺の夢殿の八角に準じたものか、私は脚下の波音に梵音海潮音を観じながらしばらく考えてみたが、矢張夢殿であろう。

彼がエドワード・モースの紹介でアメリカから東京大学に招かれて来た若き美術学者フエノロサを案内して、夢殿秘仏を開扉したのは、明治十七年の夏であつた。秘仏は聖徳太子の念じられたもので、太子亡きあとは、千年の秘仏として厨子に蔵められたまま、夢殿は扉をとざされ、太子の夢をそのままに伝えつづけられていた。フエノロサは、世界最高の仏像として驚きよろこんだ。そのフエノロサの墓は、彼の愛した日本の土に（三井寺）今尚眠つている。天心がアメリカのボストンで日本美術を彼の国に普及させるようになつたのもフエノロサの縁によるもので、天心を慕うラングドン・ワーナーは、度々日本へ来てこの五浦にも久しく寄偶し院展の人々や白樺派の人々に親しく交つた。太平洋戦争で、京都、奈良、法隆寺あたりを、米軍の爆撃から衞つてくれたのもワーナーであつた。彼は戦後日本を訪れて京都、奈良が無事であつたことを確かめてから「不滅の日本美術」の大著を残して死んで行つた。その記念碑は法隆寺内に建てられているのだが、そうしたフエノロサ、天心、ワーナーの国境を超えた美しい交りを、私は堂内にたたずんで回顧しないわけにはゆかないのであつた。そして京都、奈良を救つた精神の根は、わが岡倉天心の、しかも此の五浦の夢殿の中から生えているのだと観じてもいいようにさえ思つた。それから旧居の中に入れてもらつて、一つ一つの室に心をとどめ乍ら

坐つたり立つたりした。天心は六角が好きだつたと見え、今は無いが湯殿まで六角にしていたと緒方さんは云つて下さる。一応門を出て、今度は横山大観の旧居に入れて貰う、門に至るまでの掛橋からして既に純日本的である。玄関、茶室、すべて京都的である。特に彩管を振つた画室は神聖な殿堂に昇るの思いがした。小雨の降り注ぐ庭には萩が垂れ咲いていた。

最後に天心の墓に詣でる。ここへは海の音もとどかない林の中、寂然とした境域の中に、ふんわりとした大きい土まんぢゆうに短い草が青く茂つている。何という独創的な墓であろう、ただ正面に石の香炉があり、その両側に石の花立が配置されているだけ。

明治三十七年が初渡米。最後の渡米は大正元年の八月で、翌二年の四月に少しく予定を早めて帰つて来た、痔と、腎臓を患つていた。彼は和服が好きで、米国でも和服だつた。天心こそ平和と文化の使者であつた。基子夫人の話によると、和服はすべて天心独創の型で、はじめ紙で見本を造り、それが身に合つてから、紡お召しの生地で、元禄袖のようなものを縫わせたものだ。帰朝してからは大体にづつと五浦で静養し、沖に出て釣を楽しみ、読書に耽つたりした。彼は肉食せず、野菜を好んで時に魚類をとつたという。八月になつて文部省の古社寺保存会の委員として東京に出で、会議中から病勢悪化し、田端の別邸に落着いたが、赤倉の高原にある山荘に憧れて越後に赴き、九月二日、そこで大観、観山などの門人にかこまれて五十二才という若さで、偉大なる生涯に終りを告げた。

「よく勉強して芸術のためにつくせ。」

とは門人への最後の言葉である、

十二万年名月の夜　訪ひ来ん人を松の影

とは辞世の句である。その時、五浦に塋域を定めてくれと希望した、その松の影に、幽玄な眠りをつづけているのである。かがんで合掌している私の傍らで萩の花が地にこぼれた。緒方さんは、非常に人なつかしい微笑をたたえて、旅を急ぐ私たちの車を見送つて下さるのであつた。

一里あまり帰ると、洋岸に磯原という漁村がある、市川さんは、車を止めて、大きい門構えの旧家へ案内して下さる、ここは野口雨情の生れた家である。奥さんはよろこんで、旅人を招じ入れ、茶菓を馳走して下さる、そして数々の半折、色紙などの遺墨を見せて下さる。私はふと映画「雨情」を思い起した。映画の夫人は木暮だつたが、ここに見る夫人の若かりし頃は、木暮よりもはるかに美人であつたと察せられる。そしてあゝして劇化されたような冷い人ではない。

「ロケは二十日ばかり此の辺でありましたのよ。森繁という方は、元来が喜劇役者なのですから、表情がどうしても喜劇的になりますが、雨情は、もつと真剣なところがありました。」

御自分のことは云わないで、亡き雨情のことだけを語られるところは、流石に明治時代の日

本婦人だと思う。

「雨情は、あまり直したりせず、すべて筆を手にしてから心に浮ぶままを、すら〳〵と歌にしたものですよ。だからあまりよくないのですが、そのままの作ばかりです。時には是でいいかねと私に相談したものです。旅が好きでしてね、よく旅に出ました。」

おいとまする時には、小雨の日はもう暮れていた。清風園に帰つたのは八時半頃だつた。しかし今日はいいことをしたとつく〴〵思う。

十八日は夜明け前頃から暴風雨となつた。二十一号台風が鹿島灘を北に進んでいるらしい。私は少し疲れ気味で下痢もするので午前中は床に入つて体をいたわることにした。台風は大した被害もなく茨城県を通りすぎたらしい。千波湖の水面も静かになつた。宿は実に親切で、女中さんは余計なことはしやべらず心をこめて旅人の世話してくれた。室も調度品も何となく気品があつて、古い城下町水戸の宿らしい。朝も昼も少量の食パンにしたので、何となく力が抜けたような気がするが、椎名さんの案内で、車を馳せて稲田の西念寺にお詣りさしてもらう。椎名さんは剣道五段の水戸人で、気魄に充ちた人。途中笠間からは細谷署長さんも一所に東道して下さる。ありがたいことだ。

広島のF先生へ。

一昨日は枕石寺、今日は稲田の御坊という風に、先生がお手紙で教えて下さつた聖人の御遺

跡を、お訪ねいたすことが出来ました。山門内左脇には、七八百年の歳月の流れを黙つて見て来たような大きい欅や銀杏が立ち竝んでいました。夜来の台風が落して行つた銀杏の実を村童が四五人で拾つて遊んでいるのもほほえましい稲田の風景でした。「御草庵跡」と大書した古い標木を見ただけで、「あゝ」と口ずさんでなつかしい心でいつぱいです。今日は不思議にも恵信尼公の御命日なので、男女多数の参詣がありました。その信者たちが、広い本堂や書院のあちこちに、五六人づつ相寄つて、ごろりと横になつたりして、お念仏を唱え、何んだか自分の親の方へ帰つたように寛いだ姿でいるのも一入うれしく思いました。備後、金沢、讃岐など遠方の人もいられるようでした。その中の一人の大柄な老人は昔乍らに、白髪のチョンマゲを結うていました。その眼の涼しさ、信に生きるものの眼は美しいものですね。本堂内陣に入れて貰つて礼拝ののち役僧さんから、本尊様の右にまつつてある親鸞聖人のお像と、左側の恵信尼公のお像についての縁起を説明してもらいました。その説明というのが、金閣寺などの商売人口調と違つて、香を立てて経机に向つて坐し、長い巻物を打ちひろげつつ、あの白骨の御文章を朗誦するような口調で、ゆるゆると読んで下さるのです。それによると、聖人のお像は、聖人五十二才の年に『教行信証』の草稿を完成せられ、その開教立宗の大著述を終えられた歓喜の心をそのままに、御自身で楠木に刻まれたもの、恵信尼公の小さいお像は、八十七才でこの御坊で御往生せられた時、御子息の如信さまが、名残を

惜しむのあまり、荼毘に附された灰を固めて、母君の面影の如く創り、それに漆を塗つてまつられたもの。歓びと悲しみの像が、阿弥陀仏をまん中にして、夫と妻の坐について後世に残されていることの貴とさ。私は心にしみて迫つてくるものを感じました。それから客間に通されて、稲田良憲御門主と、その御令息にも親しくお眼にかかり、いろ〳〵と御坊のお話を承りました。聖人はここに二十年も御在住せられ、その間、遠く鹿島、潮来のあたりまで念仏を広める行脚をせられました。しかし、聖人の場合は人を集めた説教や、大道の演舌ではなく、悩めるものがあれば、その家に泊つて寝食を共にしつつ、どうしようもない人間性からくる苦悩を涙して聴いてやられたのではないでしようか。ああせよ、こうせよと申されないで、解決のすべを知らない自分を歎きつつ、一所に悩んでやられたのでしようね。しかし二十年の間には、ずい分多くの同朋同行を得られたことでしよう。その間恵信尼との間には六人のお子さんも出来ている、その肉親の愛情を、一応捨てるようにして、六十すぎてから『教行信証』をひつさげて、法然上人の亡くなられたあとの京都へはる〴〵上つて行かれた仏法に対する情熱の強さ、たくましい御意力は、矢張り日本一流の大人物ですね。みかえりの橋というのが横門から眺められます。あなたは愛児と関東の信者を、自分に代つて守り育ててくれと云い遺し、再び帰らぬ決意をもつて、峠の道から見かえられた橋なのでしよう。聖人のお姿が見えなくなるまで、涙乍らに立ちすくんでいられた尼公の姿とお気持はわ

かるような気がいたします。私の口からは、無心にお念仏が出ました。弁円の板敷山や大覚寺も、程遠からぬ所にあると知り乍ら、私は、一つの公用を主とした旅人であることに気がついて、はるか青い松山の方を拝んで、御坊をあとにしたのであります。（九月十八日）
帰途、笠間焼の窯元を一寸見学さしてもらう。古い伝統のある大きい登り窯である。多くは昔乍らのすりばちとかめを産するのだが、近時どちらかと云えば民芸調の新しい作品も相当製作せられている。しかし所謂あまりに民芸的な嫌味がなく、素朴で、比較的安くてよいと思う。

同じ室に三泊もすると、何だか身辺が、我が家のように思われる。今日は台風の通つたあとの秋晴れで肌が冷え〱するので、セルに衣更えした。十九日は機関誌『警泉』の編輯長井川さんの案内である。松山の『かがり火』と森川編輯長を思わない訳にはゆかない。午前中石岡署、午後は下館署と二回の講話である。どこの会も皆熱心に聴いて下さるので、毎日二回の講話が少しも苦にならない。遠く旅に来て初めての人々と感銘を共にすることも生くる日のよろこびと云うべきか。石岡から田と林のつづく路を筑波山へなけて走る。碧い空に聳える関東平原の孤山筑波の峰は、車の位置によつて様々に変化する。車はいよ〱その筑波の山麓を右に切つて真壁の町に出る。真壁の平四郎をふと思い出した。真壁から下館までは、茨城県一流の穀倉地帯がつづく。稲はよく出来て薄黄色の穂並が秋の日に光つて匂う。下館は、もう栃木県

に近い。下館から一路水戸へ。翌日は水戸を去るので祕書室の飯島さんや教養課の方々にお別れの挨拶をして、再び大洗へ運んでもらう。

大洗荘（九月十九日）

かねて念願の山村暮鳥の詩碑を井川さんが探して下さるのだが、移転していてなかなか見つからない。ところが電車終点の東海荘の主人が現われて、すぐ近くの海にむいた松林の中へつれて行つて下さる。

いたいた
あなたはここに立つていた
海を見て松の間に
淋しく一人で立つていた
すつかり暮れた波の音を
背に感じながら
マツチをすつて
指頭でよむ「雲」の詩
途方に暮れた暮鳥の詩碑よ

「わたしの父は暮鳥先生と仲よしでよく遊びに行つたものです。奥さんは立派な人で、病気がわるくなつてからの詩は、すべて先生が口で云われるのを、そばで書いては発表せられたものです。今は水戸にいられ、千草さんも、玲子さんも皆お達者です。この頃は、浮いた観光客ばかりで暮鳥の此の詩碑など尋ねてくれる人はめつたにありませんよ。あなたは四国の松山から来られましたか、先生もよろこばれるでしよう。」

と主人はわがことのように喜んでくださる。私はその東海荘に泊りたいなと思つたが、宿は既に大洗荘に指定されていた。大洗荘も大洋を前にした磯にあつて、これは観光的なお客を呼ぶ宿。翌朝早く起きて、太平洋から昇る真赤な太陽を拝んだ。波音も静かで素晴らしい朝だ。宿はまだ寝ているので、裏口から浜に出て、もう一度暮鳥の詩碑の方へ歩いて行つた。

見えた見えた
砂丘の細々とした松の間
あなたは洋からのぼる日にむいて
今朝は白く光つている
あなたの親しい友だつた雲が
遠い水平に浮いて
ポンポンポンポンと漁船が帰つてくる

大洗さまの松をめあてに
足もとでは芒の穂が風にゆれている
暮鳥よ今はもう
淋しいとは言わないでしよう。

改めて碑面をよむと小川芋戔子の字で

雲もまた自分のようだ
自分のようにすつかり途方にくれているのだ
あまりにあまりにひろすぎる
涯のない蒼空なので
おう老子よ　こんなときだ
にこにことして　ひよつこりとでてきませんか

とある。私が暮鳥の「雲」を知つたのは昭和二年で、彼がここで亡くなつてからしばらく経つてからのことだつた。あんまりいい詩なので、しかもびんぼうでそれが買えないので、その頃広島高校の学生だつた南蛮寺に借つた。家内はそれを私のために毛筆で写してくれた、その一冊は私の写した放哉の「大空」と共に今も書架に竝んでいる。志をとげた思いをして大洗神社の方へ松林の道をのぼる。磯節のあの大洗さまだ。境内は浄らかに清掃されて、みたらしの

水があふれている。祀神は大国主命と少彦名命である。いと爽やかに拝礼して、また遠い海原をみる。境内に再び視線をむけると、秋の七草が一ケ所にまとめて植えられて、その中に立札があつて山上憶良の歌がしるされている。神主様の心がわかるようでうれしい。

はぎの花尾花くず花なでしこの花をみなへしまた藤袴朝顔の花

これは萬葉集巻八の歌で、朝顔は今日の桔梗である。今の朝顔が支那から日本に入つて来たのは、利休の時代であつた。今日は市川さんの東道で、水戸にさよならして土浦へ向う。土浦署は人員が多いのでマイクの用意がしてあり、大いに助つた。無心に語りつづけて、茨城県最後の講演を終えたときには、感無量だつた。午後千葉県香取郡久賀局まで送つて頂く。途中牛久に廻つて小川芋毟の旧居や碑を見たいと思つたが、台風で橋が通れない由にて、霞が浦に沿うてゆく、このあたりは、映画「米」で見た風景である。わかさぎを獲る舟帆が風をはらんで七八十も横に展開している光景は他では見られないもの、湖は夢のようにかすんで、遠く筑波山が見えかくれする。水郷の美しさに飽くことなく眺め入り、やがて潮来を左に見て利根川を渡つて佐原に入る。ついでと云つてはすまないが、香取神宮に参拝して多古街道を南下し、次浦の久賀局米本邸の門前に辿りつく。米本旭窓翁、重信君父子はじめ、御一族お達者で歓喜して迎えて下さる。また茨城県大野村の石馬賢洲和尚は河を渡つて私に会うために来ていて下さつた。更らにうれしかつたのは、満洲弥栄村郵政局長米本秀雄君の未亡人時子さんが、北海道

から帰つて来られていた。会いたい人々に会うよろこびは、やがて、市川さんや運転手さんとお別れしなくてはならぬ悲しみとなつて来た。一期一会のお茶を喫し合つて、お互いに健康を祈りながら、門前で記念の写真を撮つてもらつた。

下総・旭窓庵　（九月二十日・二十一日二泊）

まづうれしかつたことは、旭窓句集「交譲木」が実に美事に出来上つていたことであつた。その題名となつた交譲木は、広い屋敷の一隅に珍らしく千年の樹齢を保つているのが、二十一号台風で枝を折られていた。また築山の千年椎も太い枝を折られていた。台風の眼が此の村の上空を通つたとのこと。父は「原人」の俳句、子は吉植庄亮の「橄欖」の短歌の道につながつていられる。六年ぶりの邸内は、古い樹林を背にしていつ来ても静かである。賢洲和尚は武州平林寺の大休老師の身辺に侍して十年も修行せられた人で、「若葉」につながる俳人である。昭和十八年頃平林寺でお会いしてから十五年ぶりである。その賢洲さんと枕を竝べて床に入つてから、茨城県六日の旅を回想してみた。曽遊の地鹿島地方を除いて、大体に全県下を巡つたような気がする。その間一哩も汽車に乗らず玄関から玄関へすべて自動車だつた。だからこそ八ケ所の講演が予定の通り進められたのである。警察官の使命が重大であるだけに、その一人一人の教養が高められなくてはならぬことはいうまでもない。そして職務を正しく守るた

めには、一人一人の人格が、高潔でしかも無我中正の立場に於て国民へ奉仕されなくてはならぬかと思う、そしてそうある限り、自己の人格と職務の尊厳性を自覚し、一つの信念を以つて生きてゆく道、それはまた家庭を和やかなものにするであろう等と思いながら、心に浮ぶままを語らして貰つたのであつたが、いづれの署でも一人の例外なく、真剣に聴いて下さつたかと思う。私は一期一会の思いをこめて語つたつもりである、語つたことが、我が身についているかどうか、深く反省せずにはいられなかつた。

二十一日。重信さんの案内で香取郡干潟町中和、小字長部に大原幽学先生の跡を訪ねる。中和の農協のところから丘を越すと、整然とした田の彼方に遠藤家が見える。丁度御当主良太郎氏もいられ私を待つていて下さつた。幽学の高弟遠藤良左衛門の孫に当られる。先づなつかしい八石教会に昇る。入口に「慎其独」という幽学の字が碑に成つている。文部省が去年の百年祭を機として援助し、史蹟としての保存に完全な措置をせられ、力強い限りだ。農民のために農民の手で建てた日本最初の公民館と云えるだろう。改心楼は受難の時に倒されたのだが、そのあとに立派な拝殿が建てられている。その上に先生のお墓がある。自刃せられたのは八丁程離れている遠藤家墓地の大松の根で、はじめその墓地に埋葬されていたが、その後ゆかりの深い此の聖地へ移されたのである。謹しんで拝礼してから私は遠藤さんに云つた。一昨年「大原幽学物語」をお供えして貰いましたが、あれは、どうもお粗末で、却つて先生の徳を傷つけは

しなかつたかと、憂えているのです。しかし農村の村づくりの一番正しい在り方としてまづあしたものを幽学先生を知らない人々に読んでもらいたいと思つたのです。

遠藤さんは、幽学精神の実践者として、また遺蹟保存の責任者として、いろ〳〵と苦心のあとを話され、去年秋の百年祭には安岡正篤先生、また春の御命日には菅原兵治先生が来て記念講演をして下さつて盛会だつたことを静かに語られた。この丘一体の地は、幽学先生の遠大な設計になるもので恰も一つの城址を思わせるような構えである。「先生は築城の術にも長じていられたのですね」というと遠藤さんもうなづかれた。丘を下りて今度新設の記念舘に入れて頂く。こうして一ヶ所に遺品遺物が陳列保存されたのはいいことだ。自刃の時に着ていた白い着物。短刀は別に保存してその型を布に印してあるのだが、一死、門人の再起を促した貴い最期が忍ばれる。その他身辺の日用品、協同購入の器物。煙管、眼鏡。それから象牙の入歯が一個。更らに幽学の筆跡数点など立ち去りがたい思いを残して、辞する時、越川春樹著「大原幽学研究」を一冊記念に頂いた。車に入つてから思つたことである。今の農村の人はよく観光や見学の旅に出る。しかしその多くは、ただ団体でバスにのつて遊び騒いで旅し、見学に名を借りて温泉地を享楽して歩くという有様ではあるまいか。切りつめた日程で、無理をして広く浅く見て通る旅が、果して人生のプラスになつているであろうか。金戔の浪費と精力の消耗以外に何が残るであろうか。この幽学の村づくりの跡こそは、世界最初の農民の協同購買、世界に

例のない屋敷の合理的移転、日本最初の農地交換分合、その他結婚はじめ、生活改善の先端を実行した村である。こうした史蹟と幽学の教えが今尚生きて残つている農村を一度は見学した上で、村づくりという偉大なことばを使つて貰いたいものだ。私などは村づくりという言葉は恐しくてとても口にし得ないでいるのだが。——

帰りは府馬、小見川を経て佐原市に出で、郵政の家で、伊能正也さんと語る。伊能さんは戦時中、中山の法華経寺での私の講習をうけて下さつた一人で、無駄のない食作法はじめ一会の精神を今日尚、実生活に活用していられるような人である。その正純なお話を聴いて私は一筋につながつて生きるものの喜びをさえ感じた。佐原駅前で賢洲さんに別れる。

久賀へ帰つて荷物を整理したりしてゆる〳〵風呂につかる。今夜は大きい母屋で夕餉を頂く。重信さんは「かんらん」の編輯長なので、その名のオリーブを、四国から吉植さんと此の邸に一本づつ何とかして贈ることを約した。ここで驚いたのは、村の耕友室岡善太郎さんが(七十五才)私の出した「俳人山頭火」「草木塔」「山頭火の生涯」の三冊を、和紙に毛筆で実に克明に書写して製本していられることだつた、私は乞わるるままに、各冊に一筆づつ記さして貰つた。山頭火も死してよき知己を得、よろこんでいることであろう。「父は、先生がくると知つて、何だか恋人がくるよう待ち焦がれていましたよ」と云われる、その旭窓翁にもお別れしなくてはならぬ朝が来た。青い柚子の一枝を翁は私のかばんに入れてくれた。そうだ、

柚子の香、これが此の大きく古い家の人々の匂いであろう。

二十二日の午前十一時、再び東京駅に降りる。郵政省の山崎忠君が待つていてくれる。そこへ南蛮寺がくる。南蛮寺と二人で住宅公団理事室に中川寿君を訪ねる。撫順炭鉱以来だ。広島県西条の人。三人で一つ橋の学士会館へ昼食にゆく。ここが新村先生御上京の時の常宿だと思うとなつかしい。中川君はしばらく病気したために、仏教書が読めてよかつたと云う。彼は転んでも太る人材だ。別れを惜しんで南蛮寺は有楽町の辺で「戦争と貞操」をみるのだと云つて映画館の前で降りた。私は一人となつて狸穴の郵政省についた。

前島会の田倉さんの室で、荘内の鶴岡や公田連太郎翁の話をしているところへ玄米の吉村正太郎氏が来られた。それから省内をあちこち歩いて親しい人々に会つた。六時から直ぐ近くの札幌郵政寮の二階で、私をかこむ大耕会、いや澄太会が開いて貰えるのである。ほんとうは私の方からお宅やお席へお訪ねせねばならぬのであるが、時間の少い旅人にはこんなうれしいことはない。

景山　準吉　　吉村正太郎　　田倉　八郎　　高橋　精一　　長岡　信捷
安井正次郎　　古瀬　長栄　　松尾松太郎　　遠藤　梧逸　　青木　亮
荒木　初蔵　　有田紀久治　　佐々木元勝　　宮本　武夫　　平井　定徳
関　正雄　　清田　金吾　　山崎　忠

の諸氏で、私の在職中の先輩や僚友ばかり、辞して十七年の私のために、大耕に心をよせて貰える縁にもつながつて、このような楽しく和やかな会がめぐまれるとは。友情は温い酒によつて、心と心に交流する一夜だつた。特に松尾さんはソ連から最後に帰られた人で、会いたくてたまらなかつた。

代々木・長岡邸　（九月二十二日）

青木さんの車で代々木初台まで送つて貰つたのは、もう九時に近かつた。床に益洲老師の「無一物」がかかつている室に寛いで、仏通寺や、広島、愛媛の人々に話は及んで夜がふけてから風呂を頂いて、ころりと横になつてぐつすり深く眠つた。

実さん、滋さん、温さんの御令息がそれぞれに大蔵省（法）病院（医）建設会社（工）と個性に応じて学問し職業していられる和やかな家風は、ほんとうに美しい限りだ。近く「凡人私語」につぐ随筆集をお出しになるとのこと。早く読みたいものだ。明けると二十三日雨が止んでいる。庭に出て枸杞を見せて貰つた。初台まで長岡さんに送つて貰い乍ら、一度、芸州中黒瀬の平賀白雲洞に落ち合いましようと約束したりした。

東京駅行のバスに席もあつて、半蔵門までくると、左が宮城のお堀となる。松は老い、水は和やか、よく見ると三宅坂あたりからは向うの堤にまんじゆしやげが沢山咲いている。お彼岸

だなと思う。そして宮中で草木を培つて奉仕していられる斎藤春彦さんのことを思つた。この頃は車の警笛がうんと制限されたので、両陛下もお静かであろうと拝察した。鎌倉行の国電は空席が多くて速かつた。北鎌倉に降りて、歩いて建長寺の門前に荻原井水泉先生をお訪ねする。小さいけれど一つの谷がすべて大泉園で、建物も、木立も、庭も、そこに寝ている二つの石も、小さい池もすべてが、随処にそれぞれ主と作つて、それでいて美しく調和している境内である。ここから俳句が生れ、詩が涌き、随筆の文章が日日ほとばしり出るのだとうなづく。お話は佐藤一斎から大原幽学に至り、一茶、山頭火とつきない。師はまたボールペンで白紙に描いて鎌倉山内一帯で見ておくべき場所を、図面を引き乍ら教えて下さるのであつた。床の扇面も、室の額も良寛の真筆である、こうした書画を実はもつと拝見したかつたのであるが、時の流れの早いことに気がついておいとまする。書いて頂いた図によつて、先づ長寿寺の萩を見る。盛りはすぎていたがその伸びて垂れ下つた茎や葉の風情はいいと思う。ここは尊氏の屋敷跡である。明月院のアジサイは「随筆」で師がほめられていたが、今はその季節でない。石段の所の小川を左に渡つて建長寺を建立した最明寺入道時頼の墓に詣でる。政治の心に仏教を以つてした人だ。浄智寺は鎌倉五山の一つで、古い門の脇に円覚寺管長朝比奈宗源老師の御私宅があつた。東慶寺も亦本堂は大正十二年の震災で焼失したままだ。奥まつた山ふところの林の中に、「寸心居士」と刻んだ西田幾多郎博士の墓がある。彼岸の中日なので黄菊白菊が活けられ

て箒のあとも浄らかである。先生の貴い一生を回顧し、その面影を慕いつつ、香を立てて心経を捧げた。この墓地は岩波茂雄が安倍能成と二人で相談して三人の眠るべき地を相したのだと安倍先生は、その著「岩波茂雄伝」の終りに書いている。その岩波氏が寸心先生より十ケ月おくれて二十一年の四月に歿し、先生の右隣に眠つている。左隣には「安倍能成之墓」が既に建てられている。手廻しがよすぎるなと思つたが、実際は此の墓の下には、御令息のお骨が納められているとのこと。生前親しく交つた人々が、死後も亦枕を並べて永く眠りつづけとは。友情は三世につづく。

一つおいた左の端が野上家の墓で、野上豊一郎氏である。長岡さんからは、此の山の上に野田大塊の墓があると聞いていたのであるが、ここから後戻りする。鈴木大拙先生の松ケ岡文庫にも心をひかれ乍らふと前方を見ると、「真杉静枝之墓」があつて、誰が詣でたのか、煙草が二本、線香の代りとしてくゆつていた。次は円覚寺、三度目なので、すうつと一番奥の黄梅院に帰一協会の辻雙明氏をお訪ねする。「街頭の禅」をよんでから一度お会いしたいと思つていたのである。丁度いられて、開山堂の夢窓国師のお像の前で茶菓を頂いて禅についていろ〳〵と伺つた。『静思に生きる』の著者中村健介氏の奥さんこそ、日本婦人のあるべき最も美しい姿だとのお言葉は、ほんとうにそうだと思う。口も手も足もその仂きを失つた主人の心を、あれだけに著述せられるとは。

此の堂の裏をふと見ると、伊予の山下亀三郎氏の墓があるではないか、私はお堂の縁からではあるが合掌した。「生前徳を積まれた人なのでしよう、誰か知ら、よく墓参して花を供えてゆくようです」と辻さんは云われる。今日私は多くの墓に詣でた、旅の中で迎えた中日らしい中日だつた。縁者の墓参も多く、どの墓にも菊の花が供えられていい薫りを放つていた。

東京に帰つて関さんの玄関に立つたのは、丁度五時だつた。芦子夫人のお手料理は、愛情にじむ馳走だつた。軽井沢から帰つて私を待つていて下さつたのである。室を飾る焼物、絵画、書、日用の器物に至るまで、その一つ一つが、お二人の性格にぴつたりするものばかりで、そうでないものは徒らに取容れないと云つた御家風で、趣味も清純で、すつきりした一筋のものが通つている。いい酒を少し過して何を話したかもう忘れてしまつたが、あとで豊後日田の広瀬淡窓と旭窓、備後神辺の菅茶山の書を見せてもらつた。関さんはまた沢山の短冊をとり出して、その中の気に入つた歌を朗吟して下さる、何というい気分だろう。歌は忘れたが親交の深かつた与謝野夫妻のもの、下総の吉植庄亮のもの、川田順のもの、小泉千樫のもの。関さんの歌は久しく拝見せぬが、広島逓信局長時代、私が編輯させて貰つた随筆集「断想」には、台湾、東北、北海道の旅の歌が三十六首納められている。台湾の旅では夫人も同道で、夫人はお一人で東海岸にまで足を伸ばされたとのこと。旅が一番好きです。「大耕」でも旅行記が何よりもうれしいと云われる。

「つい先年までうちの庭には雉が降りて来て遊んだり、いろ〳〵の野鳥が来ていたのだが、だん〳〵このあたりもうるさくなつてね。」
と云われるその庭で作られたオクラの種を頂いて失礼する。

五反田・郵政官舎　（九月二十三日）

山崎君は今か今かと待つていてくれたらしい。私が本省時代、同じ課の若手だつた。運輸省の古山君と同じように、過去を捨てないでいつまでも私を思つていてくれるのだ。越後新発田の人で、禅僧の伯父さんが書いてくれたのだという達筆の詩を見せて貰う、六年生という嬢チャンがもうお母チャンよりはるかに背が高い。世田谷の家へも久米の家へも訪ねて貰つたので話はなつかしい。ゆつくり風呂に浸つて、明日の天気をテレビで聴いて休む。

二十四日は雨。五反田駅で山崎君と別れを惜しんで新宿から小田急にのる。私の旧居、その隣の萬造居に心をひかれるのだ。祖師谷大蔵で降りて雨の道を歩くのもなつかしい。旧居の朴は伐られたらしく、木蓮、柿、銀杏、その他の木々が茂つていた。南蛮寺は何か書いていた。昨夜は広島の清水文雄君が泊つてくれたという。

「あんたも白髪がふえたのう。」
「あんたあ、よく禿げたのう。」

口には出さないが、お互いに頭をしみ〴〵眺める、法政大学へは時々出ればよいらしい。此の頃は太閤記を現代文に書いているという、彼の書く中学生文庫は、正風の愛読書だ。書斎の棚には私が東京を去る時、置土産とした私のひねつた大きい花瓶で芒の穂が光つている。ゴルフリンクの向うにいる野島の中西悟堂さんを訪ねることにしていたのだが、あの辺は路がぬかるので止してゆつくりする。床に掛つている岸田劉生の画は大したものだ。彼は軸物を取り出した。それは中里介山の書で、

南船北馬復茲煩　欲渡長江江水飜
回首中山陵上望　里風白雨溝中原
辛未洪水歳遊南京作　介山居士

とある。昭和七年、介山四十八才の作だ。笹本寅の「中里介山伝」には不思議なことにこれがそのまま写真になつて入つている。萬造が春陽堂時代に、原稿料を持つて行つたところ、介山はその中のいくらかをつかんで呉れようとした。彼は苦労人で、誰に対してもそうしたらしい。しかし萬造はそれを辞退して受取らなかつた。介山は、大きくうなづいて此の書を呉れたという。茶の間にて早昼だ、湯豆腐で呉の千福を傾ける。お互いにもう自分のことよりも、子供たちについて語る身の上となつている。雨の庭には、秋草が風に倒れて咲いて、栗がうれて落ちたりしている、流石は武蔵野だ。新村先生、玖村さん、井本さん、古田拡さんなどお噂し

て、道後へ銀婚旅行してくるように園子からのことづけをして奥さんに別れる。

新宿で伊予豊岡出身の井原茂幸君に迎えられて、八王寺の都立南多摩高校へゆく。藤村の『千曲川旅情のうた』の掲げられている校長室で池田文雄氏に会う。私の「日本の味」以来の愛読者で、広島文理大では故杵築順さんと同期、故蓮田善明君と親しく斎藤先生門下の人ときいてみると、これはもつと早く会うべきお互いだつたと思う。体育館と兼ねて新築せられた講堂の使い始めとして私の講演というわけである。女生徒の方が多かつたが千数百人の全校生徒は、ほんとに視線も正しく姿勢も美しくよく聴いてくれた。私は壇に上つてから心に浮ぶままを、原稿を書くような気持で、ゆつくりと語ることが出来た。一部の学生は別として、好き教師を得た東京の学生は、地方の学生よりも一足も二足も早く戦後的なものから立ち直つているかに感じた。明るい間にと云つて池田さんは、校舎の屋上へつれて上つて、八王寺の全景を見せ、丹沢、奥多摩、秩父の山々を指して下さるのであつた。

あとで一時間ばかり、有志の先生たちと座談。五時からは定時制の全生徒にもう一度語つた。テーマは同じでも、その云い廻しは、自ら別のものとなつて行つた。この仂きつつ学ぶ人々もすなおだつた。私としては、戦時中成城高校と、学習院の学生に語つて以来、十四五年ぶりに東京の学生に相対したのであるが、来てよかつたと思う。余情残心のままに、池田さんと井原君に送られて、小金井に下車すると、平井定徳君が待つていてくれた。

小金井・平井新居　（九月二十四日泊）

静かである。武蔵野の面影を残す欅がていていと立つている。去年まで松山にいられたのである。一家揃つて待つていられた。設計の新しいこと、気持のよいこと。ゆみ子さん、のぶ子さん、正孝君。大学、高校、中学生。それぞれの室で机を構えて勉強中だ。私たちは畳の室で大あぐらで、灘の大関を味わう。百二十坪に、二十四坪と云えばゆつたりしたものだ。私が泊客第一号だという。茲に居を定めてから、退官して、無線通信協会の通信技術者の養成所を創り、その校長と云つた格である。話は、広島の同窓や、松山、新谷に及んでなつかしいことだ。テレビは、明日も亦雨だと告げる。信州へ行つても寒くて山が見えないであろうから、名古屋へ出ることにしてゆつくり湯に入つて、平井君と枕を竝べて休む。ほんとうに熟睡した。旅では食べるものよりも、安眠が一番うれしい。早く起きて、裏庭を見て、家を一廻りして、此の新しい家に禍の入らないことを念じた。

大阪行急行なにわは、空席が多かつた。東京の人々よ、さようなら。会いたくて会えなかつた人よさようなら。淡い感傷を煙草にくゆらせたりした。曇つていて富士は見えなかつた。名古屋につくと片岡庫吉さん、染井さん、吉崎三洞子さん、深見武朗さんが待つていて下さつた。

熱田・竜珠寺　（九月二十五日）

山下照山和尚には八年ぶりだ。吉田の大乗寺以来である。大きい寺に、小僧さんとたつた二人。まづ風呂を頂いて、それから抹茶。話は宇和島の坂村真民氏からはじまる。明日は妙香山の河野宗寛老師が提唱に来られるとのこと。足利紫山翁の御近況をいろ〳〵聞くこともなつかしかつた。大乗寺時代の如く「終日作務」なのであろう。境内の清浄なこと、板の間や廊下の美しいこと、日本の美が磨き出されている。坐つた合間には、短歌を作り読書を楽しむ人だ。居候のお婆さんの年が豊後にいる母と同じなので、母のような気がすると云われる。外は雨。眠くなつたので休ませてもらう。本堂の一室で、寂然とした一室。

明けても雨。京都につくと藤川拙堂君が待つている。先づ広誠院に益洲老師を訪ね、竹山さんの新居の次第を詳しく報告してよろこんでもらう。

京都・広誠院　（九月二十六日）

午後、一灯園を訪ねてから、いよいよ広誠院に落着く。その後ずつと御好調で、私の旅の話を聴いて下さる。湯豆腐で広島の酒をいただく。老師さんのお話によつて、加州バークレーの桂つる子さんが、大耕を通して知られた老師を敬慕せられるまごころには、心うたれるものがあつた。老師はまた橋本恵光さんの「正法眼蔵」は親切でとてもよい記事だと云われた。仏通寺のこと、伊予の人々の話など、この道につながる物語はつきないのであつた。大阪住友銀行

ぐつすり寝た。
の石丸豊氏達が、機関誌にのせられた伊庭貞剛幽翁の記事をよましてもらつて二階の広い室で

朝、泰山君が京都駅に聞き合せて、東海道線は不通でセト号は下らないことを知らせてくれたので、京都仕立ての準急で帰ることにした。そこで老師さんのお伴して南禅寺に詣で天授庵裏の広瀬家のお墓に参つた。宰平翁、満正氏、歌子夫人のことなど思い、いいお彼岸詣りさせてもらつたことである。永観堂、六角堂を拝んでから駅へ出た。

旅の終りの車中、私はうつら〳〵眠りつづけた。長い旅路の十一の心の宿。旅館五泊。私宅七泊。寺院二泊。すべてわが家と同じ心地でほんとうに温く心と体をくつろがしていただいたことだ。そして毎夜悠々として風呂を楽しませてもらつた。美しいその宿の香を身につけて明日の旅路をつづけたことであつた。宿々で人に待つていただく旅のもつたいなさ。地上の旅はこれでいいとして、さて、やがて永遠の旅へ私も例外なく日々近づきつつあるのだ。この世にさらばしてあの世へゆく時、果して、私は待たれているであろうか。待つていて下さる大いなる存在を、しつかりつかんでいて今度の旅の如く、その待つていて下さるもののふところへ、そのまま抱かれて永遠に眠りつづけることの出来るような功徳を積ましてもらいたいと思う。

船が高松港に近づいた頃、ラジオは讃岐の琴ケ浜が朝汐を倒したと報じた。その時、眼を外に転ずると、仲秋の名月が、まんまるく屋島の上空に浮んでいるのであつた。（三三年）

日本の人物抄

—この書中に現われる古徳先輩—

吉川　英治（一三七）
雲居　禅師（一四一）
法然　上人（一五六）
小堀　遠州（一六四）
白隠　和尚（一七四）
国木田独歩（一九六）
永井　荷風（二〇八）
山鹿　素行（二二〇）
頼　山陽（二二八）
高橋誠一郎（二三四）
一休　和尚（二四五）
牧野富太郎（二七四）
小林　古徑（二八〇）
木村　武山（二八六）
山村　暮鳥（二九四）
田倉　八郎（三〇二）
北条　時頼（三〇四）
中里　介山（三〇八）

能因　法師（一三八）
良寛　和尚（一四八）
河上　肇（一五八）
ヘルン（一六五）
倉田　百三（一八〇）
光田　健輔（一九六）
シーボルト（二一一）
近松門左衛門（二二一）
大智　禅師（二二九）
蜂谷　道彦（二三六）
乃木　希典（二四五）
酒井　竹山（二七七）
水戸　光圀（二八二）
下村　観山（二八六）
山上　憶良（二九七）
長岡　信捷（三〇二）
岩波　茂雄（三〇五）
中西　悟堂（三〇八）

北畠　親房（一三九）
山崎　益洲（一四九）
西田　天香（一五八）
安部栄四郎（一六六）
生田　春月（一九二）
吉田　松陰（二〇二）
隠元　禅師（二一二）
玖村　敏雄（二二六）
徳富　蘇峰（二二九）
杉本　五郎（二三七）
親鸞　聖人（二五三）
小川　芋銭（二八〇）
岡倉　天心（二八六）
フェノロサ（二八七）
菅原　兵治（三〇〇）
遠藤　梧逸（三〇二）
安倍　能成（三〇五）
伊庭　貞剛（三一二）

川端　龍子（一四〇）
慈雲　尊者（一五〇）
松平　不昧（一六四）
福沢　諭吉（一七〇）
北原　白秋（一九五）
芥川龍之介（二〇八）
北村　西望（二一四）
広瀬　豊（二二六）
小泉　信三（二三四）
池　大雅（二四〇）
空海　上人（二七三）
藤田　東湖（二八〇）
横山　大観（二八六）
ワーナー（二八七）
公田連太郎（三〇二）
佐藤　一斎（三〇四）
夢窓　国師（三〇五）
広瀬　宰平（三一二）

日本の旅　　定価　二八〇円
送料　四〇円

昭和三十五年一月十日印刷
昭和三十五年一月十六日発行

著者　松山市鷹ノ子町 大耕舎
大山澄太

発行者　東京都豊島区高田南町一ノ二三
加瀬正治郎

印刷者　愛媛県八幡浜市天神通二
尾上印刷所

発行所　東京都豊島区高田南町一ノ二三
アポロン社
電話（落合）一六〇七番
振替東京九七七二〇番